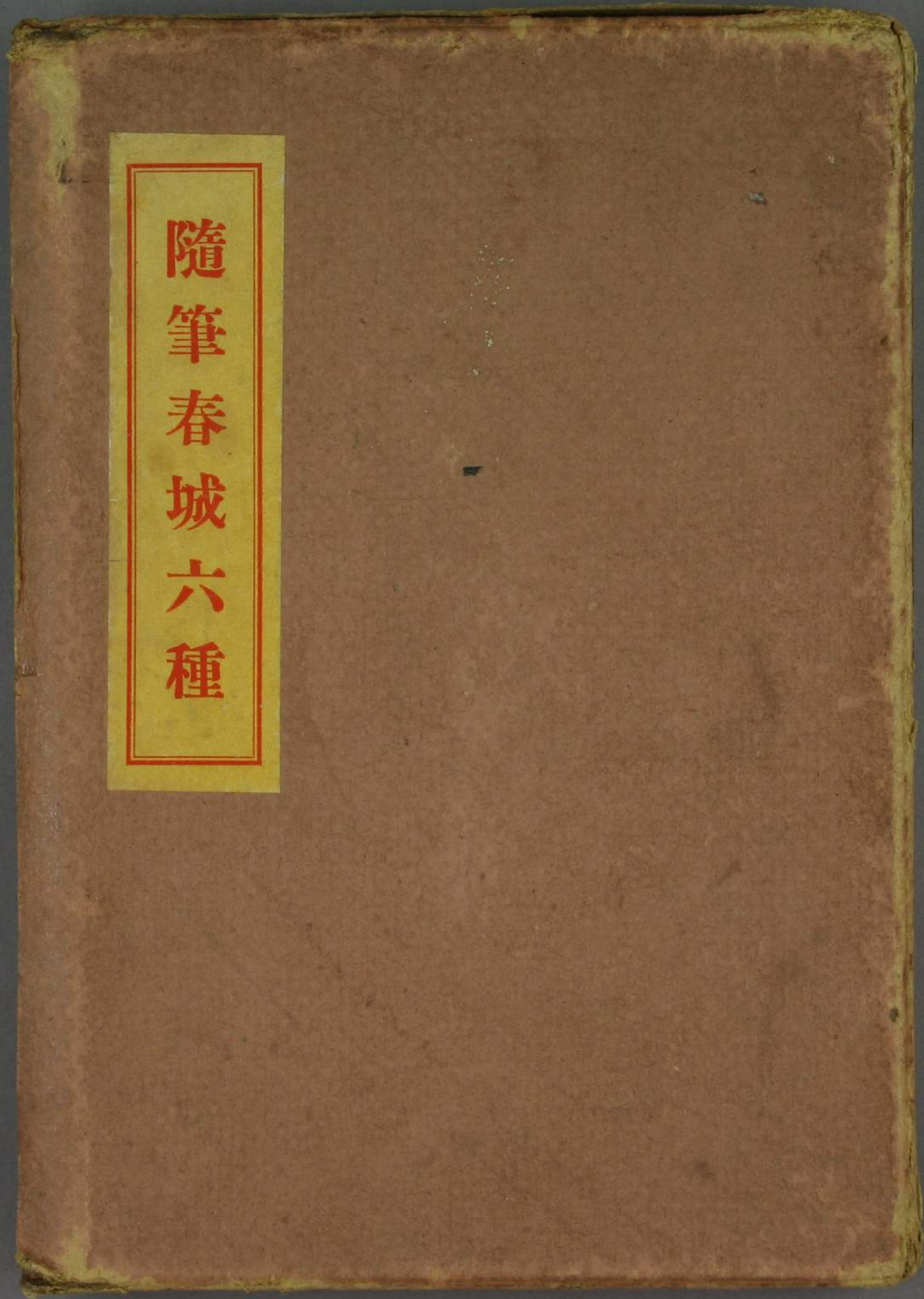


Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



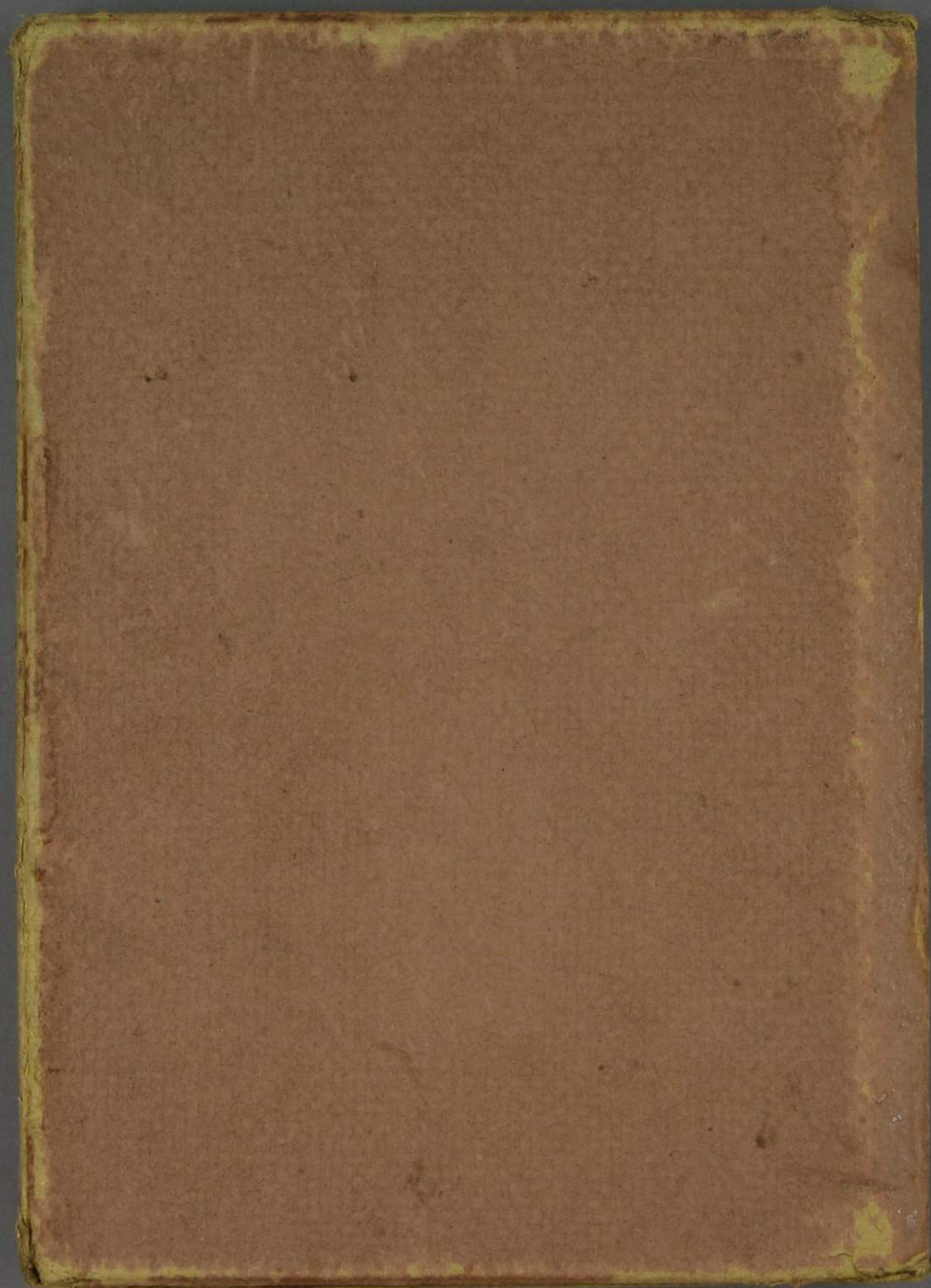
隨筆春城六種



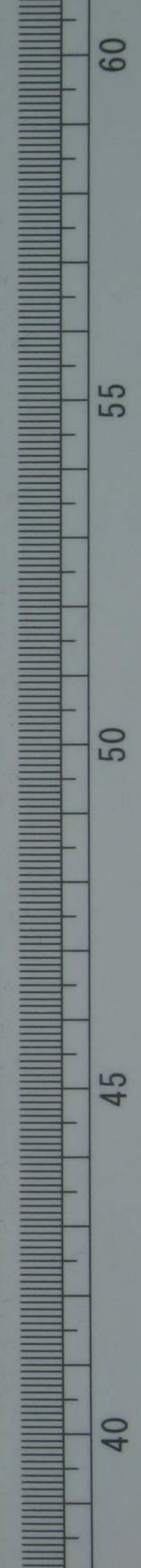
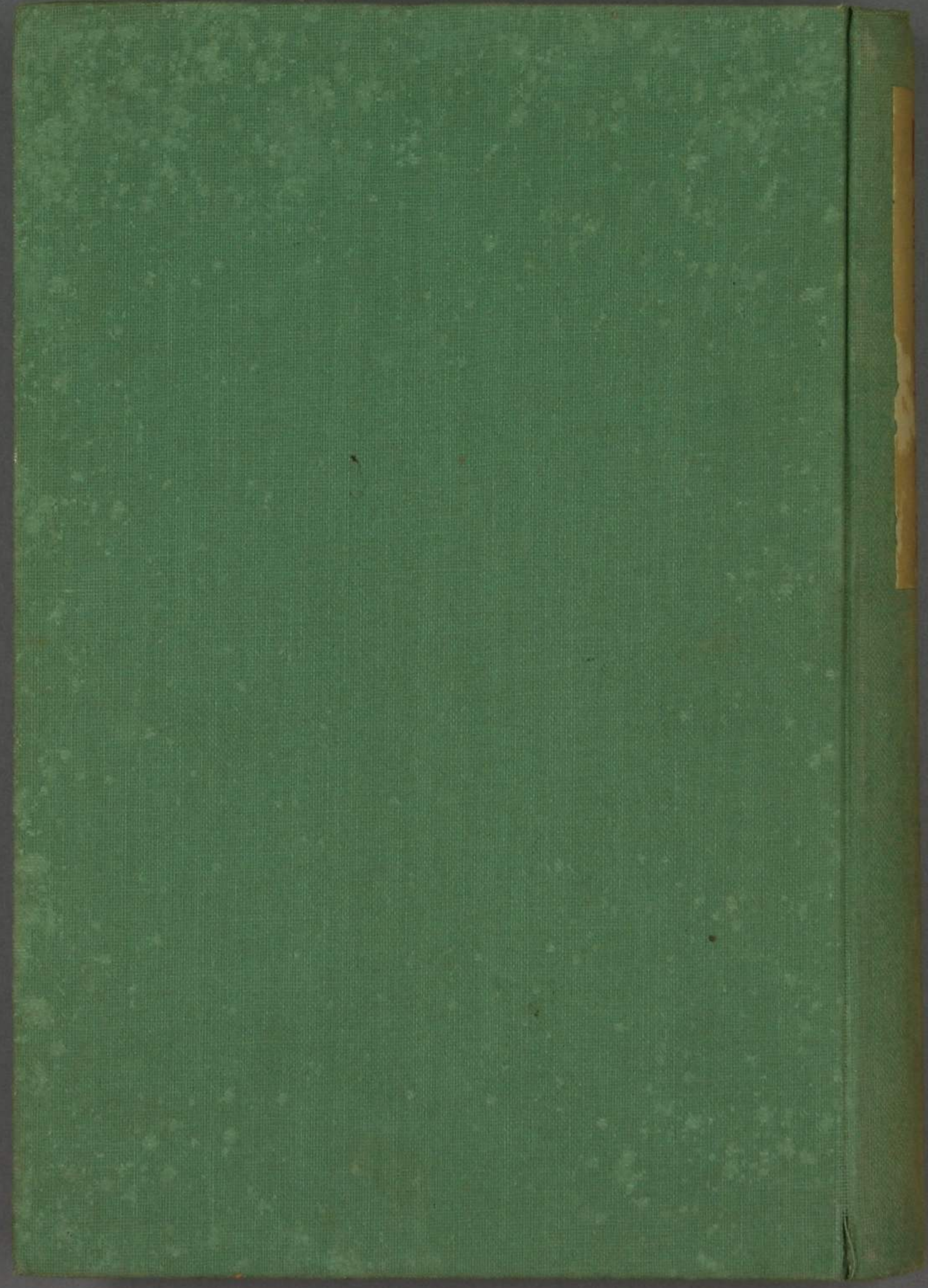


隨筆春城六種











隨筆春城六種

市島春城著











隨筆春城六種





隨筆春城六種





拙著「春城隨筆」を世に問うたのは昨年の末であつた。本年三月、大震災に壞れた家屋の改築に取りかゝり、牛込矢來に假寓を定めた當座、訪ひ來る人も少かつたので、圖らず閑を得て、漫興雜感を筆に託したのが此の隨筆である。署して「隨筆春城六種」といふは、内容が六種に分れてゐるからである。第一は「感興深き追懷」、第二は「獄窓舊夢談」で、共に私の回顧録中から、聊か奇警に庶幾ちかいものを収録したのである。第三の「圖書その折々」は、私が圖書研究に没頭した頃、折に觸れて書いたものを更らに加除訂正したので、長篇、短章錯綜してゐる。第四「趣味談採餘」は、「春城隨筆」の「趣味談叢」に入れる筈であつたのが、紙數に制限され



て收め得なかつたものを採録したのである。第五「意外録」は、人事其他で案外と感ずることを百件近く寄せ集めたもので、詼諧蒙求とでもいふべき戯筆である。第六「衝口發」は、故人の書名を借用したのだが、實は出鱈目の片々録で、世相に觸れた折々の座談を筆記したものである。奇警を欲するため特に漢文崩しの文體を選んだけれども、眼高く手低きを奈何せんである。要するに、全篇漫興の偶筆で、大方に示すに足るとは思はないが、數月の勞に成つたものを、流石に反故籠に捨てかねて、爰に出版することになつた。

昭和二年六月中浣

春城識す

### 隨筆春城六種

#### 目次

#### 感興深き追懷……………

- 一 近衛篤磨公を憶ふ……………一
- 二 高麗園雅集……………六
- 三 康有爲と會飲……………三
- 四 朴氏泳孝と觀梅……………一六
- 五 幼時見た前原と奥平……………一八
- 六 坪内逍遙翁の別莊に宿りて……………二六
- 七 正倉院に團十郎と會す……………三五
- 八 紅葉山人と最後の會食……………三七



九 寺崎廣業の騰龍軒……………三九

一〇 中井敬所翁を懐ふ……………四三

一一 印の結婚……………四八

一二 白河の提燈行列……………五三

一三 足利町の追懐……………五五

一四 酒豪二人の追憶……………六一

一五 盲啞學校に失明の馬琴を講ず……………六六

一六 横濱に於ける同窓會……………六九

一七 東京に於ける同窓會……………七七

一八 貢進生時代の大學……………七八

一九 奇想天外の天神講……………九三

二〇 高島吞象翁と語る……………九七

京濱間の鐵道(六) 高島學校(二〇) 易を心掛けた動機(二〇) インスピレージ

ヨシ(二四) 敬字翁に關する話(二五) 易の翻譯(二〇) 面白い按摩(二〇) 象

山變死の卦(二二) 外商と贖金(二三) 薩摩武士(二六) 閑叟公の事ども(二八)

鍋島の田中(二三) 家康時代の外資輸入(三五) 大名と大阪の金貸(三七) 三井

倒産を免る(三六) 伊達家の硝石(三九) 吞象とは何ぞ(三九)

一一 光悅の遺蹟を訪ふ……………一三〇

一二 五色の旅……………一三八

一三 修善寺の鐘聲……………一四五

一四 幼時の風遊び……………一四七

獄窓舊夢談……………一五三

一、忽ち識を爲す(一五三) 二、新聞界第一の犠牲(一五七) 三、入獄(一六一) 四、

新潟へ護送(一六四) 五、險於山(一六六) 六、地獄と極樂(一七〇) 七、留置所の一

夜(一七三) 八、破獄未遂を見る(一七五) 九、護送の奇縁(一七五) 一〇、高田を通過

(一七六) 一一、長野監獄(一七七) 一二、獄中に書を講ず(一七九) 一三、獄中の著

述(一八二) 一四、獄中の電信(一八四) 一五、外界との交通(一八七) 一六、寫真屋



- となる(一九〇) 一七、書家となる(一九三) 二八、門下生に博徒の親分(一九〇) 一
- 九、送別會(一九七) 二〇、大隈邸の邂逅(一九八) 二一、相撲興行(一九八) 二二、
- 演劇(二〇三) 二三、獄中の賭博(二〇六) 二四、死刑(二〇七) 二五、煙草の密入(二〇
- 九) 二六、一椿事起る(二一〇) 二七、暗室(二二二) 二八、雜事雜感(二二三)

### 圖書その折々

- 一 圖書館の不備と其補足私案……………二二五
- 圖書館の現状(二三五) 圖書の分布(二三〇) 間口を廣げよ(二三三) 富豪の文庫(二三七)
- 珍書調査と臺帳(二三九) 調査方法(三四三) 一種の保存獎勵(三四七) 大切な文化事業
- (三四九)
- 二 高麗藏經に就て……………二五二
- 三 古寫經趣味……………二五六
- 四 六朝文書を觀るの記……………二六三
- 五 北越雪譜の出版さるゝまで……………二七一
- 1 牧之と馬琴及び京山(二七二) 2 京傳馬琴約を果さず(二七三) 3 上梓までに三十年

- (二七六) 4 越後國雪物語(二七九) 5 馬琴への義理立て(二八二) 6 馬琴との絶縁
- (二八四) 7 畫工其他に就ての配慮(二八六) 8 材料發見の喜び(二九二) 9 馬琴と京
- 山の疎隔(二九三) 10 京水と雪譜(二九五) 11 越後下りの前觸れ(二九六) 12 書名漸く
- 定まる(二九八) 13 著作料僅に五兩(三〇〇) 14 京山の馬琴訪問(三〇三) 15 一覽火中記
- (三〇五) 16 道樂ものゝ北馬(三〇七) 17 父子相携へて越後へ(三〇九) 18 牧之の中
- 風再發(三二三) 19 京山と越後(三三五) 20 京山と其家庭(三三八) 21 京山の餘技と嗜好
- (三三三) 22 餘談(三三三)(三四四)
- 六 私の隨筆觀……………三三〇
- 七 日誌を書く心得……………三三六
- 私家の日記(三三七) 青年時代の日記(三三八) 日記を書く要訣(三四〇)
- 八 書簡三説……………三四四
- 1 書簡は情の使者(三四四) 2 書簡の八難(三四九) 3 書簡保存のすゝめ(三五五)
- 趣味談採餘……………三六三
- 一 含蓄の趣味……………三六五



二 聯想の趣味……………三六八

三 煙草禮讚……………三七五

    煙草に関する文獻(三七六) 煙草の異名(三七七) 日本煙草の特質(三八〇) 煙草の附屬品(三八二) アネクドット一二(三八三)

四 紙……………三八四

五 包装と裂地……………三九七

六 玩香……………四〇四

    蘭奢待より一木四名(四〇五) 鬪香の面白味(四〇六) 雙六と芝居に似る(四〇八) 故事風俗に因むもの(四一〇) 雅びな源氏香(四一一)

七 温泉と文藝……………四一二

八 旅……………四一九

    昔の旅(四一九) 山岳旅行(四二四) 旅に要する豫備知識(四二六) 旅と風景美(四三〇) 案内記(四三三) 旅館不快のかすく(四三四)

九 掘出し物……………四三七

一〇 骨董のかけ口……………四四一

意外録

はしがき……………四五七

一 無ささうだむ……………四五八

二 解剖社から兵法の大家 藤公看護婦に招かる……………四六〇

三 キ印にされた勝伯 異境に持てた省亭……………四六一

四 裸體應接の二幅對……………四六三

五 君子の好迷 お鼻さん……………四六四

六 ナペキンの上に贈與の勳章 中島信行の議場整理法 物々しい重器扱ひ……………四六五

七 異彩ある博徒の親分……………四六八

八 龍動の真中で切腹の準備 前將軍に草履を取らす……………四六九

九 似顔付サイン 大根の極印……………四七一

一〇 潔癖と勘違ひ……………四七二

一一 蝸涎の液 物騒な媚薬……………四七三

一二 力士を向うに廻して 森林意匠の一室……………四七六



一三 攝津大塚の喉 美男の吉良上野介 三人の林権助……………四七八

一四 一切經を讀んじ又手寫す……………四七九

一五 十里の間に三百餘の關所 社寺の商賣……………四八〇

一六 浮浪者の半面 惡所の希觀本……………四八二

一七 半峯博士と紙 詩版を薪とす……………四八三

一八 播槌―燐寸―靴 金城の鷓尾―日光の建築……………四八五

一九 地獄は僧徒で満員……………四八六

二〇 趣味は異なもの……………四八七

二一 缺けた處から召上げれ テンジン違ひ 風呂船……………四八九

二二 俳優入浴の一幕 螢と蚊……………四九一

二三 狩野永探 來聘使喫驚す……………四九二

二四 八重野夫人 外人の出鱈目 難訓一斑……………四九三

二五 色狂女性と奇怪な按摩……………四九四

二六 柿本人麿 髻自慢 生髻賣買……………四九五

二七 日光の宮號運動 明皇貴妃……………四九七

衝口發

五二一―五九〇

(了)

二八 通説當てにならず……………四九八

二九 佐賀の亂の陶彈 乞食刺錢を用意す 布團の中では眠られない……………五〇〇

三〇 奥平の奇行 慧春禪尼 維新當初の新聞紙……………五〇二

三一 西郷從道侯 福澤翁 前島男と星亨氏……………五〇五

三二 木戸公の乞食振り 板垣伯の住居……………五〇八

三三 明治の顯官と舊藩主 閑叟公の苦手……………五一〇

三四 中將姫支那に喧傳さる 圖書の關所……………五一三

三五 天一坊の膽玉 莫南一流の命名……………五一四

三六 幕末の外交官 五代友厚の書簡……………五一五

三七 斯氏の哲學書 油田の診察……………五一八



感興深き追懷



## 一 近衛篤磨公を憶ふ

近衛篤磨公は有爲の材を以つて早世されたのは眞に國家の損害である。公の家は攝關の系統を引き、日本に於て此上ない名門であるが、公の人格と材能は首相としても決して差支のない偉器で、何人も早晚それを期待したのに、案外早く世を去られたのは惜むべきである。公の父君忠房卿は最後の關白で、聰明の人であつたが、此方も早く逝かれて、祖父の君が長壽を保たれた。當時老公を以つて稱したのは即ち此の祖父君のことである。

私の存じてゐる或る歴史家が曾つて老公に謁して、源平時代の史談に涉つた時、其人は不用意に清盛々々としきりに呼び捨てにするのを、老公聞きとがめ、相國殿しゃうこくどのの事かと云はれたので、其人もやうやく氣がつき、成るほど斯様な家柄へ來て粗忽に清盛など、いうたのは宜しくなかつた。清盛も近衛も共に相國の家筋であるからには、相當の敬語を用ゐるが當然であると覺つたといふ。實に斯様な名門になると、歴史上大名のある人々とは、多く血屬上の關係があり、さなくとも同僚とか友人とかの緣故があるから、斯の様な家柄には歴史は決して死んでゐない



のである。

私が初めて篤磨公にお目に懸つたのは公が貴族院議長であつた時で、麴町の邸に居られた頃と思ふ。私を伴うた友人は公とは既に親密の間であつたから、初めより公は打解けて語られ、長坐した爲めに午餐の饗をもうけた。公は大の角紙好きで、回向院と貴族院と掛持に行かれたので、人は兩院掛持というた。公は嘗に此の戯を好んだばかりでなく、よく此戯に通じ、大體其日々々の番付を見て勝負を判せられたが、幾んど失することは無かつた。貴族院の忙がしい時は見物が出来ないために、勝負を其都度電信で取寄せた（當時はまだ電話が無かつた）程の數寄者だから、應接室には槽の小模型が置かれてあつた。公自身も角紙に譲らない偉大な體格で體量二十貫を出で、肉が締つて如何にも立派な相貌であつた。

公と識つてから間もなく一の會が設けられた。それは懇意の同人十數名が月に一回集まつて、酒杯の間に友情を温めようと云ふのであつた。此會員は公と共に獨逸に遊んだ學者政客が多かつたが、私は高田博士と共にそれに列なり、いつも私が幹事をつとめた。それ等の事から公とは益々懇意となり、常に公を友人扱ひするに至つたが、さて時に顧みて此人が關白家の出すなど、も云うた。

で日本最高の名門であることを思うては、俄かに態度を改めて敬意を表したやうな滑稽もあつた。又或る時は公に向つて、あなたの家は日本の國寶である。御自分では何と御考へか知れんが、攝家と云ふものは、國家の上にも大切な家柄であるから、あなたも、自重されねばならぬなど、も云うた。

公は頗る磊落な人であつたが、併しどこかに儼然たる處があつて、門地相當の威嚴に對しては昵近者でも自然尊敬の念が起つた。公の相貌は秀麗であつたが、凛乎たる氣魄があつて、普通の華族とは大いに趣を異にした。全體公家華族などは何となく薄弱な處が相貌の上に顯はれてゐるものであるが、公に於ては一點弱々しい處がなく、體軀も剛健で、寒中洋服を着けるに、洋袴つぽん下を用ゐるぬ位であつたのに、一朝二豎の冒す所となり、蚤世されたのは全く意外であつた。

日清戦役に廣嶋で臨時議會が開かれた時、吾々も其召集に應じて議席に就いたが、事果て、歸京の途次京都に立寄り、高田半峰居士らと故らに寛げる旅館を選んで泊りこんだ。公爵は貴族相應の旅館に泊つて居らるゝと聞き、定めし禮儀づくめの窮屈に堪へられないであらうと、



使を派して吾々の旅舎へ枉臨を求めた處、直ちに來られて云はる、には、實は困つて逃げ出さうと考へてゐた處へ使が來て救はれ、誠に難有いと喜ばれた。端なく宴會が開かれ名妓も多く席に來た。同人中の或る通人が、公爵と席を列するは恐れ多い、こゝは關白様の御郷里でもあるからというて、特に上座に緋毛氈などを敷かせて、そこへ公を請じ、校書中最も容色品位のあるものを選び、強ひて公の側らに坐せしめ、之れを御臺所に擬し、一同は態と末席に坐し、皆低首して、今日は關白殿下並びに御臺所まで御來駕を賜はり、恐悅至極に存じ奉ると、しかつめらしく敬禮をした後は例の如き無禮講となり、公も悅に入つて御祕藏の唄までうなり出された。それは「一つとや」の手毬唄であつたので、如何にも堂上家たうじやうけにふさはしいというて皆々喝采した。こんな事は公の徳を瀆すといふものもあらうが、公を追懐すると斯る人間味のある逸事を思ひ浮べざるを得ぬ。

## 二 高麗園雅集

故徳川頼倫侯に辱交の榮を得た、十数年間のことを追懐すると、いろ／＼の事が胸に浮んで

くる。嘗ては九州の果まで旅行を共にし、福岡縣では伴はれて元寇の跡を訪ねたこともあり、自分の郷里越後へ同行の時は、開墾工事の將に成らんとする大河津おほかうづの堀割を同覽したこともある。侯の本邸や別荘に招かれて優待を受け、談笑に時の移るを知らず、毎度深夜に迫んだことや、圖書館協會の大會や懇親會で侯を圍んで談笑したことや、思ひ浮べると際限ないほど色々な事があるが、自分の最も愉快に感じて今も忘れられぬのは、侯の大磯の別荘高麗園へ十六七の同人と共にお招きを受けた其の際の事である。

一體侯は多方面に興味をもたれた人であるが、高麗園の別荘は侯の趣味の結晶とも見るべきものである。時は忘れたが十年前に溯る。かねて名園と承つてゐたが、始めて拜見して園の風致と家の結構、園中のあらゆることに侯が加へられた意匠にはつく／＼感服した。此の別荘の所在地は高麗山の一端にあつて、山からつゞく森林帯が斜めに官道まで突出してゐる。此の自然の森林の中に道があつて、僅かの勾配で別荘の女關まで通じてゐる。森林は鬱然として白晝も薄暗いほどであるが、流石に掃除が届いてゐて、樹下には名も知れない種々の雑草が叢生してゐる。その草は一々異つてゐるので氣がついたが、これは侯が此の附近三十里界隈の異草二



百種を採集され、それを植付けられたとのことであつた。森林中に石で圍んだ立派な井戸が幾つかあるので、此の雑草を養ふ爲めとなつた。此の雑草はあとでわかつたが、此の森林中にあるばかりでなく、庭にも屋後の山にも幾んど空地を剩さず植ゑてある。其草の原産地を考へ、陽地にあるものは日光をあびる處、陰地にあるものは日の照らぬ處、濕地のもものは池沼と、それ〴〵草の性に従つて地を相してあるなどは行届いたものだ。

別荘の屋後には山がある。これが高麗山で、大部分御料地であるが、侯は其一角を拜領されたのであつて、少しく登ると、や、平な處に茶店がある。これは片田舎の茶屋に擬したもので、黒木で粗造し、店頭には草鞋や草履が吊され、壁や屋根裏には千社札が貼られ、田舎饅頭を賣る店主は田舎の爺さんにふさはしい粗野な衣服をつけ、どう見ても假装とは受取れなかつた。店前には旅駕籠が置かれ、どこからどこまで山間の茶屋に出來てゐるのに先づ驚かされた。一椀の澁茶で喉を濡しながら、店の柱に掛つてゐる柱隠しのやうなものに假名で何か刻してあるのを見ると、海拔何尺とあるので一笑を漏らした。この高さは海面から幾らもない、しかるにチャンと尺が計られてあるのが一興であつた。侯は店前に飼養してある猿に戯むれてゐる

られたが、小憩の後、侯はこれから山が嶮岨だから金剛杖を要すと云はれ、かねて用意の杖を銘々に與へられた。其杖は六角に削つた可なり長尺のもので、六方に烙印が文様のやうに捺されてゐた。其烙印は園内各所の雅名が刻されてゐた。侯は例の長身で此の杖をつき、先に立つて案内さるゝのに随つてゆくと、樹木は鬱々として路は屈曲し、路下には谿もあり、何となく深山の趣があるけれども、山は深いのでなく路も嶮ではなく、深山の嶮路と思はるゝ様に作つてある處に侯の意匠があるのだ。此の山中に山椒魚の飼養された處があつた。侯は此の魚の絶えんとするのを憂へて、天然記念物として保護されてゐるのであつた。これより少しく登ると愈々深山の趣があつて、崖上に一字の小屋があり、その前に臺が置かれてあつた。それに腰を卸してゐると、小屋より粗野な獵師態の男が現はれ出て、甘酒を一同に饗した。小屋の中をのぞきこんで見ると、大きな熊の皮が敷かれて、壁には古風な獵銃がいく挺も吊され、どこまでも獵師の小屋らしく出來てゐたので、また驚かされた。此處から縦横に道があつて追々下るのであるが、いろ〴〵の樹木が眼を遮り、道が巧みに作られてあるので、頗る奥深い感じを與へたが、實は奥深く思はせる様に工夫されてゐるので、數百歩にして平地に入り、や、大きな茅



舎に達した。ここはお庭焼の陶窯のある所で、一同はそこに入り、皆々興に入り悪書拙書を試みたが、候も一行の請ふに任せて、例の雄健の隸書を多くの雜器に揮毫され、幾十の陶器は窯に入つて看る／＼出来上つた。

さて山を一巡して初めて座敷に導かれた。候は粗造で見るに足らぬ、併し成るべく無益の裝飾を避け實用を主とすることに多少苦心したと云はれたが、實際は總檜作りで、どこまでも上品に出来てゐる中々手廣いものである。袋戸や床脇の棚などは普通用立たぬものであるが、それにいろ／＼新意匠があつて、皆役立つ様に工夫されてあるのに敬服した。又襖の繪なども、園中に集められた草の圖が文様となつてゐて、各草には小さな色の紙が貼附されてゐる。それには草の學名が書かれてゐるが、その色紙が亦おのづから文様となつてゐるのに感心した。初め此の園に招かれた時同人のいふには、吾々はお座敷の書畫や骨董などを賞翫する能力がないから、感服掛を市嶋君に頼むと云つた辭に、其約に背いて、到る處一行皆々感服して個々に感歎の聲を發し、私から咎められたのも一興であつた。一同食饌に向つた時候から丁寧な挨拶があつたが、候の云はるゝのに、昨日諸君に饗するため自身で網を投じ黒鯛を漁して見たが、ど

うも不漁で遺憾ながら数が諸君全部に供する丈ないと云はれた。成るほど銘々の膳には候自漁の魚が焼物となつてゐるので、眞實候の温い情誼を感じ、それと共に候が漁撈にも趣味をもつてゐらるゝことを知つた。

此の宴會の席で、一同より候に獻じたのは一巻の「心經」である。これは吾々同人が二ヶ月ばかり前、目黒の羅漢寺に小集を催した折、いつも腥いものを喰ふ連中が破格に精進するのだから、記念にと銘々一行づゝ敬寫し、それを表装したものであつた。候は之を喜んで受けられたが、宴會が終ると執事に導かれて離れた一室に入つた。茲には毛氈が敷かれ畫牋が展べてあり、筆硯や繪の具の類がこと／＼く備はつてゐた。そこへ候も見えて、諸君の筆蹟は先刻頂戴した「心經」に具つてゐるが、願はくはけふの記念に何か書いてもらひたい。お歸りの汽車時刻迄にはまだ二時間許りあると附け加へられた。さてかうなると、例の遠慮が始まつて互ひに譲つてはてしがないので、自分は和田萬吉君と内議して、折角の思召であるから何か銘々書くべきだが、それは手間が取れるから、君は例の漫畫で十六羅漢に擬し銘々の似顔を書き給へ、その肖像に銘々が署名するのにも一興であらうと請求し、自分は先づ惡筆を揮つて牋の上頭に



「高麗園雅集」の五字を横書した。和田君は續いて筆を把り、先づ中央に釋尊に擬して長幹の人物を寫した。それは云ふまでもなく侯を畫したのである。その左右に重なりあつていろいろの人物が出來た。十六羅漢よりも數が二つほど多かつたのは、一行の數がそれだけあつたからだ。此の羣像を諦視すると流石に筆に靈あり、それ〴〵誰れかに似てゐるので、一座興に入つて、われも〴〵と自家の像に名を録したり贊を書いたり、或は認印を捺すものなどもあつて多く時を費さず、一幅記念の書畫が出來たので、侯も破顔して喜ばれたが、此の羅漢像も心經も今になつて見ると、何となく侯に永のお訣れする識をなしたかの如き思ひがして眞に感慨無量である。

### 三 康有爲と會飲

故大隈侯は漫りに人に許す人で無かつたが、獨り康南海（有爲、字は廣夏）に許す所があつた。其の亡命して日本へ來た時、侯は其の私邸にかくまつて厚く遇された。侯は常に左右に向つて、南海の學識を稱し、其名節を重んずるの高きを賞された。私どもは毎々之れを聽いて南

海を解してゐたけれども、親しく膝を交へたのは可なり後の事である。會つて南海に早稻田大學の講堂で一場の講演を請うたことがある。其講演は世界の地理に就てあつた。こんな講演は兎もすると平板に陥るものなのに、如何にも奇警な觀察の縦横なるに敬服せざるを得なかつた。此の講演の後、學校の當局は南海を紅葉館に迎へて一夕の宴を張つた。其際私も與つたが、南海はこの招宴をひどく喜び、打寛いで種々の談が湧いた。其述懐談の内には下の如きことがあつた。「本席は御懇意の間であるから遠慮なく申すが、日本の文物研究に着眼して、支那は到底日本に學ばざるべからずとなし、日本の書を読み初めたのは、支那人中恐らく自分が第一であらうと思ふ。自分は明治十五年以來日本の書物を読み、遂に之れが翻譯所を設けて流布に努めた。斯様な譯だから今日は支那より多數の留學生が來て居るけれども、自分は其の第一の留學生である。」と云はれたのに、吾々は少からず感動した。明治十五年と云へば、早稻田大學の前身東京専門學校が初めて生れた時で、吾邦の文化もまだ幼稚な時代であつた。然るに先進を以つて誇る支那に居ながら早く文明の學問に志したと云ふは、餘程の識見があるものと云はねばならぬ。



元來南海は近世罕に見る考證學者で、曾ては「僞經考」を著し、經書の僞作を摘發して學界を驚かし、「改制考」を公けにして、大いに世の經綸家に知られた程の學者であるから、決して悲歌慷慨徒らに氣を負ふのみの人ではない。勿論外國にも遊び、歐米利らぬ處がない位だから、世界の大勢にも通じてゐる。曾つては張之洞に重んぜられ、光緒帝の寵信を得て、何事も直奏を許され、支那の維新を企つる折柄、竟に蹉跌して萬死の裏僅かに免かれて亡命日本の客となつたのである。

南海は學者であると共に經綸家である。若し我國に於て似寄りの人を搜したら、時勢に先立ち早く活眼を開いた點に於て、維新の元勳よりも寧ろ早く勤王の大義を唱へた竹内式部などに比すべきであらうか。併し康の力量は遙かに其上に在ることを思ふと適當の比較でないと思ひ直して、新井白石こそ似寄りが多いとフト思ひつき、南海に杯をす、めながら、此事を言ひ出したのが、座中の談柄ともなつた。白石の時代と明治の初年とは時代は餘りに遠ざかつて比較にならぬが、其の學識の豊なる點に於て、文藻に富める點に於て、早く西洋の事情に通じた點に於て、創見があつて誤謬の多い舊説を破棄し新見地を開拓したる點に於て、制度に精通して

新機軸を出したる點に於て、將た權門に重任を得たる點に於て、兩々比し來ると似通つた處が甚だ多く、強ち不倫の比較でないとは私の主張であつた。然るに座中の或る支那通が私に耳語していふには、君の比較は穿つてゐるが、唯だ一事の大なる相違がある。それは白石の貧なるに似ず、南海は富籤で大金を贏け、巨萬の富を有してゐると云うた。私は之れに答へて、支那の習癖南海と雖も免かれぬと見えるが、白石は一家の私産は無かつたにせよ、國家の財政經濟を料理する材能があつて幣制を革めたことは著明の事實である。して見れば此點も比較を失するとは言ひ難いと、夜更けるまで、傍若無人に論評したのも一快であつた。

南海は近年之れ程愉快な會に臨んだことはないと云ひ、酒酣なるころ席上絹紙を展べて得意の筆を揮つた。此人は金石書道の學に於ても近世希に觀る人で、陳套の舊説に據らず一家の説を立て、千古の迷霧を闢いたものが一にして足らない。私なども、此人の著書の啓沃を受けてゐる所から、斯人の揮毫なら一紙ほしいと思つて、書いてもらつた扁額は、今も我が書室に掲けてある。



## 四 朴氏泳孝と觀梅

朴泳孝氏が金玉均等と共に亡命して日本へ来て三四年程後の事であつたが、偶然朴氏と相識る機會が起つた。二三月頃の寒い時節、私は或る友人と拉へて觀梅の爲め近郊へ出かけた。先づ新橋で汽車に乗ると、同じ車中に朴氏が二三の書生を随へて乗つてゐるのを認めた。朴氏は當時春秋尙ほ淺く、色白の優形で、秀麗の風貌に品位が備はり、一見名門の貴人であることが領づかれた。主従共に洋服の扮装で、従者は大瓢を携へてゐた。

車中には互ひに語を交へる機會を得なかつたが、大森で下車し、其附近の梅林を徒歩で訪ね回ると、到る處に大瓢をぶらさけてゐる朴氏一行に出遇つた。此一行も探梅の爲め同じ徑路を辿つてゐるのだから、相前後して同じ處に相會する筈である。斯様な譯からいつしか語を交へることになり、互ひに名刺の交換をやり、大瓢の冷酒を頒ち與へられなどして、爰に初めて朴氏と識つた。四五の梅林を歴訪した最後に手を分ち、歸途には再會を期せず、吾等は氣儘に行動して時を移し、漸やく大森の停車場まで來ると、そこにまた朴氏一行が先着してゐるのに

出會つた。朴氏は到る處大瓢を傾けたと見えて、醉態淋漓の大元氣で、待合室のテーブルの上に横臥してゐる有様は、亡命の事など全く忘れてをるらしく思はれた。日本に身を置くは如何に安全とは云へ、刺客に襲はる、危険の無いでもないのに、さても大膽の事よと、吾等は窃かに危んだ。

終に相携へて同じ汽車に乗り込んだが、朴氏は吾等に向つて今日の奇縁を喜び、新橋に着かば日も暮れんが、余等と與に晚餐を共にせずやと云はれた。私共も何れかに一酌をと考へてゐた折柄、一議に及ばずそれに同意して、間もなく新橋に着すると、朴氏等が先きに立ち吾等を或る洋食店へと導いた。こゝは朴氏の常に來る家と見えたが、朴氏は到頭主人となつて、吾等に盛んな饗應をされた。其際は主客共に既に酣醉の境に入つてゐたので、互ひに遠慮會釋なく談論し、果ては政治の論にも互り、朝鮮政治の將來に就ても論議したが、此時はまだ日韓合邦を夢にも想はなかつた時だが、雙方の議論は暗に之れを豫言するもの、如くであつた。朴氏は當時まだ日本語の操縦が出来なかつたので、すべて韓語で應酬されたが、従者は皆な日本語に熟達してゐて、彼我の談論は遺憾なく通譯され、談論に時の移るを知らず、夜深うして袂



を分つた。私が朴氏と會したのはこれが初めてである。其後は遂に會する機を得ないが、朴氏も今は老境に入つてゐる。知らず、今尙ほ當年の意氣を存するや否やを。

因に云ふ、氏は判書領議政元陽公の子、哲宗十二年、水原に生る。長じて哲宗の一女を娶り、錦陵尉の榮爵を受く。明治庚戌、日韓併合の後、侯爵を授けらる。

## 五 幼時見た前原と奥平

先頃芝の青松寺に萩の亂に斃れた前原一誠、奥平謙輔一派の追悼會が催された。私は此の二豪に縁故があるから、青松寺の追悼會に臨みたいと思つてゐたが、差支が起つて已むなく缺席した。此の缺席は自分として遺憾とする所であつたので、身代りに奥平の揮毫五幅を、人に託して會場へ持たせてやり展観に供した。

萩の亂も五十年前の昔となり、今日で二豪を知る人は、山川健次郎、江木千之二老の外、幾人も無いであらう。私が二豪を見た頃は十歳にも足らぬ幼少の頃であつた。明治八年に東京へ遊學した頃は私が十五六歳の時で、確か其時前原は萩から出京し、木挽町の或る宿屋に宿泊し

た。此の宿屋の名は忘れたが、萩の人の話に、それは萩の定宿ぢやうじやくであると聞いた。餘り立派な宿でも無かつた。何でも五七の附添もあつたやうであつたが、前原に面會したのは六七年目で、そしてこれが最後であつた。其後萩の亂が起つた。此の私の訪問は別に意味のあつた譯ではなく、私の親戚熊倉美雅といふ、當時工部省に出仕してゐた人が私を伴うたのであつた。前原は私を見て「大きくなつたナ」と言つたことが頭に残つてゐる。その後、開成學校で山川健次郎先生から物理學の教を受けてゐたころ、一日同級生と先生の家を訪うた時、先生は茶の代りに大きな茶碗で冷酒を侷められたが、其際フト見ると奥平の揮毫の幅が壁間に掲げてあつたので、先生と奥平とが尠からぬ縁故のあることを感じた。此時は奥平が既に刑死した後であつた。

前原が私の郷國越後に來たのは明治の初年であつた。私の郷里水原すゐはらはもと天領で、今は寂寥たる僻邑であるが、茲に多くの富豪が居つたので、明治の初年には茲を政治の中心とした。即ち越後府を置いたのもこゝであり、其後縣を置いたのも亦こゝであつて、前原は即ち越後府の長官として來たのである。水原には舊陣屋もあつたけれども、宿泊には十分の設備も無かつた



ので、私の家に宿泊することになった。邸内には隠宅があつて、それが母屋と離れて可なり廣かつたので、そこを前原を宿す所とした。確か座敷を應接の間に充て、階上が居室で、寢所も爰に設けた。當時府の長官は今の知事などよりはるかに格式が高く、殊に前原は參議格の人であつたから、私の家でも全力を接待に盡し、粗略のないことを期した。當時は政府の顯官を宿すことが、富豪の大切な奉仕であるかに考へられ、之れを以つて光榮とした位である。言ふまでもなく宿泊料を取るではなく、費用萬端皆な賄つたものである。

私は當時頑でない小兒であつて、時には前原の居室で遊び戯れ、菓子などを貰つて喜び、毎日遊びに行かねば氣がすまぬやうであつた。前原も可愛がつてくれられたが、家父が氣をかねて、さう矢鱈に往つては困ると叱られたこともあつた。幼少であつた私がどう前原を見たかといふと、極めて穩かな沈黙の人で、どうしても恐ろしい人とは思はれなかつた。今になつて考へても、あの人が山縣よりも軍上手の武人であるとは思へない。確か顔面には薄あばたがあり、色白であつた。如何にも鷹揚で物に頓着せず、朝寢坊でそして無性であつた、あの人のエライ處がそこにあつたのだらう。如何にも生眞面目で、怒ることもなく亦笑ふことも無かつ

た。居室にはいろいろの重要な書類が散亂してゐた。それを奇麗に片付けることは御本人の望でも無かつたらしく、三人の小姓のやうな青年が附いてゐたが、此等も居室の掃除をしなかつた位であるから、私の家人などは勿論遠慮して此室に立入らなかつた。唯だ折々遊びに往つたものは、私と私より二歳違ひの弟であつた。此室へ漫りに入ることの出来なかつた理由の一つは、毎月長官が受取つてくる俸給が、奉書紙で包んだま、放り出してあることであつた。此室には床の間がなく、其代りに薄暗らい物置のやうなものがあつた。別に戸も何もなかつたが、重要な物を入れ置くには屈竟の處であつたので、官文書でも俸給でもこゝが放り込み場所となつた。こゝは前原の外、手をつけぬ祕密の所であつた。が、其主人公が無性であつたから、主人公自身も殆んど手を着けたことがないといふ始末で、毎月の俸給が、封も解かれず、累々として他の文書と雜居してゐた。然るに此の封も切らぬ金がいっしか無くなつてをる譯は、前原をそゝのかして金を貰ひにくる甲乙たれかれがあつた。かれ等は前原の性格を十分知り抜いてをり、若しも金の入用があれば私の家が辨ずることをよく承知してゐるので、事を設けて無心をいふと、恬淡な前原は、そこらに包んだ金がある筈、それを持つて往けといふ調子で、みづから手



を下さず、無心をいふものに捜させたので、幾包も胡麻化して持去るといふ始末で、俸給は封のまゝ、他人の手に移り、前原が歸國する時には旅費すら無かつたので、私の家で辨じた筈である。

前原の無頓着であつた爲め私の家で困つた事は、各方面から日々寄せ来る贈品の中には少からず魚類もあつたが、その始末に就て主人は例の無頓着で、小姓輩に何一ト言云ふでもないから、私の家では勝手に始末が出来ず、みす／＼腐敗せしめたが、後には前原の性格が分つたので、ドシ／＼勝手へ回はして始末をした。當時前原に使はれてゐた、吾が郷人が私の記憶では二人あつた。それは伊藤退藏と遠藤七郎だ。此等は皆な士族でなく、市井の人であつたが、官仕に足る才幹があつた。時々前原に無心を云つた連中は即ち此等である。伊藤退藏は水原の蠟燭製造營業であつたが、晩年岩船郡の郡長をつとめた。前原の小姓格で附添うてゐた三人の青年の一は、此の伊藤退藏の養子で伊藤悌治というた。他の二人の姓名を忘れたが、皆な越後人であつたやうに思ふ。伊藤悌治は私より年長であつたが、後に東京英語學校で一緒になつた。晩年大審院の判事として相當の地位を占めた。歿してからはや十年餘になる。彼等小姓連

も當時髪を切り下けて、紫の紐で結んでゐた。それが當時の流行であつたのだ。彼等の務は上官の出仕の時御用箱を携へて追隨すること、日々の訪問客を取次ぐ位なものであつた。遠藤七郎に就ては多く語るを要せんが、私の家に前原が、歸國後遠藤に寄せた書簡が一通ある。それに依ると前原には一人の妾があつたことがわかる、「あれも氣の毒だ、どうか俺に代つてよく世話をしてくれ」とある。此の妾はどこに置いたものか、水原在任時代妾宅があつたとも聞かない、私の家には無論妾の來たことは無い、しかし妾のあつたことは争はれない、流石の豪傑も女なしには日が送れなかつたと見える。

前原が私の家に宿した數月間は警衛のために特に門番を置き、又夜番を置いた。裏門のそこには隍があつて橋が架してあつた。こゝは家僕の通用する門で、裏門から滅多に前原に面會を求め客の來たことがないのに、ある日のこと、一ト癖ある佩刀の一士人が、袴羽織もつけず「前原をるか」とツカ／＼と這入つてきた。これには門番も驚いたが、誰何しても名を云はず、遮らば斬りも捨てん見幕であるから、門番も戦慄して隠宅へ案内すると、これが奥平謙輔であつた。門番が後に語つたのによると、テツキリ刺客であると思つたと云うた。如何にも奥平の



相貌は斯く思はせたであらう。彼れの顔面は漆のごとく黒く、兩眼は爛々として光つてゐる。衣服は粗野で袴羽織も着けず、白縮緬の兵兒帯を締め、足袋も穿かず古びた下駄を突つかけてゐた。何人が來ても前原に對しては敬語のありたけを用ゐるのに、これは呼棄にして、何を問うても一切答へない。門番が刺客と速断したのも全く無理は無かつた。今考へて見ても、奥平は案内もなく、よくも裏道をたどつてきたと思はれる。案ずるよりも生むが早いといふごとく、門番から此の椿事の報告される前に、奥平は早や前原の居室に通つて一別以來の挨拶が交換され、間もなく破鐘の如き奥平の大聲が階下に聞こえた。二豪の此會見は何年振とかいふのに、兩人顔を合はせて唯だ一語「オー」と云つた計りで、如何にも簡單なるに驚いたとは傍らにゐる小姓の語る所であつた。奥平は此日より前原と同室の人となつた。奥平は多分佐渡の准判事として赴任前先づ前原を訪ねて來たのであつたらう。私の家は圖らずも爰に萩の二豪を併せ宿す縁故關係を有するに至つた。實は奥平は早く越後に因縁があつた。戊辰の戰爭に越後を平定したのは此人であつた。彼れが新潟の酒樓で紅燈綠酒に親んだのはツイ一年前の事である。併し吾が郷里に來たのはこれが初回であつた。

前原と奥平が私の家に同棲したのは幾日位であつたらうか。私の記憶では餘り長くなかつたやうである。兩人の性格が全然異なつてゐるのに、よくも同室に起臥が出來たと私の父はよくいつた。兩人の異なるのは其の風采のみでなかつた。一方は鷹揚で寡言であるのに、一方は性急で多感である。一方は朝寢坊で日の三竿に上るを知らないのに、一方は東方の白む前に早く目を覺まして破鐘の如き聲で詩を吟じ書を讀むを例とした。一方は喜怒哀樂色にあらはれず、端倪の出來ない所があるのに、一方は慷慨激越、兎もすれば劍を按ずると云ふ風であつた。一方は酒を控へ目に飲んで泥酔の境に至らないのに、一方は斗酒を辭せず、酔倒すれば躰船雷の如くである。いくら相許す朋友であつても、よく起臥を共にし得たものであると怪しまるゝほどに、其の性格が異つてゐた。但だ兩人共に同じき所は頗る生眞面目であつた。前原を以つて玄徳に譬へたならば、奥平は張飛であつたらう。奥平はどう見ても武勇の人で、渾身是れ膽、進むを知つて退くを知らぬ人と見えた、機略は恐らく此人の短所であつたらう。しかし學問は深く、詩書共にあの頃の有志家の群を抜き、文章は曾つて草稿を作らず立どころに成つた。奥平が私の家の客となつて、家人は其の面相で恐れたが、吾等小兒は相變らず其の膝下に遊



び戯れた。コワイをぢさんも吾等には優しかつた。奥平は佐渡の准判事を勤め、それを辭してから再び私の家を訪ねて来たことがある。その時は既に前原は去り、私の家も水原から他に移つた頃であつた。今想ひ起すが、岩船郡の辰田といふ村に私の所有地があつて、そこに土地の管理人を置く小さな家があつた。奥平はそこに行きたいとあつて、吾等兄弟も伴はれた。こゝは越後の僻土で奥平を待つ設備がなく、酒は四斗樽を運んで其の鯨飲に委したが、下物の調理には困つた。然るに奥平は一向無頓着の人で、肴はあるに任せて別に望がなく、飯を喫する段になると、必らず總べての肴をしりぞけて、梅干だけを副食物とする人であつた。斯る簡易生活でなければ、此田園には一日も居らるべきでない。案外此の田家が氣に喰つて數日滞在され、毎日吾等を伴うて河原に散策に出かけ、犬などに會ふと、刀を抜いてどこまでも逐ひかけるといふ意氣で、今日なれば不良の二字の免れ難い型であつた。吾等は此の豪傑には慣れ親んで、其の酔倒を待ちて、其の眞黒の顔に樂書をしたり、玩具を頭髮に結んだりして、サンザン戯れても、眠を裝うてゐるのか一向知らぬ顔で、夢が覺めると面上の樂書などを氣にもかけず、得意の詩を高吟し、興到ると何か書いてやる、墨を磨れと云はれ、吾等は幾度も墨を磨つ

た。私が今藏してゐる四五の幅は皆奥平が越佐在留中の筆ではあるが、十年前東京で手に入れたもので、幼少時代に書いて貰うたものは四散して一紙もない。今想ひ起すが、此の辰田に奥平が酔後揮毫の額が久しく私の郷里の家に掲げてあつた。それは「敵愾」の二字であつたが、奥平は小兒の爲めにもこんな激越の字を選ぶ人であつた。前原の書も皆な散じて幾んど無い、僅かに一幅あるのは「忠孝節義」の四字を縦に大書し、私の幼名雄之助の爲めとある。これが不思議にも母方の村落の一農家にあつて近年手に入り、今はそれを記念に藏してゐるが、前原と奥平は一寸語を選ぶにも各々其性格をあらはしてゐるやうに思はれて、そこに私は興味を感じず。

奥平が越後に來たのは此時が最後で、前原とは後年東京で遇つたが、奥平とはこれが永訣であつた。前原が越後を引拂ふ時、私を長州へ伴ひたいといふたと聞いたが、それは戯れであつたかも知れんが、父は勿論諾さなかつた。若し伴はれたならば、或は前原と運命を與にして、青松寺の五十年記念祭に祀られた組であつたかも知れん。



## 六 坪内逍遙翁の別荘に宿りて

坪内高田二博士と熱海に遊んだことが數十回とある、それは書生時代から今に及んでゐる。十數年前に三人が落會つた時に、吾々も老後の靜養所として共同して別荘を設けようではないかと相談したことがあつた。逍遙君は例の諛語を弄して、共同別荘と云はずして共同墓地といふたので、それが三人の間の通語となり、連日共同墓地を設ける處を尋ね廻はつたこともあつたが、遂に果さず、逍遙君のみ二度まで別荘を營んだ。最初は海岸近く荒宿あらしゆくといふ所に建てたが、後には市街を離れた山寄りの水口村に前のよりは遙かに大きなものを營んだ、今の別荘がそれである。

私は近年熱海へ行く毎に、逍遙君の此別荘に必らず宿ることになつてゐる、如何にも閑雅な處で居心地がよい。殊に君は樓上の書齋を私の起臥の處として充てがはれるが恒例で、茲には筆研圖書茶器寢具まで一切備はり、君一流の意匠を凝した室であるから妙に興味がある。窓に向つて作りつけの机があつて、背後に身體を凭らしむべき柱がある。君が會心の筆を揮ふ處は即ち此處であるのだ。私も此机を拜借して物を書くこともあるが、窓越しに少しばかりの畑を隔て、隣の農家の茅屋が見える、そして此農家の廐が書齋と相對してゐる。此の廐には戸があつて、それに長方形の穴が穿たれてゐるのは、馬の首を出す處であることは言ふまでもない。ある時筆を停めてフト窗外を望むと丁度馬が首を出してゐて、それと吾等は差向ひになつた。其時私は微笑を禁じ得なかつた。こゝに此家の主人が坐してゐたら、正さに羊と馬とが眞向ひに顔合せをするのである。小羊先生が著作中馬と顔を合はせるのは、多分毎日の事であらうと、其の光景などに想像を馳せて、おもしろく感じたことがある。

逍遙君は文學者に有り勝の不眠症に困められ、眠薬を藉ることが頻々とある。毎朝起きて君と顔を合はせると、先づ私から君に前夜の眠況如何と問ふのが常例であるが、十分に眠れたと聞くことが甚だ稀れた。君はいつもいうてゐる、「何が爽快であると云へば、薬を用ゐず自然に眠を得た其朝ほど愉快なことは無い」と、これを聞いては誠に同情に堪へない。君が海濱の別荘にゐられた時、庭に合歡木ねじのきの大樹があつて、その枝葉がはびこつて君の書樓を翳し、一種の風致を添へてゐた。此樹の葉は夜分になると悉く裳のごとく垂下し睡狀を呈するので、椽の



名があり又青裳の名もあるのだ。逍遙君が此樹を庭へ取入れたのに格別意味があつたのではないと聞いたが、私は君に向つて戯むれて、草木ですら夜分眠るのに、君は何たる事ぞ、チト此木に見習ひたまへというたこともある。

君は紅葉山人などの遅筆と異つて、一瀉千里の勢で筆を走らせ、其の快速驚くべきものがあるが、併しそれは感興の乗つた時の事で、その感興が湧かねば筆を控へてゐることもある。君は戯れに天來のインスピレーションを狐に憑かれるというてゐる。人が原稿の催促などすると「何うもいかぬ、まだ狐が來ない」と眞面目に云はれる。私などは時々君を強制して「狐が來ないでも坪内君で結構だから」というても、君は斷乎として承知しない。

逍遙君とは、ある時間に散策することが日課のやうになつてゐて、熱海の界限、吾々の筈痕の印しない處は幾んど無い位である。君は散策中種々文藝にわたる談をされるのが毎々で、それに依り私の耳をどんなに肥してゐるか知れない。梅園の往復に兩人無氣になつて語り合ひ、途上の何物も目に入らなかつたことなどが幾回もある。吾々の散策で人の賞翫に漏れてゐる勝區を搜し出した處もある。今衛戍病院となつてゐる處に山葵の叢生してゐる溪流や、門外

數株の柳のある廢屋や、北齋の三國誌の繪にでもありさうな或る庄屋の塙根と其の門外の竹林などは皆な吾々が賞翫した處で、柳のある家を五柳先生の居と假りに名づけたこともある。併し熱海も鐵道開通其他の爲め追々變遷があつて、吾等が賞翫した處は大抵俗化して、今は一顧の價もなくなつた。

併し今尚ほ依然一個所勝地が存してゐる、それは熱海と伊豆山の中間の往還に在つて何人も通行する所だが、餘り人は注意を拂はぬ。こゝは橋が架してある所で、往來の旅人は景勝に氣もつかず、橋を渡つてゆくが、橋の下は谷が深く落込んで、藥研の如き底に溪流があり、それに沿つて一方に崖が高く聳え、一方には民家の茅屋が軒をならべてゐる。此の民家のある處に立つて橋を見ると、虚空に架したかの如く如何にも高い處にあつて、風趣を感じるのみならず、溪流に臨む民家には澡泉を引いた浴場が戸も閉さずにあつて、それに馬が勝手に這入つてゐる光景は何とも云へぬ野趣がある。さて民家に近い道路には塵埃が委棄に任せて散亂し、丘陵の雜草も亂脈に繁茂して蕪穢を極めてゐるけれども、それが敢て大體の風趣を害するでもなく、却つて自然の風趣を添へてゐる。いつも散策ごとに激稱して、洋畫の畫材として尤もよい



などと噂をする處である。

逍遙君は、いつぞや橋下に足を留めて、風景を賞しながら、脚底に横はる蕪穢のものを踏みながら云はる、には、沙翁の文章美もよく研究して見ると、決してキチンと片付いてはゐぬ、併しそこに却つて長所がある。歐洲近世の大家の文章は、すき間のない程よく整つてゐる。そこに至ると遙かに沙翁以上であるけれども、餘りに格に入り過ぎて却つて妙味がない。沙翁のは丁度此處の取繕はぬ景色や環境のやうなもので、強ひて彫琢を加へず、大體の結構に重きを置かれてゐるので、瑕疵があつてもそれが目に付かず、到底及びがたい雋味があると云はれたが、我輩も全く同感で、文章や風景のみでなく、繪畫、建築、其他の藝術に於ても、君の此評が適中することが多いのである。

吾々が同賞の勝區で逍遙君の作中に取り入れられてあるものもいくらかある。その一は、梅園の奥にある古き祠堂を白晝暗いほどに蔽つてゐる、あの大きな樟は吾等のお名染のものであるが、逍遙君が「役行者」を作するに方り、身自から劇中の人となつて、危険を冒してあの大樹に攀ぢ登り、枝の四方に擴がつてゐる木の股に座を占め、實地の試しをやられたことがあ

る。其際私は熱海に居合はさなかつたが、先頃君の別荘に例のごとく泊つてゐると、玄關の入口のうす暗い處に、一面の寫眞の額が掲げてあるのに氣がつき、よく視ると、それが君の木登りの時の撮影で、天を摩する凄味のある巨樟の枝の間に、白衣白髯の人物が端然と坐してゐるので、これが行者研究の記念寫眞と分つたが、わざ／＼白衣まで着けるとはチト念が入り過ぎると思ひ、それを逍遙君に云ふと、君は笑つて白衣ではない、よく見給へ、羽織を裏返しにして裏地をあらはしたのだと云はれたので一笑した。

逍遙君が藝術に熱心で、その研究に眞劍味のあることは、廣く世間に知れてゐるが、私が長い間の交で驚いたことは、此春君が熱海で重患に罹られた時のことである。其際は一時どうかと氣遣はれ、私も匆皇東京から見舞に出かけたが、家族と醫師の外絶對に入ることを許さない、病室から低調でこそあれ、三味線が戶外に漏れ聞こえたので、人は之れを奇とした。實際は三味線ばかりでなく、其病室で踊の稽古が行はれてゐたのである。丁度その頃熱海線が開通するので、豫て君が其爲めにもした、「熱海の榮」といふ一曲を、開通祝賀會上演する段取になつてゐたのに、君は折あしく其場合病に臥したので、君はそれが氣になつてたまらず、生死



も測られぬ病床に、一二の妓を側近く招き、踊の振を授けたのであつた。幸に藝に堪能である、君の身寄りの士行氏が見舞に來合はせてゐたので、それが君の意を承けて、枕頭に練習を試みたのは、君の勞を省いたに相違ないが、實は命がけの所業であつた。家族は皆ハラ／＼して氣遣つたが、案外熱も多く昂進しなかつたのは何寄りの仕合であつた。

逍遙君には自然の風流趣味があつて、吾等は毎々感服する。君が荒宿の別莊を作つた時には餘りに地積が狭く、庭園に十分花木を取り入れ兼ねたが、幸ひ路を隔て、君の庭の後ろに方り、他人の畑があつて風致のある蜜柑の樹が幾株も植ゑてあり、果實が黄金の色をなして鈴なりに密集してゐるのを、君の家の茶の間から見ても二階から見ても甚だ趣があるので、君はこれを以つて自家の庭の寂しさを補はんとし、毎年持主から果實の全部を買ひ取り、長く樹の上に實を留めて眺めたものであつた。今の別莊は前のに較べると、規模がはるかに大きく、遠望の利く所に最も風致が存してゐるが、一時は君の目前を遮る或障害物が出來、君はそれを除くに一方ならず精神を勞し、果ては少からぬ資を投じて其地を購ひ入れ、漸やく其障礙を取り去ることを得た。さて取去つて見ると、一眸の内に魚見岬の空洞までも透視することが出來て如

何にも眺めはよいが、此の魚見岬近く山狀をなしてゐる丘陵に、松の生えてゐるだけでは物足らぬとあつて、その山の所有者に請うて華表を建てることゝなつた。如何にも翠松の間に丹塗りの鳥居が隠見する風致は得も云はぬ趣があつて一層風景を美化した。全體君の別莊は「雙柿舎」の名があるだけに、珍らしい柿の老大樹が一雙並んで庭を飾つてゐる。脱葉の後は殊に其の枝幹の姿態に趣致を覺える。これは君が尤も愛する所のもので、私のために君が嘗つて揮毫した柿の樹の幅には左の和歌が題してある。

わが軒のやせ二王とも立はゞる百年柿の姿をかしも

## 七 正倉院に團十郎と會す

私は梨園の人と交が幾んど無い。七八年前であつたが、坪内逍遙博士に案内されて寺嶋梅幸を帝國劇場の樂屋に訪うたことがある。舞臺の上で此優を見たことは一再ならずあるけれども、近づいて化粧半ばの此人を見たのは此時が始めてであつた。其時の直覺を云ふと、優男と思つてゐたのが全く裏切られて、體格が思ひの外に大きく、筋骨も太く荒々しく、手の血管



などは突出してありくと見え、舞臺に見るやさ女は此人かと不審に思ふ位であつたが、併し退いて思ふと、これほどの嵩が無ければ舞臺は泳げぬ譯だ。男優が女形に扮するのは日本に於ては誠に意味あることだと感じた。梅幸は頗る快活の人であるかの如く見受けた。

他に偶然名優と旅先に會したことがある。それを追懐すると多少の趣致を感ぜざるを得ぬ。奈良の正倉院は今も堅く鎖されて、某々の位爵を有するもの及び其家族と特殊の研究家だけに拜觀を許さるゝ事になつてゐるが、往年まだ餘り面倒な取締の無かつた頃は、幾許の案内料を拂へば直ちに拜觀が出來た。私の拜觀したのは其頃であつた。其折誰か一人私に先立つて這入つてゐる人があつた。其人は仙臺平の袴を穿つた紳士で、薄暗い校倉まぐらの中を切りに觀回つてゐた。此先生中々いろいろの物に興味があるらしく、熱心に案内者に種々の質問を放ち、中にも例の香木蘭奢待に就ては執拗しつこく質問するので、案内者も幾んど答辯に窮したも道理、此時分は相當の能力ある人が案内したのでは無かつた。私は見兼ねて聊か知つてゐるだけのことをいうて案内者に應援したが、香木の事が濟むと今度は蒔繪の刀室に就ていろいろと質問を始め出したが、勿論案内者には何も答辯が出來なかつた。私は幸ひ嘗て黒川眞頼翁から御物に就てい

いる聞いてゐる事もあつたので、蒔繪に就ても翁からの受賣をして、これが日本の蒔繪の濫觴であるとお茶を濁し、終には私が案内者で、もあるかの如く、覺束ない説明をしながら一覽終つて共に倉庫を出た。此人は別るゝに臨み私に頗る慇懃に禮を述べて立去つたが、私は後で戸口にある拜觀名簿を調べて見ると「堀越秀」の署名があるので、ハ、ア今のは市川團十郎であつたかと分つた。さう分つて見ると、先刻香木に對する質問が密であつたのも偶然でないと思つた。此人頗る香道樂で、一ヶ月香屋に拂ふ僧が何百圓にも上るとも聞いてゐたからである。舞臺の上で此優を見たことは度々であつて、其大きい目玉と朗々たる音吐は藝の外なる大特徴で、今も忘れかねるが、素顔で逢つたのは之れが最初でまた最後であつた。若しあの時早く團十郎であることに氣が付かば、談話の交換に工夫もあつたものと、頗る遺憾に思つた。

## 八 紅葉山人と最後の會食

私は故人尾崎紅葉と別懇であつたので、山人に就ていろいろ語るべきことを有つてゐるが、爰には山人と最後の會食に就て語らう。時は明治三十六年四月七日であつた。山人が不治の大



患に罹つたのを慰藉するの趣意で、高田半峯博士が主人となり、山人を主賓として吾々が博士の小石川の邸に招かれた。此日來會した人々は、山人の外に坪内逍遙、角田竹冷、長田秋壽、梶田半古、武内桂舟の面々で、特に山人の親友を選んで招いたのである。山人は此頃病勢も多少進んで、衰弱の様子を見受けたが、元氣は頗る旺盛で、此人の壽命が數月に迫つてゐるとはどうしても思はれない位であつた。

俳人が二人、畫家が二人來り合はした會であるから、自然席書が餘興として始まつたが、實は山人の書は絶筆に近いものだと思ふと、黯黹たらざるを得無かつた。山人は先づ筆を揮つて短冊、色紙、絹本、手當り次第、得意の句を録して立どころに十枚程も出來た。其句の中には辭世らしいものもあつて、満座に涙を催ほさせた。山人が私の爲めに書いた句は「初冬や髭そりたてのをとこぶり」と「たれこめて花に物縫ふ世帯哉」であつたが、初冬の句に梶田が水仙を書き添へた。私は更らに畫帖を出し、桂舟と半古に畫を需めた。半古は燕子花、桂舟は辨慶の勸進帳を書いた。此畫帖にも山人が筆を染めて「目を閉ちて嗚呼われ花につかれたり」の一句を書いてくれたが、山人が私の爲めに書いたのはこれが最後である。

斯る文嬉に時が移つて、各々膳についたが、山人は醫戒を守つて葡萄酒と鶏卵の外に少量の汁と米飯の外、口にしなかつた。食通の山人も大好物の鰻や天麩羅に手を出すことが出來ず、寂し氣に喫飯するのを見ては氣の毒の感に打たれて、胸一杯となつた。此日の來會者は下戸が多く、桂舟、竹冷兩氏の如きは、菓子で胸をわらくしたのを汁粉でなほすといふ弱武者である。酒なれば人後に落ちぬ私も、此頃は禁酒時代であつた。實は告別の懇親會のやうなこんな會には酒が飲めても座が白け勝ちであるのに、酒を飲むものが少なかつた爲めに一層座は白けた。但だ懇意同志の間であるから、罪のない冗談は湧くが如く起つた。紅葉は餡ものと鰻が食ひたいと啣ち、私はよく調理した惣菜が旨いと主張し、半峰氏は油揚が旨いと氣焔を吐き、桂舟氏は筍子を主張し、竹冷氏は鱈の調理法を云々するなど、食物談で持切つたのは、まさか今日の主賓が食道樂で病を醸したその因縁からでもあるまいにと、私は窃かに笑つたが、私と紅葉山人と食事を與にしたのはこれが最後であつた。

## 九 寺崎廣業の騰龍軒



寺崎廣業が「東洋繪畫雜誌」の下々繪を書いてゐるころ、偶然日本橋邊の或る宿屋に暫時同宿した關係で懇意となり、長く交際をつゞけた。筆を載せて私の郷里新潟へ来たこともあり、其の鶯溪に住してゐた頃はしばしば訪うたり訪はれたりした。潤達で愉快な性格の人であつた。晩年大家となつてから、小石川の臺町に堂々たる邸宅を構へ、豪華な生活を營んだが、鶯溪に居つた頃はまだ不如意で、床の間には何であつたか、金石の拓本が一幅掲げてあつて、それがいつも掛け替へられずにあるので、私が畫家の幅としてはチト堅過ぎるでないかといふと、廣業のいふには、實は恰好のものが無い。床飾りとある以上、相當のもので無ければならぬが、自分の私淑する雪舟などの幅は、價高くして及びもつかぬ。凡庸畫家の作では自分の見識が許さない。已むなく拓本を掲げてゐるが、實は何かと掛け替へたいと、平生苦悶してゐるというた。

さて其後廣業の此床の間に、一本の明竹が壁を穿つて生え出したと、新聞紙に發表された。丁度其頃廣業は富岡永洗と連れ立つて、私の家へ遊びに來たので、談は自然此事に及んだ。私の言ふには、君の床の間の工合も庭の様子も、一通り知つて居るが、全體竹が生え出したとい

ふのは、どうした譯だ。竹が床の間から生え出したなどといふと、君の家の様子を知らないものは、さもなくばばら家のごとき感をなすであらう。お氣の毒に、君の座敷はそんなにひどくもないのに……。廣業曰く、なアに壁の隙間から出たのだ。新聞に出たものだから大層評判になつた。何にしても目出度いからと言ふので、見ず知らずの人から、物を贈つて祝つて呉れたり、歌などを寄せたり、中々の騒ぎだと云ふ。私は親竹は君の庭の中にあるのかと問ふと、實は隣の竹が垣根越しに俺の處へ遣つて來たのだと答へた。私はそれぢや後日所有權の問題が起るかも知れんナ。それは兎も角もとして、君は嘗つて畫家の床の間には見識上減多な幅をかける譯に行かぬと言つてゐるが、天然の竹は君の師であり先生である。これこそ畫家の床飾に最もふさはしいものでないか。私は君が佳い幅を獲たことを祝さるを得ぬと云ふと、廣業は成程と云ひ、永洗は笑つた。

此時廣業は越後の良寛の事を想ひ出したらしく、昔し同じやうな話があつたぢやないかといふから、私は、あるよ、あれは僧良寛だ。草庵の縁から穿つて出た竹が、追々生長して遂に天井に届いた時、良寛は天井を切り破つて、竹の自由の發達を助けたと云ふが、其の人格をよく



あらはしてゐる。君も宜しく其の顰に倣ふがよからうと語り、日を経て、實地を見る爲め廣業を訪うて見ると、如何にも床の一隅から一竿の竹が出てゐた。なか／＼姿勢がよいから、葉が出たら一段よからうと賞しながら、室内を見回すと、新装の額が掲げてあるのに氣がついた。それには「騰龍軒」の三字が書かれてあつた。即ち某親王が新聞の記事をみそなはし、特に賜はつたのだと廣業は説明した。廣業に「騰龍軒」の別號のあるのは此故である。

### 一〇 中井敬所翁を懷ふ

反故は多く屑籠に葬られ、還魂紙料となる果敢ない運命のものであるが、瓦礫の中にも珠玉を發見することがある、反故も一概に棄つべきでない。名家の反故には、兎もすると面白いものにぶつつかる、別して縁故ある故人の反故には興味を感じる。ツイ此頃手に入つた中井敬所翁の雜録一冊には、自筆の記事の外に、いろいろのものが張り込んであつて、云はゞ反故のやうなものであるが、翁に交つたことのある自分には、此反故に對して少からず興を感じた。

此雜纂は六七十枚の半紙を綴つたもので、翁の見聞が例の見ごとな字で書かれてゐる。多く

は金石に關する考證などであつて、各所から寄せた印影や、金石の拓本なども貼りつけてあるが、中に大磯邊へ遊んだ紀行もあつて、同行した狩野氏の筆に係る、高麗山、鳴立澤邊の風景圖も添つてゐる。その風景の中に、翁外二人の人物も入れてある。中根香亭より寄せられた詩が詩箋の儘に貼つてあつたり、郷純造、杉聽雨、今泉雄作氏等の書翰も收めてある。他から鑑定を頼まれた印に註を施した草稿らしいものもある。また中には細心に印の鈕まで摸したのものあり、翁の晩年に私が箱書を頼んだことのある、汪啓淑の「秋室印剩」(印譜五冊)の内の五六の印を丁寧に摸し、各冊の印数を録し、自分の爲めに作られた題識や私の姓名までも委しく録してあるのには少からず興を感じたと同時に、翁が印書を苟くもしない細心に敬服した。

尙ほ此の冊子を翻して見ておもしろく感じたものが二つある。その一つは、寛政十二年江戸で出版した両面一枚摺の狂歌便覽とでも云ふやうなものが收めてある。それを見ると、欄外に翁の註があつて翁の印が捺してある。注意して見ると、狂歌を多く列した中に「水」の題で詠じた武人窓面成の狂歌こそ、翁の祖父に當る人の作であることが欄外の註で知れた。其註には「武人窓面成、通稱森江徳右衛門兼垂、江戸人」とあり、又「就<sub>二</sub>尙左堂俊滿<sub>一</sub>學<sub>三</sub>狂歌<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>文化



十四年六月朔日歿、行年四十八」とある。其の狂歌は「立田川とづる紅葉のもやう物、氷も春のしたくをやする」とあつて、圖らずも此の摺りもので翁の先代に狂歌の名人のあることを知つた。翁の名が兼之で、其の祖父の名にも兼の字があることに気がつく、何となく一脈の通ずるもの、あることを思はしめた。

今一つは岩田正義（芝字田川町十七）といふ人より翁に寄せた書翰で、其の封筒を披いて見ると、中から香料の包紙が出てきた。

肴	價
金	千
正	
中	井
敬	所

裏						
金	千	正	之	目	録	在
中	五	圓	紙	幣	一	葉
先	生	老	矣	直	以	此
幣	購	說	文	一	部	爲
記	念	寒	山	老	衲	

此の包の譯が手紙に書いてある。岩田が何かの譯で翁より贈られ、辭退も成り兼ね、懐中して

歸路山田寒山（印人）を久々で訪問すると、寒山不相變赤貧洗ふが如くで、話次彼れの云ふには、近日説文會の催しがある。自分も出席したいが、それにつき文求堂に新渡本の説文を購はんと思へど、囊中無一物である。願はくは右代金二圓五十錢拜借したいと云ふので、翁より贈られた包を其儘出して與へ、辭し去るに臨み、折角翁の厚意だから、包紙だけは持歸らんと、中を披いて見れば、千正（二圓五十錢）と思ひの外、二千正（五圓）入つてあるに始めて気がついたとある。即ち裏に寒山が先生老いたりとする所以で、翁は二千正と書くべきを誤つたのである。此の行違は翁並に寒山の面目を躍如たらしむるものがあつて一笑を禁じ得ない。

僅かの反故の中にも妙な掘出しがある、名家の反故はウツカリ出来ないものだ。私は此の反故をひねくり廻はしながら、翁に就ていろ／＼のことを憶ひ起した。私が翁に初めて會つた頃は既に七十の坂を越えてあつたやうに思ふ。たしか亡友横井時冬氏の紹介で、早稻田大學の校印の刻を頼んだ。其時翁は義子新家孝正氏の座敷に自分を延き、いろ／＼文庫の印を摸したものを出して示された。金澤文庫の印ばかり六七種も自ら丁寧に摸して置かれた。それには火前火後の區別のあることなど説き聞かされたが、摸寫が精の極に達してゐるので一嘆を發せざる



を得無かつた。此の印の刻が成ると、自ら携へて私の居を訪はれたのは案外であつた。自分は其時態々老體を煩はし恐縮だと挨拶すると、翁の云はるゝのに、雅印と違つて校印は大切な物であるから、萬一間違があつてはと思ひ自ら持参したと云はれたので、其道理あるに服した。翁は鶴のごとく瘦せ、銀のごとき白髪を戴いた、仙骨ある人であつた。坐談が上手で多方面の趣味家であつた。私の爲めにも二三顆刻されたが、それが最後の刻である、即ち絶刻である。翁の刀痕は鮮かなもので、如何にも若々として水際が立つてゐる。嘗て家祖の印を携へて高芙蓉の作か否かを確める爲め訪うた時は病床に居られたが、それでも病床に私を延いて直ぐに鑑定された。これが不起の病であつて間もなく易簣された。翁は平生元氣で、此大患の幕上にあつても平生嗜む所の冷<sup>ひや</sup>のヤッコ豆腐を食されたと門人から聞いた。又八秩近くなつても妾があつたやうである。

不忍池<sup>しのはず</sup>の寺を會場として説文會が開かれたとき、翁に就て思ひ出づる一事がある。此時説文家は皆珍藏の圖書を持出して陳列したが、翁の列品の中に其の珍藏の狩谷椽齋自寫本「古京遺文」が出てゐた。此の寫本の中に頼山陽が椽齋の家に寄宿した際助筆した處があると聞いてゐた

から、よくよく繰つて見ると、成る程山陽の寫した處が三葉ほどあつた。それから他の陳列を追々巡覽して大槻文彦氏の陳列を見ると、こゝにも同じ形の「古京遺文」の寫本があつて、正しく椽齋の手寫である。不思議に思つて口書を見ると、字が半分缺けてゐるので、試みに翁の都合はして見るとピッタリ合つた。自分は驚き且つ喜び、座中の翁に、あなたの「古京遺文」の半分はどこにあるか御承知かと聞くと、知らないと言はるゝから、自分は兩方の本を持來つて翁の目前に口書を合せて見せたときには翁も驚喜し、大槻君とは懇意でありながら、ツイ今まで一半のそこにあることを知らなかつたと云はれた。大槻氏も同様で、果ては互ひに吾れに譲れ譲らぬの争が生じた。自分は其時戯れて、此の二つを合はした月下氷人は私であるから、争の決するまでは私が雙方の本を預るといつたことがあつた。翁は大槻氏より年長でありながら最後に何と云はるゝかと思つたら、ナンデモ早く死んだものが譲ることにするより外はないと、暗に自分が長く生存するもの、如く云はれたが、翁の反故を見るにつけいろ／＼のことを思ひ起す。



## 一一 印の結婚

漢詩で名を博した、亡友坂口五峯氏（仁一郎）は私と印癖を同じうした。それに就て印の結婚とでも云ひ得る珍談がある。自分は曾つて鶏血石の印材を三十餘顆一括して得たことがある。鶏血石は敢て珍らしくはないが、兎に角三十數顆纏つてあるのが氣に喰つて愛藏した。

これより先き、郷里の友人三浦桐陰といふが、吾等兩人に印癖のあることを知り、其の愛藏に係る、高芙蓉の刻印二顆を割愛して五峯と私に一顆つづ與へた。私に贈つたのは「滄浪」の二字が刻してあり、五峯の貰ひ受けたのは「鶴鳴于九臯」と刻されてあつて、共に名作である。五峯は窃かに私の貰ひ受けたものをも併せて自家の印笥に收めんとその野心を抱き、折に觸れて私に割愛をほめかしたが、私は拒んで應じなかつた。ある時酒後五峯が頻りに割愛を請ふから、私の云ふには、折角老友の贈つたものを趣意もなく君に贈ることは相成らぬ、若し趣意が立てば強ち割愛せぬでもないといふと、五峯は熱心に、如何なる趣意をも立てるから是非にといふので、其時私が鶏血石の事を言ひ出し、あれに對して君が一詩を私に寄せるなら、そ

れに對して印を割愛しようといふと、五峯は言下に「よろしい」と快諾するので、私は更らに、「併し、それには條件がある。詩の結構は飽くまで私の注文通りでなければならぬ」と前提して「頼山陽には、喀血歌がある。私も二十數年前郷里に喀血したことがあつて、幾何かの血を失つた。然るにこれ丈多量の鶏血を得たのは、曩に失つた血を償つて餘りあるといふことを必ず詩中に收めて貰ひたい」といふと、君は「作るには骨が折れるが兎に角やつて見るとせう、併し短句では駄目だから長篇で作らう」といふことで、其數日後、初稿をもつて來て示すのを見ると、それは非常な大作で大いに意に満ちたから、謝して之を收めようとする時、「いやこれはまだいかぬ、これから大久保湘南にも相談した上、槐南にも一通り見て貰ふ」と、例によつて凝りに凝る君の性質を現はした挨拶であつた。

其後一周間ばかりで定稿が出來た、見ると成程初稿よりも一段とよくなつた。其時君は、此作の成つたのを記念する爲めに是非一會を催したいから、某日枕橋の八百松に來いといふ。興あることに考へて當日誰れが來るかと問ふと君の答へに、これは君の手に在る印を吾輩の家に貰ひ受ける一種の婚禮ともいふべきものだから、是非媒妁人を要する。そこで詩の方面の立會



人は湘南で、印の方は濱村藏六ときめたとの話で、頗る趣向が振つてゐる。

さて其日定刻に會場へ行くと、右の兩人も來り會した。自分は「滄浪」の印を持參して交換の式を挙げたのであるが、先づ立會人湘南が吟聲を得意とした人だけあつて、朗々として五峯の長篇「鷄血石歌」を三誦すると其聲が水に響いて餘音長く、一座に詩味を漲らせた。湘南は此詩に手を入れた關係深い人ではあるが、一切草稿につかずして長い詩を暗誦したのには敬服した。ところで此日自分には別に何等の案もなかつたので、マア演説でもやらうかと、やをら起つて一席辯じた。其趣旨は、

これは自分の愛兒であるが、今回坂口家から切に懇望されて縁づける事になつた。實は割愛については頗る躊躇したのであるが、熟考へると、既に姉妹たる一つが坂口家にあるのだから、此兒も共に坂口家に養はれることになれば、恐らく其身の幸福であらう。斯く考へて坂口家に贈るのであるが、唯だ貧寒なる自分は嫁入支度の餘裕がないので、着のみ着の儘といふよりも、此通り赤裸々であるのは恥入る。

と述べて箱も囊もない印を振り翳しつ、挨拶を終つた。斯うして五峯も立會の兩氏も盛んに盃

を舉げて痛飲したのであるが、此事あつて數日後、今度は私が一會やるから某日某刻赤坂の三河屋まで來會を乞ふと案内した。但し諸氏の外に更に一人を加へたい。それは寺崎廣業氏であるといふと、一同皆知り合ひだから異存がない。そこでいよく雅會を開くと、其席上で坂口君は「鷄血石歌」の長篇を一幅の掛物とすべく揮毫したほかに、卷物一卷にも筆を染めたが、掛物の方は對幅とする爲め立會人諸君が別に合作の筆を執るといふ譯で、それには廣業氏が丹青の跡を残し、藏六氏が又これに一作を添へた。湘南の一詩はもとより此際無かる可からざるものであつたが、生憎湘南はその前日から痘瘡に罹り、當日出席し得なかつたのみならず、その一日後に病歿して、才人の風貌は長へに見る時もなくなつてしまつた。此前後の雅筵は、當時文壇の一部に佳話として傳へられた。五峯の「鷄血石歌」は左の如くである。

春城先生有<sub>レ</sub>印癖。龍文鳳篆苦搜索。玩物自比襄陽顛。博古將<sub>レ</sub>奪松雪席。少時論<sub>レ</sub>事忤<sub>レ</sub>當路。文字買<sub>レ</sub>禍鬪雞檄。時艱高目三十年。一腔熱血空鬱積。久之遂致<sub>レ</sub>長吉嘔。赤鬻逆<sub>レ</sub>地真可惜。天上將<sub>レ</sub>成白玉樓。人間難<sub>レ</sub>覓丹砂液。有<sub>レ</sub>人來賣雞血紅。昌化所<sub>レ</sub>產其鈕百。方圓大小各態殊。或戴<sub>レ</sub>花冠。或赤幘。綠字鮮疑繡頸回。朱文勁見金距磔。就<sub>レ</sub>中一塊如<sub>レ</sub>峻山。山皴隱見絡<sub>レ</sub>紅脈。



先生獲<sub>レ</sub>此疾霍然。摩挲日夕手不<sub>レ</sub>釋。紅霞滿<sub>レ</sub>室。光熊熊<sub>レ</sub>。春城居赤城下。其室曰紅霞山房。邀<sub>レ</sub>吾誇示連城壁。自謂  
曩時嘔<sub>レ</sub>出三斗血。滲入<sub>レ</sub>石膚。如<sub>レ</sub>許赤。寸心耿耿某在<sub>レ</sub>斯。歷<sub>レ</sub>遭塵劫。長不<sub>レ</sub>易。吾謂先生莫<sub>レ</sub>  
乃丈人頑。彫<sub>レ</sub>肝斲<sub>レ</sub>肺亦何益。胸中磊塊今有無。聞<sub>レ</sub>雞起舞憶<sub>レ</sub>曩昔。不<sub>レ</sub>願磨厓刻<sub>レ</sub>姓名。唯願  
先生壽猶<sub>レ</sub>石。

## 一一一 白河の提灯行列

前年松平樂翁公に贈位の御沙汰があつた時、白河では公の爲め紀念祭を催すにつき、大隈侯  
に一場の演説を請うた。侯は諾して臨まる、筈であつたが、生憎病に罹られ、代理として高田  
博士、吉田博士（東伍）竝に私が臨むことになつた。老侯の演説を代理するには一人では足ら  
ぬ、三人の力を併せたら不完全ながら代理が出来ようと云ふのであつた。出發に臨んで、侯の  
病床に就き、樂翁公に關して御腹案があらば承りたいといふと、侯の言はる、には、曾て北野  
の天満宮に參詣した時、寶物を見たが、其中に文晁の畫した菅公縁起の繪卷物があつた。この  
繪卷物は樂翁が特に書かせて、納められたことが卷末に記されてあつたので、自分は一種の感

に打たれた。菅公は忠硬の人であつたのに讒せられて貶謫され、樂翁も治蹟大いに擧つたのに  
地方巡廻中に貶せられた、兩者の境遇に似寄りの處がある。樂翁が此の繪卷物を特に菅廟に納  
めたのは、恐らく菅公に同情を寄せ、暗に自分が同じ境遇にあることをほめかしたものであら  
うと云はれた。之れを聽いて侯の腹案の一端も知れたので、吾々は白河に赴いたが、河野廣中  
氏が案内格で同行され、途中備さに福嶋事件の真相を聞くことが出來て、大いに興味を覺えた。

白河の講演會に臨んで、吉田博士は白河の史蹟を談じ、私は樂翁公が、多く有益の圖書を公  
刊された事蹟を擧げ、公の爲め記念圖書館を作るとあらば、先づ公に依つて刊行されたあらゆ  
る圖書を備付けるを以つて其館の特色とすべしと説き、高田博士は大隈侯の腹案を敷衍し、且  
つ大隈侯自身ならば避けて言はれないであらうと思ふことを代理だけに敷衍した。それは何か  
と云ふと、大隈侯は人も知るごとく菅公の苗裔で、侯自身も其祖先のごとく強大なる閥の壓迫  
を受け、しばし失脚した人である。侯が菅公に同情のあるのは、恰かも同じ境遇に陥つた樂  
翁公が同情を寄せたと同日の談であるから、樂翁公に對しての大隈侯も亦同情の切なるもの  
がある筈だ。大隈侯が北野神社で樂翁の納めた繪卷を見て感懷を禁じ得なかつたのも、畢竟大隈



侯自身が菅公とも樂翁とも同じ境遇であることが與つてゐるに相違ないと説いたので、聽衆に大なる感動を與へた。

私が白河で感興を覺えたのは此の講演會であつたが、尙ほ他に一事の漏らす可からざるものがある。それは盛んなる提灯行列の行はれた事だ。提灯行列は西洋のカンテラ行列に倣つて吾の大學が會つてやつてから、追々行はれ出したが、此行列の祖先が白河にある事を始めて知つた。樂翁公は早く白河町民に此行列を教へ、其遺風が今尙ほ嚴然と存してゐる。此行列は有事の時に備へる一種の武的訓練であることは言ふ迄もない。私が此行列を見て感服したのは、隊伍の如何にも整然たる事にあつた。鐘が鳴ると全町民が咄嗟總動員を爲すのであるが、永い間訓練してゐるから、各町の順列がよく定まつてゐて、少しも混雜することなく、甲町の動員に乙町が次ぎ乙町に丙町が次ぐといふ順序で、一町一團には必らず町名を記した大なる提灯が高く捧げられ、伍長らしいものが中形の提灯を携へ、一般のものは銘々小形の提灯を携へて、各國肅々と歩を進び、公園に向つて行進する。其の狀蜿蜒幾十町に涉り、宛がら枚を啣んでゐるかの如く、絶えて喧囂の聲なく、足並の亂れざる行進は、流石に訓練あるものと感服を禁じ

得なかつた。吾等は公園のある亭に酒食の饗を受けつ、此行列を迎へたが、此公園には南湖といふ大なる池水があつて、それが園に風致を添へてゐるが、此行列は例として此池を一周するのである。燄々天を焦す無數の燈火は池水に映じて、えも云はぬ快感を與へたが、特に行列が全池を包圍した時は湖の全面に火光漲り、眞に壯觀を極めて、今尙ほ忘れ難い趣がある。

### 一三 足利町の追懐

足利町の有志者に招かれ大隈侯が同地へ行かれた時、私も隨行した。其際は支那公使も一行の内にあつた。足利は支那と織物の貿易關係があるから、侯は特に公使に同行を勧められた譯であつた。

足利では侯一行を待つに盛んな設備をやり、公園内に幔幕を張つて、そこに多衆を會し、侯と支那公使の演説があつた。その際休憩所に充てられた處は、公園内の白石山房で、これは此地に名高い畫家田崎草雲の舊居である。私は初めて草雲の遺像を拜し、且つ草雲の閣歴や逸事を聞き、おもしろく感じた。其逸話の内に、草雲がまだ名を成さない伏櫪時代に、御殿奉公を



した或る婦人を納れて妻としたが、此の婦人が貞淑でよく良人に仕へ、嘗つて草雲が盛茂曄の山水をほしがり、之れを購はんとして資を得なかつた時に、婦人は髪飾りや衣類までも賣つて其の資に充てたといふ美談もあつた。此の來歴のある盛茂曄の幅は、今足利町の豪家の手に歸してゐるので、此日の宴會席に充てられた銀行の樓上に特に掲げてあるのを一覽し、益々興をそつた。

足利には、貴重なる古書を藏してゐる有名な「足利學校」があるので、私は一二度特に此地に游んで、古書籍の取調べをしたこともあり、その校内に行はれた釋典せきてんを見たこともある。又鑿はん阿寺なを訪うて其什物を見たこともあり、此地に興味をもつてゐるものであるが、田崎草雲の遺址を見て亦一つの趣味を加へたのである。

此日私の宿つた家は大きな料理屋であつた。夜に入り寢に就かんとする時、土地の有志が私の室に來り、階下に小宴を催してゐるから、其席に一寸來いと請はれた。私は一應辭したが、是非にと需められ、衣服など着換へるに及ばないからと云はるゝので、寢卷のまゝ、其席へ出て見ると、三十人許りの町の有志が居並んでゐた。私は今更寢卷の儘で出たことを悔いたが、退

いて取締ふことも出來ず、導かるゝまゝ、に上席に着いた。隣席には笹川臨風君がゐて、何か足利に就て所感を陳べよと云はるゝので、これも辭しかねて、出鱈目を云うた。その出鱈目の席上演説が、やがて足利町の町會の議に附され、私の説が實行さるゝに至つたのは、實に意外であつた。

私の説といふは、足利には有名な足利學校の遺蹟があつて、古くから釋典が行はれてゐる。これは孔子を祀る支那の祭典であるけれども、古式を亂さず久しく嚴肅に行はれてゐることは足利の誇りの一つに數へてもよろしい。お祭りは云ふまでもなく土俗風習で、來歴の古いほどそこに趣味がある。釋典は近年お茶の水の聖堂に復興され、年々行つてゐるけれども、此足利のよりも整備してゐない。久しい間古式を崩さず續けてゐるのは足利學校の遺址が存してゐるからでもあるが、祭典中珍とすべきものである。足利には外にお祭りもあるであらうが、全國に知られてゐるのは此釋典である。然るに此の釋典は學校の奥まりたる狭い處に行はれ、それに參加する人も極めて少數である爲めに、足利の人達は見たくも見ることが出來ぬといふ仕末であるのは遺憾と云はざるを得ぬ。これ程名高く且つ趣味の深いお祭りを、何故少數者の爲す



に任かして、町民は視ず聽かずで済ましてゐるのであらうか。私は足利町の爲めに圖るに、此の古風な趣味ある祭りを足利學校の祭典とせず、これを全町の町祭とし、其の執行さるゝ十二月二十五日には全町皆業を休んで、一日を娛樂に費したらどうかと思ふ。それをするには、丁度此度大隈侯や支那の大賓を迎へるため野外に歡迎場を設けたやうに、釋典の式を衆庶に見せるやうにして貰ひたい。大きな鍋で牛肉を煮て、之れを大牢に擬し、式に參列するものに酒を飲ませるなども一つの趣向であらう。尙ほ當日講演會をひらき、一般に名家の講演を聞かせるなどもよからう。斯の如きは此の町の繁榮を圖る一策であると思ふと。

私のいうたことは凡そこんなことであつて、咄嗟の思ひつきで責塞ぎに云うたことであつた。勿論それが實行されようとは夢にも期さなかつたのだが、其年の十二月の二十二日頃であつたか、足利町から特使が來て云ふには、先般貴君の仰せられた通り、町會で釋典を町祭とすることに決したから、お説に従ひ當日講演會を開くにつき、是非お出でを願いたいとあつたので、私は事の意外なるに驚いたが、自説の行はれたのだから愉快を感じて、歳晚匆忙の折柄ではあつたけれども吉田東伍博士を伴うて臨席することを約した。さて當日出かけて見ると、町

はづれの民家に國旗が樹つてゐるのが先づ目につき、追々町に入ると連簷皆國旗を掲げてゐるのを見ては、痛快の感に打たれた。依つて坐ろに大隈侯に隨伴當時の事を追憶し、侯の演説はあれほど雄大であつたが、其の雄大の爲めに實行が出来ず、自分の寢卷演説が却つて實行されたといふも妙だと、眞に感慨無量であつた。

當日の講演會は満場立錐の地なきほどの大入りであつた。其際に於ける私の講説は足利町の繁榮を圖る二三の私案を述べたので、其の要旨は、

(一) 幸ひに鄙説が採用され、釋典が町祭となつたのを満足に思ふが、節季師走に近い十二月二十五日にお祭り騒ぎをすることは、或は時期を得ないと思ふ人もあるかも知れぬ。此町には春期に織姫のお祭りがあると聞くが、釋典をばそれと同時に進むもよからう。釋典は必らずしも十二月二十五日に行はねばならぬと、支那の舊規にある譯でもない。

(二) 足利學校は儼然遺址を存し、建築物も残つて居り、上杉家傳來の貴重書も保存されてゐるが、實を云へば骨董同様に取扱はれてゐるのである。此學校を永久に保存するの道は骨董としてゝなく、活かして働かせて、是非町民の爲めに無くてならぬものになければ、百



世の保存は覺束ない。之れを活かすの法は、中學校程度の學校を興し、舊造營物をこれと併せて足利學校と稱し、子弟を教育するの處としたい。これが永久に保存する法である。

(三) 今一つの冀望は、足利町の智識開發の爲め適當の圖書館を設けたいといふことである。足利學校に藏してある圖書は、概ね國寶に値する貴重のものに相違ないけれども、實はこれも骨董に齊しいもので、働きをなすものではない。民智の開發を圖るには、時代に應ずる圖書が必要である。殊に足利町は染織を以つて名産とする所であるから、それ等の營業者の爲めに何寄りも大切なものは、染織に關する參考書であることは申すまでもない。若し十分の働きある圖書館を作るとならば、營業者の必要とする多くの圖書を備へて、其便利を圖ることが肝要である。此地の染織家は今の處皆銘々必要の標本などを備へてゐるが、若し圖書館にそれ等のものまで備はること、なれば、銘々が高い價を拂つて備へるに及ばないことになるのである。此の町の如き特殊の産物のある所には右のごとき特殊の圖書館が必要である。當業者に闕く可からざるものとなれば、圖書館は永久に存續するに相違ない。併し以上の如き冀望は將來のことに屬するかも知れぬ、差當つては普通の圖書館

でも結構である。足利學校の貴重圖書も、町衆に重寶がらる、必要の圖書と共に保存されるでなければ、永遠に保存されようとは思はれぬ。私が圖書館の設置を望む所以である。釋典を町祭としたキツカケに斯様な冀望を陳べた。そして足利町の如き力ある土地に斯様な冀望を有つたのは決して出来ない相談とは思はなかつたが、其後は打絶えて足利町に赴かないから、一向様子が知れない。釋典が引きつゞき町祭となつてゐるかどうか、それすら消息を知らぬ。

#### 一四 酒豪二人の追憶

中國筋で著名の素封家は野崎武吉郎氏である。初期の議會に多額納稅議員に擧げられたのは此人で、私の同姓も越後から同じ多額議員に擧げられ、同僚である關係から特に別懇であつた。同姓からしばしば野崎氏の事を聞いてゐるが、面會する機會が無く、幾年か經過した。或る年吾が大學の用を帯び備中に旅した時、田邊碧堂氏の紹介で初めて此人に會した。

氏の家は岡山縣の倉敷を距る三里許りの海濱で、味野といふ所である。訪ねて見ると、如何



さま堂々たる家構で、主人の在否を糺すと別荘の方に居ると云ふことで、留守であつたけれども、兎に角通れとあるから客間へ通ると、家人の挨拶振りや接待振りが極めて物馴れて懇切であるので、先づ以つて主人の風格が推量された。

しばらくすると別荘から電話がかゝつて来て彼方へ来いとあるので、別荘へ出かけた。此の別荘は同じ市中に在つて本宅より僅か三四町しか隔つてゐぬ。茲に初めて主人と會見を遂げたが、主人は其頃六十からまりの年輩で、體格のよい風采の溫雅な人であつた。此人の客を遇することが懇切で禮儀正しく、私が別荘に着した時は、時間を見計らつて、門前に佇立して恭しく迎へられた。

主人は切りに一泊を勧めらるゝので、其深切にほだされ、まだ日も高く且つ旅宿も遠くないのに、其の勧めに應ずることになつた。此別荘は近年の經營に係るものらしく、極めて新しく見受けた。庭は海濱に相應する結構で、翠松白沙の間に程よく巖石を點綴し、五六の白鶴が遊んでゐた。やがて晚餐の時刻となり主人に案内されたのは百疊敷の大廣間で、床には森寛齋の海上の鶴の大幅が掲げられ、私其正面に据ゑられ、主人外一家眷族の五六は横手に陪席し

た。何分にも廣い室での饗應、私は俄かに大名にでもなつたやうな心地がした。

俄大名の氣分はわるく無かつたが、茲に當惑の事が起つた。元來此家の主人は非常の酒客で、眷族も皆豪酒であると兼ねて聞いてゐた。然るに私自身は随分酒量があつたのだが、病の爲めに酒と絶縁して十年にも及んでゐる。今豪酒家の客となり、宛がら大賓を待つかの如き饗應を受けながら、果して酒を辭し得べきや否やと苦悶した。曾つて私自身にも折角人を招いて其客が酒を飲まぬと云ふ場合には不快のものであつた。今其情を推して考へると、私が酒を辭したら主人は恐らく不興であらう。さればというて十年折角守つた禁を破るのは余に取つては重大事である。漫りに主人の意を迎合して譯もなく杯を擧ぐべきでない。宜しく心事を明白に告白して而る後應ずべきであると、意を決して主人に實を告げ、折角の御款對なるが故に十年の禁酒を解くというた時、主人は感激して慇懃に禮を云はれた。斯くして私は十年目にもとの酒客に復したのである。此夜此別荘に宿し翌朝辭し去るに臨み、私が齎らした用件は忽ちに辨じた。酒客の同感が俗事に及んだのであらう。當夜主人歡喜の狀が今猶ほ髣髴目前にあるが、此人は既に鬼籍に入つてゐる。



こゝに亦酒客に就ての追憶が他に一件ある。岩崎氏の三菱時代に東京支店長を勤め、後吉佐移民會社長として知られた、吉川泰次郎氏は土佐出身で、豪放磊落の人であつた。私は曾つて本野盛亨翁の紹介で此人を訪ねたことがある。其頃は吉川の全盛時代であつた。

氏の宅は向島に在つた。なか／＼數寄を極めた壯麗のもので、庭は千坪もあらんと思はる、廣さで、見渡す限り平然たる芝生で、目を遮るものは牆塀を隠す若干の樹木のみで、一風變つた趣向の庭であつた。こゝを訪うた時は秋の初め頃で、まだ暑い時であつたから、肥満した主人は残暑に堪へざるもの、如く、膚も露はに頗る寛濶の態度であつたが、例の土佐辯を操縦して如何にも客を外らさぬ處があつた。要談が濟み辭し去らんとすると、主人は押し止め、折角來られたのだから、緩々話してお出でなさいと云はる、ので、私も辭し兼ねて其氣になると、主人は此處は暑いから、庭に出ようと云はれ、急に執事に命じて涼床をいくつか庭に運ばせ、それを組合はせて毛氈を敷き、私をそこへ導かれた。涼床の上には緞子の座蒲團があり、臺の四方には十ばかりの榻が排列されてあつた。間もなく杯盤が運ばれ、食膳酒器さまざまのものが列ねられたが、皆燦爛たる蒔繪づくめであつた。着かざつた侍女は周圍の榻に踞して、酒を

注ぐもあれば、團扇もてあふぐもあり、物の持運びを擔任するもあつて、約十人許りがゾロリ取巻いたところは如何にも堂々たるもので、其大名的態度は慥かに此主人が仕へた岩崎氏の盛時を偲ばしむるものがあつた。

主人はなか／＼の豪酒で且つ飲み且つ談じた。兎角土佐の土音が勝つてゐて話を往々解し兼ねたが、すべて話が大きい處に興を惹いた。主人は人に酒を勧めるにも亦巧みで、平生其薰陶を受けてゐる侍女等は勉強して酒を注ぐので、私も漸やく醉郷に入つた。午後の四時頃でもあつたか、一天俄かに掻き曇り、ボツ／＼雨が落ちて來たが、主人は一向頓着なく平氣で飲み且つ談じてゐた。雨は用捨なく勢を増し、其の點滴が膳部の中を浸すので、主人初めて氣が付いたかのごとく、急に雨傘を持來らせ、侍女をして主客の背後からさしかざさしめ、主人は尙ほ自若として飲み且つ談じてゐるので、私もそれに倣つて平然たらざるを得なかつたが、考へて見ると、傘を翳して雨中人と對酌することは臍の緒切つて初めての事で、一種の興味を感じた。

主人は空を仰いで、此雨は直ぐに晴れようと大平樂をいうてゐたが、その期待は裏切られ



て、終に覆盆の豪雨が襲ひ來たつた。流石の主人もこれには閉口し、私を促して座敷へと馳せ上つた。私はこれを機會に辭し去らんとしたが、主人は容易に許さず、更らに飲直さうとあつて、杯膳を座敷に移し、更らに飲み更らに談ずること前の如くで、いつ果つべくもないから、私は屢々辭しかつたが、其都度引きとめられて既に夜に入つた。酒家の常として酔が回ると種々の下物が欲しくなる、主人は頻りに呼鈴を鳴らしてそれこれと取寄せせる。曰く鹽辛、曰く唐墨、曰く甲地の産物、曰く乙縣の何と、持ち來るもの十種に垂んとし、主人益々興に入つて辭し去るを許さないで自分もホト／＼閉口し、漸く透を窺つて逃歸つた事がある。自分は多くの酒豪を知つてゐるが、其中最も雄なるものとしては此人を推さざるを得ない。氏は如何にも愉快的酒豪であつた。

### 一五 盲啞學校に失明の馬琴を講ず

私が往年早稻田大學の圖書館で、曲亭馬琴の遺書展覽會を開いた時、第一に名刺を通じて私を尋ねて來た人が、盲啞學校の校長小西信八氏であつた。小西氏は私と郷國を同じうする人だ

が、私の遇つたのは此時が初めてである。私は小西氏の來觀に就て何となく一種の感に打たれた。云ふまでもなく馬琴は晩年失明したが、それでも尙ほ孜孜として八犬傳の大作に努め、終に大成を告げた。小西氏が特に開場劈頭に來觀したのは、恐らく盲目なる馬琴に同情を寄せてのことであらう。流石に盲人教育の衝に當つてゐる人だけあると感じ、話の序に此事を言ひ出すと、小西氏は微笑を浮べ、さう云ふ意味のない譯でもないが、併し貴君がさう云ふことに直ぐお氣の付くのも、盲人に對し同情があるからであらうと信ずる。今日の御陳列は盲人教育の爲め至極結構の事であると、鸚鵡返しの挨拶に接した。小西氏は重ねて云はるゝには、甚だ唐突の願ではあるが、どうか私の學校へ來て盲生の爲め一場の講話が願ひたいと請求された。私は之れに對し、盲人教育に就ては全く門外漢であるから、盲生に對する講話の材料を持合はさぬと辭退に掛ると、イヤ馬琴の話が願ひたいのだと云はるゝので、辭しかねて承諾し、四五日經て盲啞學校へ臨んだ。

小西校長は喜んで私を迎へ、講話を爲すに先立ち、各教室へ案内された。校長は室毎に盲生に對し私の姓名や來校の譯まで懇切に告げられ、啞生に對しては、黑板に私の名刺の通りの文



字を書いて、啞生をして其字の傍らへ假名をつけよと命ぜられ、一々教室を參觀せしめられたが、不幸なる盲啞兩生に對し氣の毒な情を禁じ得無かつた。中にも啞生の多くは名家の子で、風貌も揚り品位も備はり、立派な少年であるのに、大切な官能を闕く不幸を目睹しては一滴の涙無きを得なかつた。

私の講演は茲に委しく陳べる要もないが、主として馬琴が失明後、亡兒の寡婦に筆録せしむるに苦心したことを言ひ、文字に爛はざる婦人に字を教へ假名遣ひを教へながら筆記を續けた苦心は一通りでなく、剛愎な馬琴も幾んど氣根が盡き、年若い女性を斯くまで苦めるでもあるまいと、幾回か著作を斷念しようとしたことなどを語り、世には一字千金といふ形容詞もあるが、馬琴の失明後の文のごときは正に一字千金に値するといつて、あらかじめ數へて行つた字數の披露をもやつたが、今は其數字を忘れたけれども非常の大數で、一字を千金と打算すると、其頃の日本の國債の總額に當ることだけは今も記憶してゐる。私の講演は傍ら稿檢校の事にも及び、盲人は大切な官能を闕く代はりに他の官能が非凡に働くから、偉いものが盲人より出る。諸子も盲人であるからと云つて失望するに及ばぬ。發憤すれば馬琴たり埒たる事が出来るといふやうな事を一時間許りに陳べた。

私の講演が了ると、小西校長は私に返禮とあつて、或る盲生に點字の八犬傳の或部分二三枚を朗讀せしめられた。これには私も一驚を喫した。八犬傳のごとき大部のものが、點字に出来るとは思はなかつた。校長に聞けば、失明の某法學士を慰める爲め、その細君の心がけて斯やうなものが出来、幾んど八分通りは既に成つて居ると云はれたので、更らに驚いたが、此失明學士の夫妻も私の講話の席に居られたので語も交へたが、不幸にして此盲目學士は其後歿したと聞いた。

## 一六 横濱に於ける同窓會

青年時代の追懷ほど感興のあるものは無い。別して窓を同じうして學んだものが、年を経て舊雨を語るほどおもしろいことは無い。吾等一ツ橋の帝大に學んだものは、今でも時寄り牛肉會を開いてゐるが、いつも書生時代の舊態丸出しで、互ひに貴様呼ばりをやり、傍人をして驚かしめることもあるが、實はそのうぶな處に興味があるのだ。近年同窓が追々歿して賑かな會



合もないが、明治三十一年頃に横濱に開いたのと、尋で東京に開いたのは可なり趣向もあつて面白かつた。幸に其際の記事が存してゐるから爰に其一端を語らう。露骨に何もかもさらげ出せば一層興味もあるのだが、矢鱈に天機を漏すと迷惑する人もあるから、多少の取捨は已むを得ない。尙ほ貢進生時代のことは私共の前に當り、其状況は知れないが、いつぞや杉浦天台道士からの聞書があるから、それを終りに附することにする。

横濱に催された同窓會は千歳樓を會場として、横濱在住の友人が萬般の斡旋をした。其時の案内状は左の如きものであつた。

(前略) 生等諸兄と袂を帝都に分ちてより各自其の業務に従ひ、萍痕絮跡、暫らく合うて久しく離る。歲月人を待たず、皆驅つて初老の列に入る。曾て兄等と共に一橋疊にあるや、意氣軒昂、絹布白足袋を賤しむ敝袴紺足袋を貴び、入りては食堂の戸を破つて賄方を叱咤し、出で、は高屐砂塵を蹴つて大道を闊歩し、焼芋を啖ひ煎豆を嚙り、尙ほ且つ飽かず、子路も途を譲り顔淵も面を反す。而も囊中得意の秋には、天麩羅屋に大氣焰を吐き地久庵に大政を議す。醉來眼中英雄なし。壯跡今に至つて二十餘年。頭を回らせば半ば縹緲の間に

落つ。然れども春花秋月、追ひて梁山泊の當時を思へば豪傑豈に萬斛の感なしとせんや。生等曩きに同窓に檄して會合を促すも遂に行はれず、日來情念轉た切也。願はくは來る二月四日午後四時、横濱市住吉町千歳樓に會し、綠酒紅燈の舊雨を話し、傍ら當港の近況を視、以て條約の實施明日に來るも、まごつかざるの論資に供するあらば幸甚。御返事待ちますよ。

此の檄文は在學時代のことをよくあらはしてゐるので評判がよかつた。さて案内を發した面は左の四十一人であつたが、差支が多くて僅かに○を附した十四人が集まつた。尤も神奈川縣の井上書記官と松山參事官の二氏は、同時代ではないが開會地に居る故を以つて來會した。

- 高 田 早 苗 井 原 師 義 ○市 島 謙 吉
- 大 屋 權 平 關 直 彦 田 中 館 愛 橘
- 藤 澤 利 喜 太 郎 土 方 寧 ○山 田 喜 之 助
- 三 崎 龜 之 助 三 宅 雄 二 郎 天 野 爲 之
- 坪 内 雄 藏 ○石 渡 敏 一 秋 山 源 藏



石川千代松	江木衷	山口俊太郎
○藤田四郎	都筑馨六	堀達
菅谷正樹	伊藤悌治	小林堅好
日下部辨次郎	植村俊平	朝倉外茂鐵
樋山資之	梅若誠太郎	○香坂駒太郎
馬場愿次	○田原榮	有賀長雄
○赤井雄	○鈴木充美	○三浦力太郎
奥田義人	○山縣量次	○高橋捨六
原嘉道	吉岡哲太郎	

來會者のうちで、最も人目を惹いたのは鈴木充美氏であつた。此人は辯護士で、同窓時代に  
 は禿充と綽名された。氏は在學時代の服装そのまゝ、といふ扮装で、木綿の黒紋つきに同じ羽織  
 を着し、白縮小倉の袴を着け、大きなステッキを横へてやつて來た。誰れが見ても、當世の所  
 謂壯士、豫戒令を食ひさうな容子であつた。氏の語るを聞けば、此の會に來る前に一外國人に

用があつて訪問した。其時服装に氣がついたけれども如何ともしがたく、名刺を出して通され  
 はしたが、外人はヒドク驚いて、私に不審を抱いたので、それを言ひ解く爲めに手間が取れた  
 と一笑した。

席の定まる前に、思ひ／＼に碁を圍むやら既往を語るやらで、なか／＼賑はつたが、幹事の  
 趣向として、茶菓子には葱と煎豆や豌豆などを大鉢に盛つて座中に置き、鈴木氏の寄附だとな  
 つて、焼芋を大皿に堆かく盛つたのが、座の中央に置かれたのも愛嬌であつた。

時刻は進んで早や夜に入つた。甲乙の大家の催促あるに任せ、クジ引を以つて座席が定ま  
 ると、三浦力太郎氏がやをら立ち上つて開會の挨拶をした。此人は今故郷となつたが、新潟  
 學校時代から私の同窓で、大學を出てから、米國領事館に入り十數年を勤續し、缺く可からざ  
 る人となり、髭も外國人らしく生え茂り、言語さへ外國人の日本語らしく聞えるのは、平生外  
 人に親炙してゐるからであらう。彼れは滑稽の句調を以て、開會の辭は舊大學濱尾總長の假聲  
 を以てせんと、當時我々の仲間の笑柄となつてゐた濱尾翁の言葉其儘、*ハア Please eat in this  
 room; there is nothing.* (どうぞ召しあがれ、何もありません)とやつてのけたので、一座絶倒し



た。

七四

開會の劈頭、誰やらが銘々順番に當時の失錯談を陳ぶべしとあつて、赤井、石渡、鈴木、香坂などの面々はそれに應じて交々談じた中に、赤井氏は、坪内氏と余と三人が、上野邊に飲んで、深更宿する處がなく、徹夜銀座街頭を散歩したことを語つた。私も其關係者として、赤井氏を補足し、銀座のハテ迄往復しても夜が明けないので終に九段に上り、例の夜燈のある芝生に憩ふと其儘眠に落ち、翌朝通行人の足音に目を覺して驚き起き上つた時は、既に日がカンカンとさしてゐて多くの人が通行してゐたのには面目無かつたと説き、鈴木氏は大森から東京へ歸る時、汽車の切符を買はんとするに、一厘の不足を告げたのに窮し、何とかして鐵道の役人を胡魔化さうとして胡魔化す能はず、終に一喝せられたことを語り、香坂氏は高田氏と共に王子の扇屋に飲んで、勘定の場合に十錢の不足を生じ、ジャン拳で樓主に言譯をいふ役目を定めた處、高田氏が其の選に當り、手を振はしながら言譯をした光景を説き、歸途二人乗りの車に乗り、東京の某處に至り車代を借りる底意で、揚々として歸る途中、運悪く車の輪が外れて、途中より代金を拂はざるを得ざる絶體絶命の場合に迫り、已むなく兩人力を合せ繩などを拾ひ來り、一時

の繕ひをして、無理々々東京まで車を引かせた失錯談をなし、何れも大に興に入つた。

時に樓婢が一通の電報を持つて來たので、差出人を見ると、廣島秦巖方いんぱ地久庵おゑい、松月梅、高田小すみとある。地久庵は書生時代によく行つたそば屋の名、松月は天ぶら屋の名、おゑい、お梅は何れも其處の下女だ。小すみは書生仲間の評判となつてゐた下谷の妓である。こないたづらを書いて來た電報の主は、まがふ可くもあらぬ山田一郎氏であらうと判ぜられ、披いて見れば、

ハタトセノユメアラタナリケサノユキヘン

とある。之れに返事をやること、なつて、山田奠南氏、田原柳城氏などいふ連中が、いろく工夫を凝らしてゐたが、如何に返事を出したか、私は與からなかつた。それから寫眞師が來て當日の光景を撮影し、それが終つて、銘々隠し藝を出す可しと幹事から宣告があつた。

先づ之れに應じて、座の中央にあらはれたのは赤井氏である。彼れは學窓時代に落語家の眞似上手を以つて持て囃されたものだ。私も英語學校にゐたころ、彼れが寢臺を高座として語るのを二三度聞いたことがある。久しく消息を絶つてゐたから當夜の來會者中では最も珍らしい



人であつた。彼れは洋服の上に羽織を着し、近年はいたく落語の伎倆が退歩したと斷つて説き出す口吻、懷中から手拭を取り出す調子、靜かに湯呑を持上げる態度、たしかに前座位は語られる伎倆があると見受けられた。彼れは當夕の會を種として、可笑しき落し話をして滿場の笑を博した。次に原銀行の支配人であつた山縣氏が、肥大矮少の身を以つてシャチホコ立ちをなし、高橋捨六氏はトンボ返りをなし、又箸の上に盃を載せて輪廻しをなし、鈴木氏は手拭を頭に載せて閻魔大王に擬し、續いて仁王の面貌に擬したが、閻魔大王は最も妙だと喝采を博した。次いで山縣氏は、柄にもない二上りを巧みに歌ひ、山田氏は怪しい義太夫二三句を語り出したので、それが大阪の代表かとまぜ返された。

坪内氏は衆に強ひられて、テヅマの沿革を説き、余に新發明のテヅマありと云うて、帽子三つを机上に並べ、皿にありし生薑を衆の目前に嚙み盡し、唯今食ひ盡した此の生薑を諸君の指圖に任せ、何れの帽子の下にても置く可しとて、帽子を指定せしめ、急に其帽子を戴いて、御覽なさい、此の帽子の下に在りますと立ち上つて、指にて腹の邊をさして一笑を博し、赤井氏も負けじとて、机上に盃洗二つを並べ、一つの盃洗の水を他にうつし、ハンケチを以て双方を

覆ひ、只今一方に移した水を更らに他へ移して御覽に入れますと、扇を以つて煽りまはり、さて最早や一方に移つてしまひましたれど、之れ丈では興味薄し、も一つおまけに更らに元へ戻しますと再び煽り立て、又もや大喝采。斯くのごとくにして、此の會は閉ぢられた。

## 一七 東京に於ける同窓會

明治三十二年四月、自分が幹事となつて、一橋時代の帝大の同窓會を催ほしたことがあつた。何しろ其の昔同じ鍋に飯を食つた連中が集まるといふのであるから、平凡な、眞面目な遣り方では面白くない。何か大に風の變つた趣向を考へたいといふので、坪内逍遙氏や故尾崎紅葉氏などを參謀として色々の工夫を凝らし、つとめて滑稽な會合を催ほすことにした。そこで先づ大體の趣向をいふと、會員への案内狀は狂詩を以てすること、會場を東台梅川樓とするこゝと、洋行者の送別、新博士の祝賀を兼ねること、餘興としては伊井蓉峯をして書生氣質（坪内逍遙作）を演ぜしめること、それから來賓を呼ぶこと等であつた。その來賓といふのも、もとより四角張つた高位高官の人では面白くない。一同の書生時代に、質屋の役目をつとめて呉れ



た人、世話になつた唐物屋などを當日の賓客とすることに定めた。

いよ／＼大體のことが決定して、四月三日の神武天皇祭當日、會員一同に對して、同窓會開會の檄を發した。それは左の狂詩である。

一橋同窓會第二會檄

鼻壓<sub>ニ</sub>天狗<sub>一</sub>氣吞<sub>レ</sub>牛。天下才俊推<sub>ニ</sub>吾儕<sub>一</sub>。名轟一橋同窓會。罵<sub>ニ</sub>飛俗物<sub>一</sub>取<sub>ニ</sub>手球<sub>一</sub>。第一會開<sub>ニ</sub>橫濱表<sub>一</sub>。千歲樓上醉且謳。書生氣質昔物語今爲<sub>ニ</sub>歷々<sub>一</sub>第一流。評<sub>レ</sub>花品<sub>レ</sub>月癡癡藥談<sub>レ</sub>舊語<sub>レ</sub>新爲<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>憂。第二會催於<sub>レ</sub>此起。大衆<sub>ニ</sub>同志<sub>一</sub>大欲<sub>レ</sub>遊。遊處何<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>花上野。諸君御存<sub>レ</sub>梅川樓。來八日午後三時。會費<sub>ニ</sub>三圓<sub>一</sub>帳場<sub>ニ</sub>投<sub>レ</sub>。恰是春風好時節。花笑鳥歌忍<sub>レ</sub>之丘。憶昔伊達高足馱。微醉吟<sub>レ</sub>詩花下浮。又憶墨田月夜櫻。花吹<sub>レ</sub>雪處泛<sub>ニ</sub>小舟<sub>一</sub>。振<sub>ニ</sub>返<sub>レ</sub>往時<sub>一</sub>渾如夢。一別十年空指<sub>レ</sub>樓。知是諸君定同感。當日是非御出頭。尙又同窓關係人。甲乙丙丁誘<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>求。情切心逸<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>矢竹<sub>一</sub>。時日切迫難<sub>ニ</sub>踟躕<sub>一</sub>。何卒來會有無丈。屹度即刻請<sub>ニ</sub>返<sub>レ</sub>郵<sub>一</sub>。

此の檄に對しいろ／＼返事が來たが、其中殊に振つたものが數通ある。先づ日下部氏（辨次郎）の次韻の詩は左の如くである。

次韻

空齋居士

遠州樓上會<sub>レ</sub>喰<sub>レ</sub>牛。思出當年一鍋儔。寄宿舍中嚼<sub>ニ</sub>燒芋<sub>一</sub>。體操場裡弄<sub>ニ</sub>野球<sub>一</sub>。或驕<sub>ニ</sub>大福<sub>一</sub>圍<sub>レ</sub>爐笑。又倒<sub>ニ</sub>老蘭<sub>一</sub>拍<sub>レ</sub>手謳。舉動稍雖<sub>レ</sub>似<sub>ニ</sub>粗暴<sub>一</sub>。我黨昔日書生流。蓬々散髮毫無<sub>レ</sub>厭。寥寥懷中亦不<sub>レ</sub>憂。聞說先日橫濱表。久々同窓愉快遊。今度又催第二會。會場上野梅川樓。案内通知凝<sub>レ</sub>趣向。狂詩活版郵函投。幹事署<sub>レ</sub>名何者抑。藤澤利喜覺<sub>ニ</sub>三丘<sub>一</sub>。正是櫻花好時節。猫兒杓子大被<sub>レ</sub>浮。年年此頃於<sub>ニ</sub>墨上<sub>一</sub>。競漕最盛各科舟。是等小生無<sub>ニ</sub>頓着<sub>一</sub>。只待<sub>ニ</sub>會日<sub>一</sub>頻指<sub>レ</sub>樓。同感諸員定不<sub>レ</sub>少。確信大勢御出頭。寄<sub>レ</sub>語當回幹事殿。澤山馳走致<sub>ニ</sub>請求<sub>一</sub>。萬一會費告<sub>ニ</sub>不足<sub>一</sub>。君方自腹勿<sub>ニ</sub>踟躕<sub>一</sub>。酬餘漫記<sub>ニ</sub>出鱈目<sub>一</sub>。從<sub>レ</sub>命即刻爲<sub>ニ</sub>返<sub>レ</sub>郵<sub>一</sub>。

註。遠州樓神田橋外牛店。老蘭酒名。

日下部氏は理學博士で、巖谷小波氏の兄である。其の文才は殆んど天稟に屬するといつてもよい。此の詩はよく我々書生時代の状況を描寫して原作よりもうまいが、之れが推敲の上の作でなくて、咄嗟の間に成つたといふに至つて、特に其の才氣に敬服するのである。山田奠南氏（喜之助）の返事は、



妙詞拜讀一何粹。召集檄文感服至。余輩只今雖病中。勉鞭尻馬出頭致。

士子笑面氏（金四郎）の返書は、

八日には生憎ようが御座候

残念ながらさんじ申さず

開會の八日と時刻の三時とを利かせたものである。巨智部忠承氏（理學博士）の返事は、

一橋同窓會。最是結構催。此會員鼻隆。參圓卑於埃。雖欲致相陪。生憎別會開。役人之悲矣。不往惡鹽梅。乍殘念至極。欠席于今回。決非唱大根。文圭安在哉。

大根とは書生時代に假病のことを言つたものである。當時大學に秀島文圭といふ醫者がゐて、假病をつかつたものをよく看破したのであつた。森鷗外氏からは左の如き詰責狀が來た。

「灌頂樓主人」とは鷗外氏の變號である。

讀檄寄一橋同窓會幹事次韻

蕎麥汁粉乃至牛。健啖會誇無匹儔。又將杯酒澆何物。磊塊一名肝積球。由來兩刀稱難使。吾獨併得附鼻謳。平生唯厭嗟來食。况敢膝行拜於流。心事如件與誰語。世無友達

最堪憂。聞說一橋同窓會。可謂近頃無類遊。當時創立第一會。大開橫濱千歲樓。風評入耳浦山敷。久欲以投名狀投。忽見幹事懇飛檄。第二會開忍之丘。千載一時此之謂。吾雖不精。豈不浮。好機會兮不可失。食則食牛吞舟。不知當日果何日。仔細讀來指空樓。檄是三日之所作。云來八日可出頭。既曰八日即明日。吾有先約巨應求。消印認得七日發。底事這般爲踟躕。擬責幹事不都合。直揮秃筆艸返郵。

四月七日夕

灌頂樓主人

之れは鷗外氏の處へ、おかれて手紙を出したので、幹事の不都合を責め來つたものである。

無論咄嗟の間の作であるが達者なものである。

愈々開會の當日となつたが、出席者の顔觸れは、

日下部	辨次郎	山田	喜之助	市	嶋謙吉
天野	爲之	高田	早苗	坪内	雄藏
尾崎	徳太郎	岡倉	覺三	木場	貞長
高橋	捨六	田原	榮	山縣	量次



原	嘉道	樋山資之	石渡敏一
香坂	駒太郎	近藤仙太郎	秋山源藏
中嶋	謙造	田中館愛橘	斯波淳六郎
三宅	雄二郎	岡崎正也	李家隆介
杉山	四五郎	堀田連太郎	舟越勇夫
井原	師義	朝倉外茂鐵	三浦力太郎
有賀	長文	今井鐵太郎	佐々木忠次郎
中原	貞三郎	藤澤利喜太郎	高橋一知
和田	垣謙三		

などの面々で、外に來賓として、江草芥太郎、塚谷喜平、桑端九兵衛の三人を招いた。この江草芥太郎は今故となつたが、書肆として名のある有斐閣主人で、昔は徹々たるものであつたが、義氣に富んだ人で、大學生に氣受けがよかつた。いつも金に困ると一冊二冊の洋本を持つて行き、五十錢、一圓の金を借りたものだ。大學生の爲め大切な金融機關をつとめたのは

此人であつた。それから塚谷、桑端は、兩人とも西洋小間物商で、主として大學生の用を辨じたものだが、怪しからん陰陽の綽名で呼んだ爲めに、其の姓などは今記憶してゐるものは少ない。併し當時は日々物を此二店に購うた。そして掛で買うたから終には二十圓三十圓の借りを生じて、それを返さぬものもあつた。兎に角一同にはお名染の商人である。尙此外地久庵といふ蕎麥屋も、學生の兵站部をつとめてくれた關係上、これも招かうとしたが、代がかはつてゐるので見合せた。

扱て幹事の挨拶に會が開かれて、先づ餘興として伊井蓉峰の壯士芝居が始まつた。戲題は坪内逍遙氏の當世書生氣質下宿屋の段であつた。此の小説は人も知る如く、我々同窓を中に取り入れたもので、坪内氏の處女作である。それを蓉峰が、紅葉と親密の關係のある處から、一つ演つて見ようとの好意に出でたものであつたのだ。其の場割りと登場役者とは左の如くで、ここに蓉峰から紅葉に送つた書面をかゞける。

場割(大道具は至極簡にいたし  
幕の明間も長くは無之候)

第一 下宿部屋

一七 東京に於ける同窓會



是れは塾部屋ともつかず寄宿舍ともつかず、只何となく集まりし體。

登場

任那 (本多小市郎) (性格は異なり候へども守山も加味す)

繼原 (福島清) (倉瀬桐山などを代表す)

須川 (伊井蓉峰) 小町田 (三浦滿壽次郎)

桐山 (藤澤淺次郎) 宮賀弟 (若月新樹)

下宿屋矢場女仕出し (大勢)

おとよ (鶴岡福之助)

第二 淡路町矢場

第三 寄宿舍門外

第四 門外 (是は桐山に須川打たれる處)

第五 門内

第六 草津温泉座敷

第七 風呂場前

第八 元の座敷

と簡様にいたし申候、原作破壊の大罪を犯し申候、可成丈は性格及び原書のせりふにより申候へ共筋は前後いたし候、御ゆるし下され度候、實にむづかしきものに候。

人員は

俳優 (伊井、藤澤、福島、本多、三浦、鶴岡、前井、藤塚、吉澤、若月、山崎、村井)

扱て斯ういふ場割、役割で、いよく書生氣質の芝居が初まつたが、出席者の中には、此の劇中の人物に當るものが少からずある。今は天機暫く洩さずとして置かうが、こんな縁故のある芝居のことだから、開演と共に、皆が舞臺に向つて、固唾を呑んで眺めて居る。就中劇中の一人物たる三宅雪嶺氏などは、偶然か、あらぬか、最も舞臺近く寄つて熱心に見て居た。

併し蓉峰一座の書生氣質は、大體に於て失敗たるを免れなかつた。元來蓉峰などは、昔の大學生といふものを知らずに、今日の下落した書生の状態をのみ見てゐるのと、蓉峰自身は獨逸仕込の書生で、英語教育を受けたことなく、従つて一寸喋舌る西洋語も矢張り獨逸語であるの



で、甚だウツリがわるい。それに俳優に大學生といふ品位がない。それでゐて、今日の帝大生に比し四段も五段も氣韻の高い昔の大學生を寫さうとするのだから、凡べての遣りぶりが妙を得ず、且つ大體に於て下劣を免れなかつたのは甚だ遺憾であつたけれども、又無理のない點もあるのである。で、観客は何れも半ばにして倦厭を來し、「よい加減にしてよして呉れ」とか、「お互ひが舞臺に上つた方が却つて成功する」とかいふ聲が、其處此處に聞えた。

兎に角こんなわけで、折角蓉峰の義氣に出でた寄附演劇も失敗に終り、いよ／＼開會といふ事になつて、先づ座の整理を行ひ、來賓を適當の處に据ゑる。來賓は前に言つた三人で、何れも羽織袴の扮装で喜んで遣つて來たが、當日の光景を見ては、何れも無量の感に堪へなかつたらしい。それも其筈で、昔しボロ着物を着て、五十錢、一圓の融通を乞うたものが、今日では博士とか、局長とか、或は大臣次官とかになつて、皆社會に時めいてゐる。此方側でも昔を考へると珍らしくもあり、なつかしくもある。で、お客を捉へて、「君の處には昔大變厄介になつたが、まだ勘定がいくら残つてゐる筈だ」とか、「僕も今では其れ位の借金を拂つてもよい」とか言ふものがあつて、互ひ／＼の懷舊談に、笑聲先づ堂に満ちた。

かくて一同席定まつて、幹事が重ねて開會の挨拶をすると、もうあとは思ひ／＼に、昔の態度に立ち返つて、懷舊談やら何やらに花を咲かせ、一人として沈黙を守つてをるものはなく、忽ちにして場内蜂の巢を壊したやうな熱騒を現じて來たのを、幹事は之れを制止して、折角の芝居が失敗に終つたのは遺憾であつたが、幹事が今一つ餘興をやると言つたので、何事が初まるかと一同鳴りを静めて待つた。

そこで幹事は「これから諸君の若い頃の假聲を使つてお聞きに達する」との前置きで、二三の書物を持出し、之れは數學に於て日本の泰斗と稱せらる、藤澤利喜太郎君の假聲だとか、之れは物理學に於て世界のオーソリチイである田中館愛橘君の假聲だとか、之れは現政府にときめける藤田四郎君の假聲だとか、凡そ七八人の若い頃の聲を眞似て、大喝采を博した。

幹事が何うしてこんな眞似をしたかといふに、それには仔細がある。昔し大學生時代に、皆なもの、演説や文章などが未熟だから、之れを稽古するために毎月數回、人を定めて交る交る演説をやつたものであるが、其の演説の草稿は幹事の手許にまとめて保存して置くこと、した。其最終の幹事が私であつたので、草稿は今尚ほ三四十篇ぐらゐる私の手に保存されて居る。



當日讀み上げた假聲は、即ち此の草稿に依つたものである。當時吾々の文章と云つたら頗る幼稚のもので、その草稿は坪内氏の所謂舊惡全書である。そのまづイヤツを、一人について五六行づつ、讀み上げたのであるから、槍玉に上げられた當人は何れも赤面し、會衆は皮肉の喝采を浴せたが、此の喝采者も、お次の番には亦赤面せねばならぬ運命に逢ふなど、なか／＼に面白かつた。が、この假聲使ひもおしまひには、遂に笑はる、一人となつたのは是非もないことである。

幹事が此の餘興を濟まして壇を下りる隙を見計らつて、ある同窓が件の書類を奪ひ取り、今度は幹事の假聲を使つてお聞きに達しますと、私の拙な文章を二三通讀み上げたので、一同は更らに喝采したが、自業自得とは此の事を言ふのであらう。兎に角こんなことで、一夕の歡を盡したのは愉快であつた。

## 一八 貢進生時代の大學

同窓の舊を語つた序に、吾等の先輩貢進生のことを聊か附け加へよう。往年（明治三十一

年）杉浦天台道士（重剛）と或る會で落合つた時、氏は貢進生に就て種々語られた。杉浦氏は江州膳所の貢進生で、先づ幼少の頃のことから談が始まつた。氏は四歳の時、頼三樹三郎が網乗物で檻送されるのを母に抱かれながら見たと語るを冒頭として、貢進生に就ては、大藩三名、中藩二名、小藩一名で、各藩は俊秀を抜いて南校へ入學せしめた。其の總數、四百名に及んだ。

當時の學生たる貢進生は大小を脇挟んでゐたもので、「某藩貢進生」と烙印をした札を脇指の束にぶらさけ、弊藩に於きましてはなど、角張つて互ひに挨拶した様を、今から思ふと隔世の感がある。此頃は教場へ出るにも脇指をさしてゐた。勿論各藩の俊才を挙げたことであるから、孰れも漢文位は縦横に書ける連中であつた。然るに教場に入つて學ぶ所は何ぞといふと、ピイ、エ、バなどと子供くさい限りで、中には不平を洩らす者も少なくなかつた。當時はなかなか殺伐の世の中で、學生も帶刀してゐたこと、て、教師に無禮の動作でもあつたと、教場で脇指を抜き「斬つてしまふ」など、騒ぎ立てるものもあつた。

貢進生は何れも士族出身である爲めに、各自その専門を選ぶに色々の好き嫌ひがあり、法律は、代言のやうな賤しい業だから好ましくないとあつて多くは之れを嫌つた。さりとてエンジ



ニアリングは大工の業だとあつて、これも好まず。専門學科の種類未だ多からぬ當時、それを好み嫌ひを言ひ立て、ゐては學ぶ可き學科もなかつたので、分別もなく舍密科(せひみか)(化學)を修めたものが少なくなかつた。當時の理學専攻家にして、文學に長じた者の一二を挙げると、久原躬弦の如きは某々軍談と題する小説を書き、其の挿畫も自からうまく書いた。小藤文次郎は歌人で、歌をよく詠んだ。渡邊渡も文章家であつた。此他當時文學をよくするもの頗る多く、福富孝季の如き、柄にもなくやさしい歌をよみ、河上謹一は詩を能くし、宮崎道三郎も同じく詩を能くした。西徳次郎が滑稽にして狂歌をよくし、磯野徳三郎は小説に通じたなど、一枚擧に遅ない位であつた。自分の洋行中、詩歌の唱酬頻繁で、なか／＼風流のことであつた。

當時芝居好きの三幅對と云はれたのは、西松次郎、福富孝季、磯野徳三郎の三人で、就中西は最も巧者で、自身の觀た芝居の數は百四十にも及び、常にどの芝居でも旨く評し得られないものはないと言つて居た。これには他の二人も三舍を避けた。西は天稟の滑稽家で、或る時水に落ちて學校へ歸つて來た。其の時に仲間の學生がやかましく囃し立てると、西すかさず「西

水に落つる也」と言つた。洒落の「洒」の字を云つたのである。森文部大臣の刺殺された時、彼れは「廢刀者出刃庖丁を横にさし」と詠じた。彼れは又地質學上の難題を巧みに歌に詠じて人を感動せしめたことがあつた。又放屁を以つて有名であつたので、みづから「芳菲山人」と號した。彼れは一夜に放屁百首を詠じて、同窓を驚かしたこともあつた。磊落に世を渡つて、名利の何たるを知らない風があつた。

當時最も亂暴家として聞えたのは、野村珍吉、城多虎雄などいふ連中で、随分思ひ切つた事をした。大學では此時分齋齋と詔諛とが最も嫌はれ、これを「リンゴン」と言つてゐた。「リンゴン」は齋齋の「リン」と、詔の言扁を合せたものである。そして苟くも「リンゴン」をなすものと認定を受けたが最後、運動場に引出されて必ず鐵拳の三つや四つを喰はされたものであつた。同窓間の制裁は此の通り嚴で、舎長などを煩はすまでもなかつたのである。

此時分面白かつたことで記憶に残つてゐるのを二三語ると、仙石貢は浴衣の儘で卒業證書を受取つたと云ふので、大に非難を受けた。併し彼には實は是れより外に何等の衣服をも持たなかつたのである。某は教場に於て、教師に「スタンド・アップ」(お起ちなさい)と言はれながら



應じなかつたと詰責された。然るに此人は至つて矮小の男で、ベンチに腰をかけて居る方が起立するよりも却つて身長高く見えるので、言譯は立つた。某は絹袴を穿いたとて、同窓がこれを校長に告發した。然るに仔細に之れを検すれば、無慮二十五箇所穴のある袴であつた。又ニコライの教堂が駿河臺に立てられた時、當時の大学生等は氣に食はぬことに思つて、他日必ず砲撃するの必要が起るだらうと云うて、大學の機械でこれを測量したことがある。其時機械のスパイダル・ラインを切り破つて大に叱られた。

以上は杉浦氏の談であるが、今日から之れを見ると、なか／＼興味がある。

## 一九 奇想天外の天神講

下谷廣小路にかなめ家といふ小さな店がある。主人は栗原金三というて、深川のさる材木屋の息子であるが、病身である處から、家を弟に譲り、自分は廣小路にさ、やかな店を出して、凝つた細工物を並べて居る。此主人、風の變つた人で、故尾崎紅葉や我輩などを顧問として、色々凝つた趣向を盡すのを、何よりの樂みにして居たが、その内にこんな珍趣向を凝らした

ことがあつた。

明治三十五年、菅公の千年といふにちなんで、此のかなめ家の主人、前人のおもひ及ばなかつた意匠を凝らし、奇抜な天神講を催した。其の趣向のあらましを言ふと、お客としてはいは四十八字と一二の數字の頭字を有する懇意の顧客を講中に見立て、淨瑠璃の手習鑑の趣向を取つて、講中を寺入りの寺子に擬し、四十八字並びに一から億までの數字の机と硯箱とを、昔時寺子屋に用ゐた形になぞらへて作り、これを來客の膳ともなし、果ては景物ともして贈らうと言ふのだ。斯ういふ趣向で、九月二十六日が舊曆の二十五日に相當するとて、神田明神境内の開花樓に於て催された。

自分も此の招待を受けて、三時頃に出掛けて見ると、かなめ家主人を初め清水晴鳳など、いふ、かなめ家に深交のある連中は入口に机を構へて、來客に挨拶をして居たが、何れもお粗末な單衣に紺の盲縞の前垂を掛けて居た。よく／＼見ると、何れも單衣に肩揚がしてゐるのは、前垂と共に寺子に擬へた一趣向と見受けられた。殊に晴鳳のやうな肥えた男が、短い單衣に肩揚のついてあつた滑稽千萬な様子には、噴飯を禁じ得なかつた。來客は七八人で、尾崎紅



葉、角田竹冷、竹内久一、武内桂舟などの知人も見え、大槻如電翁を初め、某々の好事家も見えてゐた。

客溜りの大廣間の一隅には、壇を築いて古器數十點を陳列してあつたが、何れもかなめ家好みの器物で、價は二束三文でも、どこやらにをかしみのある品ばかりであつた。それは都府樓の瓦片、豊公の瓢箪、咸陽宮の瓦なんど、いふ類で、何れも出鱈目の品名を附して、由ありけに陳列されてあつたが、これは福引に取らする景品と知れた。

先づ餘興として、某々の落語家、手品師などが滑稽の技を演じた。それが終つて一方の襖を開くと、こゝには竹内久一が薙きに菅公千年の記念によつて、千體の菅像を彫刻した其の一を、白木の厨子に納め、壇を築いて其の上に飾りつけ、前刻落語を語り、手品を演じた藝人どもは、何れも神主の扮装で、笙筆筆を吹きならし、幣をさ、け、端然として坐して居る。其の様子可笑しさには、一同どつと笑つた。茲で皆々神前に進んで御酒を戴くと、梅鉢の紋を畫いた陶杯一個づつ、を頒ち、尙ほ松竹梅に因んだ菓子をも分つた。參拜が終ると、更らに餘興の續きとして、寺子屋の段松王首實驗の茶番を演ずる。講武所の雛妓數名に、めくら縞の單衣を着

せ、寺子に擬したのを出して、一番の舞踏をやらせたのは一趣向であつたが、其服裝が寺子に見えず、紡績工女と見えたのも、却つて興を添へた。愈々設けの宴席に這入つて見ると、驚いた。こゝは七八十枚の疊を敷いた大座敷で、床には素岳が石摺様に擬して、かなめ家主人に贈つた空海のいろは歌の大幅をか、けてあつた。正面に置かれた桐製の机が寺子屋先生の席で、左右二列に寺子屋的の揃ひの机を三個づつ、並べ、さしにも廣い座敷も、中央の一條の通路を存する外、机を以つて充たされて居る様子は、いかにも寺子屋の光景をよくも現出したものと、一同アツと感歎した。

やがて長老の故を以つて今日の先生に推された大槻如電居士は、正面に据ゑられた桐机に凭り、我れ々寺子一同は、各々の机と定まつた所へ着席した。七八十人のお客がズラリと並んだ處は、なか／＼の見ものであつた。扱て机の結構をよく見ると、もとより粗製ではあるが、寸尺など實用に叶ふやう、よく工夫され、殊に抽斗の中まで丁寧に漆を塗り、硯箱の内方などは、艶消漆塗にした處など、かなめ家の用意のほど、感服の外なかつた。机の上には、硯箱の外に手習草紙と書いた半紙の張られた折箱、並びに手本様のものが載つて居た。試みに硯



箱の蓋を開いて見て、更らに主人の用意に驚かされた。即ち硯箱の中には、硯がある。水滴がある。墨がある。筆がある。何れも席上酒肴に充つ可き食物を以つて作られてあつて、硯は焼豆腐、墨は昆布、水滴は蒲鉾、筆は生姜で、それら其の形に擬してゐるので中々に興がある。手習草紙といふ折詰も同じく食物で、輪形の型に飯を押ししたのを、梅鉢の形に排列してゐるのは、菅公の紋に擬したものである。その他飯の菜に、海老や金柑や昆布や柚子や章魚なんどの入れてあるのも、ウツカリして居れば無意味のやうであるが、實は矢張り寺子屋の戯曲の文言から意を取り來つたものと思はれた。例へば金柑は金冠、海老は梅王の顔のクマ、昆布の青く細く切つたのは松王の松になぞらへ、柚子の輪切の中のスの明いたのは御所車の洒落ではないかなどと、考へれば考へるほど興味が湧く。又手本の如きものは紙製の柱懸を二つ折にしたもので、中に短冊一枚と手巾一枚とが插まれてあつた。

こんなことで、來會者一同が主人の趣向ぶりに感歎の詞止めもあへぬ中に、けふの寺子屋先生たる大概如電入道は起立して一場の挨拶をなし、今日は讀書を廢して直ちに清書に取りかゝらる可し、先づ十分に墨を磨られたし、誰れかある、硯水を持ってと叫ぶや、芝居が、りてハイ

ハイと、先きに寺子に扮した雛妓と、素人風に扮した大妓は、各々酒瓶を携へて次の間より出で來り、いざ硯水を差上げんと、銘々に酌をする。其の間には、吸ひ物や取り肴などを配るものもある。この吸ひ物も肴も、何れも趣向を含蓄して居るやうに見受けたが、今は既に忘れてしまつた。斯くて酒酣にして、銘々得意の隠し藝が湧くがごとくに起り、時ならぬ春けしきを演じたが、私は早く辭して歸つた。明治の世に元祿の昔を偲ばする珍趣向、馬鹿けて居ると言はゞ言へ、這間の趣味は、功利にのみ齷齪たるもの、遂に解する能はざる所であらう。

## 二〇 高嶋吞象翁と語る

私が明治三十四年養痾の爲め數月熱海に日を暮らした其折、無聊に堪へず、隣室に高島嘉右衛門氏がゐたのを幸ひに、互ひに往來を始めて懇意の關係が生じた。氏は此時分古稀に近かつたか或は古稀を過ぎてゐたか、高齡であつたに相違ないが、年不似合に若々としてゐた。例の長幹で風采が揚り、話に富んで辯舌がよく、記憶力に於ては驚くべきものがあつた。毎日晚餐の後互ひに語るのが例であつて、それが爲め鬱悶を排したのみか、得る所も少なく無かつた。



翁の得意とする處は易斷であつたから多くの談話は易斷に觸れたが、それには餘り趣味を有つてゐぬ私は、寧ろ翁が維新の際に實歴した追懐の談が面白かつた。翁は大隈侯とは相識の間柄であつたから自然私に侯の平生を問はれたので、私の談話は主に侯に關してであつた。私が當時暇に任せて翁の談話を筆録したものが數冊に迫んでゐる。今其内から特に興味のある談を摘録しよう。記事は稍々長いが、維新史の好資料が少なくないから、繁を厭はず爰に紹介する。

## 京濱間の鐵道

第一に話題に上つたのは京濱間の鐵道に就てであつた。翁曰く、明治の初年、奥羽鐵道をもくろんだのも、京濱間の鐵道を企てたのも等しく私であつた。私は其頃から大隈、伊藤の諸公と知合つてゐるが、或時兩公が私の宅へ來合はされたから、試みに京濱間の鐵道計畫の事を話し出して見ると、兩公も強ち反對でない様子で、顔付を見るとニコ／＼して居らるゝから、何でもこれは計畫すれば物になる、それにしても先立つものは金だがと案じ居る内、英國商人で上

海迄來た序に日本へ廻つた大金持が横濱へ來た。コヤツ談ずべしと云ふので、其時分私の宅へ食客同様に來てゐた連中の内、富永冬樹、横山孫一郎の二氏を遣つて、此商人に談じさせた處が、話しが追々進行して五ヶ年(?) 据置で五年目より三十萬圓づゝ返金、合せて三百萬圓、抵當には政府より受取るべき鐵道布設許可書を差入るゝと云ふ條件で、相手も略々承諾の様子に見えたから、めめたと云ふので、大隈さんを訪ねた。

大隈さんを訪ねると、其席に伊藤さんも机に倚り、横文字の書狀を認めて居られた。そこで私は大隈さんに向つて鐵道を敷設するの急なるを説き、私設を許して貰ひたいと云ふと、大隈さんは許すまいものでもないが金は何うすると云はれた。ソラ來たと云ふので、某外商と交渉の成行をあらまし話して先方から承諾の意を示した書面などを見せると、大隈さんはカラ／＼と笑ひ出された。「高島、お前は人がよくて困る、外國人が何で三百萬圓の大金を貸すものか、貸すと云ふのは相手の山だ」とテンで相手にならない様な挨拶で困つて居ると、今迄黙して書面を認めてゐた伊藤さんは、私の方を顧み「高島、鐵道をやる前に先づ洋行して來るがよい」と、これも大隈さんに左袒して、私を冷かすのであつたから、まだ時機は熟さないと見て話し



はそれなりとして戻つた。

その後店の手代共の間に一つの不思議な噂が高まつた。それは富永冬樹が千五百圓で地面を買つたと云ふ噂である。富永は當時私の宅に三十圓許り貰つてゴロ／＼して居る位であるから、千五百圓の土地などの買へる筈はないのだ。變な事と思つて、或時富永を呼んで聞いて見ると、事實であると云ふから益々不審に堪へず、立入つて段々聞いて見て初めて驚いた。大隈さんは過ぐる日私に向つて冷淡に挨拶したのは胸に一物あるからで、私が外商と交渉した様子を見て取り、政府より談判すれば外資借入は確かに届くと見たから、私が大隈さんの處を辭した足移しに大隈さんは馬車を驅り、右外商の處へかけつけ、そこで政府との間に談判が調ひ、それが爲め外商は急に歸途に就くことになつた。然るに此事を聞嚙つた富永は驚くこと一方ならず、既に船に乗り込んだ外商を訪ひ、折角こしらつた談判を政府に横取されたのは詮方なしとして、當てにした「コンミッション」を取損うたのは實に困ると泣く許りに訴へたので、外商も五月蠅くて溜らず、涙金千五百圓を小切手で呉れたのを、正直に此の金全部を以て地面を買つたのだと知れて、私も初めて政府のなかく／＼人の悪いに驚いた。丁度大隈さんが他の事件でパー

クスにすぎり金を借り出した時分で、金の出來たとき私の宅へ立寄られ、「ドウだ高島、金を見せようか」と自慢氣に見せられた事がある。此時分の大隈さんは覺束ない金の番頭さんでしたよ。

### 高島學校

私が經營した横濱の高嶋學校の盛んな時分には、七百人ばかり生徒がゐた。諸藩の貢進生などの喰ひつぶしも多かつた。此時分福澤は私塾を有つて居つたけれども、微々たるものであつた。あるとき福澤を教師に頼まうと思ひ立つて出かけた。アンな人であるから減多の事では承知すまいと思つたから、少し工夫して出掛けた。そこで福澤に向つて「ドウです、私の學校へ來て呉れませんか、徒ではない、來て下されば其代り御子息二人を洋行させる」と斯う出たので、流石の福澤もマンザラでない様子で「なるほど、一日考へさせて下さい」と云ふから、大抵話しは届くであらうと豫期して居ると、そこは福澤だ、次の日の挨拶に、實は學問は自分より幾等高いものが塾中にゐる、自分よりもそれがよからうと云ふので、小幡の兄や外に二人許り



よこされたが、實は福澤に一杯喰はされたのである。

學校に就て今一つ可笑しい事がある。學校が追々繁盛に赴くを見て、教育の爲め嘉みす可しと云ふので、政府より賞狀に三組銀杯を添へて賜つた事がある。これを外國の公使が聞きつけて、祝意を表する爲めに遣つて來た。そこで賞狀の文意を譯して聞かせ銀杯を見せると公使は驚いた。彼等は勳章を貰つた事と思つて祝しに來たのである。日本で勳章と同様銀杯を賞典に用ゐる習慣のある事を彼等は未だ知らなかつたのである。それであるから驚いたのも無理はないが、彼等は斯様に云つた。全體勳章と云ふものは、人の視目を惹くやう胸間に掲げて信用を標榜するものであるが、この杯は抑々酒を飲む器具では無いか。酒を飲むは寧ろ人生の惡徳である。即ち之れを有するは、取りも直さず不信用を表章するものにあらずやと、斯様の論法であつた。その日恰も徳大寺さんが宅へ見えられてゐたから、此話しをすると、徳大寺さんも頭を搔かれた。

## 易を心掛けた動機

鐵道や學校や瓦斯やいろ／＼の事業話しが濟むと、例の易談が初まつた。易談の聽聞は香象翁と談を交へるもの、豫じめ覺悟を極め置かざるを得ざることであるから、私も最早出るだらうと思つてゐたが果して出た。處で此の問題になると、なか／＼話しが長いのに閉口した。幾んど四時間許りノベツに語り續けられたが、併しマンザラでもなかつた。先づ私より君は全體どんな動機から易學を心掛けられたかと問ふと、曰く、實は私の親は無學であつたから、私は少しばかりでも本は讀みたいと心掛け、四書、五經の「經典餘師」を相手にポツ／＼研究して見ると、少しづつ、は意味もわかるので、易の如きも、全く「經典餘師」に依り入門したのである。然るにまだ二十臺の時であつたが、あるとき八卦を置いて見ると大火のあるべき卦が出た。そこで材木を買占めると果して江戸の大地震があつたので、成る程八卦と云ふものは尊いものだと感じた。其後鍋島家へ出入して小判を外國人に賣つた事がある、それが顯はれて入牢を申付けられ、六年許り獄中の身となつたが、これが易學研究の爲め天の與へた機會であつて、一圖に易の正文を暗誦した。暗誦して居る内に研究もした。そこで第一自分の運命はドウなるのであらうかと考へると、夙夜心配でたまらない。そこで一生懸命になつて占つて見る



と、水の卦が出たから、これは助かる、或は遠島へ流罪を命ぜらるゝも知れんと考へた。又卦の内に十年經つと運が開けるとあるので初めて安心したが、後日に徴すると果して此卦がよく當つてゐる。則ち弊屋へ陛下の行幸を辱うしたのは丁度十年目であつた。こんな事から段々八卦に身を入れる様になり、又一生懸命の場合に占つた其呼吸が神祕を發く鍵であるが、その鍵が手に入つたと云ふ様な次第である。

## インスピレーション

神祕を發く鍵だの、占ひの呼吸など云ふ話しが出る、私にも久しく釋けない疑團があるのだ、そこでこれを香象翁に質さうと思つて、試に問うて見た。周易は如何にも理窟をよく並べたものである。某卦の下に某々の理窟が附帶し、吉には吉の理があり、凶には不吉の理がある。それは宜しいが、扱て某の卦、某の卦を筮竹に依つて得ると云ふのは偶然だと思ふ。偶然に得た卦を以つて人の禍福を卜すると云ふ事は妄ではあるまいかと云ふと、翁曰く、決して偶然ではない、先刻の所謂呼吸と云ふは即ち之れである。筮竹を握つて冥目沈思一番すれば、自

然に適中の卦に當る。これは不思議と云へば不思議だが、其實不思議でない。射を以つて譬へて見ると、的に適中するや否やは矢を放つて未だ的に達せざる内に凡そ分ると同じ理法だ。易に通ぜざるものは一概に筮竹をヒネクリ廻はすを見て、雙六の賽でも投る様に考へて居るけれども、決してそんなものではない。筮竹に依つて卦を定めるのは、神と相談の上で定めるのだ。一種のインスピレーションだ。即ち私はこれを道と云ふ。道とは何ぞ、首走る也、即ち首は走つて神に驅けつけて相談をするから道と云ふのである。曾て伊藤さんと大に易を論じたことがあつたが、其時結局伊藤さんをして一言なからしめたのは此の道の論であつたといふ。翁の道の見解も亦奇なる哉だ。

## 敬宇翁に關する話

翁が易で當てた話しは、夫子自身の言ふ所ではなかく、多いやうであるが、中には随分ホラもあるとして、中村敬宇翁が香象翁の門人となつた話しのごときは面白くもあり、また虚構らしくもない。翁曰く、中村敬宇と云ふ人は三歳にして字を知り七歳にして詩を作つた神童で、



當時の大名（閑叟の如きも其人なり）で試めした人も少なくなかつたが、何れも感服した。そこで當時佐藤一齋、鹽谷宕陰は申合せて、あれを見せもの同然にして置くは惜しいものだ、シツカリ教へて大家にしよう云ふので、母親にも談じ遂に聖堂に入れた處、無論成績がよかつて洋行迄させられた。此中村はあの通りの君子であるから、金などの出来る譯はないが、何か翻譯をするとヒドク賣れるものであるから、意外の収入があつた。中村は本を賣つて得た金だから本を買はうと云ふので大分書籍を購うたが、なか／＼書籍を買つても餘るものだから、遂には公債證書を買ひ、別荘を建てると云ふ様になつた。然る處中村の養子、これは細君の實家から貰つたのであるが、あるとき薩摩の人に投機の勧めを受けて大失敗をした。それはドウ云ふ譯かと云ふに、薩摩には公債證書が非常にやすく買へるから買占めようと云ふので、平沼專藏から高利を借りて遙々薩摩迄出かけると、第一宿泊した家の主人が身代限をした者であることを知らずに、之れに大金を預けたのが間違ひで、主人は金を持つて逐電して仕舞つた。サアそこで平沼專藏がなか／＼やかましい。中村敬字はあの通りの人であるから、こんな事には無論關係はないが、肝腎な實印を養子に預けて置いたから、證文には中村敬字の判がついてあ

る。君子もこれが爲め意外のかゝり合となり、是非共二三萬圓の金を濟まさなければならぬ仕儀となり、敬字老人大弱りで、私の處へやつて来て、ドウか易を頼むと云ふから置いて見た處が差支はない。中村に卦を示し、こんな鹽梅であるからあせる可からず、あせらざれば君を救ふ人があると説明すると、中村は大いに喜んで、此時は躍り出した。さうして私のやうなものが大學で易を教へるとは實に恥入つた次第である、以來は君の門人になると云はれた。

それで段々後になつて見ると果して卦の通りで、遂に救ふ人が出て來た。それは誰かと云ふと山岡鐵舟である。鐵舟は敬字浮沈の關する所であると聞くと、直ちに電報で平專を召喚した。平專は何心なく招きに應じて行くと、鐵舟は座敷に儼然と坐し、近く寄られよと云ふ。段近く寄ると、イキナリ片手に胸倉を捉へ片手に鐵拳を丸め、中村の如き君子人をたばかるとは不届至極の奴ぢや、飽くまで非を遂けるとあらばこれなる鐵拳で腦蓋を微塵になし呉れんと、アハヤ鐵槌降り來らんする見幕に、流石の平專氣も魂も身に添はず、只管に託入り、不當の要求を撤した爲め、敬字も助かつたのである。此時は敬字も易のよく當つたには心から感服した。感服の極は耶蘇教の信仰を見合はせ、一意易に力をこめた。これが翁の自慢話の一つで



ある。

## 易の翻譯

翁はなか／＼話上手である。どこやら講釋師メイた句調もあるが、感服するのは記憶のよい一事である。經書の文句など驚く程よく記憶してゐるのは勉めて記憶したのでもあらうが、さまで大切でもない文章、例へば栗本鋤雲が彼れの易斷に序した長篇の如き、彼れが政府から貰つた褒狀の文言の如き、話しの間に挿んで、水の流るゝが如く朗誦するに至つては勉めて記憶したものとも思へない、天稟の性と判する外はない。彼れが易に凝つて兎に角大家と呼ぶるゝに至つたのも恐らく記憶のよい所から馴致したのではあるまいかと思ふ。今一つ彼れの話を舉げよう、如何に彼れが話上手なるかを見よ。それは易の翻譯を人に頼んだ話である。翁曰く、往年米國で萬國宗教大會を開いた時、易を翻譯し、自分の考へも加へて平易に西洋人に知らせん事を欲し、出版を目論んだが、困つた事には易を翻譯する位な腕者がない。偶々此時分杉浦重剛や、死んだ巖谷の息子立太郎などと云へる面々が私の處へ議論に來た事がある。杉浦等の

意氣は、初めは天を衝くばかりであつたが、段々論じて見ると私の云ふことに味があるから、彼等も遂に兜を脱ぎ、改めて私の門下生となつて、それから彼等の請求に任せ、毎週神田の英語學校の跡へ出張して講釋をする事になつた。杉浦等も段々易の事がわかつて來た様であるから、私より翻譯料として一千圓の金を添へ、自分著述の易を翻譯して貰ひたいと頼んだ。杉浦は受け込んだが、さて易のやうなむづかしいものを縦横に翻譯するは容易の業でない。杉浦は頭本元貞に頼んだ。頭本は當時の日本人中最も翻譯の名人として人に許された人であるけれども、此翻譯には頗る困つたのである。

## 面白い按摩

話は少し横道に入るが、これより先き私は高崎最寄の倉我野くらがのと云ふ處へ旅行し、宿の無聊を遣らんと按摩を呼んで揉ませながら、四方八方の話をすると、按摩が身の上話を初めた。此按摩、年もよらぬに感心な事を云ふのが氣に喰つた。それはドウかと云ふに、眼の見えない不具となり、親を十分養ふ事が出來ないので、親に對して誠に濟まないと云ふのである。不具なれ



ば大抵は親を怨むものであるのに、これは感心だと思つて、おれは神奈川の高嶋と云ふものであるが、若し神奈川へ来たならば立寄れと云うて別れた。然るに其後果して此の按摩が遣つて来た。そこで私の家にも按摩の一人位は入用であるから、毎日揉ませる傍ら易を教へて見ると、一生懸命に習うから段々に覺えて来た。盲人は目明に較べると一得あるもので、暗誦と來ると目明は叶はない。私の宅へ出入りする多くの弟子も、遂には此按摩に叶はない位に上達した。取り分け私の假聲をよく使ふと云ふので、門弟中に評判になつた。そこで東京の平河町の宿屋上總屋の主人は私に仕へたものであるから、それに頼んで其の附近に家を借り、此の按摩に世帯を持たせ、親には百五十圓で船を買つて與へた。親は船營業だと云ふからである。

ある時上總屋へ行つて客の肩を揉んで居ると、客が來てそれと段々語るのを聞くと、肩を揉ませてゐる人が云ふには、此頃高嶋より易の翻譯を頼まれたが、ドウもこれには困る、何とも筆の下し様がないなど云ふ話もあつて、訪ねて來た客は間もなく立去つた。按摩は客に向ひ、あなたは高嶋の易を翻譯するに困つて居らるゝと仰つしやつたが全體ドンな處が翻譯しにくいのです。實は私も高嶋の門人で、一通りは心得て居るつもりですが、試みに高嶋さんの易の説

き方をこゝで申して見ませうかと云ふので、客は意外なのに驚いたも理り、半ば好奇心に驅られて一議に及ばず、其説き方を聽かんと云ふから、按摩は肩につかまりながら、得意の高嶋の假聲をやるので客も全く驚き、按摩はドウでも宜しいから、ドウぞ翻譯の手傳を頼むと云うて、初めて頭本なることを名乗り、翁の著述の分り兼ねる節々を按摩に相談に及び漸く翻譯の出來上つたのが、即ち往年日本から渡航した坊さんや神主に頼んで萬國宗教大會へ送本した歐文の拙著である。此の按摩は鈴木康伯と申したが、先年歿したとは、翁の手柄ばなしの第二であつた。

## 象山變死の卦

ある夜また翁と語る。談佐久間象山の事に及ぶと、翁はまた八卦の話を持出した。併し之は余には耳新しい話であつた。翁曰く、象山は吉田松陰の外航の企を賛成し、之に詩を贈つた事から幕府の忌諱に觸れ、松代藩にお預けとなりそこに塾居して居ると、當時京都に居られた、時の副將軍徳川慶喜公よりお召しが來た。松代藩主も我藩の名譽であると云ふので、金千圓を



象山に與へて、匆匆旅装を調へさせた。處が象山は久しく蟄居の身であつたから馬を持たなかつた。そこで差當り馬を物色した處が、幸ひに良馬があつて、百二十圓の大金を投じてこれを求め、都へ上る用であると云ふ處から「都路」と命名した。

サア愈々出發と決したが、門人の北澤（正誠）が遣つて來て、先生、今度の都上りに就ては定めて易を御覽でありましたらう、易の表は如何でありますかと問うた。象山は易には巧者であり、重大な場合には易を見るのが例であつたから、此問は當然の間であつた。象山は、ナニ將軍のお召だから易は見ないと云うたが、其時初めて氣が付き筮竹を取つて見ると「澤天夫」の上爻が出た。此の卦は森有禮の殺されたときにも出た、李鴻章の狙撃された時にも此卦の第二爻が出たのである。此卦には「夫、揚于王庭、孚號、有厲」とあつて、實に危険な卦である。かくの如く澤天夫が出たから象山氣にかけないではないが、仕方がないからそこへ出發した。途中で大阪に小原鐵心を訪うたが、小原は象山の上洛を賀し且つ易の表を問はれたについて、澤天夫を得た事を話した。小原も妙に思つたが、深くも言はずして別れた。

扨て京都では慶喜公に謁して外交意見を陳べ、滞在して居る内に、一日中川宮のお招きを受

け、象山喜んで參上すると、いろいろのお尋があつて西洋各國の事など申上げ、宮にもお喜びになり、御酒を賜はり、馬術の話などもはじまり、象山は馬の名人であるから頻りに馬の講釋やら鞍の講釋をなし、終にお庭先で騎馬の御所望があつたから、象山いたく面目に思つて、直ちにお受を申上げ、西洋の鞍を置いた例の新購の馬を引出して騎ると、馬は稀代の逸物、騎手は當代の名人、鞍上人なく、鞍下馬なしの妙技に、宮は如何にも感歎あり、厚きお詞を賜はつたので、象山も喜悅斜ならず、一身の面目、藩の面目此上ないと、記念の爲め「王庭」の名を馬に命じた。之れには象山も氣が付かなかつたのであるが、易の表にはハッキリ顯はれてあるので、王庭に揚ぐ、孚に號ふ、厲きこと有りて、實に危い事限りなしであるが、果せる哉、象山は此夜辭して宿屋へ歸る途中暗殺に出遇つたのである。ドウです、易は恐いものでありませんか。

## 外商と贖金

幕府の末路に各藩競うて二分金の贖金を造り、幾んど贖造をやらぬ藩は無い位であつた。そ



ここで横濱に居留してゐた外商はしばらく、新政府に訴へたけれども、新政府とても致方がないから事に託して遷延して居ると、外商の訴へが益々急になり、若し日本政府で速かに贖金の引替を爲さざるに於ては、已むを得ず本國に照會して戦争を開くより外はないと云ふ筆法で脅迫に及んだから大久保や木戸も幾んど困却して大隈と伊藤に圖ると、宜しい、速かに處分しますと云うた。實は速かに處分と云ふけれども、なか／＼困難だらうと窺かに考へて居ると、苦もななく大隈が處分したのには大久保も木戸も驚いた。それは如何にと云ふに、大隈は時の東京府の參事中江弘を呼び出し、今夜中には是非東京全市二百八九十軒の兩替屋へ布令を出し、明日早朝築地汽船場へ集る様に嚴命を下された。そこで翌朝何事かと全市の兩替屋が集まつて見ると、これより横濱へ行き、外人の所有金の眞實を鑑定せしむるのであると云ふので、一艘の汽船に三百人近くの兩替屋を載せて横濱へ出かけた。

是れより先き、外商が贖金の弊を訴へ、大隈が引替を諾すると聞くと、内商の狡猾者流は外商に託し自家所有の贖金を引替へて貰はんと企んだ。大隈は疾く此事あらんと知つたから、扱てこそ兩替屋を召連れ、突如眞實の検査を初めたのである。横濱へ汽船が着くと外商へ布令を發し、即刻金を持參せよと命じた。餘りに急であるから、内商も狡猾手段を施すの餘地がなかつた。それでドレだけの金が集まつたか、初めは政府も四五百萬の金が集まるであらうと期し、引替に渡すべき金などは實は少しもないのであるから、内々心配してゐた處、案外に出て來た金が少なく僅かに四十五萬兩程であつた。それを三百に垂んとする兩替屋に手分をさせ、検査をなさしめた結果、二十五萬兩丈が贖金、二十萬兩は正貨であると云ふ事がわかつた。そこで贖金二十五萬兩をば、三井を呼んで若干づゝを包んで封印をなさしめ、扱て外商を招いて曰く、眞實の検査をさせた處が二十萬兩丈は眞正の通貨であるから安心して宜しい、二十五萬兩は贖金に相違ないが、三井の封印した儘政府の上納金に用ゐれば、何れの手より來るも政府は差支なく受領すると申渡したので、外商は初めて安堵して引取つた。これが一金をも動かさず四十五萬兩の引替に應じた當時の奇談で、大久保も木戸もこれを聞いて、大隈の臨機の才略に驚歎したと云ふ事である。

福岡縣の贖札とりしらべに、彈正臺から渡邊昇が出かけたはなしがある。このとき、渡邊は單身で、五十二萬石の福岡の城の二ノ丸で、大勢が寄つて掛つて精出して贖札をこしらへてゐる



る處へ出かけて、おれは彈正臺から來た、印形を渡せと云ふので、質札に捺してゐる偽造官印を先づ押收して、しづくくと引上げた。これもなか／＼常人の眞似の出來ない仕業と云はなければならぬ。

## 薩摩武士

翁と話次、維新頃の武士談にも涉つた。翁曰く、幕府の末造より維新の初めにかけて、何にしてもエラカつたのは薩摩である。當時三萬の兵を養つて居つたのは薩摩の外にはなかつた。營に兵の数が多いばかりでない、薩摩には全く立派な侍が多かつた。一つ二つ、今生きて居る（明治卅四年頃）人の事を云つて見よう。

奈良原（繁氏）などは實に強かつた。伏見の寺田屋に四十人ばかりのやかましい浪人が居る、その内五人は薩摩であると云ふ處から、藩では奈良原外四人を呼んで臨機の仕末をして來いと言ひつけた。決死の五人に對して矢張り指向けたのは五人である。臨機の仕末と云ふのは、場合に依つては殺して來いと云ふのだ、随分難儀の役である。五人對五人は力相角すると

するも、寺田屋は浪人の屯所である、何人合同して手向ふやら分つたものでないのを、奈良原は平氣なもので、先づ眞先に單身出かけて、一人の薩摩出身の浪士と會して遂にバラして仕舞つたから、其物音に大勢は抜きつれて奈良原を圍んだ。すると奈良原は大小を放り出し、兩肌を脱いで、諸君に手向ふものでない、御安心あれと云うた。なか／＼これが大抵のものに遣れる業でない。

それから海江田（故信義子）だ。今こそ穩順しさうな老人だが中々やかましい男だ。あるとき禮聘使が東海道を通つて掛川へか、つて旅宿をもとめると、一番上等の宿泊所が塞がつて居るので、其次の宿屋に泊まることになつた。實は英吉利公使パークスが第一等の旅館に泊まつて居るので、禮聘使の供づれはこれを知つて居るから、例の如く屈竟のユスリものだ、一番ユスラんと拔身でパークスの旅宿へ上り込んだ騒ぎに、公使は縁の下へ逃げ込んだ、それを無暗にピストルで打つと云ふ亂暴。それを見た掛川藩も、已むなく警衛の爲め拔劔の士卒を以つて禮聘使の旅館を圍み、矢鱈に供勢が館外に出て跋扈出來ぬ様にした。そこへ海江田は他事を以つて此驛に一泊し、此事を聞くと、よせばよいのに單身掛川の城へ推しかけ、勅使を捕虜にす



るとは吾れ未だ先例を知らずと一本ヤツ付けたから、掛川藩も驚いて狼狽の餘り、此の一言の爲に奉行に切腹を命じた事がある。

## 閑叟公の事ども

翁は鍋嶋家の御用をつとめて居つたから、鍋嶋家の事をよく知つて居る。曰く、鍋嶋家も閑叟さんの前は實に氣の毒な程貧乏藩であつたのです。それも其筈で、閑叟さんの親と云ふ人はなかく道樂もので、それが爲めに隠居を餘義なくされた人である。一例を云へば、此人は山下門を入ると見える屋敷に恐ろしい高い三階を造つた。當時はガラスなどは随分高價の贅澤品と云はれてゐた時代なのに、ガラスの柱などを建て、中に金魚を泳がすと云ふ趣向。又侍女や妾などに肌の透き通る紗の衣服を着せて戯れて居つた位な始末であるから、藩中でもやかましく、筆頭の家老職諫早は之れを聞いて上京すると、直ちに一夜の間に此の樓閣を打壊した、そこで殿様も泣寝入りと云ふ鹽梅であつた。當時は一家老の爲す通りに従つて居らねばならぬ様に殿様達は心得て居つたのだ。鍋嶋の家老と云つても矢張り一つの大名であるから、殿様も無

暗に駄々を云ふ譯にはゆかなんだのである。これは唯だ贅澤の一例に過ぎないが、侯は遂に家老職に隠居させられたのである。

閑叟公が相續されて歸國のときの財政困難と云うたら實にヒドかつた。當時の規則寧ろ習慣では、大名が歸國せんとする前日、登城して將軍家に暇乞をなし、其足で老中の邸を歴訪し、留守中の事をよろしく頼むと挨拶する、そこで翌朝老中が挨拶にやつて来る、その挨拶が終れば直ちに發足すると云ふが習慣であつた。處が閑叟さんに於かれては、老中との挨拶は濟んでも出發が出来ない、ナゼと云ふに、萬事は濟んでも大切な旅費が出来なかつたからである。閑叟さんは供勢をも連れずに、單騎品川に出かけ、待つて居らるゝと云ふ始末であつた。そこで家老の面々も痛心して、已むを得ず茶器を長持に入れたのを一個木場の鹿島へ持ち込んで、これを抵當に三千兩即時用立てよと依頼した。鹿島もさるものであるから長持を明けて調べて見ると、實にエライ珍什がある、なかく三千兩どころの物ではない、そこで鹿島も慾が起り、抵當として貸す譯にはゆかぬが、譲ると云ふなら即座に三千兩渡すと返答した。何にしても足元を見られて居ることだから、鍋嶋家でも據ろなく賣る事を諾し、漸やくの事で三千兩調達し



て殿様を立てたと云ふ様な始末。鹿嶋はこれが爲めに非常の大金をまうけ、當時數個所の地面を買つたと云ふ事である。

斯様の譯で、閑叟さんも貧乏にはツクなく、懲りたから、歸國すると共に心を藩の財政に注いだ。最初先づいろいろの手段で人心の歸向を博し、人心の歸向の盛んなるを見ると土地に竿入をはじめたか、誰れも不服を云ふものがなかつた。此の竿入で打出した高が六萬石で、藩では此の金を以つて海を埋めて開拓をはじめ、これが爲めに一段の富を増した。そこで今度は漸やく出來た金を元として札を發行したが、藩の遣り方がなく、旨いので札が非常の信用を博した。それはドウしたかと云ふと、町の辻へ神樂堂の様な引換所を設け、これに氣の利いた男を三四人坐らせ、金が這入つて居るかドウか知らんが、千兩箱をいくつとなく積んで置き、札の引換を請求に來ると深切に扱ひ、まるで商人が兩替をして呉れる様な呼吸であるから、誰れも安心した。これは佐賀ばかりでなく、大阪でも長崎でもやつたが、鍋嶋の遣り口がこんなわけであるから、間もなく好評を博して、正金を持つて歩くより鍋嶋藩の札を持つて歩く方が便利だと云ふやうになり、他藩でも遂には正金を鍋嶋の札と引換へて旅をする事になつた。此の手

段で鍋嶋家が小判を吸収したことはエライもので、幕末に自分の金で戦争したものは鍋嶋家其他二三しかないが、實にこれが原因である。

鍋嶋家が子弟の教育に力を致した事もなく、通常的手段ではなかつた。文武の免狀を貰はないものには妻を迎へるを禁じたから、一家の相續上是非勵まねばならなかつた。又娘を呉れる側からも、是非相手を勵まさざるを得ないから、教育奨勵は自然に行届いた。そこで修業中は如何なる門地ある者の子弟でも、輪番に市中へ青物や魚を買ひに出され、炊事にも當らざるを得ない仕組となつてゐたから、世帯を持つても一ト通り俗事を心得てゐた。これも藩の工夫がよいからの結果と云はねばならぬ。又西洋の學問や藝術の如きも、長崎が近いからぬかりはない。逸早く人を遣して研究もさせた。新奇の書籍や軍器の類なども買はせたから、幕府の知らない内に鍋嶋では新奇の事を何でも知つてゐた、又何でも持つてゐると云ふ状態であつた。

大隈さんもなか／＼大膽な人であつた。あの人が長崎に私塾を開いてゐたとき、薩摩の小松帶刀も同じく私塾を有つてゐたが、ある時加州の書生が薩摩の書生に愚弄されたのを憤り、二人で此薩人を殺したから大變だ、薩の書生が總が、りで加州の書生を追つかけた。そこで加



州の書生は溜らず大隈の塾へかけ込んで救を乞うた。大隈さんはあんな人だから、よろしいと受け込んだ。間もなく薩摩の大勢が拔身で遣つて来たのを、大隈さんは短刀一本さしたきりで平然と應接して、荒くれ連中を静かに歸したのは全く度胸の然らしむる處であつた。

幕府が品川に砲臺を築いたにつき、之れに据ゑつける大砲製造の任に當つたものは鍋嶋家である。試射をやるときには幕府の重職は何れも立會つたが、鍋嶋家から試射の爲めに出張した侍は、砲身の上につて居りながら發砲させた。居並ぶ幕府の面々は發砲の響きで何れもブツ倒れた。唯だ僅に筒井飛驒守と云ふ老人が、箒をつきながら床几に腰をかけて居たので、僥倖に倒れなかつたと云ふ事である。此れ位鍋嶋の侍と幕吏には違ひがあつたのである。

硫黄嶋と長崎の間へ、多くの壞れ船に材木を載せて沈めた、其結果、従前の如く外國船が自在に通れない様にしたのも鍋嶋である。斯様に船の這入らぬ様にして置いて、又硫黄嶋には敵艦の水際を打つ大砲を据付けたから外國人も驚いて、それから浦賀へ廻る様になつた。そこで鍋嶋では此の要害を作つたのを名として參勤の御免を願ひ、課役の御免を願ひ、いろいろ便利な無心を提出したが皆聞き濟まれた。要するに、閑叟さんの政治と云ふものはこんな工合

で、なか／＼旨かつた。そこで誰れが帷幕の内に居つて萬端の驅引をしたかと云ふと、田中善右衛門と云ふ人であつた。この人は所謂る加判列と云ふので、家老に次ぐの重職であつた、即ち事實上の家老は此の加判列であるのだ。

## 鍋嶋の田中

江戸の鍋嶋の屋敷はなか／＼規則のやかましい邸で、どんな重職でも、午後の五つを過ぎると門をしめる、門限を過ぎて歸るものは一度は允すが、二度となると國元へおつ返して仕舞ふ掟で、少しも容赦がなかつた。田中は斯る嚴則の下にゐる度々門限をおくれてかへり、或は外泊することもあつた。そこで度々國元へ戻されたが、戻ると直きに上つて来る。蓋し閑叟さんより内旨を受けて江戸表に交際の衝に當つて居るから、外泊する事のあるのも無理はないので、終には君公の命で田中だけ門限無しと云ふ事になつた。

當時田中は一日三十兩の交際費を貰つてゐたから、なか／＼の贅澤であつたが、私(吞象)は幾んど毎日田中の家へ往來してゐた。田中が悪所へ行く時分に同行したこともある。田中が



如何に幕府の役人に金を與へたかについては、チョット一例を擧げると、猿若座へ芝居見物に出かける、柳橋や吉原の藝妓や自分の妾（此の田中と云ふ人は老人のくせに女好きで、若い妾を幾人も有つてゐた）や末社を澤山に連れて出かけるのであるから、幾んど棧敷の重なる部分を獨擅すると云ふ勢であつた。そこで附いてゐる坊主より内々に其筋へ鍋嶋の田中が來てゐると通ずると、警護の爲めに役人が遣つて來て、これも設けの棧敷に居並ぶ、又江戸中の重立つた陸引も遣つて來ると云ふ騒ぎであるから、幾んど其の日は買切りと云ふさまであつた。そこで食事時になると、田中よりとして五兩許りの折詰に小判を十枚づつ、包んだのを載せて、御苦勞でござると云ふ挨拶をさせる。先づこんな鹽梅だから、幕府の役人も田中にかゝつては、大抵の事はいやと云はれない、それだから課賦も免かれる、參勤も免ぜられると云ふ様な、いろいろ都合のよい事が出來たのである。

さて芝居が濟むと、田中は一同（役人は除く）妾や藝者や末社を連れて吉原へ繰り込む。そこで當時女ずきのする役者坂東彦三郎や半四郎の如きものをも同伴して、一夜女どもに勝手に雜魚寐をさせる。これはさぞ老人の伽ばかりして居るは辛いであらうと云ふ推量より、御馳走

を妾等にするのである。それだから田中と云ふものは幕府の役人にのみでなく、また女にも評判のよい爺さんであつた。嘗て大隈、伊藤、井上の諸公が、熱海へ來られた時、今井半四郎方で伊藤さん達が無暗に昔しの人間をクサスから、田中のエライ事、妾に役者を買ひ與へて其の氣を兼ねた粹な事などを語り、當世にはそんな人がありますかと、伊藤さんにあてつけて云うた事がある。其時に伊藤さんも困つたから、長州にも長井雅樂と云ふ人があるが、田中と一對だと、矢張り昔しの人を持出してヤットの事にお茶を濁した、アハハハハ。

## 家康時代の外資輸入

徳川家康が眼病に悩んでいたく困却した時に公の眼の明暗は天下の休戚に關すると云ふので、朝野を擧げて心配をした。此時分、支那の亂を避けて日本へ逃げて來て長崎にゐた、支那紳士の中に眼科の名人があると云ふ事が江戸へ聞こえ、人をして招かした處が早速に江戸へ來り、家康も此人のお蔭でつぶれかゝつた眼が助かつたので非常に喜び、謝禮として少なからぬ黄金を與へた。すると此の眼科醫が辭して云ふには、身既に本國に居る能はず、貴國へ逃れ



て安穩に月日を送るを得るは全く大君の賜であるから、これしきの事に黄金などの賜を拜受すべき謂はれがないのみならず、黄金は多分の貯へもあるから、決して頂戴におよばぬ。併し強ひて恩命を賜はるとあらば、あはれ尺寸の土を賜はりたい。不佞は貴國の土となりたい覺悟なれど、相成るべくは己が所有地に埋まりたい心願でござると申上げた處が、家康公には尤もなる願ひとあつて、直筆で長崎の出嶋二萬何千坪を賜はるの朱印を賜はつたので、此の眼科醫は喜ぶこと大かたならず、いそぎ長崎へ馳せ下り、これを奉行に示すと、大御所の直筆を拜見するのであるから、屋根の下にては恐れ入ると云ふので、大空の野原で拜見に及び、奉行は平伏した。これより出嶋は此支那人の有に歸したのである。さて此支那人は喜びの餘り、ありし事ども詳細に本國へ申送り、日本の本國に比して太平なること、一生を送るに愉快なること、今度頂戴した土地の廣くして避難者の居るに適することなどを吹聴に追むだ處が、追ひく支那の富家豪紳が此の出島に来て難を避ける様になつた。此時この富豪の齎らし來つた金塊は、どの位あつたか分らんけれども、實に夥しいものであつて、出島を興へた爲めに思ひがけない非常な外資の輸入を招いたのである。即ち加藤清正が熊本城を築いたのも、福嶋正則其他當時續々

大土木を興して築城をやつたのも、其資本は何れも此の出島の豪紳より借り受けたので、日本の正金はこのとき餘程増加したと云ふ事である。これは餘り人の知らない話であるが、故勝海舟翁が嘗て吞象翁に語つた事實であるさうな。

### 大名と大阪の金貸

大名に金を借りられた擧句、貸主の損となつたのは随分多いが、江戸と大阪を較べると江戸は大方貸倒れて、大阪の金持は幾んど倒されなかつたと云うてもよろしい。それは何故であるかと云ふと、流石に大阪は其の時分からなかく、コスク立廻つた故である。大阪の金持は借方たる大名に對して一種の同盟を形づくつた。そこで大名の方では秘して置くけれども、此の同盟中の金持には、誰れはどこに幾らの借りがあると云ふ事がチャンと知れて居るのだ。で大名より甲なる金持に内々少しばかりの金を貸して貰ひたいと申込むと、抵當は何、返済は何時、利子はいくらなど云うてお定まりの推し問答の末貸方より、時に御藩では誰れ某れより何萬圓のお借りがあるさうだが、ドウです、私方より金を差上げますから返済なさつて一纏めになさ



つては如何です。何だか他所にも御關係があると、私方でも面白くありませんなど吹つかけるのは皆同盟申合せの上の慣用手段で、先方より借金の申込を機として、他の貸方の負債の利子を清算せしむるのである。大名の方では此の内實を知らないから、深切有り難しと大抵はこれに乗るが例なれども、實際は貸方を利するのであつた。甲より金を出して乙に拂ふと云ふも、手形一本の働きで出来るのである。大阪の金持は斯る仕組で始終貸倒れを警戒したから、多くの損は無かつたのである。

## 三井倒産を免る

維新の當初政府は小野、島田、三井等に奨励していろいろの事業をやらせた。一面には政府より金を預け、一面には事業を興すことを奨励したから、つかひ込みの起るも無理は無いのである、然るに政府より突然預け金に相當する抵當を出せ、然らざれば預け金を戻せと云ふ様な筆法でやつて来たからたまらない。小野組の如きも、つまりこれが爲めに瓦解を來たした。三井の如きも、今少しの事で同轍を踏む處であつたのだが、幸にして三井は逸早く政府の内議を

聞いたから、急に抵當を作つた。當時横濱で一坪十錢位なヒドイ地面を買つて、宅地で候、一坪十五圓で御座ると、縣廳から地券を申受けた。これを抵當に差入れたから助かつたのである。當時の縣廳など云ふものは、高い地券を渡せば多く税が取れると云ふので、サツ／＼と地券を書いて下げたものであつた。

## 伊達家の硝石

慶藩後仙臺の伊達家から陸軍省へ引取つた硝石は實に莫大なもので、彈藥を製するに長い間之れを使つて間に合はせて居つた位だと云ふ。政宗は兵器彈藥に二萬石を充て、居つた位だから、これあるも無理はないが、支倉が羅馬から歸るのを待つて何かやる積りであつた事は、此の莫大な硝石を貯藏し置きし事でも分るぢやないか。

## 吞象とは何ぞ

翁の談話は滾々として盡きざる事河の如くで、尙ほ紹介すべき趣味ある今昔談も尠なくない



けれども、此れで閣筆する事にしよう。私が最後に高嶋翁に向ひ、君の號の吞象と云ふのはドウ云ふ據り處があるかと問ふと、ナニ「象を吞み込む」と云ふのだ、むづかしい出處などのあるわけがない、人が遂に吞象と云ふから、終にさうなつたのである。翁又曰く、全體私の姓は高嶋でなく、「薬師寺」と云ふのが本當の姓で、今でも水戸には此の姓が多い。處が商人の身分で薬師寺など云ふ姓では困ることがある、薬師寺と云ふ提燈を點けて歩くと、何だか醫者が歩く様な氣がするでせう、そこで屋號を高嶋屋と云うたから、遂に高嶋を本姓としたとの事であつた。

## 一一一 光悦の遺蹟を訪ふ

近年本阿彌光悦の多方面に渉る藝術が、漸やく鑑賞家以外にも知れて、その遺蹟の存する京都鷹峰に第を曳くものが多くなり、其遺蹟を保存する光悦會が組織され、光悦寺内には瀟洒な茶室や訪人の休憩所などが建てられ、草萊を拓いたり附近の土地を買ひ添へたりして、其遺蹟の保存にとめてゐる。

私が前年京都に滞在中、或る知人より光悦屋敷の細圖を贈られた。兼ねて漠然と想像を馳せてゐた私が、此圖を見て始めて手に取る如く、光悦の家や其親族の家などが分つて、其邊の光景が彷彿として眼に映ずるの感があつた。以前から光悦趣味を有つてゐた私は、茲に決然一遊を思ひ立つたのである。私を案内した人は京都の年若い藝術家石本曉海氏で、此地をよく識つてゐる人であつた。

鷹峰は洛の北方に當り、紫野の大徳寺を過ぎ、更らに一里近くチリ／＼上りに上る高燥の地である。紫野邊より四方を眺めると展望如何にも廣く、山や野や林や田や人家は布置おもしろく、畫圖も及ばぬ風景に先づ心を酔はしめた。此日は空麗かに晴れて氣澄み、散策には此上のない好日和で、心も軽く次第に上り行くに、「是より光悦屋敷」と刻んだ石標に接した。一息入れて此邊の風景を探るに、先づ眼に入つたのは程近き二三の小山で、それが如何にもヌヴオー式であるのに、私は思はず「これだ」と連呼し、車を駐めて一行を顧み、「此山こそ光悦の山だ、お互が光悦の作品に見る山はこれだ」と云うて、しばし夢心地になつた。

扨愈々光悦屋敷の地域内に入つて見ると、地圖で見た通り、なか／＼廣大な地區で、一ツ屋



敷と見るよりは一ツ村と見るべきものである。近年光悦會で立てた石標で光悦の宅址も他の重なる遺址も容易に知れたが、光悦の宅址は向つて右側に當り、中央より較々上の方である。今は何人が住んでゐるか、其の土塀は半ば崩れて、富める人の住居とも見えない。此の土塀の上から一本の松が表へ枝を出してゐたが、これも光悦時代の老松でなく、何等の風致も無かつた。しかし光悦の宅址を中心に、石標を辿り、いろ／＼の遺址を搜して見ると、爰は光悦の一族が住んでゐた計りでなく、光悦の藝術に關係ある、いろ／＼の技師や職工も爰に住み、又いろ／＼の設備もここ、に整つてゐたらしく思はれた。即ち刀劍であれ、蒔繪であれ、陶器であれ、製紙などに至るまで、皆それ／＼の職人が此の一廓内に置かれ、光悦の意匠のまゝ、にそれ等が手足の如く働らき、あれ丈の名品を出したものであらう。即ち此の一廓は藝術屋敷である。光悦が無冠王として中央に坐し、多くの匠人に君臨したのであると思ふと、追遠の感に堪へなかつた。此の一廓内に、光伯、光甫などの屋敷跡もあり、光悦の母妙秀の歸依した寺の址も存してゐた。畫家宗丹の屋敷跡はなきや、灰屋紹益（佐野氏）の思ひもの遊女吉野が寄進した寺門は何れと、漁り廻はる内に、車は一寺院の門前に着した。

此寺が即ち光悦寺で、光悦會が保勝に力を入れてゐるのはこれである。車を下りて門に入ると、石だ、みの細徑があつて、左右には竹林が陰をなし、えも云はぬ幽趣を覺えた。寺僧に案内されて座敷に通ると、こゝは近年建てたらしく、古色はないが、縁近く光悦好の老松が横臥の態をなしてゐるのがうれしかつた。寺僧は光悦手植の松だと説明したが、それは兎もあれ、惣には松の根元に幾株かの薄がほしかつた。光悦の繪には薄がつきものである。此松に配するに薄を以つてし、尙ほ銀色の明月が樹梢に懸つたら、それこそ光悦の繪そのまゝであらうと、種々想像を馳せた。

庭も近年光悦會で取擴けたものだと聞いた。一行はそろ／＼歩いて見ると、三四十歩して崖があり、雑然たる野草に埋められてあるけれども、おのづから一種の趣があつて、床しく思はれた。左方の小逕を辿つて行くと、光悦の墓があつた。墓面には「南無妙法蓮華經」の七字を刻したのみで、格別意匠を凝らして無かつたが、簡素の間に何となく光悦の面影がほの見えた。此墓に隣つて板倉公の墓が立つてゐた。光悦は公の知遇を得た緣故から、こゝに供養塔を建てたものか。尙ほ幾基かの墓を此邊に認めたが、大概は光悦一族の墓であつた。其の刻字が磨滅



して讀めないのを遺憾とし、木標に小傳でも書いて墓側に立てたらよからうと思つた。ある墓碑の側らに昔むしたる自然石の洗水鉢があつた。如何にも古色掬すべきものがあり、茶人の垂涎すべきものと思つたが、果して大阪の藤田氏が欲しがり、掘らせて見たが、石の根が大きく深く土中に盤屈してゐるので、終に掘り上げ得なかつたと、案内の僧の話である。

庭内小高い丘陵の右手に、光悦會で建てた小亭がある。懸崖に臨んで如何にも形勝の地を占めてゐる。一行こゝに入つて憩ひ、肘掛窓を推して眺めると、前には光悦好の圓い山があり、崖下一圓は亂草で埋つてゐるが、其中を穿つて一帯の溪水が銀絲のごとく流れてゐる。これが又えも云はぬ風致があるので、川の名を問へば、光悦が紙を製したと傳へらるゝ紙屋川だと云ふ。此邊遠望殊によく、山と山の間より東山ひがしやま一帯の翠を望み、兩賀茂あたりの市街が指顧の間に見え、えも云はぬ好風景である。恐らく郊外から京都を觀望する景色でも、斯程に脱俗幽雅の趣ある處は他に無からうと思はれた。

折柄夕日が前山に映じ、光線の按排で山が皆鉛のやうな鈍白の色を呈したのを見て、私は思はず膝を拍つて「これだ！ 光悦が好んで其蒔繪細工に嵌入する鉛山なまりやまは即ちこれだ」と叫ん

だ。光悦の意匠は故らに困んで得たのでなく、日夕目前に見る山を其儘圖案に取り入れたのであることが、此處に来て見て合點が行つたのである。私は此等の山を鉛山と命じて悦に入つたが、一行も相和して鉛山を賞した。此邊自然の風趣を描寫する事は私の企て及ばない所である、已に林羅山の「鷹峰記」といふ有名な文もあり、殊に吾々の喟々を待たぬが、私はこゝに灰屋紹益の「にぎはひ草」から此地の風光に關する一節を引きたい。私の實見した氣分がそつくり紹益によつて寫されてゐる。

(前略) 都のいぬるに當りて、鷹が峰と云ふ山有り、其の麓を光悦に給りにけり。我が住所として一字を立て、茶所などしつらひ、都には未だ知らざる初雪の朝は、心面白ければ、寒さを忘れて自ら水汲み、釜しかけ、程なく煮え音づる、も、いと淋しく、都のかた打眺め、訪ひ來る人もがなと、松の梢の雪は、朝の風に吹き拂ひて、木の下かけにしばし残るを惜む。東は、賀茂の山、松が崎などは、いと近く、松と竹とのけぢめ見ゆる程にて、比叡の山は、此方の山より上に麓迄見えて、いと高く、一條寺の里、白川までも麓と見ゆ。雪の頃ならねど、有明の月は、頂の山の端に残りて、明方あけがた近き程に、遠方とちかたは霧深



く、麓の山は皆隠れて、比叡の山は、水海のあなたにや、と打眺めらる、よ。横雲棚曳き出で、誰が別路の眺めなるらん、と老の心を慰む。京の方は、巽に當りて、いとめでたく、朝夕の煙り賑はし。都の空打越して、音羽山、稻荷山、深草山、伏見の里の空はるばると遠方に高山あり、春日山、三笠山にや、と推し量り眺めやる山々、四方に限り無くぞ見え渡る。斯かる住居の軒端の松に馴れて、年久しかりし世の中のわざとは一つも知らず、心にもなし。我は、然こそすべけれ、とこしらへたるは、更に無くて、生れ得たる心の潔きにてぞ有りける。

右は紹益の叙景の一節であるが、之れを讀むと、風景と關照して隠棲後の光悦の心境までも彷彿することが出来る。

此小亭に行厨をひらき酒を温めて、且つ飲み且つ談じて時の移るを知らなかつた。寺僧も席に來つて拙書を需めるので、呑み兼ねて悪筆を書畫帖に留め、寺僧の示すに任かせて光悦の木像、其遺墨、太虚庵の記などを一覽し、且つ此の亭の結構も一わたり見たが、如何にもよく工夫されてゐたのに感服した。窓には例の光悦牆が應用され、肘かけ窓に装置した板縁に嵌めて

ある板などは、皆光悦面を取つてゐる。何れ其道の人の數寄を凝らした工夫に成つたものらしく、濛い趣味である。若し閑にあかして其方此方見物したなら、此の境内には他にも種々の工夫を見出したらうが、此日はそんな詮索する閑はなかつた。

感興盡きず、光悦翁に倣つて此の幽境に隠居したいやうな氣もした。時刻の移る事早く、私の忙がしい身は長坐を許さないのので割愛坐を起つて、歸り際に庭の邊りを歩いて見ると、其處に竹で面白く垣根した茶室があつた。中へ入つて見ると、是も光悦會で建てたもので、爐の切り方や、挽割の儘の材で作つた爐ぶちなど、趣致を覺えた。

歩を移して寺の本堂に至り、光悦の位牌を拜した。ふと見ると、堂内に古色蒼然たる刻板が一枚あつた。何か由緒あるらしく思はれたから、能く見ると、光悦一族の系譜とも見ゆるものが刻してある。寺僧の語るには、之は近年迄縁の下に埋没してあつたのを拾ひ上げたので汚ないものだが、何かの記念にもと思つて保藏したと云ふ。記念どころでない、此の古板こそは儂りなき光悦一家の歴史を語るもので、此寺に取つては極めて重要なものだから、珍重保存すべしと注意した。寺僧は初めて悟つた様子で大に喜んだ。



京都へは従来十數回遊び、多くの名所を見たが、自然の趣味の豊かなるは光悦寺を第一に推さねばならぬと感じた。

## 二二 五色の旅

題して五色の旅といふと、何となく奇を弄ぶやうでもあるが、さうではない。およそ旅とし云へば、何色かの旅である、その觸る、所のもの皆何等かの色を有するからだ。海へ行けば白く、山へ行けば青い、土や樹や石や、川澤湖沼皆それぞれの色があるのみならず、人にも家にも風俗習慣にも亦色があつて、これを「ローカル・カラー」というてゐることは先刻御承知の通りである。されば旅の記は其の目に映じた種々の色を描くことであるとも云へる。或は如實に色彩を施して繪を描くこともあり、或は單に文を以つて色を寓することもある。藝術家の旅の記は色彩を用ゐた繪よりもはるかに寫實で、はるかに趣味がある、藝術家のエライ處がこゝに在るのだ。何れにしても旅は最も多般の色に接觸する機會である。私の旅にしても幾十百の色に觸れたのであるが、特に五色といふのは、五種の色に感ずる所があつたからである。

私が朝鮮に旅行したのは五六年前である。朝鮮で何物よりも深い感じに打たれたのは、例の白衣の風俗である。此の白衣は氣節を超越し、夏でも冬でも、多少の取除けはあるにしても幾んどあらゆる階級に通じて白衣を着けてゐる。この白衣は概ね麻で作られてゐる。麻は日本や西洋では贅澤品になつてゐて、シャツでもハンカチーフでも安價のものでない。日本の上布も勿論高い價のものである。それを鮮人が常服にしてゐるのを見ると、贅澤過ぎる感も起るが、實を云へば原始的の服裝である。あんな暖味のない強張つたものよりも綿服の方が着心地がよい、別して寒を防ぐには綿服がよいのに、鮮人は之れを以つて彼れに替へることをせぬほど頑固に舊習を守つてゐる。日本でも古くは麻を着物に用ゐた。で其麻を軟かにするためには之れを撃ち和らげねばならなかつた。ふるい歌集に夥しく砧きたの歌のあるのは此故であらう。然るに綿布が發明されて砧も不用に歸したが、朝鮮では今も昔しのごとく砧が入用である。鮮人は餘程潔癖性と見えて白衣の汚損をひどく厭ふ所から、其の妻妾の最も大切な任務と云へば、日々夜々之れを洗ひ淨め、之れを撃つて和らげるにある。鮮人の家庭の四六時忙がしいのは此故である。京城の鮮人市街鐘路に行つて見ると、滿巷白鷺が群がつてゐるやうに白衣の人が右往左



往、濶歩横行して宛然白世界を現じてゐる。彼等が着けてゐる、些しのシミも垢もつかぬ清白の衣類を見ると小氣味よく感じられるけれども、靜かに彼等は何のため街路に往來してゐるのかと釋ねて見ると、何の用があるでもなく、唯だ漫歩散策してゐるのだと氣がつく。彼等の多くは公園を占領して惰眠を貪り、幾んど半日も遊んでゐる、その暢氣さには實に驚かされた。彼等鮮人には「ノラ・サラミ」といふ名がある、日本で遊惰のものを「ノラクラ」といふと同じく「ノラ・サラミ」は即ち遊惰の人といふのであらう、彼等はおめかしをして遊惰に耽つてゐるのである。此の遊惰の風を誘致した原因は一にして足るまいが、其の着する白衣も確かに遊惰の誘因をなしてゐると吾等は見て取つた。些しの汚損すら氣にかけるやうな潔癖のものが、日々おめかしをやつて、何しに働くことが出来ようか。勞働は少くとも衣服を犠牲とするものである、朝鮮の「ノラ・サラミ」に勞働を望むのは、社杯を着けたるものに快活の働きを望むと一般で、難きを責むるものではあるまいか。朝鮮の馬卒ですら、途中驟雨などに出遇ふと、客を閉却して己が戴く帽子や衣服を保護するに没頭する、其の笑止さは私が目撃した實況である。されば鮮人の行動に累を爲すものは白衣である、其家庭に累を爲すものも亦白衣であ

る。白衣を改めねば鮮人の或る階級の遊惰を改めることが出来ず、鮮人の家庭を洗濯の奴隷より救ひ上げて他の勞役に就かしめるの道も亦白衣を廢するより外は無いと感じた。

私は朝鮮を去つて北京に行く途中鴨綠江の鐵橋を横斷した。前岸は支那の領土である。茲で先づ氣の付いたのは、多くの農民が田圃を耕してゐる光景であつた。彼等は皆青色の筒袖と股引を着けてゐる、白衣の天地はこゝに青衣の天地と變じた。支那の黎民を蒼生といふのも偶然でないと感じた。彼等は身輕に汗を流して働いてゐる。彼等は汚穢といふものを全く知らざる如く、泥濘にまみれ、糞土に親んでゐる。私はこれを見て叫んだ、働くには此色此服で無ければならぬ、朝鮮遊惰の白衣連、何ぞ近く隣境に來つて此光景を見、自から改むることをせざる。私は一葦帶水を隔て、蒼衣の風俗を見て坐ろに痛快を覺えた。汽車中偶々一客あり、私に日米の近事を語つていふのに、米人の日人排斥運動もひどく濃厚となつて來た、少數の米國の識者は之れを憂ひ、日本人を驅逐するのは取りも直さず日本人で無ければ産し得ない野菜類を絶つ所以で、折角蒼々となつた田圃を、もとの白土に歸するのは眞に愚の骨頂とし、田圃の各所に「白土たらしむる莫かれ」の標札を立てるに至つたと、其記事のある外字新聞を示された。



私は之れに答へていふのに、米人の所謂る白土とは支那の所謂る赤土で、赤土は不毛の地をいふのである。恰かも身に一絲を着けざるを赤裸と云ふが如し。赤露が赤を以つて旗色とするのも虚無の意を寓するのであらう。虚無は即ち不毛である、これが亡國の徴である。因つて私は朝鮮に目睹したる事實を語つた。それは白衣でなく山嶽であつた。朝鮮の山々は皆山骨を露はして土が無いから木も草もない。朝鮮の諸山は皆赤化したのを、合邦以來皇化漸やく霑ひ、諸山今や微翠を呈し、追々積翠の昔に還らんとしてゐる。諸山の赤化は亡國を語るものでなく、何であらうか。白土や赤土は、畢竟國土を不毛ならしむる所以であることは誠に米國識者の言ふ所の如しと。此談話は端なく私の旅に一色を加へた。

汽車は漠々たる廣原を走つて翌日夜に入り北京に着し、北京飯店に宿することとなつた。翌朝ペランダに出て驚いたのは、支那の皇宮紫金城が眼下に見えることであつた。これは想像したよりも大規模のもので、幾んど見渡す限りが宮城區域で、城内には市街もある、皇室の専用である黄紫二色の屋瓦で作られた葺が、青空を凌いでゐる壯觀は、眞に魂飛び魄迷ふの概があつた。此日恰かも晴天で、朝暾の屋瓦に映する光彩は燦爛として眼を眩し、心膽を驚かした。

其の大規模の壯麗はとても寫し得ないが、五日間北京に滞在し、早朝から夜に入るまで自動車で乗り廻はり、日々の觀光終に皇宮區域を出ることが出来なかつたと云つたら規模の大略を髣髴し得るであらうが、世界に皇居王城はいくらもあるが、これほど大なるものは斷じて他に無からう。清帝が國を中華と呼んで四海に君臨するの態度を取つた、その抱負からすれば、其の皇城の規模も斯くあらねばならぬと感じた。若し支那人が黄色人を代表することとならば、これも亦代表の禁闕たるに恥ぢぬ。此の皇居の屋上に輝やく黄瓦を見るだけでも、獨帝をして黄禍を云はしむるものがあるとシミムと感じた。しかし同時に感じたのは、これほどの大土木は偶々民力を糜して支那を疲弊に導き、清朝は廢せられ、中華民國は常に動搖の内にある、黄禍として恐るべきは最早や此の皇城でもなく又國民でもない歎息した。そして私しの感慨を一層痛切にしたのは、西太后が幾百萬圓の海軍資金を轉用して萬壽山の離宮を築いたことである。私はその經營の壯大を見て坐ろに感慨に堪へなかつた。若し支那が西太后時代に早く覺醒し、萬壽山を經營せず多くの軍器軍艦を作つたとしたら、日本も或は枕を高うすることが出来なかつたかも知れない。諸外國とても亦同様であらう。然るに衰亡の運命は如何ともするこ



とが出来ず、唯だ黄紫の殿瓦が燦然舊時の盛を物語るのみであることを思ふと、誰れか支那の爲め一滴の涙無からんやである。

支那漫遊中には漠々たる沙漠も見た、高粱の波濤のごとく際涯を知らないのも見た、一端ながら黄河も見た、大豆肥料の埠頭を埋むるのも見た、そして萬丈の黄塵は一刻も身邊を離れなかつた、此等のものは皆な黄色である、支那の旅は何というても黄ろい旅であると感じた。私は天津、濟南を廻はり、青島より歸途に就いたが、船中本國を遠望するに及んで快哉を叫ぶことを禁じ得無かつた。三十日の旅行は確然なる朝鮮の山に飽き、漠々たる支那の平原にも飽いた、而して本國近く一抹の翠黛を天半に望んだ時は、三十日間會つて體驗しない生色に觸れた氣がした。私は日本の山水に熟してはるるが、國外から見たのは此時が初めてである。外部から見ると、日本全島の積翠は生氣があつて、得も云はぬ露ひがある、三十日間どこにも見ることの出来ない色はこれであつた。私は叫んだ、吾等の國土は何故こんなに立派であらう、神僊の住むてふ蓬萊もこれには及ぶまい、赤魔襲來、邦人之れに魅せられ、或ひは其の手足となつて立働くものがあるが、我が祖宗の國土を赤化不毛に歸して堪るものかと。快哉滿を引いて無

事歸國を自祝した。曰く白、曰く蒼、曰く紫、曰く黄、曰く赤、三十日間の紀程、特に記憶に存するものは此の五色である、依つて五色の旅といふ。

### 二三 修善寺の鐘聲

曾て修善寺温泉に遊んだことがあるが、この温泉で氣に入つたものは朝夕響きを傳へる梵鐘の聲であつた。それが餘りによく耳に徹するので散歩の序に距離を計つて見ると、寺（修善寺）は恰も旅宿の隣家で、鐘樓は殊に宿に近いところにある。裏口から出て見ると、僅に十歩ばかりで直ぐ鐘樓に達することが出来る。こんなに近くては鐘下に起臥してゐるも同様で、近く響いたのも當然であつた。元來鐘聲は近く聴くよりも遠く聴くほうが趣がある。しかし終日事に倦んだ時に聞く晚鐘などは、響きの烈しいほど情氣を一掃するの概がある。又朝の五時頃に撞き出す鐘が響いて來ると、どうしても平然として寢てはゐられぬ。

この禪刹には四時半に讀經するのが例だといふから、鐘もその折に撞くと見える。近いから撞くところを出て見ると、有髮の者が撞いてゐる。鐘樓の一隅には椅子が一脚備へてあるが、



一つ撞いて次に撞くまでは、この男椅子に凭つて雑誌などを讀んでゐるのを認めた。今では眞面目に勤行の一つとして僧自らが撞く譯ではないらしい。此鐘は一體何時代に鑄造したものであらうか。ツイ銘なども檢せず終つたが、しばく、回祿の災に罹つてゐるから、鎌倉時代の鐘かどうか、一見したところではそれほど古色は認め兼ねた。併し音響で考へると、なかなかよい鐘である。自分はこの鐘聲を聞く毎に、種々なる史的聯想を禁じ得なかつた。

よし又この鐘が鎌倉時代のものでないにしても、その時分から同じ場所に鐘はあつたに相違ない。この寺の開山といはれてゐる、臨濟りんぎの名僧蘭溪禪師は、宋からやつて来て、この邊の景色が本國の廬山に似てゐるといふて、寺を肖廬山、前溪を虎溪と呼んだと傳へてゐるが、禪師もまたこの鐘を聞く毎に、遠く故郷に想ひを馳せたことであらう。名僧寧一山も、一たびはここに住した。自分は鐘聲を耳にして、深く畏敬する、この僧のことが一層聯想されるのである。この地に謫せられた源家二代の頼家は、朝夕この鐘を聞いて如何に感じたことであらうか。榮枯盛衰は常理といひながら、彼が如き悲惨な運命は臨濟の教によつて果して慰め得られただであらうか。尼將軍政子も、流石にその長子の悲運を閑却しかねて、微行してこの溪村をし

ばしば訪うたといふが、政子また且暮の鐘聲に、抑へ切れぬ憂愁を味ひはしなかつたであらうか。いくら實家本位のこの尼でも、一身の罪業深きを思うては、恐らく戦慄を禁じ得なかつたであらう。星霜は幾百回代謝しても鐘の聲は絶えず響く。寺は焼けてすでに幾度も模様が変わり、人家も著しく變遷してゐる。樹木なども最早舊時のもではないが、たゞ鐘だけは、たとひそのものは往時のそれでないとしても、五六百年間朝夕撞くことに變りはない。自分の今聴く聲こそは、蘭溪や一山や頼家や政子が聴いた聲である。自分は鐘聲を耳にしてこれらの人々を思ふと、もに、此人たちの境遇や性格までもいつしか幻想に描き出すのであつた。

修善寺で今も昔と變らぬものは寺前にある一帶の溪流であるが、鐘聲は水に落ちても間斷なく流れて行く。五百年前の鐘聲を聴いたものは、たゞこの溪流だけであらう。しかしそれも刻去つて、往事茫茫、今は空しく想像の翼を張るの外はない。

## 二四 幼時の風遊び

私の幼少の頃は風かぜの流行時代であつた。私は遊戯に格別趣味を有たなかつたが、風揚丈は大



好きであつた。當時男性的の遊戯と云へば先づ凧を飛ばすことで、まだ其頃は今のやうな野球などの遊びはなかつた。今日飛行機が實用に供され、小兒と雖も之れに興味を有ち、専門の能力のないものまでが、飛行機の新案を試みたりするなども、長い間風俗をなしてゐた凧遊びから、脈を引いてゐるものではなからうか。

凧は端午の節の遊戯であるけれども、端午の前後幾十日とつき、小兒が遊ぶばかりでなく、大人までも遊び、單に空に飛揚して喜んだ計りでなく、他の凧と闘ふ事が起つた。其のために糸に種々な工夫をすることが行はれ、澁にひたして固めたり、硝子の粉を塗りつけたり、或は剃刀を結びつけたり、方言「サンマタ」と呼ぶ个字形の刃物をつけたりして武装する事が行はれた。兩々互ひに約してカラメ合をすることもあり、或は不意に奇襲を試みることもあつた。通例は個人々々のカラメ合であるが、一町と隣町、一村と他村の戦争となることもある。個人々々のカラメ合の結果、負けた方から常に苦情を生じ、口論が始まると、それが動機で人氣が立ち、喧嘩氣分で、町と町、村と村が争ふことになる。さうなると壯丁は總動員といふ騒ぎで、おのが町村の榮辱は係つてこれにあると云うて非常な敵愾心を起し、幾十の凧が双方

から揚り、敵味方入亂れて相依り相撃ち、カランで兩つながら墜ちるもあり、刃物に糸を断たれて飛ぶもあり、空中は大混雜を極めるが、痛快の味も亦此の時にある。此の遊戯は太平無事の天地に一種の戦争氣分を現はすもので、頗る人氣を引立てる所に男性的遊戯の特徴がある。

戦闘に用ゐる凧は輕快に操縦の出来るものでなければならぬ所から、多く小形のものを用ゐる。十六枚張りといふ位が尤もふさはしく、其形は六角であるべきは言ふまでもない。長方形の隅切らずは、戦闘用にならぬ。これは唯だ飛ばして遊ぶ方のものに屬する。これには鯨で作つた方言「ウナリ」を上頭につけるのが通例である。天高く飛揚して一種の聲を發するものも愉快なものだ。六角型にも「ウナリ」を用ゐるが、戦闘の場合には操縦に不便であるから、用ゐないことが通規となつてゐた。

私の郷里越後で凧で有名であつたのは中蒲原郡の白根村で、中の口川を挾んで前岸の村と雌雄を決するのが或る時代の年中行事で、吾が郷土の壯觀の内に數へられた。毎年此季節には近郷からも多くの見物人が簇がり、兩岸は人を以つて埋まるの盛況を呈した。勿論此の戦は兩村の壯丁を擧げて村の榮辱を繫けて争ふのであるから、痛快のものであつた。随つて兩村とも凧



の操縦には最も妙を得てをると云はれた。

私の生れた北蒲原郡の水原すゐはらと云ふ所は、今こそ寂莫たる所となつたが、もとは天領で陣屋もあり、殊に國內屈指の富豪が多くこゝに住したので、凧揚の遊戯も爰に發達した。昔は百枚張の凧を有たねば富豪の面目を害すとさへ云はれた。私の郷里には富豪が多かつた丈に此大規模の凧を有する家が他郷よりも多かつた。私の家なども之れを有つてゐたが、百枚となると如何にも大きな物である。奉書大の大谷内おほやちといふ堅硬の紙百枚を張るのであるから、美濃紙百枚よりも一倍も大きい。此の百枚張は六角形を例とし、其の心棒とする竹の直径は三寸もあり、糸は直径七分もある太繩で、飛揚する時には操縦に二十人位の壯丁を要し、轆轤を用ゐて上下するのである。

右のやうな大きな凧は滅多に揚げらるべきでなく、所持して居るといふが富豪の誇りであるが、私の幼少時代に唯だ一回揚げたことがあつた。今考へて見ても不思議のやうに思ふが、アノ狭い町によくも揚げたものだ。果して揚げはあけたが、引きおろす時に、誤つて或る藥種屋の屋上に落ち、屋瓦をメチャクに破つたので散々苦情を持込まれた。今なれば、勿論交通整

理の爲め、市中に斯る大凧を揚げることは許さるべきでない。

私の郷里は、大凧があるので名高かつた外に、凧の製産地としても名聲があつた。町に一軒の凧屋があつて、それを誦名して一六といふた。店頭に十疊程の板の間があつて、そこに二十六七の婦人が常に凧繪を畫いてゐた。其の凧繪は皆武張つたもので、義經、辨慶、清正、金平きんぺいなどが最も得意で、彩色も立派に施され、武具も凡そ式に適つてゐた。若い婦人の手でよくもあんな剛健な筆を揮へたものだ、時に思ひ出すこともある。國內に凧を製した所は多くあつたが、繪は決して此の一六に及ぶものは無かつた。殊にこの家で製したものは三十枚ほどの大きなものが多かつたので、其製品は頗る振つてゐた。私は幼少の頃此家から多く凧を買つたが、毎日足を運んで食事時に歸るのを忘れた位であつたのは、購ふ爲めと云ふよりも寧ろ凧繪の揮毫を見るためであつた。



獄窓舊夢談



## 一 忽ち識を爲す

私が一ツ橋の大學にゐた頃、多くの友人もあつたが、石渡敏一氏とは特に懇意で日々往來した。氏は純粹の江戸兒で、氏の知人に傳馬町てんまちょうの牢屋の事を精しく知つてゐる人があつた。氏は其人から聞いた話を、私に委しく語つたので、私も頗る耳を傾け、おのづから監獄に就て興味を感じ、共に研究するの端緒が開かれた。全體法律では罪囚の刑期が満つれば之れを釋放することになつてゐるが、刑餘の人を社會に放つことは甚だ危険である。監獄は罪人を罰すると共に其の改悛を促すを目的としてはゐるが、事實懲罰の目的は達しても精神的の感化改悛を爲す迄には行届いてゐぬ。由來人の不善を爲すは其の原因さまざまであるが、生活難も其の原因の一つである。殊に刑餘の人は社會の信を得難いから、職業を求めても有りつけず、已むなく罪を犯すものもある。放縱性を爲す彼等が、饑渴に迫つては勢ひ罪を犯すより外は無い。されば刑餘のもの、二犯三犯を防ぐに何寄り大切なものは、彼等を保護して相當の職業に就かしめ、それに由つて改悛に導くことであらねばならぬ。斯る方法なくして彼等を良民と伍を爲さしむ



るは、所謂虎を野に放つと一般で、危険も甚だしい。全體監獄なるものは、一方から見れば悪事の練習所であつて、之れに入ることが度重なれば重なるほど、悪事の手段は巧妙になつてくる譯であるから、成るべく獄外で改悔を促す手段を講じ、犯罪を再四することを防止せねばならぬ。それに就ては何等かの救済の方法が必要であると、兩人は種々考案を凝らした。結局這般の事は、人心の上に大なる感化力を有し、物質的にも力ある本願寺の如きものが、救済の計畫をすれば有効であらうといふ結論に達した。當時吾々兩人も年少氣鋭で、考へたことは直ちに實行されること、思ひ、刑餘の人に職業を授ける案を書いて得意であつたと云へば恥かしい譯だが、實は當時監獄學など修めてゐる人は法律學者の内にも幾んどなく、僅かに時の帝國大學教授穂積陳重氏が、監獄の原理を科外講義で吾等に聽かされた位に過ぎなかつたので、吾等は臆面もなく穂積教授を訪問して、したり顔に案の梗概を陳述した。教授は吾等に向つて、兩君はよい所が氣がついた、まことに結構な案だ。併しこれ等の事は既に西洋に工夫されてチャンと組織があるというて一二の實例を示されたので、内心大いに惜けた。が其後も細目に涉り實行方法を案じ続け、しばしば筆も把つて見たが、追々考へれば考へるほど面倒を感じて來

た。實は兩人とも監獄に少しも経験がある譯でなく、所謂坐上の兵法であるから、行きつまるも無理は無かつた。終には兩人筆を投じ、お互ひの内一人監獄に繋がる、身となり、實地を踏まなければ、獄内の事情も分らず、囚人に對する同情も起らぬと、此研究に斷落を告げたが、何ぞ圖らん、其後二年も経つか経たぬに、私が不幸にも實地を踏むの貧乏圖を引き當てた。全體を云へば、石渡氏は法律の人で、私は文科のものだから、圖は先方へ當るべきであるのに、妙な番狂はせである。由來惡語讒を爲すことが多い、さりとはまた奇しき緣因である。

## 二 新聞界第一の犠牲

私が越後の高田に赴いて、今の「高田新聞」を創刊した時は、恰かも彼の高田事件の勃發した際で、「高田新聞」は幾んど同時に呱呱の聲を上げた、即ち今を距る四十五年の既往に屬する。當時民論が沸騰し、官民の軋轢は極點に達した。政府は民論の壓迫に餘力を剩さず、新聞條例には曾つてない峻刻の改正を施したのである。云ふ迄もなく此條例は明治初年から度々改正され、改正毎に嚴密が加はつて來たのであるが、まだ幾何か寛なる所があつた。それをば明



治十六年に至り、水も漏さぬ嚴密な改正を加へた。従前は紙上の責任はひとり編輯長にあつて、罪は編輯長が引受けたものである。随つてどこの新聞社でも、入獄擔任のものを編輯長としたものであるが、此の改正では、苟くも紙面に名を署するものは、社長でも主幹でも印刷長でも、苟くも情を知るものは編輯長と共犯を以つて論ぜらるゝことになつた。これが新聞界に大恐慌を惹き起して、東京の諸新聞紙に、それまでは社中の第一流の人が署名してゐたのだが、此條例發布と共に一齊に署名を撤して警戒する所があつた。事實此頃の社長は皆主筆であつたから、此の改正の條例は事實の筆者を罰するに在つた。尙ほ此の條例の改正と共に法の執行が頗る嚴となり、従前不問に附したことまで容赦しないことになつたから危険は非常であつた。私も此の危険に心附かなかつたでもないが、新聞が生れたばかりで、私が社長として署名しておく事が新聞の信用上多少の必要もあつたので、都下の新聞に倣ふことなく、名を撤去しなかつた爲めに禍は頻々として起つて來た。全體高田事件は福嶋事件と同じく自由黨に纏綿した事件で、當時改進黨であつた、私位に私の新聞とは、没交渉の事であつたけれども、藩閥政府の専恣を憤る點に於ては自由黨と同様であつたので、此事件に對しては吾等は寧ろ同情を寄

せたのである。そこで當局の吾等を見ることは高田事件の被告人と毫も異なる所なく、些細の事でも苟くも政府の不利と見ると、ビシ／＼告發し、吾が社の被告事件は僅々二三ヶ月の間に五六件も續發するに到つた。其罪の目安は何かといふと、誹毀罪もあり、官吏侮辱もあり、豫審下調べに關しての條例違反もあつた。斯く並べ立てると、國事犯を飽くまで庇護でもしたかに見えるであらうが、決してそんな事ではなく、今から見ると實に兒戲に齊しいやうな事が罪となつたので、今日の新聞記者から見ると幾んど理解もつかぬほどの事が官吏侮辱となつたり、條例の違犯となつたのである。豫審の下調べに屬する事の如き、豫審の妨害をなす程度に書けばよくないことは言ふまでもないが、僅かに筆が豫審の事に及んだと云うて法に問はるゝとあつては今日の新聞は毎日法に問はれねばならぬ。官吏の失錯を冷笑した位で、それが侮辱とならば、今日の新聞紙は毎日侮辱罪を以つて問はれねばならぬ。實は當時官尊民卑の風尙ほ盛んで、微々たる警部巡查を冷罵した位のこと皆罪となつたのである。例へば高田の警察署長赤木某が高田事件の被告人を取調べるに當り、「汝等は干戈を弄する」と云うた。然るに干戈の戈の字が俗に書く才の字に似てゐる所から、干戈と云ふべきを干才と云つたのがをかしいと書



いたばかりで、それが官吏侮辱となつたなどが一例である。他の幾多の被告事件も大體こんな類で、此等の事から私が社長として共犯を以つて論ぜられたことを告白するのは自から恥ぢる程であるが、時の判事でも今頃考へたら、吾等と同じ様に其の苛察に恥ぢるであらうと思ふ。併し當時の裁判所は如何にも神経質で、馬鹿に高田事件を重く見たから、其の餘沫がひどく新聞社にも及んだのである。當時の檢事が如何に陰險であつたかの一例を挙げれば、檢事は宛がら探偵の如く、見え隠れに私などの身邊に付き纏つたり、夜中戸外に佇たずんで私等の動靜を窺つたり、吾等の宴會席の隣室に潜んで偵察をしたりしたことは隠れもない事實で、高田事件の被告人に對してならば兎もあれ、新聞記者に對しては、如何にも念入りに過ぎた舉動と云はざるを得ぬ。

當時私は二十四歳であつた。如何に年少氣鋭の時であつたとは云ひ、自重を闕いて、數多の筆禍を得たのは面目ない次第であるが、政府者の遣り口も亦大人氣のないものであつた。私は斯くして新聞歴史の上に於て既往に類例のない峻嚴な改正條例の犠牲となつた。編輯長として、はななく、社長として共犯を以つて論ぜられたものは私が初てある。久しく帝國通信社の

社長であつた竹村良貞氏は印刷長であつたが、これも私と同じく共犯を以つて同罪となつた。これも此法律の第一の犠牲である。斯る事は固より自慢にもならぬ事だが、談話の順序として之れを省くことが出來ず、當時の状態を知るにも之れを語るの必要があるのである。

### 三 入 獄

明治十七年六月二十一日、私は此日を以つて高田の分監に收容されたのである。此日は朝來潦雨盆を覆すが如くで、殊に日曜であつたから、新聞社も寂寥であつた。豫て覺悟をしてゐたのではあるが、警吏に引立てられて、社を立出る時は言ふ可からざる感慨に打たれた。高田の分監は上職人町に在つて、同じ町に居ながら曾つて見たことも無かつたが、高く黒い板塀が嚴めしく立て廻はされ、一隅の潜りの戸には重量ある分銅が鐵の鎖に吊され、開閉の時にいやな鈍重な音響を發した。此の戸が娑婆と地獄の境界であるだけに、一種言ふ可からざる凄味を覺えしめた。全體小兒等が戯れに地上に線を引き、こゝは獄屋だというてさへ、誰れもそこへ立入ることを好まぬのが人情である。私共は破廉恥罪を犯したのではない、精神上別に疚しい所



がないから、内心氣樂ではあつたが、よく考へると獄舎は全くの別天地で、實は劍呑な所である。こゝにあるものは皆な疵者で、よからぬ徒である。それに臨むの獄吏も亦それ相應のものである。こゝは秘密の場所であるから、秘密が往々秘密のまゝに葬らるゝこともある。此中で暗殺されたとしても、實は遣られ損であることなどを思ひ合はせると、私は始めて悚然として自重自愛の念を起さざるを得なかつた。私は竹村氏と共にやがて一房に收容された。そこには他囚は一人も無かつた。相當に廣い監房で、板敷に筵が布いてあつた。房内の模様は、同じ經驗のある人は誰れも知つてゐるから略するが、入獄當時の感想に就ては聊か言ふべきことがある。誰しも斯様な境に臨んだ初一日二日は、最も神經興奮して無限の感慨に打たるゝものである。吾等は當時政府に不平があつた、それが兒戯に齊しいことで囹圄に繋がるゝことゝなつては、一層政府に對する不平が増長して來た。吾々はつくづく思つた、過激でないものを驅つて過激の徒たらしむるものは、其の過激を最も恐るゝ政府であると感じたのが抑々第一感であつた。私共の最初の刑は輕禁錮二ヶ月で、他の被告事件はまだ上告中で決しなかつた。輕禁錮は勞役に服することなく、監房に閉鎖されてゐる譯だから、讀書でもやつてゐれば幾分不平も慰

め得らるゝのであるけれども、入獄勿々書物の差入も出來ず、已むなく沈黙して居れば精神は益々興奮して來るので、幾んど一日を送るのが非常の苦痛であつた。こんな事で何うして前途幾月の刑期を過ごすことが出來ようぞと、初めの二三日をひどく長く感じた。併し獄八ヶ月間のことを後から考へて見ると、初めには似ず、中頃は夢の如くに過ぎ、いざ満期と云ふ二三日に迫ると、又候最初の如く非常に待遠に覺えるものである。入獄早々の一兩日は多く沈黙をつゞけていろゝの事を案じた中に、同じ境遇に立つた先輩の述懐などを、記憶から呼び起して味つても見た。佐久間象山の獄中の語に「吾れ此境を履まざれば此省覺なし、一跌を経て一知を生ず」と云うたのを味うては、如何にも此境遇に立つ以上吾等も亦省覺する所が無ければならぬと發奮の念を生じた。又同じ象山が「振拔特立は可なり、激昂忿戾は不可なり」というたのを味うては、自重自愛身を傷うてはならぬと、自から警しめるやうになつた。終には「儻し閑居すとも眞に日月を空過せざれば、我を錮するものは我を成す也」といふ句を誦して、獄中に於ては是非此心掛が無ければならぬと悟つた。私が新聞記者の身として何よりもつらく思つたのは、數月間世の中と隔絶して世事に疎となることであつた。それを償ふには是非這中に一省覺をひら



き、日月を空過せず、他人の企及し得ざる獄中の修養を積まねばならぬと考へた。かう考へると神氣が初めて安靜に復したが、しかし此の安靜は忽ちにして破れた。我々は、三日目の朝、突然新潟の本監へ移さるゝ事となつた。吉か凶か、又復不安の夢を辿る境地に陥つた。

#### 四 新潟へ護送

二十三日早朝、新潟本監へ護送さるべく出發する事となつた。現今では交通機關が備つて居るから別段不便もないが、當時の傳遞護送は、全く宿送りしゆくおくりと云ふもので、其上犯人は病氣にあらざる以上腕車などには乗せない。殊に私等の護送の任に當つた看守は兼ねて聞く意地悪だと云ふから甚だ面白くなかつた。併し斯く言ふ自分等も中々我儘者だから病氣を言立て、自分等と外一人の常事犯と三人で腕車に乗る事が出来た。當日自分等の護送は既に知れてゐたと見え、高田の北端陀羅尼町あたりへ近くと、新聞社の同人及び友人知己數十名は附近の茶屋へ出張つて見送つてくれた。此見送りの一人が私の車を遮り通ると見る間に、一封の何物かを車中へ投込んだので、行く／＼之れを開いて見ると、中に金が三十圓在つた。自分は金であること

を知つたもの、さて其れを何うする事も出来ない、併し道中で自己の費用を以て辨すべき場合が無いにも限らぬし、又時には通常の旅館に泊ることもあるかも知れない、さすれば其時の役に立つと思つて、内心厚く好意を謝して、携帶した洋本の表紙の背の處へ祕ひそめた。それにつけても氣づかはれたのは意地悪な看守が附添つてゐることで、果して此金を遣ひ得るか何うかであつた。間もなく直江津に着いた。茲に滑稽であつたのは、自分が警察署の控所へ這入ると、そこに四五人の藝妓がゐた。是等は皆兼ねて知つて居るもので、自分を見て大に驚き、何うしてあなたは繩付なづなづになられたと問ふ。自分は透かさず、貴様達はまたナゼ警察などへ來てゐる、と云ふ様な問答で、果は大笑ひとなつた。此處でも不相變病氣を申立て、懇意な醫者に見せて都合のよい病人になり、腕車に乗り傳遞されて二三泊した。扱て案ずるより生むは易く、護送の看守も、高田の友人間で前以て何か差略がしてあつたと見え、途中仲々親切に取扱つて呉れるので、聊か安心した。これと同時にそろ／＼謀叛氣が起つて來て、例の金を何處かで遣ふ方法を講すべく、是非途中一泊だけ旅館へ泊めて呉れと頼んだが、仲々好機會がなかつた。斯くて愈々長岡へ着く事となつた。そこで自分は看守に訴へるには、明日は既に新潟であ



る。今夜頼みを聞いて呉れねば到底絶望だと云つた處が、彼も大に同情したが、併し平生あなた方の泊る様な旅館では目立つていかんと云ふので、何でも裏通りの餘り振はぬ旅館へ宿つた。すると看守がまた言ふには、あなた方は何も心配はいらぬが、連の男は常事犯であるから逃亡せぬとも限らぬ。さすれば自分の落度になるから、今夜は寧ろあなた方に任せるから責任を取つてくれと云ふので、自分等も宜しいと引受けた。何分三十圓の金を此振はぬ旅館で消費しようと思ふのだから、凄まじい勢ひで、無論第一等の座敷を占領して、極度の贅澤を言つて一夜の豪興を縦にした。殊に可笑しいのは、任せられた常事犯の奴を一つ改悛せしめて遣りたといふ様な抱負で、酒食を勧めながら其改心を説くと云ふ様な事で、是れを肴ともなし、殆んど通宵飲みあかし、翌日は愈々新潟へ行つた。處が此時の金は何うしても遣ひ切れず、仕方がないので、後長野監獄へ移さるゝ迄秘めて置いたが、之れを或囚人に與へた爲め、面倒な事が起つた一條の話もあるが、それは後に語ることにする。

## 五 險 於 山

私共は愈々新潟に着して、直ちに本監へ收容された。此の本監こそ、私等に長く忘れ難い不快を感じしめたものである。古への詩人が人の心は山よりも水よりも危険であるというたが、實にその通りであると感じたのは此の監に於てである。此の獄の主腦は誰れあらう、吾等を告發した高田の警察署長即ち千サイの名を博したものが、いつしか轉職して、この副典獄となつてゐた。當時は大抵の監獄に典獄を置かず、副典獄だけで間に合はせてゐたやうであつた。いくら告發者が監獄の主腦であつても、それが相手に對して復讐的の待遇をなすこととはあるまいとは今の人の推測であるが、當時はそんな譯では無かつた。内閣大臣ですら随分陰險な手段を以つて敵手に對した時であるから、屬僚は推して知るべしである。私等は運悪くも、高田分監に收容された時は輕禁錮の刑が執行さるゝ譯であつたのに、他の被告事件が新潟へ移る迄の間に決した、そしてそれは重禁錮の刑に處せられたので、制規に據り輕禁錮の刑の執行を後にし、先づ重禁錮の刑の執行を受けることになつた。云ふまでもなく重禁錮の刑は服役を課せらるゝものである。副典獄は此の刑の轉換を利用して私等の力に堪へざる勞役を選び、特に看守長に命じて翌日より之れを課したからたまらない。吾々は屈竟な人夫と一般、大なる材木や土



こゝに恩を施さんとしたのであるけれども、私は其の恩に與かるもので無かつた。私と竹村は、其翌日卒然長野縣へ旅立つことになつたのである。それは私等が控訴中の被告事件が、審理の末原裁判を破毀して長野裁判所へ移すの判決が下つたからである。僅々十日ばかりの間に、走馬燈のごとく頻々獄が變つて、少しも落ち付くことが出來ず、其のかはる毎に不安を新にした。

## 六 地獄と極樂

長野の獄に移るに先立ち、聊か新潟監獄に就て語るべきことがある。云ふまでもなく監獄は専ら地方税に由つて建てられてゐるので、各縣其の構造が異つてゐる。縣に依つては整頓してゐる所もあるが、又然らざる所もある。新潟の監獄は今はどうか知らんが、其頃は甚だ不整頓であつた。監房はすべて松の生木なまきで造られて、それがまだ新らしかつたので、板の間などは濕氣でジブ／＼してゐた。それに臺も置かず、寢具を置き、夜間は其の板の上に布團を敷くのであるから堪まらない。疥癬に罹らないものは幾んど無いといふあり様で、衛生には全く無頓着

であつた。私等は幸ひに長くこゝに居らずに濟んだから、此の病を免かれたが、若しこゝに長く居つたら、半病人となつたに相違ないと思ふ。尙ほ監房の構造其他に就て云ふべきこともあるが、それは省略するとして、茲に一言を要するのは監獄の位置である。其の位置は今も同様に市街の一端で、新潟で有名な料理屋行形亭ゆきなりていと墻一重の隣り合はせであるから、極樂と地獄が境を接してゐる。一方は享樂の處で、歌舞管絃がさんざめき、一方は鐵窓呻吟の苦界である。斯く云ふ私も此の極樂に出入したこともあるが、今は其の隣家の人となつてゐるので、深夜夢さめては無量の感に堪へなかつた。殊につらかつたのは、外役の場合には必らず此の酒樓の門前を通過せざるを得なかつたことだ。或る時は石を擔つて此の門前を通過したこともあつた。新潟市中には知る家が少なくないので、緒衣を纏うてゐるから、人は氣が付かないけれども、吾れ自からは知る人の家前を過ぎては、坐りにフランクリンが微時一片の麵包を民家に乞ひ、後日偶然婦を迎へて見ると、それが即ち麵包を與へた婦人であつたことなどを思ひ浮べざるを得なかつた。外役中の瑣事を舉げればいろ／＼あるが、爰に談柄となる一事がある。事は後日に屬するが、端は私の外役に發してゐる。私が外役中土砂を運んだことは前に録したが、數年



の後私が「新潟新聞」の主筆となつて新潟に在住した際に、後に女子大學を經營した成瀬仁藏氏が新潟にゐて、學校を建てたいと云ふので私等も贊助して、北越學館を設けることになつた。さて其の敷地として選んだ所が即ち私共が熱汗をしばつて土砂を積んだ所のそれであつた。そこで校舎が出来た時、發起人の席で、私の言ふには、私は微力ながら此校舎の基礎を作つたものである。斯く云へば不遜の言を吐くやうであるが、實は此敷地の土砂は自分が運んだのだというて、入獄當時の機微を漏すと、發起人一同も初めて事の次第を知つて驚くもあり、又感謝するもあつたことを今想ひ起す。

## 七 留置所の一夜

前述の如く私等は長野監獄へ護送さるゝ事となり、七月七日を以て新潟警察署へ引渡された。處が其時刻が最早暮れ方であつた爲め、一夜警察の留置所に泊められる事となつた。留置所は一時犯罪人を留める所であるから、規模の小さなものであるが、併し新潟は五港の一でもあるから可なりのもと思つたが、實際は意外のものであつた。僅か二疊と三疊の二室がある

ばかりで、それが板を以て仕切られてゐた。自分は廣い室に入れられ相手は狭い隣りに這入つたが、自分の三疊には六人入れられてあつたから、炎暑の折柄室内の蒸暑い事は勿論、一種の悪臭鼻を衝いて來り、殆んど堪へ得られなかつた。噫て喫飯の時となり、それを了ると、自分は連日の疲勞一時に發して忽ち睡魔の襲ふ所となつた。

## 八 破獄未遂を見る

茲に一珍事が起つた。夢中一種の物音に驚いて目を覺まして見ると、既に暮れて居るのにまだ燈光が點かない、随つて同室の者の顔の見分けもつかなかつたが、よく視ると或る一人が切りに騒いで居る。此奴何をすると思つて居ると、彼は猿の如くチョロ／＼と監柱を攀ち、外廊にある高い小窓を外して縁を破壊し、其一片を携へて降りて來た。今度は己が帶を手早く解き、監柱三本に、真中を押へとして左右へ引掛け、其真中の結び目には前の高窓の縁を通し、之れを挺に振つてゐる。警察署の留置所は所謂一夜泊りの假監であるから構造は必らずしも嚴重ではないが、併し五寸角位の柱を廻らしてゐるから、容易に破獄は出來ないと思つてゐる



と、挺に力を籠めて帯を振る毎にギシシ／＼と凄まじい音響を發して、其都度左右の柱が次第に中央に撓め寄つて、柱と柱の間に多少の間隙を生じてくるので私も驚いた。こやつを脱せしめては一同は其の累を免かれぬ。別して自分に對し監獄の主腦は意地がわるいから、どんな言ひがけをするかも知れないと、蹶然起きて嚴然たる語氣を以て、「何をする」と制した。すると此奴は「お互ひの事だ、大目に見て呉れ」と云うた。自分は更らに「貴様には都合がよからうが、あとで同房の者が迷惑をする。知らねば知らぬで済みもしようが、目前に見る上は黙しては居れぬ。併し強ち止め立てはせぬ。自分は明朝護送されるのだから、遣りたければ其後に勝手に遣れ」と諭した處、彼れの云ふには「俺が此處で脱監を企て、既に四日にもなるが、果し得ず、今日に迫んだ。明日は必定本監に移さる、であらうから、今日遂げねば到底出られぬ。どうか拜むから見逃して呉れ」と哀訴しながらも、彼は挺の手を休めず振つてゐたが、挺の力は強勢のもので、優に身體を脱し得る間隙を二柱の間に生じた。併しその間隙より身を通ずるには、他人に挺を支へて貰はねば一舉ユリが戻るので、彼れは誰か此挺を握つて呉れよと頼んだ。房中には惡黨もゐるに相違なからうが、流石に後累を恐れて、諾するものが無かつた

ので、曲者も大いに窮した。此時幸ひ戶外に人聲がして、警察の使丁が燈火を携へて來た。曲者も其物音に驚いて匆皇挺を放つた。それからは追々見巡りの警官も出入し、彼れも目的を達し得無かつたので、私も漸やく累を免かれたが、此の椿事の爲め通宵睡眠を得ず、短夜の明けやすく、東天いつしか白みたる間もなく、吾々は出發することになつた。後日聞けば、此の曲者は有名な掏賊で、脱監には頗る巧者で、吾等が發してから終に脱監の目的を達したとか。

## 九 護送の奇縁

翌朝巡查が附添うて吾等兩人は留置所を發した。其頃は無論汽車はなく、長岡までは安進丸あんじんまるといふ汽船で信濃川を溯るのであつた。全體護送の場合には戒具を用ゐることが多いのであるが、護送巡查の裁量でそれを用ゐないのみならず、衣服も刑服を脱して通常服に着替へることを許されたから、同船のものは吾等の境遇に氣がつかず、船中には始めて種々の新聞紙を読むことを得たので、其の喜びは大したものであつた。此の待遇は全く同情ある巡查の取計らひに出たのであるが、私はそれを幾んど忘れてゐた。後に私が「新潟新聞」を主宰した時、一人



の探訪者を入れたことがある。それは警察に務めたものだとはい聞いたが、委しく其素姓を聞くこともなく打過ぎた。然るに後藤伯が大同團結で新潟へ来た時に、私は死活の間に抗争したので、危険は頗る身邊に迫つた。此時である、兼ねて入れた探訪者が私に私語していふには、今夜は貴下に危害を加へんとする計畫があるから、社より御歸宅の途上御用心なされねばならぬ。私が御案内をするといふに任せて、常に往來する通路を避け、嘗つて通つたこともない小路をいろ／＼迂回するので、私はフトある割烹店に此人を伴うて、對酌しながら種々の談に入ると、先年長岡まで護送した巡査が即ち此人の前身であることが知れて私は愕然とした。私は前後此人の助けを得た奇縁に興を覚え、危難を忘れて對酌を續け、深更無事に歸宅したことを今想ひおこすのである。此の探訪者は後に新聞社の會計主任となつた人で、名を林鑄吉といふた。

## 一〇 高田を通過

斯くて長岡より長野までは三四日を費したが、途次高田を過ぎた時は、既に知れてゐたと見

えて、多くの知人に迎へられた。此日高田警察署に休憩中、友人より最近の新聞紙を與へられて、此上ない喜びを以つて讀み、入獄以來の政界の形勢を略々知ることが出來た。公侯伯子男の爵位が定まり、華族の外、國家に勳功あるものに授爵の御沙汰があるといふ記事を見たのは此時であつて、議會開設の曉には兩院制を探る準備として、先づ爵を定めたものであると推察し、憲法の制定も遠くはあるまいと想像を馳せて愉快に感じた。それから佐渡の有田眞平が新潟の某新聞に寄せた論說中、今日ならば不問に附さるべき事が皇室の不敬罪として告發された事は自分の入獄前で、兼ねて氣の毒に思つてゐたが、其の上告が棄却されたとの記事を見て、同舟遭難の歎を發せざるを得なかつた。斯くて長野警察署へ着したのは七月十三日で、翌日は日曜である故を以つて二日間同所に留置され、十五日日本監に移された。

## 一一 長野監獄

私が長野監獄に移されたのは私に取つては非常の幸ひであつた。別して刑期の全部を此監獄で送ることを得たのは私の仕合せであつた。當時の長野縣の縣令は私の郷里の先輩で、其人は



累世儒者の家に生れた大野誠といふ人であつた。縣令が越後出身である所から、屬僚の重なる人も多くは同じ出身で、私の親戚も縣廳で樞要の位地にゐた。縣廳の此組織が間接に私を幸ひしたに相違ない。よし然らずとするも、犯罪地は種々の利害關係から往々公平を缺くことがある、現に新潟監獄が其適例である。長野は隣縣であるけれども、私の事件には何等の關係もなから、監獄の取扱ひが公平であるだけでも仕合せと云はざるを得ぬ。況んや私の仕合せは實に想像以上であつた。それは追々後段に陳べるが、差當り喜ばしかつたのは、監獄の設備がよく居いてゐて、衛生上の注意が申し分無かつたことである。この監獄の主要を言ふと、其構造は羽翼制を取つて、監視には最も便利があり、監房の用材が皆乾燥してゐるので、忌はしい濕氣は毫もなく、飲食物其他の供給も新潟よりもよく、看守、押丁なども純良であるかに見えた。即ち吾が郷里の監獄に較べると雲泥の差があるので、私は窃かに罪囚は犯罪地の如何によつて幸不幸のあることを感じ、如是く不同であることが刑に不公平を及ぼし、よくないことと思つた。

それは兎も角も、私共は收監の翌日式のごとく長野の裁判所へ召喚されたが、一旦取調べら

れた切りで十數日何等の取調べを受けなかつた。その後判決があつたけれども、前判決と大差がなかつた。此の判決などに就ては云ふべきこともあるが、爰に略する。扱て判決があつたから既決囚の取扱ひを受けねばならぬ筈であるのに、其事もなく三ヶ月以上も未決のまゝに置かれたのは氣樂ではあつたが、何故であらうかと、窃かに不審を抱いた。後で考へると、これも暗に私を厚遇したことであると理解した。此の未決の監房に居る間は、各所からの差人物などは破格に許されて、些しも不自由を感じなかつた。

## 一二 獄中に書を講ず

三ヶ月間未決の間を如何に經過したかといふに、随分記すべき事もあるが、それは追つて項を分つて陳べることにして、監房は羽翼制の大建築の内にあつて、一房十囚を收容するの廣さである。昔しの牢屋の遺習は些しも今は存せず。相當の素養あるものは房長に推さる、譯で、自分も此の監房に入ると、直ちにそれに推された。同房には種々の未決囚がゐるが、かれ等は私を頭領と推さるを得なかつた他の事情もあつた。仔細は、かれ等は日々無聊に困んでゐる



が、さて読み物として差入れを許されてゐるのは、刑法、治罪法と自己の事件に關係ある一件書類の外には何も無い。然るに彼等の多くは刑法、治罪法を解するの能力がない。さりとて己が事件のためには曲りなりにも研究を要するが、其の相手になつて説明したり解説したりしてくれるものが無かつたのに、今度は其の先生が這入つて來たのであるから、彼等は競うて私に法の説明や解釋を問ふことになり、彼等は意外の便利を得たので、私は監獄から命じられないでも勢ひ房長たらざるを得無かつたのである。實は私とても法律には門外漢であるから、自から此の機會に多少の研究をしようといふ氣になり、始めて刑法、治罪法を總則から終りまで二度通讀し、こゝに同囚の法律顧問と成り濟ましたのは滑稽であつた。私は此點で同房の尊敬を受けたが、尙ほ各所から差入る、食物などを必らず皆々に分配してやるので、此點に於ても私を尊敬せねばならなかつた。彼等は私に對して臣僕營ならざる態度を以つて忠實に仕へた。

毎日々々刑法、治罪法のみを講釋で日を暮らす譯にも行かず、追々に興味ある雜誌をやつて彼等を喜ばせると共に吾れ自らも悶をやつたが、長い間の事だから、其内種切れとなり、果て

は矢野龍溪翁の「經國美談」を、二三夜つゞけて、講談師句調で語つたこともあつた。此の未決監房に私が常に坐右に置いたのは、ヒスクの「コスミック・ヒロソヒー」二冊で、毎日幾頁かを默讀することが私の日課であつた。

### 一三 獄中の著述

或る日の事、副典獄から特に召喚されて監房から出て、導かる、まゝに副典獄の室へ入つた。此時初めて副典獄を見たのであるが、四十格好の武人肌の頗る快活の人であつた。此人は三浦親肅と云うたやうに記憶するが、此獄も副典獄が新潟同様主腦であつた。さて私が其室へ入ると、副典獄は看守を退け、私に對等の座を與へて、先づ私の境遇を慰藉して云ふには、「貴君の事件はいくつもあるやうだから、結局どうなるか分らんが、それがどうなつても、結局刑期のあらん限りは、當監で服役さる、ことにならう。それに就て御相談がある。貴君が「高田新聞」に會つて連載された監獄意見を拜見してをる。如何にも現行獄制の缺點をよく看破されてゐるのに敬服した。實は我々は一年に一回乃至二回中央に開かる、典獄會議に臨んで討論す



るけれども、いつも好案がないので困つてゐる。貴君の現在の境遇は貴君の爲めには不幸であるが、監獄の爲めには幸ひとも云ふべきだ。どうか監中に監獄意見を書いて貰ひたい。貴君も最早や獄内の實際にも通じて居らる、から、必らず相當の意見がある、であらう。どうか司獄官の爲め遠慮のない意見を陳べて戴きたい、ひとり本監の仕合せのみでない」と云ふのが私に對する要求であつた。

私は此の意外な要求に驚きもしたが、實は内心喜んだ。此篇の首頭に陳べたごとく、私は嘗つて學友と監獄問題に觸れたこともあつて、結局實地の研究を必要とした。然るに圖らずも私其境地に臨むこと、なつては、眞實研究の意もあつたのであるが、未決の監房に居るだけでは實情も分り兼ねてゐた。處が又圖らずも公然副典獄の依頼とあるからには、これから便利もおのづから開ける譯と、私は喜んでその依頼に應じ、自分は法科を修めたものでもなく、監獄に就ても決して多く研究してをらぬ。併し云々の事があつて研究の志はあるから、出獄までには何か書いて、記念のため獻することにしよう。それに就ては監獄に關する材料を示されたいと求めた。副典獄はそれを諾したが、これから後は私に對する待遇が全く一變して一層寛大となり、直ぐに他囚を交へない一房に移された。其の房は頗る清潔であつた。且つ私一人では寂寥を感じるであらうとの同情から、竹村をも同じ房に移して、互に無遠慮に談笑し得るやうになつた。差入れなどもこれから一層寛大となつて、菓子を入れたこともあつた。時には副典獄が見舞ひにも來た。私の需めた参考書は、兩三日後に監獄から差入れた。それは一二に過ぎなかつたが、其中に「萬國囚獄會議錄」といふ、厚い印刷した二冊本があつた。これには各國の監獄制度の改良に關する意見書も載つてゐて、私の研究には可なり役立つた。全體監獄に關する原書は其頃日本に餘り來てをらなかつたので、此の會議録も私が始めて寓目したものである。

私は副典獄から一種の著述を頼まれたけれども、十分研究した上でなければ筆を取る可からずとなし、筆硯を房内に差入れを請ふ事を差控へた、斯の如きは獄則の禁する所である。私が筆を把り始めたのは、重禁錮執行の爲め工場へ出るやうになつてからで、私の爲めに特に湯呑所を居處と定められた、其時からである。それは後に更らに語るとするが、在監中、監獄論十篇を著し、それを脱稿したのを竹村が淨寫してくれた。出獄の時監獄に残したのはこれであ



るが、これは監獄に關する私の理想を陳べたので、實際の事には觸れなかつた。實際の事に就ては、私が獄中に感じたことを、出獄してから副典獄に口頭で語つて、其參考に資した。獄内には獄司の氣のつかない事がいろいろある。蟻蛭の穴が大堤を崩壊する基となるやうなもので、獄中に行はるゝ悪弊は、瑣事と云うても兎もすると不容易の事を惹き起すから、決して輕に附すべきでない。以下少しくそれ等に就て語ることにしよう。

#### 一四 獄中の電信

交通遮斷が獄中の原則であることは言ふ迄もなく、未決囚には最も此原則を厲行するのが大切で、監房の構造も、随つて遮斷的に出來て居り、隣室と互ひに話などすることは萬出來ない筈であるが、人間の智慧はなかく、エライもので、窮すれば通ずるの諺のごとく、いろいろの交通法を案出するから妙だ。獄中の隠語で「電信」と云ふがある。之れは隣室と聲語を交へる法であるが、看守押丁が終始目や耳や鼻を以て意地悪く偵察する傍ら、各室互に聲語を通じては妙と言はざるを得ない。これを説明するには監房の構造を一ト通り言はねばならんが、當

時長野の監房は前にも云うたやうに羽翼制であつて、中央に六角の看守堂を置き、それを中心に左右羽翼を廣げた様に監房が總二階で二行に並んで居る。一房は凡そ十疊敷位で、兩室の間は松板の二寸許りのもので隔て、あり、苟且にも節孔や割れ目やアキなどはない様に注意してある。尤も死刑に處せらるべき程の重罪犯を容るゝ處は三疊敷位で、障壁も頗る堅固で、兩室より板と板とを以て隔てた其中に土砂が入れてある。何と云うても、二寸許りの板を以て隔てた處であるから、兩室の間に聲語の交通は出來ぬ様に素人の思ふは勿論、看守押丁も大丈夫に思つて居る様子であるが、決してさうでない。自分が未決囚との雜居時代に親しく見た所に依れば、例として朝七時頃には用の有無に拘はらず此電信と云ふものが行はれて居る。先づ看守の戸外に居らざるを見濟まし、拳で靜かにコツ／＼と板障を打ち叩く。元來此の電信は囚徒間に行はるゝ常習であると思えて、隣室の者も時刻になれば注意して耳を敬て、居る、そこで合圖を聞けば聲のするあたりに耳を付け挨拶をする。或は互ひに晴雨の挨拶から、用あれば簡單に之れを語り合ふのであるが、此話が看守に聞こえぬと云ふのは、長野監房の構造が四圍栗板を以て封鎖され、唯一隅に縦五尺横三尺許りの扉が設けてある計りなので、低聲の言語は室外



には漏れぬからである。毎朝時間を約しての應酬位は退屈まぎれの戯であるが、こゝに恐るべき悪事が此手段に依つて行はる、事が往々ある。それは別房に在る共犯人若くは關係者と情思を通ずる事で、例へば數人の共犯者があれば、其一人が金錢の報酬を得て自己のみ罪を負擔する約束をなし、若くは法廷に出た際言葉の不揃ならぬ様罪證湮滅の手段を講ずるが如き、皆此手段に依つて行はる、のである。即ち一房より隣房に對し先づ甲なるものありやと問ひ、若しありと答へれば直ちに板越しに其言を傳へるは勿論、隣室に其者なくば更らに隣室に託して、其隣室より更らに其次に傳聲し、如是くすること各室に及び、其の返答も同様の手段によつて傳へられ、遂には全く罪證を湮滅し若くは共犯者を救済し、意外の變化を法廷に見る事がある。而して最も驚くべきは廊下を隔て、前面の監房にも情思を通ずる事で、これは容易に出來ぬ事であるけれども、囚人の目と云ふものは口よりもよく働くものであるから、敢て怪むに足らない。營に目の働きのみならず、看守室より最も隔りたる一隅の相對する監房に於ては、看守の目を忍んで長い間に切れぐに簡單の聲語を傳へること敢へて出來得ぬものでないから、一度前面の或一室に意思が通ずれば、直ちに其列にある各室に傳へ得るのである。そこで各室

ともに此電信の取次をつとめ、決して疎略にせぬのは、銘々同様の事を依頼する必要があるからである。

## 一五 外界との交通

監房内の交通を遮斷すると同じやうに外界との交通を遮斷するの必要がある。否外界との交通は最も嚴密に遮斷せなければ、治罪の上に大妨害を來すは言ふ迄もない。さて外界より書狀などの紛れ入るのは専ら衣類差入のときにあるから、差入物の検査はなかく嚴密のもので、或は衣類の内部に縫ひ込んでありはせぬかと思ふときには、解きほどこいてまで検査する位である。又房中に禁制品を置かぬかと、それを検査する爲めに、毎日一回一房毎に全囚を看守室へ連れ出し、數人の看守押丁が其房に入りて疊を上げ、夜具類を改め、板のふし迄ほじりて周到の検査をなすのである。斯る嚴密の検査の下に、手紙を認むる筆墨などのあるべき筈なく、又元より一本の手紙も外界へ出し様のないものであるのに、立派に筆墨に託した手紙が係官の手を経て外界へ達すると云ふは獄中の祕密で、身を囚人の位置に置いたものでなければ、



到底此祕密を知ることとは出来ない。凡そ二犯以上の罪囚は一種斯道の専門家とも云ふべきもので、未決監に入るに先立ち、あらかじめ家人や知人と申合をして、衣類の差入をなす場合、若くは不用の衣類を下げる場合には、必らず音信が衣類の或る部分に隠されてゐて、それを注意して捜すことになつてゐる。併し差入れの時に如何にして手紙を縫ひ込むかといふに、多くは薄い紙に細字で認め、紙捻こまねにひねつて、襟のあたりの端物の重なつてゐるやうな處に縫ひ込むのであるから、係り官が如何に検査に抜け目がなくとも、眞逆に衣類全部を解きほぐすでもなく、疑はしい箇處を撫でさすつて改むるに過ぎないから、細い紙捻位な物は衣類の上より幾ら探ればとて手に觸れるべきものでなく、終に目を脱がれて房中に這入ることになる。嘗に手紙計りでなく、手拭、犢鼻褌の類も衣類と共に這入つて來るが普通である。自分は之れを目撃し、其の工夫の巧妙なるに驚いた。それはどうするかと云ふと、手拭は肩縫ぎとして張り付け、越中褌は尻縫ぎとして縫ひ付けてあるから、これを解けば直ぐに用をなすのである。此等は格別害にもならないから、係官も餘りやかましく云はぬやうだ。且つ未決監には手拭や褌の類は既決の如く一定のものがある譯でないから、氣が付かぬと見える。扱て又外界より信書其他の紛

れ入る次第は前陳の如くであるが、出すときはどうする。即ち返事を遣る時には如何にするかと云ふと、矢張り同一の手段で衣類の中へさし込んで親族に御下願をするのだが、下げる時は入れるときより無雜作で、看守も検査などを嚴重にせぬ。ナゼと云ふに、毎日々々監房を改めて決して手紙を認むるなどの器具はないと思つて居るから、それは難なく關門を通り過ぎるのであるが、扱て其家族は専門家の家族丈けあつて、早速解きほゞいて周密に搜索するから、どこへ縫ひ込んで置いても終にはわかるのである。次に何を以て手紙を認むるかと云ふに、いろいろの方法もあらうが、自分の房中に實見したのは極めて巧みな遣り方であつた。墨も筆も、手紙差入れと同じ方法で衣類と共に這入つて來るのである。墨、筆と云へば大袈裟であるが、實は墨の粉末と筆の毛が衣類の縫目に這入つて來るのである。墨粉も毛もバラにして、疊の下に塵埃に交せて置くから、如何に嚴重に検査しても氣の付くことでない。斯くて手紙を認むる場合には、先づ毛をあちらこちらより四五本拾ひ集めて箸の頭に結び付け、墨粉も塵埃中より拾ひ集めて之れを枕の上などで唾液で溶解し、虱大の細字に勝手の事を認め、前陳の如き手段で衣類を宿元へ下けるのである。自分は其工夫の巧みなるに驚き、成る程これなれば看守の氣



が付かないのも無理はないと思つた。

## 一六 寫眞屋となる

三ヶ月許りも未決監に這入つて居つたが、冬近く肌寒き頃、既決囚として勞役に服することになつた。扱て愈々既決となつたら筆硯を請求して監獄論の執筆に取り掛らうと待構へてゐたが、監獄意見を書くことが如何に典獄から内命を受けて居るとは云へ、斯様の事を看守や看守長に唐突に言うてよいか悪いか、先づ以て考へ煩らうたが、工場へ伴はるゝや、間もなく年若い人品のあしからざる、肥太つた一人の囚人が自分の前に來て言ふには、私は聊か寫眞術を心得て居るので、自身の器械を取寄せ、此工場外に別に一室を構へて寫眞を撮るのを日々の仕事とし、極めて暢氣にやつて居る。そこで先生から少しく洋書の素讀を受けたと思ふが、是非寫眞場へ來て戴きたいと云ふ。自分は突然の事に驚き、そんな事は出来るものかと問うたら、彼は、それには私から、先生は東京で寫眞術を極めた妙手であるから、自分は是から其教授を受けたいと申立て、寫眞工場へ編入されたいと願出るから、萬一看守から問はれたら寫眞に長

じて居ると答へて下さいと云ふので、薄氣味がわるいけれども其言に任せて置いた處が、典獄より兼て特待の命が下つて居つた爲めか、一應の質問もなく直ちに此男の請求通り許され、喧囂なる疊糸などを製する工場を去つて寫眞の方へ行つた。此若い男は大江某と云うて、小諸のある豪家の次男である。出京中道樂に寫眞などを習ひ、終に誤つて詐欺の刑に觸れ獄中の人となつたのだ。又寫眞場として特に設けたのではなく、大江が偶々寫眞術を心得て居る所から、典獄の道樂で、病監の不用となつた所を暫らくそれに充て、これに暗室をしつらひて寫眞場としたのである。當時信州の如き邊鄙の所では、監獄若くは縣廳の小役人等が寫眞を撮るなどは贅澤となつて居るので、それらを目的に大江に此の勞役を授けたものと見える。扱て自分は大江の云ふに任せ寫眞の先生氣取りで居つたが、一日に客が一人か二人あるかなしであるから、退屈で困るので、例の監獄論執筆の事を願ひ出でた處が早速に許され、これよりは筆も硯も机も供され、寫眞の傍ら専ら執筆に従事し、大江は東京遊學中聊か西洋の文字を習つて居たので、ひまには讀本などを素讀して遣つた。如此くして二ヶ月許りをこゝで暮らしたが、此間にをかしい事がある。あるとき縣官が四五人監獄に遣つて來た。三浦副典獄は先きに立つて寫眞場へ



來り、これが市嶋君でありますと丁寧で紹介し、縣官も一々姓名を名乗つて挨拶をした。此時自分は柿色の獄衣を着けて居たが、名乗るを聞けば多くは新潟縣の人々で、斯る場合に紹介を受けたのは誠に難有迷惑に思つたが、これも三浦の好意より出たに違ひない。或時又一人の押丁が遣つて來て「寫眞を寫して呉れよ、大江は拙手だから是非先生に」と云ふので、先生も已むなく大江諸共暗室に入つた。其實は唯だ大江の爲すを傍觀するのみで、暗室を出ていざ寫すと云ふ場合に、度が高いとか低いとか大江を叱り飛ばして漸く一場のお茶を濁した事もある。斯様の次第で時々暗室に這入つたが、寫眞用に備へてあるアルコールのあるに心付き、水に和して一二回飲んで見ると、好酒家なる自分の事だからなかく旨い。遂には毎日飲む事となり、自分の相手の男も眞似を始めたが、この人は顔に紅を呈するので困つた。あるとき見張をする看守が此事を看破し、二人暗室に這入つて居ると、外から突然戸を明けんとするのに驚いた。其時自分は高く聲をあげ、「素人が暗室を明けると薬品が全部用立たぬ様になる」と、叱る如く制した處が、看守も已むを得ず控へた事がある。今から思へば洵に抱腹絶倒である。自分も大江の爲すを見て、二三度は自から試みもし、序に少しく教はつて他日の隱藝にせばやと

思つた事もあつたが、餘り熟達せぬ内に寫眞勞役を廢する事になつたのは遺憾である。曾て戲れに獄衣を着けた自分を大江に寫させた事がある、焼付けて之れを見て、思はず吹き出した。人間は衣類で半ば氣品を作るとは眞實である。筒袖、股引、襟に番號を付けた扮装では、我ながら一文半錢の値もなかつた。此寫眞は記念の爲め出獄の折携帯したいと思つたが、獄法許さぬとあつて、他人に與へて仕舞つた。

## 一七 書家となる

大江も満期が近づき、寒氣も迫つて來た爲めか、寫眞場は撤せられ、自分と相手の兩人は工作役場に附屬する湯呑所に移された。こゝは六疊敷許りの板敷で、大爐を構へ湯と火とは贅澤な程豊富である。此度は大江と別れ、相手と差向ひに机を構へ、他囚を交へないから獄中と思はれぬ心地がした。これも典獄の特命に出でた事と思へば感謝の外はなかつた。こゝに移つてからは、静閑に乗じて著述を専らとしたが、傍ら相手の請ふがま、毎朝英書を教へた。何といつても長い間であるから、ノベツに著述計りもして居られず、追々獄中に知る囚人も出來て、



手本など五六度書いてやつたが、段々其の眞似をするものが出来て来た。これは多く長期囚である。さうすると獄内に評判が立つて、看守押丁などで書を需めに來るものが毎日五人や七人ある様になつた。退屈に任せていろくものを書いて遣つたが、中には楷書で一枚の白紙に「千字文」を書けなど云ふ注文が出て、これには閉口した。が無聊で堪まらないから此難題も斷らず、幾度か遣つてのけた。遂には少し書法を習つて見たいと云ふ考が起つた。然るに手本などは無論ない。囚徒中に誰れか所持して居るものはないかと穿鑿して見ると、僅かに佐瀬得所の書いた摺本の千字文を所持して居るものがあつた。草書を學ぶにはこれもよしと借受けて、毎日無聊の折に之れを習ひ、人の書を需むるものあれば、手習半分に此の手本中の語を得所流に書いて遣つたが、日を経るに隨つて兎に角手本を離れて草體を一通り書くことの出来る様になつた。今日自分が書は拙ながら、餘り法に背かぬ崩し様の出来るのは全く得所のお蔭である。後年新潟で得所の子息佐瀬精一氏と日夕交遊の折、此事を語り出で、一笑した事もあつた。そは兎も角、追々自分の人と爲りが獄中の上下に知れ渡るといたく尊敬を受け、看守などは争つて書を需めに來た。監獄でも屏風や襖などを製して、ヤス表具して賣り出した事もあ

るが、皆な自分に書かせた。此時分になると一廉の書家氣取りで、ドウも毛氈がなくては書きにくいと云ひ出した處が、看守は毛氈はないが、これではドウだと出したのを見ると、屑布團に綠色のケットを張つたもので、當直の役人が板の間に敷いて疊と寢具とを兼帶するものであつた。これ屈竟と、居室に推し廣げて、書くものがあつても無くても常にこれに坐して傲然構へた様子は、我れながら書家らしく思つた事もある。扱て毎日々々屏風の一雙位は筆に任せてなぐつたが、斯うなると印章もなくてならぬ事になる。或る日役人が典獄の言付けであるからというて、印章御所持なれば御宅より御取寄せ願ひたいと言つて來た。恥さらしに印章など押すは不本意と斷つたが、再三の請求辭しがたく取寄せた。如此くして出獄まで毎日々々書いたが、出獄近くなると、幾んど書き切れぬ位依頼が來た。そこでをかしいのは、獄則で百日以上の在監人には工錢を與へる事になつて居るが、書家先生たる自分の工錢は一日十二錢五厘であつた。十二錢五厘と云へば情けない薄給であるが、これが監中第一の高い工錢で、終日炎天に曝されて力役する囚人、例へば瓦職の如きは随分骨の折れる勞役であるが、僅かに五錢さへ取ることが出来ぬ。それで或日彼等は自分の工錢の額を耳にし、休憩時間に自分の室に來て云ふ



はに、あなたは誠に仕合せ者だ、終日蒲團の上に坐つてゐて、勝手な樂書をしてゐて、一日の工錢は我々に比すれば二日分よりも多いと羨んだ事がある。満期出獄の當日は午前十時迄に獄門を出す法であるが、満期前三日より遙かに書きものが多くなつて、いくら走り書をしてもなかく、書き切れないので、出獄當日も、折角獄官の依頼だから時間がないと云うて斷るも氣の毒に思ひ、一時間許り出獄時間を延ばして漸くの事に書き終つた。多分信州地方には自分が獄中に書いた拙書が幾らも残つて居るだらう、誠によい手習をした。

### 一八 門下生に博徒の親分

上田の早川富五郎と云へば信州切つての博徒の親分で、その乾兒こせんは到る處に散在し、なかなか強勢のものであつた。自分の入獄の節此男も入監してゐたが、あるとき自分に手本を請うたから、直ぐに書いて遣つた。此男は右眼の下に紫斑があつて、如何にも一ト癖ある者と見受けられた。手本を與へたのが縁となつて、書物も請ふがま、教へて遣つた。此男一ト通り讀めた。自分の教へたのは「古文眞寶後集」であつたが、大概是自ら讀んだ。扱て此男は信州に有名な博

徒であるから、獄内にも乾兒の五十人や七十人位は確かにゐた様である。自分は既に親分の先生であるから、乾兒共も勢ひ自分を尊敬せざるを得ない。毎朝工作場の井戸側に私が顔を洗ひに出ると、富五郎の言ひ付けて、盥を持つて來るもあれば水を汲んで呉れるものもある、時には汚れた衣類を洗濯して呉れるものもあつて、これには大層便宜を得た。

### 一九 送別會

獄中に送別會あると云ふと人は怪むであらうが、決して怪むべきでない。自分が出獄間近に富五郎は乾兒十三四名を率ゐて送別會を開いて呉れた。實は送別會と云ふと大袈婆であるが、矢張り送別會に違ひない。それはドウするかと云ふと、百日以上在監の囚人は一日若干の工錢が取れる、さうして日々三錢丈けの食物を買ふことが出来る規程になつて居る。そこで何れも申合せて買物の餘り重複せぬ様、或者は菓子を買へば或者は茶を買ふと云ふ様な鹽梅で、酒や煙草こそ禁じてあれ、其他は大概買ふことが出来るのであるから、いろいろのものを持寄つて、食後の休憩時間に團欒して食ひ且つ談じ、送別の意が寓されたことがある。



## 二〇 大隈邸の邂逅

富五郎に別れてから十数年、或歳議會終了の後、進歩黨議員一同、大隈侯邸に招かれた際、日頃見知らぬ男が兩三人入り交つてあるを不審に思つたもの、深く意にも留めなかつた。處が會食後、居合はせた竹村氏が自分の處へ來て言ふには、貴君に珍らしい男を紹介しようと思ふから、後へ付いて行くと、先きに不審に思つた男の處へ連れて行つた。自分は誰れだか分らなかつたが、よくよく顔を見ると、眼下の紫斑に見覚えがあるので、妙な處に邂逅するものであらうと大いに驚いた。後に聞けば、富五郎は最初は自由黨側の壯士を操縦し、毎回の選舉に進歩黨を苦めたが、其後深く感ずる所あつて、驟然態度を一變し、進歩黨に左袒する事となつたので、降旗元太郎氏が伴うて來たと知れた。

## 二一 相撲興行

獄中に相撲興行ありと聞かば何人も意外に思はんが、長野監獄内に自分が兩度まで目撃した事である。當時の獄則として祭日には囚徒の驅役を免ずることになつてゐたが、囚徒は此日だけは氣樂な日だが、さりとて勝手に飲食の出来るにもあらず、思ひ／＼に打集ひて日頃の苦みを啣つか、さなくば無駄話に打興じて徒然を慰むるが責めて其日の心遣りである。但し大方は退屈と無聊の中に欠伸だら／＼日を送ることが多いので、斯くては折角の休暇も面白からず、何ぞ氣晴しに鬱を散ずる趣向もがなと、あるときいろ／＼思案の末、相撲こそ養生にもなり、別に弊害もないから宜しからうと、試みに看守に願出た處が、副典獄は武人氣質で、自身も相撲を好む所から、幾んど公然之れを許可したのが始まりで、祭日は相撲興行を以て殆んど一兩年來の慣習とするやうになつてゐた。全體斯る遊戯を許すのは疑問であるが、實は多少の弊があつても之れを許さねばならぬ必要もある。仔細は、祭日の事であるから出來得べくんば看守押丁にも休暇を與へたきは典獄の情である、然るに千餘の囚人を勞役も課せず監内にゴロ／＼遊ばせて置いては、如何なる悪事を企むかも知れず、平日に比すれば取締上一層の困難を感じるので、斯る場合に、相撲の如き遊戯を許し、これに全監内多衆の視目を集中するに於ては、爲めに看守押丁の數も省き得るのみならず、監視も亦容易であるから、其方便としても許したも



のと思はれる。殆んど公然に近い典獄の許可であるから、相撲の心得ある壯丁は遠慮會釋なく騒ぎ立ち、獄舎の傍らに廣い空地のあるのを屈竟の場所と喜び、一同此處へ繰出して、明き俵に土を盛るもの、土砂を運んで土俵を築くもの、材木を持ち來つて四本柱を建てるもの、八方に手をわけて掛れば餓鬼も人數とやらで、法に叶うた見事な相撲場が咄嗟の間に出來上つた。偕て四本柱は建てたが幕がなくてとは云ふ處から、裁縫の心得あるもの三四人一團となつて、頻りに縫ひ針をして、これも時の間に出來た。一體獄中には一定の規律があつて、衣類は勿論、手拭、三尺に至るまで唯だ一本に限りて渡しあるもので、一片の布きれと雖も餘分のもの、あるべき筈がない。然るに柿色の幕ながら幅三尺長さ三丈もあらうと思はる、ものが出來ると云ふは、重罪の囚徒で長の年月を送るものが、平日の衣服の外に着古しの短衣、役に立たぬ三尺帯、垢だらけの犢鼻褌など、各々幾許の貯へなきにあらねば、之を取集めて、はぎ合せたものである。扱て愈々場所が出來て、東西の力士場に登るに際し、驚いたのは行司が柿色の社袴を着け、なか／＼精巧の細工をした軍配を持つて居る事で、これは大工や仕立屋や其道の職人が幾らも監内に居るからなので、斯る器具は常に心がけて看守の目を盗み拵へて何れへか

隠してあつたのだらう、到底咄嗟の間に出來得べきものでない。さて力士も柿色の犢鼻褌を式の如く締め、紙捻で作つた化粧廻しを着けたのも面白く、纏て東西の關取は代る／＼場に出つたが、中には骨格逞ましく角術も妙を得て居るものもあつて意外に感じたが、よく／＼聞けば、田舎相撲ながら四邊あたりの評判を取つた専門家も五六交つて居り、行司も専門家であると感じて、成程千餘の囚人中にはいろ／＼の者が交つて居ると感じた。そこで千人に餘る囚人は何れも土俵際に坐を占め、緒衣着用の看客は雲霞の如しとも譬ふべき有様で、勝負毎に我が最負の方に拍手喝采する聲は天地も崩る、許りである。こゝに頗る面白いのは、看客から纏頭を與へる事で、誰れ殿より金三百圓、誰れ殿より金何千圓下さるなど、聲高らかに披露するのは回向院あたりと同じであるが、これは戯れに空の披露をする譯ではなく、金額こそ百がけも千がけもしてあれ、纏頭を與へる事は實際である。仔細は、己が工錢を以て買ひ得る其日々々の食物などを、或は一人或は數人共同して與へるのである。これより尙可笑しいのは、中入毎に「菓子如何が」と群集を推し分けて物を賣りあるくもの、あることで、これは何ぞと見れば、米麥四分六の辨當の残りをかき集めて小さな握り飯を作り、黄粉きんこに砂糖を交ぜたるをつけたもの



である。但し之れを賣り歩くのは唯だ場面を本場の相撲に擬せんと、醉狂もの、所爲で、賣る譯ではなく、望むものあれば随意に取らすのである。

## 一一一 演 劇

獄中に相撲興行あるさへ人は意外に思はんが、尙それより更らに意外なのは演劇の催しある事である。これは無論獄中に許すべからざる事であるが、併しこれを黙視すると云ふのも矢張り多衆を一處に集め置き、視聽を一處に集中し、監視に便する方便から來たに相違ない。即ち多衆を一處に集め置けば、少數の看守押丁で監視の出来る便利もあるからである。併しこれは斷じて許すべからざる遊戯であるから、典獄もこれだけは容易に黙許しない、唯だ歳首三日に許した例があるとか云ふ事で、自分の入獄中も恰かも歳端に際したので、遂に黙認した。扱て監獄で黙認するからには、舞臺に充つる場所も貸さねばならず、道具類も貸し與へなければならぬ事になる。否看守や押丁も演劇興行に多少の盡力をしなければならぬ事になるは自然の行掛りで、をかしなものであるが、已むを得ない。獄中には俳優も居る、振付けも居る、義大夫

を語るものも三味線をひくものも皆備はつて居る。長期の囚人などは別に自ら慰める事がないから、俳優や振付けに就いて、毎晩監房に這入つてから看守の目を偷んで稽古をする。勿論其道のものと同監したもの稽古するのだ。稽古をするると云うても、勿論幾何も出来るものではないが、半年も一年も少しづつ、遣つて居る内には聊か身體に心得が出来て來る。そこでこれ等の連中の熱心なる希望は、先例を楯に取り、新年三日の休日に之れを試むべく黙許を得た計りで、許すか許さぬかは未知數であるが一意専心これを樂みとして居る。營に藝の稽古計りではない、苦役のひま／＼には係官の目を偷んで種々なる器具を製造して蓄へて置く。相撲の如く、柿色のキレを以て女の服も出来ないから、打掛や鎧や兜や素袍やの演劇用服裝の一切は皆な紙で作るより外に途がない。紙細工ではあるが何れも其道の心得ある者が作るものであるから、中々巧みに出来て居る。模様はいろ／＼の繪の具で描いてあるが、随分滑稽だ。これも繪師がゐるて書くから、兎に角金欄や緞子の様に見える。尙是等の衣裝類はなか／＼數多いことであるが、これ程のものをよくも斯う看守等の目を偷んで作つたものだ。作るのも容易でないが、これを隠し置くは實に不思議と云ふの外はない。監房は出入ともに衣類検査をするから禁



制品は一つでも隠して置くことが出来ない。ドウしても是等の品物は工場へ隠して置くより外仕方がないが、此工場も毎日日暮囚人が監房に入った後、隅から隅まで十數の看守押丁が検査をするのであるから、隠し置かるべきではない。で正月となつて演劇を黙許することになれば、其結果として、斯る器具装束の類も黙許することになるが、平日こんなものが顯はれたら、何れも嚴罰を受けるのである。扱て一月元日より三ヶ日演劇を黙許する、事となると、先づしつらはねばならぬのは觀覽席であるが、是は監獄の方から監督上の便宜を圖つて教誨堂を貸し與へた。是は在監人千名以上を集めて教誨する處であるから、劇場に充つるには屈竟の場所である。劇道の心得あるものが此廣い堂の一隅に、土砂など運ぶ爲に車上に装置する大きな箱を幾つとなく積み重ね、(信州には荷車と云ふもの何れも車上に大なる箱を載せ、それに竹木土石等を入れて運搬する)舞臺の三方は葦簾をはりつめ、大きな梯子を一方に渡し、板を敷いて花道にあて、その背後に樂屋を作る、滑稽ながら宛から舞臺に見ゆるもをかし。そこで引幕もいくつか紙で作つたのがある、紙捻に環が出来てゐて、自在に卷舒の出来る様になつて居る。囃子方も専門家が居るが、唯だ缺けてゐるのは、三味線、太鼓、鐘の如き樂器は一切作るこ

とが出来ないので、三味線は口三味線である、太鼓の代りに桶の底を打くと云ふ次第である。けれども兎も角も多少其道に心得のあるものがやるだけに、滑稽ながらも聞くに足るものがあつた。

登場の役者の顔には或は隈取りがあり、日にやけた眞黒な顔に白粉代りに胡粉を塗りつけたりして、馬鹿に白いところがあるかと思ふと赤黒い肌が露骨に見えたりするのだから、お姫様などは殊の外滑稽であつた。それから外題は雑多で、今寺小屋をやつてゐたかと思ふと忽ちにして太十(太閤記十段目)、忽ちにして琴責め、忽ちにして熊谷陣屋、忽ちにして毛谷村といふ工合に、もの、十分もやつたかと思ふと、すぐ次の劇に移るので、まるで走馬燈を見てゐるやうであつた。

かうして一日に十番から十四五番づゝの戯題を演ずることが三日間つゞいた。無論練習がつゞかないから、一つのものを経めてやらうとしてもそれは出来ない。しかし、やる部分だけは藝も相當に練習を積んでゐて、今少し練習をすれば、マア田舎芝居の役者程度にはなれると思はれた。團十郎や菊五郎や左團次などの假聲なども、巧に使ふものもあつた。觀覽席では、



時に成田屋、音羽屋など、囃し立てたが、此日は大抵の事は黙許されて、監督の看守等も極めて鷹揚であつた。

### 一三 獄中の賭博

獄中にある囚人一千餘名、罪種はさまざまであるが、多数であるのは賭博犯であつた。恐らく全国の監獄中斯く賭博犯囚の多い所は他に無からう。長野縣に賭博が如何に盛んであるかの一端が窺はれる。此の賭博犯は概ね現行犯であるが、中には博徒が態々小事犯を構へて入監するものもある、勿論斯様なものは専門の博徒である。つまり獄中で一ト仕事をやらうといふ料簡から這入つてくるのだ。元來一年の季節から云ふと、農繁の時が、賭博の相手の尤も少ない時で、彼等の不景氣の時は此期節である。慙う云ふ時節には、娑婆にあるよりは監獄の方が却つて商賣が出来ると云ふ、意外な事で這入つて來るのである。彼等は入監すると、抵ね未決監内で同房の者を相手にして奇偶ちやうはんを遣る。相手になることを拒むと、出獄後復讐をすると威嚇するから、大抵は相手になるが、其の相手の多くは初心であるから無論負ける。すると差入れ

である塵紙に味噌汁や醬油などの有合ふもので借用證書を書かせる。いやだと云へばまた脅迫するので、已むなく書く。さうすると、前に陳べた方法で衣類の内へ隠して宿元へ下けると云ふ譯で、此の證書が後日祟りを爲すのである。尙ほ又監中で威嚇手段で乾兒を作る事も少からずある。在監人中には、今乾兒になつた方が却つて將來の便利だなど、間違つた考へから進んでなる奴もあるが、多くは威嚇されるので仕方なく水杯をして師弟の禮を取る。愈々此奴出獄の曉には、證文を以て相手の處へ怒鳴り込み、或は水杯をした廉で強請り込み、結局幾らかの金錢をせしめる事となるので、扱てこそ自から好んで小事犯を構へて迄も入監するのである。兎に角賭博の目的でわざと入監するは案外の事と云ふべきだ。

### 一四 死刑

死刑に處せらるべき囚人を容る、監房は四疊敷位なもので、隣房との間には、双方より二三寸の松板を以て障壁を作り、松板の間に土砂が入れてある事は前に陳べた通りである。又此監房は或は二人位入れてあるものもあるが、大抵は獨囚である。死刑の宣告を受けたものは非常に



煩悶するのと、一つは既に極刑に處せらるゝので其上罪の加はるべきものがないと云ふ處から、二人容れて置くと、或は他の一人をしめ殺すと云ふ様な凶暴を働く虞がある。看守等も、食物を差入れるか或は何かの用で行く時は大に警戒する。或る時一看守が監房の戸口で囚人と語りつゝあつたが、矢庭に中より手を差延べてサアベルの柄を取り、正さに引抜かんとしたことがある。勿論之れを以て看守を刺すか、乃至自殺するか出来心に相違なく、危険至極の事である。故に死刑囚の監房に接近する看守は非常に遠かつてサアベルの柄を押へて注意する。また普通囚は日常看守室へ出して衣體検査を行ふのが例であるが、死刑囚だけは出さぬ。しかし長く監房に居ると、髭を剃つてやる場合もある。普通囚には剃刀を用ゐるが例であるが、死刑囚には鋏を用ゐる。是も剃刀を奪はれまい用心からだ。扱て又死刑の執行がある當日は誰云ふとなく其事が知れ渡る。これほど囚人に激切の感情を與へるものはないと見えて、平時に於ては、夜中入房の後は看守が如何に矢笠しく云うても、私語騒然として到底制し切れるものがないが、死刑の執行ありと云ふ前夜は、殆んど互ひに申合せた様に、全監水を打つたる如くヒツソリとなると云ふも、一種の感に打たる、自然の現象であらう。今頃はそんな事もあるまい

が、當時は死刑執行の當日には特に頭を刎ねた魚類を全囚に喰はせた。これは無論此機會を利用して一般罪囚に警告し感化を促すの方便に供し、且つ之れを以て彼等を制御するの助けにしたものであらう。

## 二五 煙草の密入

酒と煙草は云ふまでもなく獄屋の禁物で、酒は絶対に密入が出来ぬが、煙草は何うかすると這入つてくる。元來煙草に對する人間の嗜慾は非常のもので、此の嗜慾を充たす爲めには危険を辭せないものが澤山に在る。神妙にさへやつて居れば間もなく出獄の出来る囚人が、此の嗜慾の爲めに満期間際に犯則して、マゴツキを生ずるものが往々あるのは愚の至りであるが、それほど煙草の誘惑は甚しいものである。獄中では禁制品にはおのづから隠語もあるが、煙草を「クサ」と呼び、煙管を「ラツバ」と云うてゐる。煙管と云うても金屬製のものでなく、西洋の「シガレット・ホルダー」のやうに、木や竹で小さく自製した粗末のものである。看守の目を遁る、爲めに、通例「クサ」と「ラツバ」を油紙に包んで土中に埋めておき、時に出して喫



するのであるが、妙なことには、全然烟草の禁ぜられてゐる所だから、どこかに一吹やるものがあると、その香氣が方々に傳はつて、誰れがやつたとの評判が立つ位である。且つ平素用ゐないものが一服喫すると、其人に隠し難い香氣があるので、それが爲めに看守に看破さるゝこともある。それ故に必らず一喫の後は口を洗つて其香氣を去るを例としてゐる。自分は當時非常に烟草を嗜んだが、危険を冒し犯則までして喫するは愚の至りと思つて、度々喫烟を勧められても一回も口にしなかつた。獄則では此の犯則者に減食の罰を行ふのである。情狀の軽いものには一飯の三分の一を減することになつてゐるが、重いものは暗室に入れて數日間の減食を行ふ。此刑は囚人の最も苦痛とする所である。

## 二六 一椿事起る

茲に一椿事が起つた。自分が高田を去る時或る人が車中に若干の金を投じたことは前に記したが、其の金が護送の旅中につかひ切れず、幾許か残つてゐるのを、洋籍の内へ隠して長野の獄へ這入つたのであるが、此金は私には全く不要のものであつた。或る囚人が満期になつて出

獄匆々糊口に困るといふを聞き、氣の毒の情が起つて、此の金を與へた。すると此金が糊口の爲めに計り使用されず、其囚人が出獄すると、其金の幾許かが烟草となつて獄中へ這入つて來て、それが長期囚の手に入つた。無論出獄者と此長期囚の間に約束があつて、差入れさせたのに相違ないが、どうして此の禁制品が這入つて來るかといふと、監獄の高屏から工場附近の或る地點に投げ込むのである。あらかじめ時間と場所が申合され、投げ入る、ものが獄内の地形を知り事情に通じてゐるのであるから、看守の目を偷むことが出来るのである。扱て烟草が一袋這入つて來ると、一種の商賣が内々行はれて、密輸者は成金となると云ふ譯は、一袋の烟草は一圓位のものに過ぎないが、監内喫烟嗜好者は一服十錢と云はれても其價を拂ふことを辭せぬ。それだから一圓の烟草を所持するものは、十倍二十倍の所得となるのである。勿論監内では金銭で買ふ譯には行かないが、金銭に代はるものがある。即ち前にも述べたが、百日以上の在監囚は工錢の内から毎日三錢丈けのものを買ひ得るのであるから、それを以つて烟草と交換するのである。斯様な譯で、烟草の密入を受けたものは、單に喫烟の嗜好を充たし得るのみでなく、交換で他の供給もあることになるから、彼等が危険を冒して斯る犯則をなすのも理りあ



りとも云ひ得よう。扱て此の密入が遂に看守の知る所となつて、犯者は終に暗室に投ぜられた。此事は自分の與かり知らぬ事とは言ひながら、源に溯れば自分が惻隱の情が動いて金を恵んだのに胚胎してゐるので、自分は監内で慈悲心を起すなどは無用の事だと感じた。看守は犯者に金の出處を厳しく糺したと聞いたが、どう云ひ紛らしかしたか、終に累は私に及ばなかつた。

## 二七 暗室

前に暗室の事を云うたから筆の序に大略を録するが、暗室は僅かに一人を容る、丈のもので、云はゞ玩具の土藏の様なものである。そしてそれが四隣に人語の全く無い所を特に選んで設けられてゐる。寂寞を感ぜしむるのも苦痛を與へる一方便であるからである。自分は監獄研究の資料として、この中に幽閉されたもの、感想を聞きたいと思つて、三日間此の刑を受けた者に就ていろいろと質問をした。その話しに據ると、内部は一點の光線も通ぜず、絶對暗黒である。人語は一切聞くことが出來ず、狭い爲めに正坐の外はなく、眠るにしても正坐のまゝで無ければならず、空氣を通ずる所はあるが、寒中などは冷たい恐ろしい風が肌を衝いて堪まら

ないほどつらいと云うた。食物の差入口があつて三食を差入る、から、それで初めて晝夜を判ずるのであるが、特に粗食を量を減じて與へるのだから其の苦痛も甚しいが、尤も困るのは空氣抜の穴から推し入る冷たい空氣であるといふ。此の囚人は三日間の幽閉で、ひどく衰弱し、且つ足部に浮腫を生じて、大關おほせきの足のごとく膨脹してゐたには一驚を喫した。

## 二八 雑事雑感

獄内の事を書けばまだ色々あるが、年を経て忘れたことも少なくない。爰に最後に思ひ出のまゝの雑事雑感を録して筆を置くことにする。

△各房には房長が置かれ、又助役らしきものがある。これは監獄より命するもので、自分も既決囚となつても、房長であつた。新入の囚が房へ這入つて來ると、一同輪坐して容を正し、新入囚を中間に正坐せしめ、房長より住所姓名を問ひ、獄法を聞かせるの

が、房長の役目である。随分房長の權を弄し新入囚を威嚇するものもある様子だが、自分は面倒であるから斯る儀式は助役にやらせた。扱て獄法を云ひ聞かせた上、銘々より所謂娑婆の様子を聞くが常であるが、何より先きに囚人就中長期の囚より問ひ出す



のは、娑婆に大赦の沙汰がないかと云ふ事である。或時一人の新囚が這入つて来たが、例の如く大赦はないかと聞いた處が、其者は意外にもありますと答へた。自分は之れを聞いて、いゝ加減な戯言を云ふナといふと、其男は「私の町の大社は確か氷川神社であります」と云つたので笑はせた。

△舊監獄則には癡疾となれば宿へ下げると云ふ個條があつたので、舊監獄時代に入監した囚人で、癡疾になつたものがあれば、舊法に據り宿下りの特典を得る事になつてゐた。それが爲め長期囚などに癡疾の眞似をするものがある。自分の在監中にも一人あつた。これは片脚が利がないと云うて常に竹馬に片脚を載せてゐたが、二三年前より在監して居るものに聞くと、あの男の竹馬に足を載せてゐるのは随分長い間で、もはや半年にもなりません、全く癡疾らしく見えますが、監獄警は屢々診断して足の筋など

に異状がないと云うて癡疾と認めませんと云うた。然るに此男不都合な所爲があつて、集治監へ送らるることになつたが、彼れは看守長に特に面會を請うて、此の長い年月癡疾を装うたが、遂に欺き果せず、遺憾に堪へないと、始めて白状し、他監へ移さるゝ事となつた上は最早詮なしと云うて竹馬を棄てて、其の目前に躍り廻つて見せたと云ふ事實がある。

△これも入監中の事であるが、某看守長の機智で全監囚を鎮撫した話がある。或る夜監獄附近に火事が起つた。在監人は半鐘を聞いて噪ぎ立つた。斯る場合には火事に託して破獄を企てるものもあるから、監獄の一大事である。此際に處して旨く囚人を鎮めるのは決して容易の事でない。看守長は機智あるものであつて、囚人が騒ぎ立てると直ぐに看守押丁に令して、數百の草鞋を監房中にさし入れさせて、號

令を發して曰く、「今に出すから草鞋を穿いて待つて居れ」と。囚人はそれを眞に受けて騒動を止めた。然るに火事は其内下々火となり、囚徒を解放せずには濟んだのである。

△自分の同房に一人詐僞取財の奴がゐた。此奴詐僞を働く曲者だけあつて、法律なども一通り心得て居て時々詐僞の手段を手柄らしく喋つた事もあるが、日本の法律は嚴密であると云ふ條、潜ればいくらも潜り得られるもので、流石に詐僞専門の奴等は何うにも處分のしやうのない手段を遣る事が多い。其結果斯様の場合には裁判官の認定裁量に據る外法律も致し方がないと感じた。此奴は自分に讀書を教へて呉れと云ふので、相當むづかしい書物を教へて遣つたが、自分に先きだつて出獄する事となつた。其時自分に對して、長い間有難う御座いました。出獄の曉には貴下と私とは身分が違ふから此末お逢申す事

は出來ますまい、従つて御返禮も出來ませぬから、聊か御禮迄に詐僞の祕傳を申し上げませうと言ふ。自分は返禮はいらぬ、殊に詐僞の祕傳などは用がないと斷つたが、彼曰く、無論御入用はありますまいが、只私の心意氣計りにお聞下さいと云ので、自分も監獄研究の材料にもと聞く事にし、始めて恐るべき巧みなる證書變造の方法を聞いた。其事は詳しく述べると必要はないが、兎に角書物を教へた返禮に詐僞の奥儀の返禮は、獄中でなければ無い事である。

△嚴冬烈寒の折、監房中に臥して、半夜目を覺ますと、窓外には吹雪の聲が聞こえて如何にも寒氣凜烈である。夜は更けて一時か二時であるのに當直の看守は監外を警衛して、サアベルの地上に觸れる聲が聞こえる。考へて見ると、看守は一ヶ月僅かに十圓や十五圓の薄俸の者であるのに、此の極寒凜烈の風雪を冒して夜半に監外に立つは随分つらい事であら



う。これを監中を擁して温臥して居るものに比すれば、苦樂は實に天壤音ならずである。然るに温臥するものは呻吟して安んぜず、彼れは甘んじて烈寒風雪の裏に立つを敢てするは何故であらう。唯だ彼れは自由天地の人、これは自由を缺くの境界に居るが爲めである。自由は眞に尊むべきだと今更の如く感じた。

△人は言ふ、獄中は著述に最も適當な處だと。自分も入獄前は斯く信じて居たが、實際経験して見ると決して適當の場所ではない、否寧ろ獄中ではよい著作は出来ぬと考へた。前に述べた如く、三浦典獄の依頼で監獄論を書く事となり、在監中は大に勉強している、工夫もして見たが、初めの二ヶ月位は實に困難を感じた。全體監獄の事を獄中に書くのであるから、最も適當の場所である様に誰れも思ふであらうが、實際は反對で殆んど筆の動かなかつた事

が幾回もあつた。何故と云ふに、思構と云ふものは種々な刺激や聯想で起るもので、毎日々々居る所の室、見る所のもの、接する所の人に毫も變化がないのであるから、思構を起すの刺激は更らにない、工夫を促すの聯想は些しもないから、頭腦は函に入れられた如く、腦漿は凝結した様になつて、面白い思想や考案は容易に起らないのに閉口した。依つて千篇一律に其日を送る境界に在つては、到底名著などの出来るものでないと考へた。此の感は獨り自分のみでない。偶々携帯したヒスクの「コスミック・ヒーロー」の内に、コムトが「ポジチヴ・ヒーロー」四巻を著した、それに對する或る學者の評が擧げてあつて、コムトは外界との交通を杜絶するを以て眞の哲理を講ずるの一手段となし、第三卷目よりは一切の交通を遮斷し、新聞紙すら家に入るを禁じ、一心一向に哲理を講じて筆を執つたが、著作の成績

に就て批判すると、外界杜絶は所期と反對の結果を生じ、第三卷以下は、前二卷に比すれば劣つて居ると書いてあるのを讀んだ。して見ると、哲理の如きですら尙ほ且つ外界の刺激を要する、況んや其他をやである。

△監獄に教誨師のあるは昔も今と變りなく、大概一週間に一回宛、教誨堂に囚徒を集めて其説を聽かせ、また時には宗教家などを聘して法話を説かしめ、之れを以て遷善感化の方法を講じて居る。自分も毎度其席に連なり聽聞した。教誨の必要は言ふまでもないが、教誨の方法が宜しきを得なければ何等の功能もないと感じた。全體罪囚なるものは多くは無教育者だが、しかし其割合に利害の打算には明かなものである。而るに教誨師や佛教家の説く所は、幾何か教育がなければ理解の出来ない様なものが多い。例へば佛教家の法話の如きは専門語が七八分を占めて

居るから、到底會得が出来兼ねる。斯様の事を何十回遣つても、遷善感化は愚か、何等の功能もないと思つた。現今では教誨の方法も定めて改善されて居るであらうが、兎に角罪囚と親しく起臥して、よく其性質を理解した上、直接の利害に根據を求め、罪を犯せば結局如何程の損がある、正當に行けば斯様な得があると云ふ様な説き方でなければならぬと考へた。出獄後、二三の教誨師を尋ねて議論を闘はした事もあり、終には教誨師にも知られて、特別の場合に一場の教誨を遣つて呉れと頼まれた事もあつたが、一回も試みなかつた。

△長野監獄に於て自分が最も心配したのは防寒の一事であつた。人も知る如く、長野の冬は全國に冠たる烈寒で、普通の生活ですら防寒は容易でない。況んや獄中で、殊に自分は天性寒を恐れ、幼少より多くの服を纏ふ習慣に育てられてゐるから、防寒の爲



めには人知れず非常の苦心をした。自分の入監は夏より始まり翌年の春の末に及んだのであるから、寒暑を獄中に迎へたのである。然るに獄規によれば、そろ／＼寒氣に向ふ時節より十一月半ば頃迄は、一重の肌襦袢と袴一枚、股引にて通さなければならぬ。確かに記憶するが、四圍の山々には皆な薄綿を被つた頃はまだ袴であつた。信州の此頃はな／＼寒いから、連も自分の體では凌げない。さりとて勝手に己が衣服を着用されないは知れ切つて居る。そこでドウにかして此の寒氣を防がなければならぬといふ工夫したが、前にも述べた通り、一尺の布すら容易に得られない處であるから困つた。手本など書き遣はした代りに古手拭七八本許り集め、之れを人に頼んで柿色が殆んど白くなるほど洗はせ、これを試みに肌着の背中へ三枚並べて縫張りしてみたが、斯うすれば裕になる譯で、やゝ暖かく感じた。そこ

で更らに又一枚づゝ張つて、遂には五枚重ねになる迄其上々々と張つたが、大分暖かに感じて、兎に角綿入の衣服に更へる時迄凌ぐ事が出来た。漸やく綿入の服を給されたが、これも極めて薄いもので、肌着の上に一枚の綿入を着し、上に綿入の羽織を着るに過ぎないから、愈々烈寒の時節になるとな／＼堪まらない。併し今度は古切れの縫張り位では到底おつ付かない。然るに爰に妙な工夫が出来て、吾ながら感心したのは、綿を得て羽織並びに綿入に入れ増しをした事だ。それはドウするかと云ふと、監房中の満期囚が出獄の節、監獄から借受けて居る柿色布團の綿を抜くのである。獄規として囚徒の既決監に入る者には布團一枚を貸與へるが定めであつて、満期の曉には之れを返さなければならぬ、そこで其の布團から三百目や五百目の綿を抜き出しても、看守に氣付かれるものではない。これは實に名法であ

つた。扱て抜き取りたる綿を持出すも容易である、毎々入房の折には看守室に於て各囚の衣體検査をするから、何でも携帯が出来ないが、朝出房のときには改めない、そこで抜き出した綿を懐へ入れて出ることが出来るのである。斯くて己が室へ綿を持つて来て綿造りをやつたが、不完全ながら羽織も綿入も背中だけは大分厚くなり、恰かも二枚程の綿入を増した程になつた。斯る方法で防寒其功を奏し、入監中は一日も寒冒に罹つた事はなかつたが、此一面には看守がそれと氣が付いても黙認した情もあつた譯である。

△獄中生活で、尾籠の事ではあるが、排尿、入浴、半風子について語るべきことがある。先づ排尿から云へば、入獄中は便通の時間が一定し、また常に多量のことを排泄する。之れは粗食の結果であらうが、兎も角一定の時間に一定の分量を排泄すること

は自分がこれ迄覚えのない事だ。元來自分が入獄の當時は壯年氣鋭の折で、酒を多量に飲んだり随分亂暴をしたもので、兎もすると健康を害した。然るに入獄以來、一切の自由を奪はれたとは云へ、日々規則立つた生活を遣るので、却つて壯健に赴き、且つ長野監獄は監房もよく乾燥してゐたので、皮膚病の如きを一切受けなかつたのは、不幸中の幸ひであつた。入浴は一週一回許されたが、監獄の浴場は一種の奇觀だ。何分にも全體の人間が皆柿色の衣類を着て居る結果、皮膚に此色が浸潤してゐる。此柿色の人間が幾百人も入浴するのだから、浴槽中の水は赤くなつて居る。槽外の流し場を見ると、處々の大きな垢の塊りがまた皆柿色で、満目赤色ならざる無きに驚いた。多數の囚人とすれ合つて槽中に入るのが如何にも不氣味で、不愉快を覺えたが、慣れて見ると入浴は流石に爽快を感じしめる。浴場へ篋を以つて引



いてある水だけは、赤色を帯びず、全く清水であるから、之れをザンブリと被れば、全く五體が清淨になり、一入爽快ひとしほを覺えた。半風子に就ては誰れもいふごとく、獄中のそれは一種特別である。其の大きさが普通のものよりも三四倍もあるから、衣服を検すると見通すやうなことは無い。繁殖力が猛烈で、如何に清潔に身を持しても、どういふ譯か、一夜寢て翌朝検すると、必らず二三十位は衣類に附着してゐる。自分は獄中種々特待を受け、寒中火の豊富な處に置かれたから、着衣を乾かすの便利もあつて、出來得る限りの方法を講じて見たが、一向效力がなく、毎朝着衣を脱して大きな火爐の上に、それを翳すと、無数の半風子がバラ／＼と火中に墜ち、異様の聲を發して炮烙の刑に就く。これが毎朝の事で、朝の虱狩は日中行事の一つであつた。

九月五日 高田早苗氏より書狀來る、中に余に寄するの國風二首あり。

世の塵を拂ふべき身はつなぐとも

ひとやの塵は汚さざらん

兔に角に誓ひし甲斐も荒波に

隔てられぬる友千鳥かな

△最後に獄窓日誌から二三の事を抄録する。

十日 友人小坂駒三郎氏より、ダーウキンの「オリジン・オフ・スピーセス」の差入あり、又山田奠南（喜之助）氏よりペーソンの「心理學」差入あり、巻首に奠南の詩あり。

如今天下悉俳倡、丈夫偶誤觸朝綱、

枕函秋冷鐵窓月、雁行寒更愁夜長、

獄中外事を知るの一機關なり。

十三日 副典獄、獄書を齎らし來り訪ふ、監獄醫岩崎喜七又來訪、清佛開戦のことを報ず、岩崎は高田近傍の人にして、曩に高田病院の副院長たりしが、今監獄に來りて醫官たり、常に來りて世事を報ず、

きたりと聞く。

十月二日 星亨氏、新潟に遊んで拘引せられたりと告ぐる者あり。

十六日 副典獄より、赤井景昭、静岡に於て縛に就きたりと聞く。

廿二日 疋田新次郎氏、上京の途次來り訪ひ、信越鐵道、官設に決すと聞く。

十九日 長野縣令大野誠氏、病篤しと聞く。

廿九日 大野縣令易簣の報を得。

廿一日 「高田新聞」を齎らし來り、私かに與ふるものあり、黨友尾崎行雄氏、清佛事件視察の爲め清國に赴くの廣告を見、事件の容易ならざるを知り、轉た出獄を思ふの念に堪へず。

十一月廿三日 新嘗祭、自由黨解散の事及び前新潟縣大書記官木梨精一郎氏、長野縣令に任ずと聞く。十二月廿五日 朝鮮暴動の報を得。



圖書その折々

Figure 1: A page of text from a book, showing faint, illegible characters. The text is arranged in vertical columns, typical of traditional East Asian book layout. The page is aged and shows signs of wear, including discoloration and small stains.



一 圖書館の不備と其補足私案

圖書館の現狀

近年日本の圖書館も相當に進歩したに相違ない、御大典記念に各府縣に圖書館の設置されたものも少くない、かぞへ來たれば圖書館と稱するもの八千幾百に上り、文化のため喜ぶべきではあるが、しかしその内容如何と吟味するときは、まだくゞ整頓に甚だ遠いといはざるを得ぬ。各地にある大小の圖書館、それが府縣立であれ、市立であれ、それ等はたゞ僅かに形式を備へたといふまでだから論外におくとして、三都にある公私の大圖書館について見ても、未だ頗る備はるに遠いものである。これ等の圖書館の大なるものは現に百萬に垂んとする藏書を有してゐるけれども、洋籍の備はらざるは勿論、和漢書においても決して備はつてゐるとはいひがたい。圖書館を圖書の淵叢と解してゐる者は圖書館萬能を説くけれども、今日の狀態では萬能どころか、百能もどうであらうか。普通一寸の用を足す圖書は缺けてゐぬとしても、少しくこみ



入つた事を調べようと思つて、圖書館に行つて参考書を捜して見ても、十の七八は備はつてをらぬので失望する。なほ一段高い研究となると、参考資料を得ることは幾んど不可能である。例へば古書を精確に校正せんとすることがありとすると、それには古版を要する。支那の本ならば宋版、元版を参考しなければならぬ、或は古代の舊鈔本を参考しなければならぬことがあるが、その底本となるものは絶對にないとはいはぬが、宋元版などは標本位しかなく、圖書館にこれを求めんとするは無理な注文であり、古鈔本なども頗る貴重のもので、それも大體備はつてゐない。宋元版は兎も角、それを日本で復刻した五山版とても標本位しかないことを考へると、大圖書館といつても、今日の所如何にも貧弱であるといはざるを得ぬ。勿論圖書館について求むる所は百般の事に涉り、通例世間に得難いものを圖書館に求めるのであるが、さて實際はその需めに應じ兼ねることが十の七八まであつて、需要者を毎日失望せしめるのが現状である。理想的に十分のことをいへば、世間を捜し廻つても到底得がたいものが、圖書館に行けば見られるといふことでなければ、圖書館は備はつて居るとはいへぬが、圖書館の現状、これを望むのは無理な注文であらう。

圖書館に十分備はることを望むには、資金の供給が今日は餘りに貧弱である。差當り新刊の内外の圖書を購ひ了れば経費が手一杯であるといふやうな現状で、如何にして手を延ばすことが出来ようか。圖書の希覯のものとなると、一部で千圓以上のものが多い、浮世繪本ですら一冊幾百圓のものがある、それを圖書館で購はんとすると無理解な監督者から抗議が起るやうでは、圖書館も縮み上らざるを得ぬ。また今日の如き貧弱な圖書購入費で手を一部五百圓千圓のものに延ばすのは、事實無謀の沙汰であるかも知れぬ。圖書館は、たとひほしいものが市に出ても、経費のために指をくはへて見す／＼逃がして仕舞ふことが頻繁にある。これが圖書館の備はらざる一原因であり、また主なる原因であらう。

圖書館は、最初狹義に解釋して、或る者を探るべからずとした。即ち日本に長く行はれた儒教の影響で、いやしくも風教を助けるものでなければ探るべからずと狹義に解した結果、狹斜文學、花柳の雜書を全く排斥した時代もあつた。追々その非を覺り、これ等のものを備へようとする時は既に遅しで、これ等のもの、價が著るしく騰昂し、これも買ひ易からざるものになつた。大圖書館に割合にこの部類の乏しいのはこのゆゑである。狹斜文學も、風俗研究には今



は大切な資料となり、各種の浮世繪も、同じ意味で必要である。演劇に關する多くの圖書、脚本、臺帳、番付、評判記、淨瑠璃本、これも風俗や藝術の資料であるが、これ等に對し或る時代には風教に害ありとし、或は玩具に近いものとして執らなかつたこともあるので、大體これ等の部類は備はつてゐぬ。これも圖書館を狹義に解した結果に外ならぬ。圖書館を狹義に解したのは、儒教の影響にもよるが、一つは資金の不十分も手傳つてゐる。

圖書館とても書畫部類を全然要なしとするものではない。たとへば繪巻物の類や或る種類の墨蹟や法帖などの類は圖書館になくてならぬもので、現にいくらかはあるが、それ等は偶然にあるので、それも粗悪な副本や複製ものなどがあるまで、その道の研究家が範となし得るやうなものはない。これも購入費がないから生じたことでもあるが、書畫の蒐集は博物館の領域に屬するものとして除外した、めにもよる。なほ圖書館で除外してゐるものには金石の部類がある。これも博物館の領域に屬するとしてゐる趣きがあつて、大體頗る闕けてゐる。

近年帝大でしきりに金石の拓本を集めてゐることは隠れもないが、どこの圖書館でも日本の金石拓本をすら多く有して居る所がない。まして金石の豊富な支那の拓本、殊に近年盛んに出

土する金石拓本に於てをやである。これ等は圖書館に是非備はらねばならぬもので、かつ採集に多くの資金を要するものでもない。金石の内でも最も小なるものは印譜であるが、これが又著名のものだけ一通り備へてゐる所がない。この種のもの、備はらざる一原因は取扱の面倒にもよるであらう。一丈も二丈もある一面碑の拓本を、表装せずには置かれず、これを表装したり適當に保存することが煩はしいために閑却されてゐると思はれるが、どの道博物館に讓つて濟む譯のものでない。

かく考へ來ると、圖書館は多くのものを博物館に讓つてゐたり、世の好事家や趣味家の採るに任せてゐるものが決して少くない、それだけ圖書館は不備であるともいひ得るのである。全體博物館の領域は、どこが經界であるかは面倒な問題で、こゝにはその研究を避けるが、圖書館を廣義に解すると、博物館に讓つたものが當然圖書館の領域に屬することになる譯で、事實圖書館は追々廣義に解せられてゐるが、廣義に解すれば解するほど不備は目立つて來る。従つて圖書館萬能が怪しくなる。いふまでもなく、いくら圖書館に資金があつても到底天下のあらゆる圖書を網羅し得べきでない。それはなほ後段に述べるが、それに先立ち、現在我國の圖書



は如何に分布されてゐるかを一と通り考察して見よう。

## 圖書の分布

日本の圖書の分布してゐる所を尋ねるに、大略左の十箇所であると思ふ。

一、内府 帝室御料の圖書は、宸記、宸翰をはじめとして、御手元本は特殊のもので、宮中奥深く藏してあるから思議の外にあるが、多くの御藏本は、圖書寮において保管してゐる。この内には版本も鈔本もあり、頗る貴重なものがある。徳川氏の紅葉山文庫にあつた、多くの圖書の内、佳本は皆内府に移つてゐる。他に献上本もあり、種々の事情で御買上となつたものもある。日本に唯一の道教の藏經もこゝに存在する。

二、官廳 各官廳には、それ／＼その所屬の記録があり、その廳で出版したものがあり、またその専門に屬する参考書があるはいふまでもない。各省所藏の本を驅つて一ヶ所に寄せ集めたのが内閣文庫で、中には徳川家を初め各藩から引上げたものもあり、各部門の版本の内には珍しい古版や、稀なる寫本もあり、明末清初に支那にほろびた逸書だけでも百點もあつ

て、眞に鬱然たるものだ。

三、圖書館 官私公立圖書館並に各種學校附屬圖書館、一私人の文庫をもこゝに包含する。藏書の數がこの一類に尤も多いことはいふまでもない。なほこの圖書館の範圍には、東洋文庫の如き特殊の圖書を有するものもあり、陸海軍兩省、美術學校の文庫の如き、其専門に屬するものもある。

四、博物館 東西兩京にある博物館、表慶館、遞信博物館などもまた圖書の淵藪である。前にも陳べた如く、こゝには圖書館にあらまほしいもので、圖書館に備はらざるものが多い。殊に貴重珍奇のものがある。

五、社寺 神書佛典の淵藪は社寺である。社寺の縁起を初め古文書は多くこゝに存し、中には國寶となつてゐるものもある。經卷の最も大部のものは一切經で、芝の三緣山には三大藏經があり、東大寺の聖語藏には世に知れざる珍奇の經があり、文書についていへば、東寺には百合文書があり、高野山にもおびたしい古文書がある。尾張の眞福寺には、佛書の外に儒書や古鈔本が多く藏してある。



六、史料編纂所　これは帝大の範圍にあれども、圖書館とはおのづから其性質を異にし、史料の集積所である。凡そ國史の資料となるべき各時代の文書は、謄寫によりて頗る備はり、諸家の貴重書類の副本は、大略こゝに存するといふも不可でない。圖書館に最も缺けてゐる、この部類のものは概ねこゝに藏されてゐる。

七、舊家　華族堂上家には、その家に傳はる古記録が多く藏されてゐる。むかし世襲的に儀式典例を司りたる家には有識故實いしやくに關する古記が保存され、且つ諸大名が歴代蒐集した藏本も夥しくある。加賀の前田松雲公の蒐集の如きは古今藏書家の魁首で、その佳本の多きは天下に冠絶する。

八、富豪　この内には前の舊家に屬するものもあるが、金満家殊に暴富の家が金に任せて天下無双のものを買ひ集め、それを誇りとするものが少からずある。その蒐集は概ね書畫部類に屬するが、中には圖書と見るべきもので、巨資を投ぜざれば手に入り難いものがある。希觀の繪卷物や古寫經や上代の墨蹟などが、多くは此手に歸してゐる。

九、藏書家　各方面の學者、或は圖書の趣味家が、研究、或は趣味のために多く圖書を蒐集し

て私藏してゐるものが少くない。殊に趣味家の蒐集にかゝるものには珍奇希觀のものが多く、圖書館に缺く所のものが却つてこの方面に藏されてゐる。舊家にも藏書家が多くあるから、多少噛み合ふやうでもあるが、おのづから性質も異なるがゆゑにこれを一類とする。

十、特殊蒐集家　好事の人が或る特殊の圖書に趣味を有ち、それに偏して蒐集をつとめ、徹底的に蒐集する者が甚だ多い。例へば詩集のみを集める人、俳句、川柳などを専ら集める人、或は往來物、或は黄表紙、洒落本、或は浮世繪本といふ如く範圍を狭めて集める。その結果として希觀珍奇のものはその手に歸し、數は必ずしも多からずとも、その一類においては一種の藏書家である。併し普通の藏書家とその性質を異にするがゆゑにこれを一類とする。

問口を廣げよ

わが國の圖書の分布が上述の如く十類にも及んでゐて、圖書館はたゞその一類に過ぎぬ。圖書館が如何にその數において、他類を壓倒するものがあるにしても、千にも滿つる圖書館を一類にしてゐるのだから重複本が頗る多く、殊にあり觸れ本が十の八九を占めてゐる。特殊の本



に至ると、寧ろ他の九類にありともいへる。勿論他の九類に藏する圖書が全部特殊のものではないが、内府には内府特殊のものがあり、官廳には官廳特殊のものがあり、博物館、社寺、舊家、皆それら特殊のものがある。史料と或る特殊蒐集家の圖書に至つては、その大部分が特殊のものである。かく廣い分布を見ると圖書の範圍も廣いもので、圖書館の藏本は僅にその一部分に過ぎぬ。この中には天下唯一のものや、すでに國寶に指定されたものや、又國寶に相當するものがどれほどあるも知れぬ。その多くは圖書館以外に分布して、圖書館にはかゝるものは九牛の一毛もない。希觀貴重のもは外にあつて、圖書館には藥にするほどの小粒しかない。勿論希觀貴重のも必ずしも圖書館に必要ありとはいはぬが、圖書館に備はるを要して力の及ばないため手に入らないものがどれほどあるか、實に數知れぬほどある。

勿論幾ら金錢を投じても絶対に手に入り兼ねる物もあるから、圖書館が前途大いに發達し購買力が萬倍しても、天下の珍籍を網羅し得るとは思へない、又網羅せねばならぬとも思はぬ。例へば或る特殊の蒐集家の如く、一類に偏して徹底的に何もかも蒐めるごときは圖書館の必ずしもなすべきことでない。往來ものを幾百も寄せ集めたり、千社參りの札を幾千枚も集めるご

ときは、その趣味家にまかせて差支へない。又史料の如き、すでに大成に近きものがあり、これを藏する所もあるのに、それを又一々謄寫して圖書館に藏するにも及ばぬ。陸心源舊藏の二百種の宋本が岩崎家にあるからというて、それに倣うて宋本の蒐集に没頭するにも及ばぬ。すでに特殊の藏者があれば、それを國用に供し、圖書館の不備を補へば、それでよいのである。

圖書館は、將來如何にとめても、天下の珍籍を網羅することは到底不可能である。たゞ大圖書館の面目上、是非備へるを要するものを大いに補足することは望ましいが、何といつても續々出る内外の圖書を買ひ集めるすら容易でないのに、廣義の圖書館相應の體面を保つと求めるのも或は無理かもしれぬ。が實は金次第で或る程度まで整頓せしむることは、強ちむづかしくないかも知れぬ。到底金力において圖書館が手に入り兼ねるものは、藏者に勧めてその寄託を受け、特別に保護する事も、闕を補ふの一法に相違ない。此種のもの、内には正しく國寶たる資格を具するものもあるが、それが頗る危険な状態に置かれ、或は紛失したり、盜難に罹つたり、火災に亡びたりする憂ひがある。この種ものは天下唯一のものであるから、堅固に保護するの必要がある。その寄託を受けるのはその藏者に取つても大切な事であるから、圖書



館の倉庫が堅牢であり、取扱や保管に信用があれば寄託の習慣も起るのであるが、従前斯様のものを等閑視した、めに、藏者は圖書館を無縁の者としてゐる観がある。畢竟圖書館を狹義に解した餘弊で、圖書館が高い趣味をもたないために、藏者が寄託を危むのも一概に無理とはいはぬ。

兎角圖書館の間口を大いに廣げるでなければ、圖書館萬能など、はいひかねる。よし間口をひろけても萬能たることは出来ないにした處で、その氣宇は大ならざるを得ぬ。資力に乏しい故を以つて勝手な理窟をつけて強ひてその領域を狭めるのは、たまく不利を醸すゆゑんで、多くの人は、或る形式を具するものでなければ圖書館には不要と思ひ、或は圖書館に寄託すれば閱覽に供されて、大切なものがサンザンに汚損されるとのみ信じてゐる。これ等は全くの誤解で、貴重なものに對しては、現在でも嚴重の保管法があり、特殊の研究者に限つて監視を附して見せてゐる。

今後貴重圖書の寄託を受けるとすれば、特別の保管法を設け、寄託者の安心を博すべきはいふまでもない。

### 富豪の文庫

私は、以上のこと、貴重圖書を藏する諸家がその襟度を大にして、公益のためその門外不出の貴重書を最も信用ある圖書館に寄託することを勸説するものであるが、他日は兎も角も、今日これが直ちに行はれようとも思はぬ。家に藏も有たぬ人は、火災を恐れて僅ばかりの愛藏の圖書を寄託することは寧ろ欲するでもあらうが、莫大の珍籍を擁する舊大名などになると、それを寄託することが煩はしくもあり、圖書館にしてもそれほど多數の圖書の寄託を受ける設備もない。かゝる大襲藏家は、圖書館に託せんよりは、寧ろ自ら文庫を建てることを選ぶであらう。近來圖書を死藏して人に秘することの愚を覺り、開放の機運に向つて來たのは文化のため喜ぶべきことで、舊大名などで文庫の設立を目ろんでゐるものがチラホラある。私はこれを美舉として賛成し、續々事實に現はれんことを望むものである。

昔の雄藩の内に貴重の圖書に富むは前田家を第一に推すが、私は先づ前田家が率先して範を示してもらひたいと思ふ。なほ他の富豪も追々これに倣はんことを冀ふ。富豪においてはすで



に若干の先例があり、そして尤も著明な例は岩崎家の東洋文庫にある。私は富豪に向つて、必ずしもその襲藏の圖書のみを以つて文庫を經營せよとはいぬ、岩崎家にならうて他の襲藏を繼承することにしてもよろしい。例へば支那の「四庫全書」を一部購ひ得べくんば、それを以つて一館を建てるもおもしろからう。

私は富豪に文庫經營を慫慂すると共に多少の注文がある。それは外でもない、或る特殊の圖書館を設けよといふにある。普通の圖書館は、必ずしも此等の有力者を待たぬ。どこの圖書館にも有觸れた圖書を集めることを繰返すのならば、假令幾十萬の數を寄せ集めても、それは敢て誇りとするに足らぬ。富豪にあらずんば集め得ざるもの、いひ換へれば普通の圖書館の力の及ばざるものを集めてこそ、現在の圖書館の闕を補ふことにもなり、經營甲斐のあることなのだ。私のいはゆる特殊の圖書館とは、これをいふのである。岩崎家の東洋文庫は、某外人が特に東洋に關する古今の圖書を集めたのを譲り受け、それに同じ部類の多くの圖書を附加したもので、東洋研究の資料を多く有する點において到底他の圖書館の及ぶ所でない。こゝにおいてこの文庫に意味があり、その經營が徒爾でないのである。私は富豪に岩崎家にならへというた

が、それは文庫を起こす事を傲へというたに過ぎぬが、更に特殊圖書館を起こすことをも傲へと勸告せねばならぬ。もし追々富豪が美術にあれ宗教にあれ産業にあれ工藝にあれ、思ひ／＼に特殊の圖書館を設けるとなれば、こゝに分業が成立して普通圖書館の缺陷も補充し、普通圖書館も自然蒐集の區域を狭め、その主とする所に専らになることが出来る。到底一圖書館で萬能なることは出来ぬ、特殊圖書館を綜合してこそ、初めて萬能に近いものとなるのである。

### 珍書調査と臺帳

特殊の圖書館が將來盛んに起こり、それと普通圖書館とが、分業的に互に闕を補ふことになれば、や、圖書館萬能に近いものになるであらうが、しかしそれがために日本の有するあらゆる圖書が開放的地位に置かれたといふことは出来ぬ。日本には隠れてゐる圖書が頗る數多くある。書名も所在も知れてゐるものもあり、書名が知れて所在の知れぬものもある。書名の全く知れないもので、或る所に潜み、それが頗る珍奇で大切なものもある。特殊圖書館が起これば、それにつれて何かの因縁で其隠れた或る部分のものも舞臺に現はる、かも知れぬが、實は特殊



圖書館を作る事と隠れた圖書を現はすこと、はおのづから別問題に屬する。されば如何にして隠れた圖書を現はすかの問題について攻究するの必要がある。この問題を解決するに非ざれば、日本の有する大切な圖書を、隠れてゐるゆゑを以つて全く逸するの嫌ひがある。

さてこれを如何にすべきかといふに、結論をいへば極めて簡單である。その隠れたものを徹底的に取調べて、その書名、その時代、その著者、編者、その所藏者、その書の略解題を録して一部の臺帳を作り、これを適當の場所に備へ、研究家の縦覽に供することである。かくすれば、如何なる時代の、如何なる書物が、どの方面にあるか、直ちに分明して、文化を裨補するの端がこゝに開けるのである。研究家はこれにより長く尋ねて知り得なかつた其の所在を知ることが出來、或は思ひも寄らぬ好資料のあることを初めて知ることにも出來、便利を得ることが甚大であらう。これが隠れた圖書を世に現はす一法である。慾をいへば、謄寫して副本を作りたくもあり、或は刻して世に流布させたくもあれど、それはなかく、容易の業ではない。最も簡單で勞費を多く要せず實行し得るのは、差向き臺帳を作ることである。

かく結論をいへば如何にも簡單である。謄寫本や刊本を作るのに比べればたやすく行はれるとはいへ、實地に臨んでは多少の面倒がある。第一、書名も所在も知れてゐる圖書は、概して著名のものでも圖書界には大略ながら書目も存してゐるから、これを臺帳に録することはあながち困難でないが、第二の書名のみ知れて所在の知れざるものと、第三の書名も何もかも知れないものに至つては、さながら雲を攫むが如きもので、氣根よく寺社や舊家や藏書家について調べる外に手段はない。圖書に經驗のない人は、諸家についてその藏書目録を調べたら、およそは分るだらうと思ふでもあらうが、實際さう簡單には行かぬ。その譯は、圖書のある所に必ず藏書目録があるとは限らぬ、假令あつても、全部の圖書が載つてゐるか否かも分らず、素人の作つた目録は大抵役に立たず、又目録だけを見ても書物の價值は知れかねるから、どうしても實物について調査を遂ぐる要がある。大抵何れの方面においても希觀書を藏する所には、因習的に重きを置くものがあるけれども、實地について見ると案外つまらなかつたりする、その代り軽く扱はれてゐた藏書の内にかへつて珍籍を發見することもあり、或は圖書に全く無理解の舊家においては、珍書奇籍を藏しながら、ほとんど一切を辨ぜざるものもある。總じて珍奇の逸書は、刊本は極めて少く、多くは鈔本であるから、或は書名を缺くものもあり、その體裁



甚だ整はず、反故に近いものもあつて、それが兎もすると非常に年代が古く、且つ名家の自筆稿本であつたり、世に稀な記録であつたりすることがある。かくの如きは、相當の能力ある専門家にあらざれば判じ兼ねるものであるから、この調査は決して容易でない。

ただ幸ひにも以上とほゞ似通つた調査を永く續けた先例がある。それは即ち帝國大學に附屬してゐる史料編纂事業である。この事業の大意は、官府の力で諸家の藏する隠れた史料を借り受け、それを謄寫編纂するのであつて、永い間の繼續事業であるから、そのすでに得た史料も夥しい數に上り、史料の備はつてゐる方面には殆んど觸れぬ所がないまで行き渡つてゐる。この蒐集は主として史料にあるので、それに關係のない圖書はこの編纂所の干與せざる所であるけれども、史料となるべき圖書の存する所には、他の圖書も亦存在すると推定しても不可なく、史料編纂係の多年の經驗に聞けば、某寺、某社、某家にはおおよそ如何なる圖書があるか位な見當はつくべく、又史料編纂係が史料として抄録した其の原書それ自身は、概ね臺帳に登録さるべきものであらう。兎も角この編纂事業が先驅をなしたことは書目臺帳を作るに非常の便利を與へるもので、愈々臺帳を作るとなれば、この編纂係とは密接の交渉あることはいふまでもない。

### 調査方法

修史編纂について學び得た一事は、官府の力に頼らざれば書目の取調べも出來かねることである。書目を作ることは必ずしも史料におけるごとく原本借受けを要するものでないけれども、その秘藏を取調べるにつき、諸家を煩はすことにおいては史料の場合とあへて異なる所がない。随分襲藏家が面倒がり、或は人によつては公表を忌み嫌ふものがないにも限らぬから、どうしても政府の力でやらねばならぬ。若干の審査委員を要するが、それも政府が囑託せねばならぬ。相當の經費を要する、それも政府から支出せねばならぬ。審査の規程も定めねばならぬが、史料編纂の規程と、國寶審査規則を参考して作れば容易である。そしてこの事の主管が政府のどの官廳に屬するかといふに、文部省たるべきは當然であると思ふ。

全國に散在するあらゆる圖書を取調べるといへば、頗る廣汎の區域にわたり、非常に煩はしい様に聞こえるであらうが、實際はそれほど煩はしくない。第一、普通圖書館に備はつてゐる



やうなものは、手に觸れないでよいのである。刊本にせよ鈔本にせよ、これが大数を占めてゐる、それを控除するとなると案外に数は少いのである。殊に史料を蒐集する事業に較べると、甚だしく難易の相違がある。彼にあつては圖書を精讀する必要がある、なほその上に必要の部分を抄録せねばならぬ。或は一部の圖書を全部寫し取らねばならぬこともある。それがために圖書を借り出す必要もあり、謄寫のため巨費を要するは勿論の事である。

これに反して圖書の調べにおいては、臺帳に登録すべき圖書を稽查鑑別し、その書名を録し、著者のわかつてゐるものはこれを録し、不明のものはこれを缺き、年代のわかるものはそれを録し、不明のものは推定して録し、内容については細述の必要なく、たゞ大略どんな種類の事が書かれてあるとほゞ解題を附すれば、それで足りるのである。これ位の事は圖書に普通の委員は即座に辨する譯だが、併し圖書によつてさう簡單に行き兼ねることも幾許かあるであらう。内容について即座にノートの取れぬものや、年代の推定が困難で審議を要するものなどは、僅の日子借出しを要することもないとは限らぬ。しかし恐らくこれは極めて稀であらう。史料調査に比すれば、難易は同日の論でない、従つてはかどりも早く、經費も決して多く要するものでない。

大體この審査は足を舉げて出張を要する。北は奥羽、南は九州までも漁らねばならぬが、しかし出張を要せず、居ながら書名の登録の出来るものも少からずある。たとへば岩崎家に藏してゐる宋元版の如きは、舊藏者がすでに解題を作つて居る。なほ同家の希觀和本の解題も出来てゐる筈。足利文庫の藏書も同様であるし、加賀の前田家などでもその道の人が調査をしてゐるから、凡そは分つてもゐる。内府の圖書寮においても専門家がその員に備はつて調査をしてゐるから、これも凡そ分つてゐる。なほ修史編纂掛にも亦らく調査した結果が備はつてゐるに相違なく、圖書で圖寶に指定したものは文部省に登録してある。凡そこれ等の類は必ずしも實物について稽查を遂ぐるまでもなく、それ〴〵を寫し取ればそれで間に合ふであらう。要するに、専門家が置かれて圖書の整理を擔當してゐる處の藏書の取捨選擇は大體樂なものとするところが出来よう。

出張の煩を省く一法として、廣く天下に登録臺帳を作るの趣意を宣布し、任意にその所藏書を届け出でしむるもよからう。實は紛々たる個人が密かに少數の珍書を有する方面の如きは、



知れ難いものが少からずあつて、全く見當が付き兼ねる。審査委員が出張を厭はないとしても、その先きが判然しないから、これ等に對しては自ら名乗らしむる外はないが、必ず原物を提出せしむること、したい。

圖書の選擇についての細目の如きは、こゝに縷述の煩を避けるが、すでに版に刻され或は活字で印刷されて流布してゐるものでも、その著者の稿本は勿論、稿本にあらずとも、舊鈔本は取らねばならぬ。又異版、異本の如きも、取るべきものがあらう。流布本のあるゆゑを以つて、これ等を閉却すべからざるゆゑんは、流布本は整版と雖も訛謬が少からずある。活字本においては最も正確を失してゐる。例へば諸家の記録の如き、その著名のものは活字本となつてゐるけれども、もと轉寫本を底本としてゐるから誤りが多くあつて、研究家を惑はすことが非常である。

古書の尊いのはその原本にあるけれども、原本は多く門外不出のものであるために、容易に見ることが出来ない。昔は別してさうであつた。新井白石が某堂上家についてその家の大切な記録「人車記」を見せては貰つたが、その時は主人自身庫から取出して來て、人拂をして内證

にこれを示し、且つこれを見た事を口外されては困ると、口留をした位秘密にしたものであつた。そんな譯だから、伴信友のごとき考證家で、惡寫本「扶桑略記」のために大和の長谷寺の創立年代を誤つたこともある。原本若くは原本に近いものが如何に大切であるかの一例として、こゝに今一つ近衛豫樂公のことを挙げる。公は「唐六典」を幾年もかゝつて厳正に校正して自ら版にされた。それが今流布してゐるが、當時「唐六典」の佳本が容易に手に入らず、公の藏本には訛謬が少くなかつたので、公はみづから六典に引いてある原本にさかのぼつて校訂され、毎ページ眞赤に朱が施された。その勞力は實に大なるものがあつたが、やつと校訂が濟んだ頃に、佳本が初めて手に入つたので、それと對照して見らるゝと、すべて直した通りであつたので大いに喜ばれたとあるが、同じ版本でもこんな相違のあるものであるから佳本は實に大切である。公が初めに佳本を手に入れたなら、あたら精力を幾年もこの一書に注がれなかつたであらうに。

### 一種の保存獎勵



談は少しく横道に入り過ぎたが、本體に戻つて、全國の隠れた圖書の所在と書名とが知れたとすると、それを部門を別つて適當に編纂して、臺帳に登録するのであるが、出來得べくんばこれを印刷に附して、廣く必要の所に頒布したいものである。然しこの目録は多分浩漭のものであらうと思ふから、或は經費の關係などでそれが出來ないかも知れないが、臺帳だけは作り上げねばならぬ。そしてそれをどこに置くかといへば、文部省に置くべしといふ説もあるかも知れぬが、閱覽者の便利を考へれば、文部の直轄に屬する帝國圖書館に備へ付ける方が寧ろ便利であらう。

登録を経たる書物について洩らすべからざる緊要の事がある。それは所藏者が變更し従つて所在が移動する場合を如何にするかといふことである。臺帳の最も大切である意味の一つは所在の明記されてゐることであるのに、それが賣買讓與等のため移動するとなると、臺帳は當てならぬものになる。始終所在の正確を期するには賣買讓與を禁ずることも一案であらうが、人の私有物にそんな干渉は出來ないとする、移動の都度その事を届け出でしむることだけはどうしても實行せねばならぬ。勿論審査の結果國寶たるべきもの若くは國寶に準ずべきものを

發見したとすると、それが或は國寶に指定さるゝこともあらう。その結果矢鱈に賣買も出來ないことになるであらうが、少くとも賣買の場合には官廳の許可を得なければならぬことになるのであるが、大體は登録のゆゑを以つて藏書を拘束することを避けたい。

それにしても一旦登録を経ると自家の私有物が勝手にならぬやうに考へて、登録をいやがるものもあるかも知れぬ。しかし臺帳の登録はその書の珍奇希覯を裏書してこれに價值づけるものであるから、案外喜んで登録を欲するかも知れぬ。もとゞゝ大切なものは滅多に賣る氣がなく、これを手離すは萬已むを得ない時であるから、この登録は所藏者にその圖書の保存を奨勵することになるであらうと信ずる。

### 大切な文化事業

全國に散在する圖書が、震火災その他の災害で亡びたものが少からずある。或は無理解の手に渡つて反故として取扱はれて亡びたものもある。これ等の中には今日の識者が一たびも寓目せず亡びたものがどの位あるか、殆んど測量がつかぬ。なほ又外國人に購はれて海外へ持去



られたものもまた莫大である。毎々洋行者のいふことであるが、外國の博物館や圖書館あたりで、内地では到底見られない日本の古書がいろ／＼陳列されてゐて、こんなものがあるかと一驚を喫し、今更それ等の輸出を残念がるものがあるけれども、今は如何ともし難い。これ等輸出については種々の原因があるであらう。外人が高い價を拂ふからといふそれに釣られて、ムザ／＼と日本唯一のものを副本も取らずに出したのもあらう。書物屋などの手から外國に傳はつたものは商賣上已むを得ないとしても、ある混沌時代に古書などを全く理解せず、殆んど外人の取るに任かせたこともないでもない。如何にも取り返しのつかぬことをして惜しいことであるが、これも畢竟自家の藏本がどれほど珍奇で、どれほど貴重であるかを知らないのに坐するのだから、登録臺帳を作ることとは、これ等圖書に無理解の人のためにも必要である。即ち臺帳の登録は濫りに圖書を失ふことを防止する一方便となるであらうと思ふ。

若し夫れこの臺帳が各方面の研究家にどれだけの便利を與へるかといふに、圖書の校勘や校訂や編纂などに實地當つたものには、直ちにその效の頗る大であることが理解される。私も前年埼檢校の編纂した「羣書類從」に倣つて、國書刊行會を起し、未刊の圖書を幾千部となく

出版したことがある。その際につく／＼感じたことは、先づ貴重の佚書が何であるかを知るに困難を感じた。書名が知れてゐても、それがどこにあるか、知れないので困難を感じた。更に校訂をなすに當り、正確若くは正確に近い底本を得るに困難を感じた。古書は多く零本となつてゐて、あちらこちらに散在し藏者が異つてゐるので、それを寄せ集めることにも困難を感じた。さうした場合にこの臺帳が備はつてゐたら、如何に便利を感じたであらうか。「東大寺要録」の如きは、如何に搜索しても一冊だけの所在が知れず、やむなく斷念して、版にしてからであつたか、版にせんとする時であつたか、(刊行會本が坐右にないから)はつきりいへないが)ヤット所在が知れたことがあつて、やれ／＼といふたのなどは、ほんの一例に過ぎぬ。

この登録臺帳を作ることとは私一個の私案でなく、前年同人と共に文部省に建議して實行を促したことがある。文部省はこれを可としながら、國費の都合で今日までも實行しないが、文化のために大切な事業である。これを行へば隠れた圖書も初めて世に出るし、死藏されてゐる圖書も初めて活動の機會を得る。これがために圖書館の不備を補ふことも出來、將來に起るべき特殊圖書館と共に圖書萬能の働きを實現するには、速かにこれを實行することが極めて大切で



あると信ずる。

## 二 高麗藏經に就て

書物の趣味が向上すると、遂にお經にまで赴くのが順序である。つまりお經は、書物の残つてゐるうちで最も時代が古いからである。私は聊か高麗版大藏經に就て小話を試みようと思ふ。

高麗經は日本にもポツ／＼ある、就中尤も有名なのは、京都建仁寺けんにんじに在つたものだ。一體高麗版にも精粗の二種がある。精なるものは紺地の表紙がついて居り、普通の流布本は朝鮮特色の茶表紙のものである。建仁寺のものは紺地のもので、日本に於ける一番佳いものであつたのに、前年經藏が火災に罹つて大部分烏有に歸したのは遺憾の極みである。東京では、芝三緣山しばさんざん増上寺の高麗版一切經が最も名高く、殊に宋版も元版もあつて、高麗版と共に三大藏と稱してゐる。元來増上寺は徳川家の菩提寺であるから、此の三大藏は家康の威力で諸方から最上の藏經を取上げたものである。即ち三緣山の三大藏目錄の序に徴するに、宋本はもと近江の管山寺

に在つたもの、元本は伊豆の修善寺へ平政子が納めたもの、高麗本は大和の圓成寺にあつたものとある。いづれや修善寺を訪うた折、平政子の署名のある零巻を見たが、それは即ち三緣山藏經の姉妹巻である。寺に就て、此經卷を増上寺に譲つた爲め修善寺にはどれ程の報酬があつたかと聞いたら、御朱印を賜つたと云ふことだが、實は其の御朱印は中有に迷つて寺に來ないと云うてゐた。

増上寺の三大藏は同寺に最も大切なものであるから、維新の變亂の起つた時、兵燹に罹つてはならぬと、特に川越かはごえその他の二三の寺に移して鄭重に保護したと、いづれや増上寺で三大藏を一覽した時寺僧から聞いたことを想ひ起す。尙ほ其際三大藏曝書のことを寺僧から聞いた。その大要を云ふと、昔し此寺の學寮は學徒三千と稱して、頗る盛んなもので、従つて學識ある僧も多くゐた。そこで曝書の折には、其多數の中から成るべく老年のものを、確か十六人かを選んで、一週間交代に日出から日没迄擔任させた。此の選に當つたものは、齋戒沐浴して、第一日より第七日まで十六人が分課して、重なる老僧が立會の上、相當の儀式を以つて行つたものだ。渠等は直立三禮し、一卷づつを手を把つて繰ること、恰も田舎の禪寺で今日猶ほ行つて



る、大般若を繰ると同じやり方で風を通した。何故年の若い者を避けたかと云ふと、若いものは粗略があるからといふ用意から来たのである。

版本藏經の内で高麗經が最も重じられる所以は、單に時代が古いといふだけでない、其校勘の精に於て前後無比であるからだ。但し是は高麗高宗の勅版再刻本を指して云ふのである。そも今から九百十五年前に高麗の顯宗が崔士成に勅して見行の藏經五千餘卷を開雕した、尋いで文宗の時に「續貞元錄」に收めてあるものと宋代の新譯とを新雕して増し加へた、前後總計六百三十九函六千五百五十七卷に達し、其經版は之を符仁寺に藏せしめた。處が其れが高宗の朝に至つて蒙古兵の兵火に焼失したので、高宗は其二十三年丙申（我が嘉禎二年）から三十八年辛亥（我が建長二年）に至る十六年間に李奎報等に命じて之を再刻した。其際守其といふ博學の法師があつて、宋本と契丹本と高麗初刻本との三種の藏經を比較對照して微細に參訂校讎した。此の時の「校正別錄」が三十卷あるが、それを繕くと、當年苦心の迹を見ることが出来る。これが無二の佳本と云はれる高麗經で、其經版は見に海印寺の藏經閣に保存されてゐる。さて斯う高麗朝で前後二回までもかゝる驚く可き大出版を營んだのは、全く外敵調伏の發願に出た

のだといふ事だ。それでこそ國帑を糜した意味も領かれる、手もなく今の軍備擴張と同格なのだ。

大藏經は非常に大部のもので、其の一部を有するすら寺の誇りであるのに、三緣山が稀なる佳版三部までも併有してゐるのは、流石に徳川氏の菩提寺だけある。斯る貴重な經を所藏する結果として、元祿の頃、同山に學識の高い僧があつて、高麗經を熱心に研究し、遂に京都に出て、此經を基礎として諸名刹につき、あらゆる古經を照合した末、高麗版が一番正しいと斷じ、多年研究の結果を、「校勘錄」と題して、三緣山から上版した。其冊數は百に上り、佛典界に破天荒の大功德を與へた。此「校勘錄」は、高麗經と共に三緣山の誇りとする所である。

右高麗經の版木を藏してゐる海印寺は慶尙北道陝川郡伽耶山中に在つて、各市邑から茲に到るには、随分困難な道程ではあるが、京城から行くには、大邱驛から百三十韓里、高靈、冶爐を経て行くのが、尤も便利だといふ。同寺は今を距る千五百餘年前新羅哀莊王の第二年名僧順應の創立に係り、其後數回の火災に罹り、現今の伽藍は百年程前の重建で、昔は現存のものよりもズット規模が大であつたと云ふ。藏經閣は二棟あつて、これは李朝に至つて改造されたも



のだが、大藏經版は高麗朝に出来たま、藏してある。其數八萬六千六百八十六枚で、五層の版架に毎層縦に二列に配列し、中央の版架及び壁際に設けたる大なる版架は、猶ほ前後左右から排列する事、恰も洋風の書架に書籍の排列してあると同様である。此寺は朝廷の勅願寺の一で、特別の扱をしたものだが、彼の文祿の役には、多くの寺院が大概荒らされたのに、此寺丈が幸にして免かれた。其理由の一つは、山奥に在つたから見逃された譯であつた。本寺は前述の通り火災の爲めに焼け、従つて種々大切な文書は消滅したが、幸に經藏丈満足であつたので、經版の現存してゐるのは實に喜ぶべきことである。申すまでもなく、これは朝鮮の國寶である。

### 三 古寫經趣味

既に高麗藏經に就て説いた因縁から古經の趣味にも及んで見たい。古經には版經もあり、寫經もある。共に圖書の部類に屬するものであるが、最も古い時代に溯り得るものは寫經である。昔天平あたりの古經の容易に獲難かつた頃には、好事家は其一行を得てすら雀躍して喜んだ。

だ。屋代弘賢ひろかたが武州慈光寺の小水磨せみぎの貞觀經尺餘を得た時などは、ひどく喜んで、一行づ、切つて同人に與へて其喜びを頒つたことがある。

日本で最古の版經は寶龜版の四種の陀羅尼だらにである。其大きさは竪二寸、幅一尺位で、聖武帝が百萬塔に納めて方々の寺に置かれたのがこれである。これが世界最古の版本と云はれてゐるが、近頃支那で稍々時代の近い版本を掘り出したと云ふから、これとそれとが世界最古のものであらう。寫經となると、天平頃のものが澤山残つてゐる。支那から來たものもあり、日本で書いたものもある。久しい間天平以前の寫經は絶対に無いかの如く思はれてゐたが、法隆寺から、天平より六十數年前、即ち白鳳經と見るべきものが出た。それは偶然私の手てに歸したが、これには年號を闕き、干支のみ書かれて、白鳳と見るべき特徴は、「河内國志貴評」とあつて、郡の字に「評」と云ふ字が用ゐてある。白鳳年間に出来た金石には郡の字は皆な評となつてゐる。大和の法金剛院の鐘銘や下野國造碑にも同様の字を見る。嘗に此特徴がある計りでなく、白鳳年間に建てられた、大和の長谷寺の佛像の臺座に刻されてある字が、此經と全く同筆で、干支まで同一である所から、當時同一寫經生が書いたものに相違ないとさるゝに至つた。



書體は天平に較べると一段莊重であつて、そこにも特徴がある。これが日本に現存する寫經の最古のものである。これより稍古いものが二三日本にあるけれども、それは支那出來である。此の白鳳經は金剛場陀羅尼で、一卷經まつてゐるが、これと同時代同筆のものが他に絶對に無い譯ではない。いつぞや田中青山伯から、多く貴重の寫經を示された時に、私と同様のもの、ある事を發見した。併しそれは斷簡であつた。

白鳳あたりの古經には、おのづから超越した趣味がある。併しこれは頗る希觀のものであるから、普通古經の趣味を語るには、寧ろ數の多い、天平經に就てする方が適當であらう。天平の寫經の内には、聖武帝と光明皇后の願經が少からずある。此等の經に就て何人も趣味を感じるのは、其の經卷に收めてある識語で、佛に祈るの意は何人も同じだとしても、流石に帝者の祈願文には堂々たる趣があつて、一誦容を改めしむるものがある。當時如何に佛教が盛んであつたかは此等の識語で看取せらるゝ。支那にも帝王が祈願の爲に納めた寫經が少からずある。それが當時日本へ持來られて、其の經の末尾に聖武帝並に皇后の識語を加へたものがある。これは寫經の煩を省いて他國の寫經を應用したのであるけれども、帝者の識語が連なつてゐる所に一種の趣味がある。

寫經の中には、天子皇后の宸翰、高貴の人の直筆もないではないが、多くは寫經生の筆したもので、帝者の願經を書くには最も熟達の寫經生を簡拔したから、如何にも立派なものが多い。寫經生と云へば輕んずる人もあるか知れんが、決して馬鹿にならぬ。私の友人が曾つて手に入れた、本願寺舊藏の首楞嚴經（天平）などは實に堂々たる書で、寫經生の名が山部諸公と明かに書いてある。これは藥師寺や醍醐寺にある經と同様のものである。同じ友人の所持してゐる根本百一羯磨第八卷（天平十二年願經）は、これも名高い筆者の書いたものだけに、唐人を壓するの趣がある。

寫經生の筆ですら頗る味ふべきものがある。況んや空海や良辨や最澄などの高僧が書いたものになると、更らに玄妙の味を感じざるを得ない。斯る高僧の筆の跡は、寫經にこそ稀れに存すれ、それを離れては多くの場合残つてゐないから、頗る貴いものである。かの國寶になつてゐる仁和寺の三十帖冊子は、空海入唐の折寫字生に書かせた側ら空海自身も助筆したと云はれてゐる。寺の傳では橘逸勢の助筆も加つてゐるといふが、これは覺束ない。兎も角も空海の正



しい筆が此冊子にあるとなると、其一行でも貴いことは言ふまでもない。世には菅公自筆の經があると言つてゐるけれども、今の鑑識家はそれを許さない。大概は當時の寫經生の筆に相違ない。併し其時代が時代だけに、そこに相當の趣味があるのである。

書の外にもいろ／＼味ふべきものがある。先づ用紙である。麻紙もあり、穀紙もあり、また茶毘紙もある。光明皇后の願經などは重に穀紙を用ゐてゐる。穀紙は色が白く奇麗であるから、成るほど女流の好みには適つてゐると首肯される。茶毘紙は茶色を帯びた脆い紙であるが、これには線香抹が漉き込まれてゐるので、宗教味が感ぜらるゝ。

軸の形式にも種々あるが、時代によりそれ／＼特徴もある。檜材のが普通で、水晶、紫檀などの類もある。軸の両端が色漆に塗つてあるのが普通だが、密陀みつたというて、ペンキのやうな塗料を用ゐたものもある。又經卷に野を引くには鉛筆を用ゐたらしい。天平の當時早く鉛筆のあつたことは、其實物が正倉院に存してゐるのでもわかる。金泥や銀泥を解くに膠を嫌つたと云はれてゐる。獸類の脂を忘んだのも無理ならぬ事であるが、それに易へるに何を以つてしたか、豆の精などが代用物の一つであつたらしい。

以上を外にして經卷の表装の種々の違ひや、打紐のことや、經の外部の題署や、扉の内外の繪や、經卷の紙の地模様や、帙あてや、經函きやうぼんなどに就て研究して見ても、少からず興を覚えることがある。例へば、前に擧げた百一羯磨の軸付を見ると、其餘白に山部一校小野などの字がホンの二三字存してゐる。それを「大日本古文書」に就て調べて見ると、筆者山部は花麿であることがわかり、又同書二ノ二九二頁を見ると、此人が紙四百枚を受取つたことが書かれてゐる。こんな工合に分ると、言ひ難い興味を感じ、寫經道樂もやめられないことになる。千年前のことがツイ先達ての事のやうに感ぜられて、面白くなつて來る。

これに就ても古い文書の表装には意を用ゐるべきだ。大抵經卷の卷留まきどの餘紙は、表装の際切り棄てるのが通例であるから、筆者の覚え書などはその爲めに多くは失はれてゐる。此の百一羯磨の巻尾は幸ひにウブに保たれた爲めに筆者の事が知れるのである。若し普通の場合の如く、殘紙を裁ち切つたとすると、千歳の後、誰れか筆者を知るを得べきぞ。殆い哉。



#### 四 六朝文書を観るの記

西本願寺の光瑞師が、支那の西域即ち今の新疆省邊から、多くの六朝乃至唐代の珍什を獲て歸つたことは誰れも知る事實で、今は敢て珍らしくもないが、此の珍什が本願寺に着した、其當時、文學博士内藤湖南氏が其整理を託されてゐたので、内藤氏の好意で私が一番早く閱覽することが出來た。當時私は鉛筆でノートを作り、それを旅館で匆卒書き散らしたものがあつた。最早二十年前の既往に屬し、頗る覺束ない書き留めではあるが、多少鷄肋の感もあるので、爰に聊か補筆して掲げる事にした。

私は東本願寺を訪うたことは度々あるが、西本願寺を問うたのはこれが初めてであつた。寺僧の案内で先づ保護建造物を見た。言ふまでもなく、昔し豊公が豪奢を極めた名残りの建物が爰に移されたので、鴻の間と稱し、疊四百枚も敷くべき大規模のものである。當時豊公が列候を引見したのは、即ち此室であると思ふと、低徊去り難い感興が湧いた。書院傳へに四五の室が連なつてゐる、皆な桃山の遺物で、其の襖や格天井の華囀さは眞に驚くの外はない。

廊下を通り抜けて奥まりたる一室に到ると、爰に内藤氏は先着して、私の來るを待つて居られた。氏は紹介者であると共に説明者でもあつたので、非常な仕合を得た。

先づ寓目のものを分類すると、左の四類となすことが出来る。

- 一 文書
- 二 繪畫
- 三 器物
- 四 金石

廣い室に置かれた種々のものが數百點の多きに及び、時代は六朝から唐代に迫んでゐる。發掘地は所謂の西域即ち今の新疆省の吐峪溝邊である。此邊は沙漠地で、昔しの城墟でもあるが、石壁を掘り崩すと其中から、土砂に交つて種々のものが流れ出て來る。土砂に深く埋藏されてゐるが、幾んど雨のない所だから、埋藏品も皆な乾燥してゐて、文書でも繪畫でも、皆な今書いたやうに繪の具もそのまゝに存してゐる。到底濕氣深い日本の頭腦を以つては想像が出來兼ねるものだ。

第一類の文書は經文が多きを占めてゐる、論語や左傳などの經書の斷片も交り、書簡や借用



證文や、木片で作られた逮捕状などもあつた。此等の文書の内に發掘の際損したものであるが、完璧のものも少なく無い。何と云つても李栢の書簡が最も珍奇のものだが、幸に此書簡は完璧である。

今左に私が特に意を留めたものを列記し、聊か注を加へよう。

## 一 寫經

元康二年の款識がある。これは西晉惠帝の年號で、紙は麻紙、輪廓と罫は鉛線ではなく墨線である。輪廓の天地には唐以後の經のごとく、多く餘地を存しない、これが一つの特徴であると思つた。書は隸楷混合で頗る特徴がある。總じて此頃の經は隸體が多く、楷體のものでも隸味が交つてゐる、過渡期の書體の趣が看取される。

## 一 經書

論語の斷片は唐代のものか、天子の諱の民の字を忌み、代へるに人の字を以てしてゐる。又今の版本とは異同がある。史記、漢書の斷片も、書體を以つて判ずると、唐代のものと思はれた。史記は仲尼弟子列傳の斷片で、漢書は張良傳の一節であつた。左傳の斷片は成公十七年の條で、矢張り唐代のものと思つた。

## 一 書簡

では李栢のものを第一に推さねばならぬ。これが二通あつて、共に完璧である。

他にも、李の名の散見する、同じ書風の反故が一括りあつた。此の李栢は晉書の八十四卷に出てゐる人で、時代は東晉の初、今を距る幾んど千六百年に溯る。王羲之とは同時であるが、李栢は寧ろ先輩である。此人は武弁で、焉者王の麾下の人であることが晉書で知れる。現に此等の書簡は皆焉者王に寄せたもので、武弁の書だから、敢て巧妙とも言ひかねるが、時代は争ひがなく、どことなく羲之の筆意に似通つた所があるかに見受けた。天地間に正書なしと云はれてゐる羲之と同時代の人の正書が存してゐて、臙ろけながら羲之の肉書を想像し得ることは一興である。此書簡の紙は我邦の檀紙に似た厚い強いもので、書は行體であつた。此書簡はエンチダリヤより發掘したとある。

## 一 借用證文

二通の内一通は完全で、年號は大曆十六年とあり、借用主は楊三娘で、紙尾に舉錢人、保人が列記されてゐる。舉錢人は貸主で、保人は保證人であらう。何れもその年齢を記してゐる。楊三娘とあるのを見ては、我が藤三娘を聯想せねばならぬ。藤三娘は我が光明皇后が自書の樂毅論に署された名であることは云ふまでもない。總じて證文の體裁、文字、用紙共に吾が天平文書の面目があるのは同時代であるからだ。他の一



通は文言が完くない、併し唐代の書で、矢張り大曆のものであると思はれた。此の二通はクムトラで獲たと聞いた。

一 逮捕狀 幅三寸程の木片を薄くへぎ、其一面に楷書で細記があれど読み兼ねた。今も支那では罪人の逮捕狀は紙に認めず、木片を用ゐるといふが、これは書體を以つて判ずるに、恐らく唐代のものであらう。

以上の外に少からず經卷があつた。六朝の經卷などは容易に觀られないものであるのに、ここには幾十卷を一束にしてあつて、其の豊富なるに驚かざるを得なかつた。書はすべて楷書であるが、一字の内必らず或る一畫だけ肉太に書いてあるのが此頃の特徴で、もあつたらうか。どの卷を見ても此の趣があつた。書は唐經に較べると整つてはゐるが、どこかに氣魄があるやうに思はれた。唐代の經卷は殊に多くあつたが、これは吾々も見慣れてゐるもので、我が天平經と格別の違ひがない。すべて書體は圓熟して、六朝經の如く粗笨の處がない。

第二類の繪畫は大體佛畫であつて、其十中の八九は絹本に畫かれてあり、何れも金碧燦爛たる極彩色である。乾燥の砂地に久しく埋もれて、絹地が多く裂けてゐて、完璧のもの、少ない

のは惜むべきであるが、描法の一端を窺ふには十分である。何れも唐代のもので、六朝のものは存してゐなかつた。

さて其寓目のもの二三を挙げると、天寶十載辛卯正月某日縣君和氏供養と楷書の款識のある佛畫は、着色が如何にも精細であつた。これは絹を二枚縫ひ合はせてある、その縫目を調べて見ると、我國の所謂フセ縫ひで、極めて巧みである。又吾が鹽瀨とも見るべき厚地の絹に畫かれた佛像は其面貌と衣裳の一端だけ存し、金碧燦爛の美を盡し、殊に金泥で書いた細紋が精を極め、顔面には隈取りがあつた。表装されたものらしく、幾許かの紙が背面に附着してあるを認めた。又他の一枚は薄絹で、矢張り斷片であるが、羅漢風の僧が剃刀を取つて他の一人の髪を落すの圖が書かれてゐた。これにも絹が縫ひ合はされてあつて、縫合せ方は前と同じである。又他の一枚には羅漢の圖像があり、其の背景に水墨の山水のあるのを見て、王摩詰などの墨畫はこんなものであらうかと、少からず興味を覺えた。此山水などは恐らく南北の未だ分れない頃の筆であらう。畫家の研究資料に供して頗る價值あるものだ。又小品では、色紙大の絹本に悉達太子が馬に乗つて門を出る圖がある。門前には二人の阜隸が擔架に死者を載せて擔



いでゐる。これは恐らく四苦を觀する四枚の圖の一であらうが、幸ひに毀損もなく、唐代の風俗が知れて參考になるものと思はれた。又一枚の斷片には二人の人物の面貌と其の胸邊が畫かれてゐるが、此の畫風が全く吾が倭繪と同じく、吾が邦人の筆と見まがふ程で、一驚を喫した。倭繪だけは日本創意のものであらうと思つてゐたのに、これすら唐代の摸倣であると思ふと少々心細からざるを得なかつた。又大曆六年四月十八日の款識ある菩薩の面貌を圖した斷片があつたが、其の畫様は吾が因果經の繪に酷似してゐるのに趣味を覺えた。これには上柱國錄事雍義章供養とある、即ち獻納者の名で、大曆六年は中唐代宗の時である。又一斷片に佛像の面貌のみ存してゐるのがあつた。其の書き方に一特徴があつて、まぶたが大きく且つ重く畫かれてゐる畫様は當麻曼陀羅式で、吾が將軍塚縁起を聯想せしめた。

佛畫の外に二片の織物があつた。一は一見木綿と見ちがへる厚い布にいろくゞの模様を織り出したもので、五寸餘の方形であるが、吾が法隆寺の四天王紋旗の裂きれによく似てゐる。他の一は繡佛で、廣東裂かんとうれのやうな地に天女が琵琶を彈ずるの圖を刺繡したのだが、精巧驚く可きものである。天女の顔は眞圓形で、トルコ式とも謂ふべきものであつた。外に細もの二片、これも

刺繡を施したもので、其の精巧は我國の天平頃のものより優つてゐるけれども、其の趣は頗る似通つてゐる。又外に佛像を板に刻して、それを摺つたものが幾通かあつた。唐代にこんなもの、あつたのは珍とすべきである。すべて此種のもものは異教の行はるゝ所に、却つて早く興つた形蹟がある。

第三類の器物と第四類の金石は極めて要略を記すことにするが、器物は大體小品が多くを占め、佛像、古錢、印、指輪などの類が二百點も雜然と陳列されてゐた。六朝の特徴ある完璧の佛像も可なりにあつたが、土製の佛の頭のみ存してゐるのも多數あつて、其の面貌に研究の資料となるものを少からず認めた。此中に特に注意を惹いたのはギリシヤ式、ガンダラ式のものが四五あつたことである。天地佛もあつたが、マリヤの像と見るべきものもあつた。佛像の鑄型の完全なものや、封蠟印もあつたが、封蠟印の内には洋式に酷似のものもあつた。又古錢の内には錢譜に嘗つて見ざるものが多かつた。概して此部類に西洋趣味の混じてゐる譯は、西教が早く此邊に行はれた影響であらう。第四類の金石は、碑板、石像、其他尺四方位な石片が數十の大箱に入れてあつたが、これは皆な燕京附近で獲たもので、西域將來のものでは無かつ



た。珍奇のものもあつたが爰には略する。

以上は閱覽記の大略である。私が之れを見て幾年かの後に、大隈侯に随つて西本願寺に光瑞法主を訪うた時、侯と法主とは共に起つて其の巨幹をそれとなく較べて、種々の談話が湧いた中に、法主は自分には道樂が無いと云はれたのを、私は横合より、あれほどの六朝物を西域より獲得されながら、道樂が無いとは受取り難いと云ふと、これが法主の急所に觸れたらしく、法主の云はるゝには、實は微力の爲めと西洋人に先手を打たれた爲めとで案外獲物が少かつたと云はれたが、それは謙遜の言葉で、日本では光瑞師が獨り擅にした大成功であつたのだ。西域は支那の邊隅で、支那人ですら容易に到り得ぬ處である。光瑞師の如き有力者であるからこそ、行きもし發掘もしたのである。此の旅行は冒險的のもので、現に法主は兵士に護衛された。幾百の馬に糧食其他必要のものを荷はせての長い旅行であるから、其の經費は莫大のものである。されば早く探險の志を有しながら近年まで決行を敢てするもの、無かつたのも偶然でない。光瑞師の此の遠征は、實は時を得て幸運であつた。其頃までは支那は西域の舊物を外國に持去らるゝのを敢て意にも留めなかつたが、その後漸やく氣がついて、追々やかましくなつ

て來たから、光瑞師の二の舞を事實繰返すことが出来なくなつた。即ち光瑞師の擧は我が學術界に大なる研究資料を與へたもので、長く傳へて感謝すべきものである。

## 五 北越雪譜の出版さるゝまで

### 一 牧之と馬琴及び京山

雪の越後を初めて全國に紹介した好著として「北越雪譜」の名は其頃中央の讀書界に喧傳したもので、郷國の人は今に至つて尙ほ此書を珍重して居るが、殊に此書に關係したものが曲亭馬琴、山東京傳、同じく京山といふ如き當時一流の小説作家であつた點からも、一層世上に著聞したものである。自分は曾て郷里越後の南魚沼郡鹽澤村の鈴木家から此書の著者たる先代の鈴木牧之が江戸の戯作者山東京山と往復した書簡集を借り受けて一覽したことがあるが、京山は半紙の野紙に手紙を書くのが例であつたものと見え、往復書簡の全部が野紙に書かれてあつて、それを綴つた冊子が二冊出來て居る。何れも百五十枚許りを綴つてあるから二冊で三百枚



近い大冊であるが、それを讀むとなか／＼面白い上に、「北越雪譜」の出版になるまでの経路が、至つて細かに書かれてあるから、雪譜編纂の小史とも見るべきものである。又單にそれのみでなく、牧之の事や京山自身の事、其他種々なる事柄が此書簡中に現はれてゐるので、自分は覺えず湧然たる興味に浸ることが出來た。そこでこれらの書簡を通じて窺ひ得た雪譜編纂當時の経緯いきさつを中心に、此兩人の友情や性格などに就て感じた所を叙して見よう。

鈴木牧之は天保の末頃まで在世した人で、生地なまのちの越後南魚沼郡は郷人一般の知る如く雪で名高い北越の中にも特に雪の深い土地で、若しも越後に就て問はんとすれば、此地方の人をして答へしむるが最も適任といはねばならぬ。牧之はたまく／＼斯うした雪深い中に生れた。そして家には相當の資産も有し、又幼少から文藝に志があつて詩も賦する、狂歌も詠ずる、俳句も作れば畫もかくといふ、多才多藝の人であつた。既に文字に因縁深く文藝に嗜み淺からぬ當時の豪家としては、自ら吟詠して楽しむといふばかりでなく、更に遠近同好の士と文墨上の交りを訂するといふことは、全く自然の傾向であつた。牧之が夙に江戸の文人と書簡の往復によつて風流の交際を續けてゐたのも、要するに斯ういふ欲求に其端を發したものと思はれる。

所謂る文學が媒となつて、牧之は馬琴にも交はり、京山にも交はつた。其他當時江戸で著名な文士雅客とも書狀の往復で多く交際のあつたことは、鈴木家に藏する書簡に徴しても首肯されて、其交遊の廣かつたことに驚かされる。而もこれら多くの文人中に、最も交際を長く續け且つ親密であつたものは馬琴、京山の兩人で、此兩人に對しては親族以上にも親しかつたものらしい。

一年に何回といふ不便不自由を極めた當時の飛脚便によつて手紙の往復を續けたのであるが、双方から發する一通の手紙が、何れも半紙野紙拾枚位に亘つて居て、殆ど相對して歡談して居るかの如くに、時には文藝上の事計りでなく一家の私事についても隔てなく通信し合つてゐたのである。

## 二 京傳馬琴約を果さず

牧之が「北越雪譜」を世に公けにせんと志すに至つた動機は、當時江戸に於ける作者と交際があつたからにも因るであらうが、彼れは敢て著作家でこそなけれ、自分で畫も描けば相當文



章も作れる人で、且つ郷國の雪に興味を感じてゐた所から、何とかして全國に第一位を占むる郷里の雪を、江戸を始め九州邊の雪の多く積らぬ國に住む人達へ知らせたい。殊に雪國特有の風俗習慣、さては用具までも全國に紹介して見たいといふ考を起して、爾來其實現に努めたのであつた。

京山の兄で、馬琴の師に當る京傳と、牧之との關係は如何といふに、牧之が抑々第一に「北越雪譜」の著作を依頼したのが京傳であつた。其間の消息は委しく知らぬが、著作に經驗なき牧之は、京傳の如き文名を世に馳せてゐる著作家に囑し、之に材料を與へて代筆を乞ひ、江湖に其書を流布しようと謀つたのであらう。此想像は、後に馬琴に對しても京山に對しても自分の草稿をその儘出版して呉れと頼んだわけではなく、材料は牧之から提供する、執筆は著作家に任せるといふことになつてゐる點から考へても、必ず誤つた觀察ではあるまいと思ふ、即ち京傳にも矢張り此形式で委囑したものと推斷してよからう。

牧之が「北越雪譜」の著作を京傳に頼んだ時には、まだ玉山といふ高名な畫家も存命であつた。玉山は浮世繪師で、曾ては「太閤記」の畫をかけたので頗る名聲を博した人である。尤も

其「太閤記」は當時徳川氏の忌諱に觸れて、絶版となつたのであるが、其爲めに却つて玉山が世に持て囃さるゝことにもなつた。又鈴木芙蓉といふ畫家も居た。俗に木芙蓉もくふよう（鈴木の木を取つた略稱）とも呼ばれた人で、これが又越後へ遊んだことのある關係から、牧之はこれにも畫を託しようとした。即ち文章は京傳に、畫は玉山、芙蓉に囑せんとする段取であつた。これが抑々牧之が雪譜を世に出さんと謀つた發端である。

ところが京傳も机の上の甚だ多忙な作者である。受け込みはしたが、遂に果すことが出来ないうちに歿してしまつた。そこで一時は畫家の玉山に畫と共に文章をも頼まうと考へた。これは玉山が才氣ある男で文章の素養にも乏しくなかつたからであるが、此事は馬琴にも相談をしたものと見えて、文政五年五月十七日附の馬琴の書簡で、此間の消息を知ることが出来る。しかし其うちに玉山も芙蓉も亦地下の人となつたので、更に當時江戸に於て戯作者中第一の學者として名のあつた曲亭馬琴に著作を託した。馬琴も無論自己の手で之を版にしたい意はあつたらしいが、これも机上の多忙な作者で、幾年経つても其約を果さない。兎角するうちに牧之も追々老年となる。馬琴は牧之より年長だから益々老いて行くので、幾ど絶望状態に陥つたので



ある。ところへ偶々京山から、この雪の話は曾て亡兄京傳へ御依頼になつた縁故もあるから、一つ私にその材料を遣はされたい。自分の考では繪草紙様の物にして、越後の雪の驚くべき面白い話を世に紹介して見たいといふ事を牧之の許まで云うて來た。京山の意では、牧之からは唯だ材料を得て本は自分の著作にして世に出したい考であつたらしい。然るに當時は馬琴と牧之との間にまだ手が切れて居なかつたので、どうも似た様なものを出させるといふことは馬琴に對しての遠慮もあつて、牧之は京山の此申込を一應は斷つたのであるが、さりとて馬琴に囑して置いても何時出來る事か、亡羊の歎に堪へぬわけで、寧ろ之と手を切つて京山をして代らしめるが捷徑だと考へたので、斷然馬琴と絶縁して京山に之を託することに決した。

### 三 上梓までに三十年

抑々京山が最初牧之に草雙紙くさむしじとしての著作を申込んだのは文政の頃で、いよいよ馬琴とは手が切れて京山自身の著作に移つたのは天保に入つてからの事であつた。そして天保七年、越えて八年に至つて漸く前篇が出來た。勿論全部京山の著作に成つたのではあるが、それを京山の

自著とせず牧之の著作で京山は唯だ代筆したに過ぎぬ事にして世に公けにされた。詳しく云へば序文から中に收められた詩、歌、俳句の類に至るまで大抵京山の代筆したもので、名義丈けを牧之の名にして出版したに止まつて居る。こんな譯で牧之積年の宿志は京山によつて始めて達することが出來た。今は正確に調べても居らぬが、なんでも牧之がこの志を起し、そして宿志を達する迄には、少なくとも三十年の長年月を要したと聞いている。京傳——馬琴——京山を経て、兎も角前篇の脱稿出版されたのが牧之六十七歳の時であるから、如何にも永い歳月を費したもので、一の著述をするにしても當時はなかく容易でなかつた消息が、これによつても察せらるゝ。

牧之はこれが爲めに幾度もく、同じ圖と同じ文章と書き送つた。最初京傳に頼む時に送つた草稿は、火災で焼いてしまつた（尤も之はズット後に至つて火災から免かれたのを發見したが、此時は焼亡したと信じられてゐたのである）といふので、其後馬琴に依頼する時には、再び同じ草稿を書いた。此草稿は何故か馬琴は事に託して返却しなかつたといふ。牧之は斯うして何度も草稿を書き直す勞を取つた上に、尙ほそれが上梓さるゝ迄の間に起つた種々苦心の跡



については追々と叙述する積りであるが、兎も角も「北越雪譜」の出版は全く大成功を収めたのであつた。此成功は筆者京山の努力によることは無論であるが、一には當時雪譜のまだ出版されない前から、早く評判されて新刊物の番附こむすびに小結の地位を占めたといふやうな事にも因つた。如何に前景氣がよかつたかは此一事でも知ることが出来る。これは勿論京山が如才なく種々なる廣告法を行つた結果で、其一端を云へば「北越雪譜」の著者としての牧之の名を豫め出版界へ弘めさせる意味に於て、或は自分のいろいろの出版物に京山の代筆で牧之の序文を掲げて見たり、或は牧之の詩歌を載せて見たり、美人の錦繪にまで牧之の名で狂歌を掲げるといふ如く、鈴木牧之と「北越雪譜」、この二つの名を弘めることに甚だ努めたのであつた。

京山は出版界の情偽に深く通じてゐた。随つて讀者の心理作用なるものを十分に會得し、人心に投ずるやうに巧みに趣向を考へたものである。其結果は「北越雪譜」は非常に廣く世に行はれた。其結果は單に越後の雪ばかりでなく、それに附帶した越後の風俗習慣を世の中に始めて此書が傳へたのである。凡そ越後文人の文藝的著書で古來全國にひろがつた點に於て、此「北越雪譜」に匹敵するものはなからう。越後の物で全國に評判されたものは、越後の「七不思議」などではなくて、實際此書を推すべきである。雪は全國中何れの地方にも多少は降るが、而かも越後魚沼深山の堆雪、殆ど山岳の如きを見るに至つては、七不思議以上に之を奇とせねばならぬ。果して「北越雪譜」は一種の奇書として、奥羽の端から西國の果までも盛んに賣れた。江戸に於ても幾百軒の貸本屋全部が、此書幾部かを備へ置くにあらざれば營業の出来なかつた程であつた。これは全く其話に大なる趣味があつたからである。雪譜の爲めに幾ど一生を捧げた牧之の苦心も、斯くして酬いられたと云つてもよからう。それに當時江戸の出版界では、前篇を出して見て餘程の好評を博するのでなければ後篇は出し得ないことになつてゐた。それが「北越雪譜」は前篇天地人を出して、間もなく後篇春夏秋冬の四冊を出版したに徴しても、いかに此書が出版界に持て囃され讀書界に歓迎されたかの一端を知ることが出来る。

#### 四 越後國雪物語

以上は「北越雪譜」が出版さるゝに至つた迄の顛末を便宜上先づザツト録したに過ぎない。云ひ換へれば以下記述せんとする其序説で、倍これからは京山が牧之に與へた書簡を中心に書



かうと思ふが、何にしても十八行野紙で三百枚からもあり、年に積れば十年以上にも亘つてゐる、それを多く引いて居る餘地もないので、主として「北越雪譜」著作に關する肝要の部分、或は牧之と京山との交情に關する部分、其他多少興味ある部分などを聊か引用するに止める。それも考證家の如くに、種々解説を附したり他の書物などから取り來つて委しく説明することを避ける。而かも自分がそれを語るよりも事實上の雪譜著者たる京山をして自ら語らしめる方が却つて興味があると思ふので、その書簡の要所々々を引いて書くことにする。又京山の書簡は極めて解し易くは書いてあるが、併し今日の時文とは甚だ異つた字面などもあるから、さういふ點には多少の説明を加へよう。或は稀に雪譜と無關係の事も交るであらうが、それは書簡の順序等に依る結果で、それらには又別種の趣味があらうと考へる。

前にも略叙した如く、京山は雪の話を書紙體に八冊許りのものとなし、牧之の著作として出版して見たいといふ氣が起つて、其意味の手紙を牧之に與へた事がある。それは文政十二年の事で、左の如く云うてゐる。

昨夜枕上にてふと心つき申候間申上候、先年貴國雪中の事を述作致し可申様亡兄へ被仰、

雪中の具ども雛形など迄細に被遣、是に小冊添被成候を年來所藏致候處、此度池魚に奪はれ残念至極に御座候、さておもへらく、北越雪談と致し繪入讀み本五冊として雪の故事古歌などを加へ出版いたさんと存付候は亡兄の趣向にも候へ共、讀本にて手重に相成、雜費も餘程に、作もむつかしく候故、ついで延引致候事に候、當時草双子のなり行きを考ふるによき時節と存候間、北越雪談を

越後國雪物語

越後鹽澤秋月庵牧之作  
東京山東庵京山校合

全八冊

歌川國貞畫

右の通り草双子にいたし出版仕候は、うれ可申かと存候、御冬ごもりの内著述、御旅費等一切相掛け申間敷候

此書簡によつて見ると、京傳の頼まれた時は、京傳は「北越雪談」と名づけ、繪入りの讀み本とする積りであつたと見える。即ち讀み本五冊として出版する趣向であつたことが分る。雪の故事古歌、いろ／＼の考證を附する遣り口で、一種の隨筆の如き恰好にせんとしたのが京傳の考案であつたのである。



## 五 馬琴への義理立て

京山の考へでは、どうも讀み本では大分重くるしいものになるし、此時分は草双子流行の時代でもあつて、大抵のものは双子にさへすればよく賣れるといふ所からして、之を極めて解し易く婦女子迄も讀み得るものにしてはといふ趣向で、「越後國雪物語」といふ平易な名を冠する考へであつたらしい。尙ほこゝにはそれを引かないが、此雪物語を作るに就て、斯くくゝの材料が在るといふ事が詳しく書かれてある。それは越後の大雪について何人も興味を感じ且つ人の意外に思ふやうなことを列挙して、こんな様な材料が入用であるとして恰も牧之に教へるが如く惻切にこれを書き列ね、一番終りの大團圓については、例のめでたしめでたし了る趣向で、その所へは牧之翁の「寄雪祝」の歌でも入れたい、さうして畫は松竹梅を載せた島臺の上に雪の降りかゝつて居る所をかいてはどうかといふので、此書簡中には京山自ら島臺雪の圖などを書いて居る。しかし京山の此書簡に對しては、牧之は斷りをいうたものと見える。その次第は、兎も角も既に馬琴に託してあるのに、本の體裁も趣向も多少變るにしても、似寄りの

ものを他に囁するのはどうであらうかと、律義一遍の牧之であるから、折角の京山の思ひ立ちではあつたが、一應それを斷つた。それに對して京山は又左の如く云うて居る。

北越雪譜の事、馬琴、玉山兩翁に存立(存立立ち)も未だ上様に及ばず、依て私より申上候雪の草紙も御著作被成がたき由御尤も千萬奉存候、ふとうかみし儘申入候、御一笑被下度候

玉山の雪の消えたる跡なれば簑笠のかくもいらぬものとや

いかに雪の物語なればとて、うづめおくもおしきものに御座候、春に相成申候は、どうか御相談致し方もあるべくや

櫻木に早く上せて見たきもの雪とみやまの物がたりをば

この書簡によると、牧之の馬琴に對する義理立ても尤もであるが、併し畫をかく約束の玉山は既に歿し、馬琴も引受けながら埋没に附して其約を果さぬ、それを其儘にして置くは惜しいから活かしては如何というて居るので、歌の意味はこゝに云ふ迄もないが、玉山とは雪に困んでいたので、簑笠は馬琴の號であつて、それも亦雪に引懸けて詠じたのである。春になつたら出版したいといふ所から櫻木の文字を使つてゐるが、櫻木とはこれ亦板木は櫻で作るので出版



を意味してゐる。更に玉山については、京山の書狀中にも斯う云うて居る。

玉山存在の節太閤記に付この雪の圖可相違御示し被成候由、おもしろきはなしに御座候由、玉山も畫に於ては東都にても雷鳴致し候、亡兄へ度々文通もいたし候、書も見事に才子と見へ申候

玉山と牧之との間に交りのあつたことは前にも書いたが、此の書簡にある太閤記の畫をかいた時、牧之が雪の圖について、玉山に注意した事などは餘り世の中に知られて居らぬ事實である。又玉山は世間に多い尋常浮世繪師ではなくして書に就ても造詣の深いものがあつた事も、此書簡で始めて知る事が出来る。

### 六 馬琴との絶縁

其翌年には、新年早々京山から牧之に一書を寄せて切に「北越雪譜」の出版を懇懇して居る。其中に曰く、

越後雪物語の事さてく、残念に奉存候、つらくおもふに、右の趣向の元祖と申すは亡兄

が起立にて御座候間、馬琴にかまはず先年被下候貴君の草稿を種といたし合卷に作り候趣序文へしるし著述いたし候はゞ、馬琴がいかんとも申がたくあらんと存候、いかんとなれば右雪の趣向は京傳馬琴に先だつ事十年程と存候、先生の思召如何に御座候哉御覧ひ御指圖次第に可仕候

又同じ書簡に重ねて曰く、

前に申上候如く、雪の合卷如何に御座候哉、此事先生は御存なく出版の上京山が北越の雪を新作に致候、是は先年京傳へ掛合いさ、かの草稿つかはし申候、是を京山が種にいたし作意いたし候事と存候とかなんとか申被遣候はゞ可然哉、私先生へ御あいさつなく作意候ても私へ罪を御せめ被成候事にもある間敷、馬琴より馬のしりをよこし候事もある間敷や、おぼしめしを伺ひ申候、御へだてなく御申越被下度候

即ち京山は百尺竿頭一步を進めて、全體此雪の問題は自分の兄が思ひ立つたから生れ出たものである、此點からいへば自分の方が本家本元であるから、自分があなたに御相談なしに亡兄の遣り残しの仕事だと言ひ立て、出版したからとて、あなたから御叱りを受くべき筈の物でもあ



るまいし、馬琴からあなたに掛合があつても、それは俺の知らぬ事で、俺の方から京傳へ頼んだ當時遣つて置いた材料が残つてあつたのを種に、勝手に著作したのであるとあなたから御挨拶になつたら、馬琴から苦情の出る餘地もなからうと、兎も角熱心に慇懃を試みて居る。

此幾回かの慇懃に對しては、さすがの牧之も心を動かさずには居られなかつた。それも實は道理あることで、京山の書簡によつて見ても、牧之が京傳に頼んでからも既に十年も経過して居る。馬琴に頼んでからは幾年になるか分らぬが、これ亦數年か、つて更に一枚の原稿さへ出来ぬといふわけで、牧之もだん／＼老境に入つて来る、自然京山の熱心な勧めに對して應じたくもなつて来る。併しながら馬琴がなかく面倒な人物であることは牧之もよく／＼承知して居るので、如何にして之と手を切るべきかと頗る苦心したらしいが、結局手切れの談判と意を決して、そしてつひに絶縁を申込んだものと見え、その意味の事が牧之から京山に通ぜられて居る。

### 七 畫工其他に就ての配慮

京山が牧之宛の書狀中から一二の事を抄録すれば、

馬琴は自負の人であつて、雪の隨筆と云ふが如き類のものは、當世筆を取り得るもの乃公一人で、他人の能く成し遂げ得べき事ではないと、實は高を括つて今日迄放却して延引を重ねて來たものである。然るに先生が手を切つていよく／＼私に御任せになつたと馬琴が聞いたならば、首を傾げてどんな事を云ひ出すかわからない。其邊の事は能く／＼吞込んで居らねばならぬ。又馬琴の所へはあなたの方から色々の材料が行つて居る。先づ其材料を取り戻す事が肝腎ではあるが、下手にひねくれられると材料も戻さぬと云ひ出すかも知れない。

こんな事を注意してゐる。果して京山の氣遣つた如くに、馬琴は結局京山に編纂を任せらることに同意はしたが、牧之から送つた材料は戻さなかつた。其理由として、折角あなたの筆に成つた好記念物である、自分が著作をなし得なかつたのは誠に濟まなかつたが、しかし永い間種々考案を廻らして來て居る、就ては材料は私へ下さい、自分は表装をして家に遺したいといふわけ、到頭圖も草稿も戻さずじまひになつた。此の事に就ては鈴木家に残つてゐる馬琴の手束



集、それは凡そ二百枚近くのもので大きな冊子に作られてあるが、其巻頭に牧之がそれに就ての序文を書いて居る、それを讀むと、何故に馬琴は材料を戻さなかつたのであらう、自分は斯かるもの、他の手に残る事を耻とする、よつて種々馬琴に談じては見たが、遂に戻さなかつたと云うて何となく不快の筆致が見えてゐる。

京山は前の如くに書き終つて後、同じ書簡中に早くも著述する時の種々なる考案に言ひ及ぼしてゐる。

私存寄にては讀本の形にいたし、雪の圖なればうすゞみの彩色を入れたる所もありたり、(彩色本國禁なれ共、薄墨は制外なり) 又人物を見せたる所、細畫の所、色々取りまぜ目を變らせたし、北齋の筆なれば上々、次には英泉なるべし、國貞などの筆の物でなし、唐畫家に書かせては俗に落ち不申、うりものにはあしく候、上梓のうり物は文晁でもあしく候、先年亡兄へ被遣候同草稿の時よりは乍憚御畫も御進み、雪の事は段々詳しくならせられ候事と存候儘、此節又々草稿被成候は、目を驚かし申す事と存候、貴君を發起として亡兄や、玉山、曲亭など上梓の意ある事は書林などは更に不存處、草稿を見せ候は、刻する心に相成可申かと存候、先づ下ごしらへの御草稿、おぼしめし次第早々御取りかゝり可然候、雪を鋸にて引わり申候處の圖などは大きく見せたし、めづらしき事に候、市中の有様と山中の有様と、雪中鳥を取る事、漁獵山獵の圖も面白かるべし、かくべつ御念入りたる圖にも及ばず、眞畫にては御手もかゝるべくと存候

さすがに京山は繪入物の著作にかけては經驗がある故、誰に畫をか、せようかと云ふ事は此書簡によつても早く既に工夫する所があつて、畫家の選び方など考へたものである。如何にも文晁でもなく、南畫の畑でもない。さうかと云つて國貞のやうな、人物を畫くには妙手であつても風景畫に拙なるものでも駄目である。北齋ならば上乘だと云つてゐるが、如何にも、尤もの月日である。又其後に京山から左の如き書簡を牧之に與へてゐる。

雪話の御草稿昨夜中八ツ頃迄に荒々拜見仕候、圖などは一しほ玉手を勞させ給ひたる事おしはかり申候、御文章の内貴國の方言にて御しるし被成候處々に江戸人にはさとり難き事も見へ申候、熟覽の上推量に落ちざる所は跡より御尋ね可申候、すべて著述は机上に筆を採りて幾百萬人に示し候ものゆゑ獨り合點にてはこまやかにさとしがたく、よんでわから



ぬとおもしろからぬ始り也

○雪中の圖どもさてく、目を驚かし申候、圖の中に人家のかたわらに水瓶ともおぼしきもの、大なるを、こもにて包みあるが家毎に見え申候、是は雪中に水を貯え置き候にや、大家にては三つも四つも貯へたる様也、是は人かず多く候故の事に御座候や如何に哉

○御草稿拜見してつらく思ふに、越後の鈴木より國の名物として魚類、青物、品々山東へおくり、是を料理しては江戸の人及び京浪花の人にも口にあひ候様に振舞候へ共、おくられたる魚類青物を見て獻立をして、なます、ひら、しる、其外種々に料理し、膳立までして、いざ食し給へと云ふ様なものにて、折角めづらしき雪話といふ趣味をふあんばいにしてたべさせ候ては、一碗を喫して今一杯と申す間敷、此處に於て筆をとるに心あるべき事と存候間よく熟覽いたし、北越の雪をよく腹へしみこませて筆をとり可申候

追々と京山が氣乗りがして来て、料理にたとへる所などは作者の極意を云うてゐるものと見るべく、天水桶の凍るのを防ぐ爲めに菘にて巻かれてあるのを圖に見て、京山が飲料水と解釋したなどは江戸人として無理からぬ事ではあるが、越後人から見れば聊か滑稽の感がないでもない。

い。

## 八 材料發見の喜び

前にも少し書いて置いたが牧之が最初京傳に著作を頼んだ時、草稿は勿論、雪に関する圖、其他雪國の種々なる用具、例へば橋かみ、かんじき、雪下駄の類をわざと小さな模型に作つて多く參考に京傳の許へ送つてあつたものである。京山がいよく著作するについて、これ等のものは至極大切のものであるが、京山の家は不幸にしてこんな交渉を重ねつゝある間に火災に罹り、家財の幾んど凡べてを擧げて失つたので、其後土藏を建て直すことなどの混雜があつて、京傳が牧之から預つてゐた材料を一時見失つてしまつた。此一事は京山の非常に悲んだ所であつたが、其焼失したと信じてゐた品が、後に焼けずにあつたのを發見した時の京山の喜びは名状す可からざるもので、其狂喜の情を牧之に報じた書簡には、細かな目録まで書き添へて左の如くしるされて居る。

拙家此節土藏建替申候に付、土藏に納め置候雜具書籍の筈ども見世二階へ移し申候に付、

五 北越雪譜の出版さるゝまで



火器用心の品は親類共土藏へあづけ申候、依之亡兄手澤の抄録など取調べ申候内に小風呂敷に包、出火持退と申札紙附のものあり、ひらき見候へば前年貴君より御認め被下し二季雪話と申す横本の繪抄并に越後國繪圖一枚、澁紙小宮の内に雪車、すかり、かじきの類の雛形あり、去年大火の節持出したるつづら二つ焼亡いたし候故、右品も其内に焼け失ひ候事と残念がりしに、今此風呂敷包を得て泥中に玉を拾ひたる心地して、黄泉の亡兄を思ひ出し、萬歳の貴老雪に御深切なるをかんしん仕候て三十年の昔、一日の如くに存候、云々」右申上候先年の圖を見出し候故、先づは腹にのみ込み申候、しかのみならず九月末に奉公人召抱申候、此者は越後國魚沼郡千駄ヶ谷藤澤村百姓市二郎二男吉藏、當年二十才に相成申候、老實の者にて此吉藏に貴君の雪の圖を見せ、これはかうであるか、これはかうかと受け給はり、前年の雛形を見せ、雪車の使ひ方、雪中の働き、其外雪のはなしき、申すと、一文不通の者故はなしも前後錯雜いたし、國の話をする時は一しほ國ことばに相成り、き、わけ難き事多く、はからず一笑を催し申候、され共目前にはなしを其人に聞き候故發明の事も多く御座候

曲亭よりも音信ありて、雪話の事私へも曲亭よりたのみたしとの事、上首尾安心仕候これによつて見ると、幸にして失せたと思つたものが発見されたので如何に京山が喜んだかわかる。何にしても越後の事情を更に知らぬ作者が、書信の往復のみで材料を得るのだから、如何に模型を手許に送つて貰つたにしても、それがどう用ゐられるのか、江戸の人などが想像の及ぶ所ではない。然るにそれが雪の深い所のものを抱へ入れて、それに取敢へず雪の話聞いた一齣の如きは、讀んで頗る興味を感じる話である。

### 九 馬琴と京山の疎隔

前項の書狀の末段には馬琴もいよく承諾して、京山へも其旨を申越して來たといふので、京山は案ずる程でもなく甚だ好結果であつたと喜んで居るが、こゝに聊か馬琴と京山との間柄に就て書く必要がある。全體誰も知る如く馬琴は文壇に雷名を博した人であるが、實は京山の亡兄京傳を師として戯作の修業をしたものである。馬琴は京山よりも年長であるから、云はゞ先輩の地位ではあるが、併し自分の師の弟たる京山に對しては、馬琴と雖もそこには多少義理



もなければならぬ筈である。年始、中元などの季節には互に往來もしなければならぬわけであるのに、此二人は殆んど吳越も管ならぬ程に疎遠で、馬琴は曾て一度も師家なる京山を訪ねたこともなければ、京山も亦馬琴の消息は牧之の書簡によつて始めて知る位であつた。これは馬琴の傲岸なる氣質が因をなしてゐるに外ならぬのであるが、是非の判断は他に譲つて兎も角二人は甚だ相和さなかつた。之に對して律義なる牧之は頗る面白からず思ひ、書簡のついでには京山に向つて「忍」の一字を説いてゐた。話がつい岐路に入つた形であるが、問題の雪譜がいよいよ馬琴の手から離れて京山に移つたについては、牧之は益々此兩者間の疎隔を解きたいと考へて、どうか是非馬琴と往來して貰ひたいと京山に向つて切に勧めた。牧之の書簡に答へた京山は、此事について左の如く云うてゐる。

馬琴へしたしみを結び私罷越、翁が起居をも尋ね候様にと御心ぞへ被下ありがたく、吳越の如く更に音信も聞き不申候故に眼病の由も尊翁御書中にて始めて存じ申候、著作堂と申す人、腰はぬけるとも右の手さへ自在ならば机上に黄金を耕し可申候へ共、眼病とはさてさて氣の毒千萬也、何れ尊意に任せ近日わざ／＼御尋ね可申候

馬琴の眼病といふことは江戸に居る著作者仲間では唯一人知らぬものはない位であるのに、それすら京山は知らずに居て、牧之の書信で始めて知つたといふ事から考へても、その疎遠の程度がわかる。この一齣は天保六年とも思はる、正月二十四日附の書簡に詳しく書かれてある。

### 一〇 京水と雪譜

更に又「北越雪譜」の問題に戻るが、天保六年九月九日の書簡には左の如く認めてある。

私ねがひには雪志初篇來春三月迄に上梓發兌して評判もよろしく、書肆後篇もと申候節にいたりて、五月京水を具して尊堂へ草鞋をとぎ、後篇の御相談いたし、京水眞景を寫し候事もあるべし、かくあらば上々の首尾也、表題の事學友達へも相談いたし候處、話の字よりは志の字の方可ならんと皆申候ゆゑ十目の視る所に從ふ

.....著

北越雪志 三卷

.....校



此書は……………書肆文溪堂梓

右日向半紙一枚半にすり申候もの江戸中大屋へくばり申候、是を書林のことばにびらと申候、賣り出しまへにくばる也、右は十枚ばかりやがてさし上可申候

これによると、兎も角相當に筆もはかどつて、先づ凡そ其時分の習慣として「ちらし」を撒く迄に進んだのである。且つ又若しも成功すれば、息子で畫のかける京水を伴ひ、後篇出版の相談に越後行の段取迄してゐることが窺はれる。

尙ほ此京水について少しく書いて置くべきことは、京水は此作者の片腕ともなるべき大切な働きをしたもので、畫が相當に描かれた爲めに、雪譜著作前の事ではあるが、京山は京水を伴うて熱海に遊び、數日そこに入浴した際も京水に熱海の風景を描かせて、それに京山の文章を添へ、「熱海圖景」と題して世に出したこともある。更にこゝに附記すべきは「北越雪譜」の挿畫の大部分は京水の手になつたことである。

一一 越後下りの前觸れ

京山は又同一書簡の中に、いよゝゝ越後へ下つて牧之を訪ねる時の事を豫め左の如く書いて居る。

さきの長き事を今申すも老の癖なり、わたくし命ありて、家内も無事にて、來年尊堂へ京水同道參上の節、相願ひ候約言左の如し

一、滯留の節被下候御膳、御家内末席につらなり、御一同様と同じ惣菜いたゞき度事、別段の御馳走は堅く御斷り申上候、却つてうまくたべ不申候事

一、夜具絹類御無用、是等堅く御ことはり申上候、私共平日本綿夜具相用る申候事、並に夜具の上げおろし自身に仕度事

一、下足のあつかひ等まですべて御家來の御世話に相成候ては却つて迷惑いたし候間、自身にいたし度候事

一、萬端客のあつかひは御免可被下候、御親族末席の者同様に奉希上候

右の如くに候へば心よく足をのばし逗留もいたされ候、いか様粗末に御取扱被下候とも決して御恨み不申候、旅行者別て堪忍大明神と心掛申候、御一笑く



京山の此書簡は實に委曲を盡したもので、幾んど對坐して語るが如きは筆のまはる人の常であるが、特に此書簡を掲げるのは、京山の文才を示すと共に其人格の一端を知らせたい爲である。京山は江戸に居ては當時頗る文名の高かつた人であるが、その割合に質素の生活で、酒も飲まず贅澤もせぬといふ平生の狀が、此書中からも偲ばれるといへば云ひ得る。

## 一一一 書名漸く定まる

同じ天保六年五月の書簡中に曰く、

つらくおもふに、此度雪篇の一舉、尊翁畫を能し給ふ故、圖あり説ありて成れる也、余幸にこれに與りてその全をなせり、一度梓に上りては海内に布き候て不巧にも傳ふべし、拙文の代筆に尊名を穢すと雖も、天幸を得て世に行はれたる翁が名を他國に雷同せん事、我に於て雀躍に不堪候、翁が年來の御望み一時に成就せん事、良縁の時を得たるに在り、可賀く、

一昨日（五月二十日）書肆文溪堂の番頭嘉七と申者訪ひ來り、雪上の卷、筆耕之校合持參

申候、さて主人口上に、雪志之外題、相成るべき事ならば雪譜と申被成度、右は唱へもよろしく、且亦先達而中より京、大坂、名古屋本屋共へも此度雪譜と申すものほり立て、やがてうり出し候噂も申つかはしおき候、その返事に雪譜くと申越し、或は又馬琴著述の末にも此名見申候ゆゑ、他國本屋共も雪譜方請よろしく故、なるべき事ならば雪譜にいたし度、それとも先生思召次第と申候ゆゑ、私言下之答へに譜も志も字意は遠からず、志とする所以は馬琴が題したるがいやさ故也、これは此方のまけ惜み也、馬琴が一笑は滄海の一粟也、譜とすべしくと答へ申候、此段左様に思召被下度候、さて此嘉七へ酒肴をもてなし、しばらく物語の内に、雪譜はいつ之頃よりうり出しに成るべきやと尋ね候へば、嘉七曰く色々ほり立て候物御座候故、先づ五月金と存候と申候、此の五月金とは來春にうり出して五月拂をとる事を云ふ也、これは仲間同志の通言なれ共、京山は作者故、仲間の通言を以て答へし也、來春出版大當りを願ふ、可賀く、

嘉七が言ばを聞いてうれしく、即興

ほり上て積み重ねべき雪の卷消ぬ言ばをたのみこそすれ



前に掲げた書簡中にもある如く、百里から離れた遠隔の土地で互に見もせぬ人が幾んど江戸に於ては想像のつかぬ大雪の本を書く。それがともかく纏まるやうになつたといふのも、畢竟京山と牧之との間に種々微細に亘つて文書の往復があり、或は京山から質問して來た草稿を牧之が見てこれは斯うありたい、こゝは間違ひであると一々訂正したりして、種々なる面倒を繰返した其勞苦の大なるに因ること、思ふ。随つて其文書は何時も數十枚に亘つた細書である。又同じ書簡中にある如く、抑も雪譜のまとまつた所以は、主として牧之といふ人に畫才のあつたことが關係をもつてゐる。粗雑ながらも文筆の及ばぬ所を畫で寫すといふことが、詰り雪譜成功の基で、それは京山の言の如くである。又その表題については、京山は或は雪話とつけ、或は友人に相談して雪志と改めもしたりしたが、遂にそれを雪譜と名くるに至つたのである。前にも書いたやうに、馬琴は牧之から著作を託されて、遂にそれを果さなかつたが、併し雪譜の命名者で、此名を弘めるには大功があつた。最初表題を雪譜などがよからうと言ひ出したのは馬琴で、自然に其名が定まつた上に、馬琴の著はした隨筆「玄同放言」の終りに、まだ筆を執らないこの雪の話「北越雪譜」として廣告もしてある。こんな事から諸方の書肆仲間或は讀

者の間にも其名が知られてゐたので、本屋から雪譜々々と迫られるに至つたのは無理もない。多分京山自身も其位の事は承知してゐたであらう。其書簡にもある如く馬琴の跡を踏まない様にといふことで、志とか話とか附けたのであるが、それが遂には馬琴の定めた名に戻つて、其名で出版された巔末は、前掲書簡の言うて居る通りである。

### 一三 著作料僅に五兩

又同じ書簡中に於て、再び越後へ漫遊することに就て言ひ及んでゐる。

來年五月私父子遊策之節は、油屋翁善光寺迄御案内もあらん様に御申のよし、ありがたく存じ候、蒲原七奇も新潟も遊覽いたし度候、併し文藻を挾んで漫遊する文人多くは○之爲なり、余も其同臭ありと雖も絶窮にはあらざれば、錢を見ること蠅の血を見るが如くにはあらず

五六七月の間技を賣つて囊中十金(十二)餘せば足るべし、嗚呼拙技を賣つてこれを得んこと難かるべし、茲に尊翁が庇護を希ふのみ、遠近之諸友へ御噂御ひろめをねがひ上る



この書簡によつて見ても、先づ京山が頗る眞摯の性格だといふことがわかる。馬琴ならばもう少しエラさうに書くであらうと思ふ所を、敢て錢が欲しくないと言はぬが、三ヶ月も越後に滞在して結局望みはどれ丈けであるかといふに、拾兩、それを更に訂正して拾貳兩を得れば足ると云うて居る。どちらにしても餘り大なる望みとは思はれぬ。勿論此時分の金の貴いことは今の想像の及ばぬ位のものではあるが、現に六七年もかゝつて非常に勞をとつた「北越雪譜」が、どれ丈けの著作料を牧之に約束したかといふに、只僅に金五兩であつた。而も其中には息子の京水が幾ど七八分通り畫筆を揮つた其畫料をも包含して居ることを考へると、いよく十二金といふものは其當時として少ない金でもなからうが、併し先づ大體に於て小なる希望というてよろしい。

一四 京山の馬琴訪問

京山が牧之に與へた同じ書狀の中に、馬琴に關する一齣がある。

馬琴が臺所蕭然たらんとて御憐察御厚情也、平日自重いたさぬ謙徳の人ならば書畫會でも

すゝめ、幸によりては四五十金は得可申候へ共、老鷹喬木に款立(不暁)して人を燕雀にする氣質故、これらの事すゝめもしがたく、又平日人に交はらぬ人のゑ、書畫會の五十金は千門萬戸へ腰をかゝめねばならず、今更左様にもなるまじ、嗚呼悲い哉

今日(菊月二十五日)菅神へ參詣之歸るさ馬琴を訪ひ候處、もはや明き家也、飯田町へつばみ候事と存候、扉より見やる庭前の紅葉ばかりが時知り顔にくれなるを示したるを見て悲涙一滴せり

あるじなき明家の庭に錦して紅葉(此間文 字不明)照りまさりけり

明き家のかどに空荷のつなぎ馬琴は隣りにかきならしけり

住みすてしあるじ尋ねて此頃逢ひ瀧澤が宿札のあと

など思ひつゞけ宿へ歸り申候

京山は牧之から頻りに馬琴を訪ねるやうに勧められ、始めて訪問して見ると、空家になつて居たと知らせて來た書簡である。其時分馬琴は湯島に居たので、京山は湯島天神へ參詣の序(ついで)に訪づれたものと見える。併し空家と見たのは京山の間違で、門札がとつてあつて、戸がしまつて



るた爲め、始めて訪問した京山は馬琴が家計不如意の爲め遣り切れなくなつて轉宅したものと早呑込をしたものであらうが、實は後に掲げる書簡にもある如く、馬琴は矢張りまだそこに住んでゐたのであつた。

然るに京山が馬琴を訪づれた日に宅へ歸つて見ると、馬琴から牧之へ宛てた書狀が到着してゐた。此時分は京山の方が馬琴よりも「北越雪譜」の關係で牧之と書信の往復を重ねてゐたので、馬琴から牧之へ届ける書狀は京山の所へ持つて来て、更にそれを幸便に託して送つたもので、その事は京山の書簡中にも見えてゐる。京山は此書狀に就てフト考へたのは、書狀は牧之宛であるが、之を開封したならば馬琴の消息が知れようと感じたのである。ところで茲に書くべきことは、牧之は豫て京山に對して馬琴からの書狀は開封苦しからずと云ふことを許してあつたものらしい。その事も亦京山の書狀中にチラホラ見えてゐる。其わけは、察するに馬琴の書狀が越後へ届いて、それを牧之が見て、そして其中に認められてある事を更に江戸へ報じて來るといふ事になると、其間大變な日子を要し、時に甚だ遅れることもあるので、便宜上先づ開封してよろしいといふことにしたのであらう。そこで京山は開封して讀んだのであるが、當

時京山から牧之に宛てた書中には左の如く書いてある。

翁への返書とて懷中より出し候ゆるに馬翁が身の上のことも此書にあらんと存じ、且つは兼々御差圖にまかせ内見して御届け申候、是より馬琴の書簡を見んとて先づ筆を此處にとどむ

### 一五 一覽火中記

さて京山が馬琴より牧之宛の書狀を内見してみると、茲に京山には默視されぬことが書かれてあつた。試みに其内容を云うて見ると、牧之が雪譜の著述を京山に任せ、それが漸く成功せんとする場合に臨んで、馬琴は其功の全く京山に歸せんことを妬ましく感じたかの如く、例の馬琴の筆法で、實は雪譜の板元丁字屋ちやうじやには自分からも懇々頼んで置いた、その結果として丁字屋も快く引受けた、といふやうな事を書いて、非常に御爲めごかしを云うてゐる。其中に京山から言はずれば頗る虚偽の言を弄してゐる様な點が散見されるので、京山は一讀大に憤つた。そこで早速筆を執り、馬琴の言に對して辨駁書を書いた。それは「一覽火中記」と題する四五



枚のもので、さすがに痛快に駁して居つて、何人が讀んでも馬琴が偽君子であることを思はしむるに足るものである。一々此處に其長い文章を引くわけには行かぬが、全體馬琴といふ人は非常に自負心の強い人で、それが爲めに往々非難を受けた。且つ著作者などといふもの、癖として、兎角同業者間相互誹謗を敢てするが通弊で、馬琴亦此弊中の人たるを免れ得ないわけであるが、單に此時ばかりではない。それより後に至つて、馬琴の題せる雪譜といふ名を用ゐて居る事に就ても何か誇り顔に云々して、牧之に書狀を寄せて居る位で、この「一覽火中記」の一番末に、京山は例の狂歌二首を載せて馬琴を罵倒して居る。

狐のみ人をばかすと思ひしに馬の狐にまさるにくさよ

乗せ掛けて喜ばす馬なればひそかに人をけることもあり

これは勿論馬琴が「北越雪譜」の著述を引受け、長く牧之を悦ばせてゐて、到頭出來ずに終つた事を諷したのである。

一體馬琴の性質として、一度自分の繩張内に入つたものを人手に渡すといふ事は餘程遺憾とする方であるから、何かにつけて文句が起りはせぬかとは、豫て京山も恐れ且つ期して居たの

であつたが、馬琴の書狀を見て、そろ／＼起つて來たワイと感じたのである。それよりズツト後の書簡中にも京山は他日の事を心配して云々してゐる所がある。それは雪譜前篇を世に出して、それが若し成功したとなると、馬琴は或は書肆の方へ手を廻して、書肆の方から牧之に向つて後篇を馬琴に頼むやうに云はせて、後篇著作の野心を起さぬとも限らぬ。どうか萬一さういふ事が起つても、もう後篇の草稿は略々出來上つてゐるし、尙ほ其細目、圖などについて相談の爲めに京山が越後へ下ることに迄なつてゐるといふ事で御断りに相成りたいと、豫め牧之に注意を與へてゐる。京山の此取越苦勞に對しては幸に其事なくして濟んだのであつたが、京山が斯く迄懸念したことも、馬琴の性格にそれだけ彼れをして警戒せしむるものがあつたらである。

### 一六 道樂もの、北馬

天保六年十月廿一日附の京山の書簡にも越後に行くことについて細々と書いて居る中に一笑を催させる文章がある。



來春私遊筈の節、先觸の事など御眞情被仰下ありがたく、私も問屋帳にて往來すべき心掛也、北馬尊館へ逗留中厚く御取扱のよしは北馬よりも聞き申候、人之信は萬歳不消、北馬は酒色をこのみ候人物ゆゑ、尊堂逗留中も妓樓へ登り候事しばしなる由も北馬かたり申候、私は二十年以來もとめて妓樓へ登る事をせず、又たまに富人に誘はれ妓席に連なり候事あれど閨房に入ることせず、賢人顔して色を好まざるにあらず、頗る名を賣り候故京山が如何なることを云ひしやなどと其妓に尋ねる人もあるべし、閨中の語は何れ痴情なるものゆゑ一言に名を穢すもいや也、又一度限りにて再び其妓をむかへざれば遊里の情格を知らぬ奴と言はれても口惜く、寧ろ妓に近よらざるがまし也と、九年面壁之悟りをひらき候、江都の遊廓ですら如斯、況や村妓驛娼に於てをや、たとへ新潟之淫廓にたてこもる八百八後家（此間文）めへつた孔明の八陣を布き八方より取りかこみ、ふんどの旗をひるがへし風の雨を降らすとも、京山文筆の矛先を以て突破り、先生さんわしにも扇を一本かいてくんなさると降参させん事、余が胸中に在り、此義に於ては御安心可被下候

この書簡は、最早追々越後へ旅行の期が迫るについて、更に旅行出先きの事迄書き立てたものである。この先觸れ、或は問屋帳といふ事は、今人には一寸分り兼ねるであらうが、苟くも徳川家の家來（けらい）或は士籍に在るもの、旅行に當つての特權ともいふべきもので、これが爲めには尠なからぬ便利を得る。先觸れを發して宿泊所を定め、人足を徵發するなどのことをいうたのである。又此書簡によつて牧之が北馬に交りのあつたことも知られるが、北馬は北齋の門人で、浮世繪を書いて相當に名聲を得たものである。しかし永い間放埒をしてゐたらしいが、京山は北馬とは選を異にし、放埒はせぬというて独自の地歩を占めてゐることが文字の間に歴々としてゐる。斯くていよく、天保七年の夏には京山は牧之を訪ふ事になつたので、約の如く、それ迄に是非雪譜三冊を版にして、それを土産に持つて行かねばならぬといふので、其頃の書簡には頻りに版の督促をしてゐる事が書いてある。若し間に合はねば校正刷でも取揃へて持参しよう、氣を揉んでゐることも書面の上に見えてゐる。

## 一七 父子相携へて越後へ

京山書簡集の最後に、天保七年五月發の書狀がある。これはいよく、江戸發足に近づいた場



合の書狀で、その中には左の如く書かれてある。

此度旅行は御本丸御數寄屋組頭野村休成内岩瀬理一郎と申先觸れにて旅行仕候（右は私茶道の師也）

江戸發足より七泊りにて御地へ着の心得也

先觸れは鹽澤留りに可致候（發足前日にも先觸れ出し可申と存候）

此書簡は即ち先觸れ、問屋帳などを説明してゐる。元來京山は茶人であつて、自分の家にも釜をかけて幾何かの弟子をとつて居た位で、この書簡に幕府の茶の役人の門人であると書いてゐるのは其故である。岩瀬理一郎といふのは京山自身のこと、京山は又百樹とも稱した。さて此の茶の御役人は石州流の茶人であるから、京山も亦石州流であつたことは云ふ迄もない。兎に角四十年の交りで、交通は頻々とやつてゐたが、まだ一度も顔を見たこともない其人と、手を把つて互に談ずるのも近きにある事を喜んでゐる様子が此書簡には躍如としてゐる。

斯うして京山は遂に約を履んで天保七年夏、子息京水を伴うてはる／＼鹽澤迄下つて、草鞋を鈴木家に解いたのであつた。そして漸く出來た「北越雪譜」——恐らくこれはまだ板に彫刻

した丈の校正刷を、假綴にしたものであらうが——を、待ちこがれてゐた牧之に土産として贈つたこと、思はれるし、之を受けた牧之の喜びは實に喩へるに物がない位であつたと察せらる。何にしても牧之が雪譜著作の考を起して京傳に囑して以來、三十年の星霜を経てヤツトの事で出來たのであるから、その喜悅はまつたく想察するに餘りある。

さて京山といふ男も、兄京傳の關係から懿徳をはなれて全然好意的に此著述をなし、且つ詩歌俳句までも悉く代作をしてゐるのに、何處までも牧之の著として世に出したことも矢張り好意の一つである。尙ほ其人の著作であるから、どこ迄も其人の意に副はねばならぬといふ所から、細大となく牧之に相談した。従つてその往復書簡は實に澤山のものである。何れにしても著作には經驗のない田舎風流人の牧之の事であるから、種々なる注文難題が書簡の折々に云はれてゐるのを、京山は又少しもそれをうるさがらずに、云うて來た事柄について、改むべきは直ちに改め、又牧之の云ふ事が誤つて居る事は懇切に説明して、毫末も倨傲の氣を示さず、牧之をして快く納得せしめ、そして此一篇の「北越雪譜」が出來上つた。斯う考へると多年に亘る京山の心勞を察すべきで、若し京山が勝手に書く自著であつたら、恐らく五年もかゝるもの



を半年位でサツサト書き上げてしまつたであらう。それをば幾んど雪譜の原稿にも近い程の紙数の書簡を積んで、しばし往復を重ねたといふことは、他の文人達のなし能はざる所を爲したといはねばならぬ。且つ越後の地を曾て踏んだこともなく、越後人でも雪の薄い地方のものは想像も及ばぬ大雪の有様を餘り間違もなく、さながら越人の寫實的に書いたものであるかの如くに現はし得たのは、畢竟細目に亘つて非常に煩はしい往復を重ねた結果で、雪譜が江戸の人の手に成つたにも拘はらず、それが全く土地の人牧之の筆に成つた如く見えるといふのは、京山勉強の力によるといふべきである。

## 一八 牧之の中風再發

「北越雪譜」に收めてある幾多の畫は、最初の計畫では國貞くにさだといふ浮世繪師に書かせる筈であつたが、それが抄取らぬ爲め僅に印しるしばかりに此の人の描いたものが載せられてある。その他の大部分は京山の息子京水で、親父の傍らに在つてその指圖のまに筆を執るから、畫と草稿としつくり合つてゐる。一軒の家に文章を書くものと畫をかくものとが揃つて居るなどは希有

の事で、雪譜成功の一原因は確に此處にもあると云ひ得るのである。

京山の書簡はすべて野紙に書かれてゐて、之を集めれば直ちに冊子になるやうな體裁になつて居るから、百四五十枚宛を綴ちて大きな厚い二冊の本に仕立て、ある。而して其巻端に牧之が「兒孫に示す」と題書して、京山との交際、雪譜編纂の始末を叙して居る。但しこれは兼て牧之が中風の氣があつたところ、恰も京山が越後の鹽澤へ訪ねて行つた時に又復それが再發して、折角珍客の來たのを家に留め置き、自分は三週間ばかりどこかの湯治場へ出かけ、それから中風がだん／＼重くなつて餘程不自由になつた。その後書簡を冊子に綴り、まはらぬ筆を強ひて書いたものであるが、その文を読んで見ても大部分の意味はわかる。一寸文章の通じない所もあるが、なるべく意味を取違へぬやうに自分で補つて、聊か筆も加へた上、左にそれを掲げよう。

## 兒孫に示す

山東庵京山は涼仙と號し通稱は岩瀬理一郎、故人京傳之舍弟にて、兄五十餘歳、急病にて物故、實子なき爲め其跡を受く、京山子、青山侯之近侍たりし時武藝を好み其修養あり、



又篆刻をも能くせり、而して山東庵一流の戯作をなして世を渡る、余此兄弟と魚雁往來すること四十年、余が一生の志願は北越雪譜を著して普く海内に流布せんとするに在り、初め雪畫と説とを京傳に寄せ、余の爲めに一書を著さん事を託し、京傳も諾し、繪は玉山、芙蓉に託し、これも諾したるに、皆前後して黄泉の客となり、志願行届かず、其後馬琴翁と交はる事深ければ之に託すること、なり、翁は越後雪譜の表題を撰び、立同放言に掲示迄しながら机上の耕生活世話敷とて徒らに星霜を重ね、馬翁もはや六十の坂を四ツ越し居れば成功覺束なく、依て之を斷り、更に京山に託せし所、いとたやすく引請、剩へ余が著述名義にて聊かの謝金にて引請、開板前より江戸に評判立ち、近年の著述番附の小結びの地位を占むるに至りたるは偏に京山の取計らひによる事也、馬翁も後悔して京山を誹謗し、悪口を申越したれど、余は京山に忍耐を説き、しばらく馬翁を訪はしめたり、京山も兄以來の舊交を忘れず遠路を意とせず、ことし天保七年五月廿日餘り、机上の耕を廢し子息京水を伴ひ尋ね來り、積る話に日の移るを知らず、水無月半ばかりにして自分の中風發し、三廻りの入浴を要する爲め留守之響應を牧山に託したり、余が病は其後漸く重く、京山滞留六

十日に及び、京山善光寺を廻り歸府せり、實に今生の別れと京山の消息を病中のつれづれに収集め、牧原にさし圖して冊を合綴し永く記念となす、兒孫みだりに之を反故となす莫れこの自叙によつて京山と牧之との交情がわかる。即ち前に記述した事實がこゝに簡單に裏書されてゐるやうなものである。

### 一九 京山と越後

京山の書簡なるものは、彼が鹽澤に牧之を尋ねた所までしか書かれてないので、鹽澤に於ける京山の消息、江戸へ戻つて雪譜後篇を著すまでには四年もかゝつてゐるが、この間に牧之とどんな往復を重ねたものか、その點が甚だ明確でない。京山の書簡集は今一冊あるといふから、それを見ればおのづから判斷もつくであらうが、寓目する機會を得ぬので想像して見るほかはないが、只雪譜後篇を讀むと、京山が越後に於て見聞したことがチラホラ載せられてあるので、それによつて消息の一端は窺はれる。第一、京山は越後を如何に見たかといふに、實は京山は息子を連れて越後へ行つたが、越後でも山の多い殊に深山地の魚沼地方を見た丈で、新



瀉にも寺泊にも行く事を期して居たに拘はらず、折ふし主人役の牧之中風に罹つて湯治に出かけるといふ騒ぎで、萬事心の儘に行かなかつた事情もあつて、幾ど何處へも行かずに江戸へ立歸つたと見える。雪譜後篇に京山の録して居るのを見ると、鹽澤滞在四十日、鹽澤をはなれて小千谷へ遊んだのが十數日、小千谷には岩居といふ人が居て、姓はわからぬが牧之とは親戚關係にあるものらしく、京山はそれを頼つてその家に滞在し、それから江戸へ戻つた。折角百里を遠しとせずして出かけた京山は、山を見て歸つたに過ぎぬ。鹽澤は別して山地、滞在中の四十日間は殆ど一回も鮮魚といふものを箸にすることが出来なかつた。小千谷に至つて始めてそれも川魚である鮮魚を口にしたのである。

併し京山の越後へ着後は熱心に雪の問題を研究した。其中でも一番興味を感じたのは市中の家屋の構造であつたらしい。即ち雪國特有の雁木がんどを見て不思議の眼をみはつたのであつた。それから雪中歩行の用具「かんじき」の如き實物を見たのは始めてであつて、京山はそれを自ら穿き試みなどしたものであつた。牧之の家人はそれを穿いて、あの重くるしいものを自由自在に操縦するのに、京山は穿いて見ると身動きもならなかつたといふ笑話もある。

又小千谷滞在中、一人で郊外に散策を試みた事がある。さうすると物を荷うた三人の女に出逢つた。此三人の女は物を荷うては居るがよく見ると鄙ひなにはめづらしい程の美人なので、越後には美人が多いと豫て聞き及んだ如く、實際美人國であると感じ、さすがの京山も見とれて恍然となつた程であつたが、岩居の家に歸つて其の事を話すと、一同は笑つて、其女こそ此の邊の穢多の妻や娘で、誰も相手にするものはないと云はれて一笑したといふことや、又同じく小千谷滞在中、地獄谷ぢごくたにで遊んだのであるが、其時岩居は氣を利かせて、土地の藝妓二三名を杯盤の間に侍せしむるため、豫め先に遣つて置いた。さて京山は行つて見ると、まことに嶮阻なる道に、崩れか、つた茶屋が僅に一軒あるやうな山間に、其近所には見られないやうな女が居て茶を侷める、酒を饗する、これにも吃驚して聞いて見ると、小千谷の妓なる事がわかつて、さうかと領いたのであつたが、歸途連れ立つて戻つた時に、孰れも草鞋をはいて歩き出したのを見て、これはとても都會には見られぬ一種の風俗だと、頗る面白がつた事などが書かれてある。又三國峠みくにたうひを通つて或茶店に憩ふと、天然の水があるので、京山は之に大なる興味を覺えて「其水を」といふと、砂糖の代りに豆粉まめこをかけて出されたのには京山も辟易して、荷うてゐた



行李の中から砂糖を取り出し、かけ直したといふことも載つてゐる。

## 二〇 京山と其家庭

ついでながら京山に就てもう少し録して置かう。それは雪譜のことに關係する以外、しばしばの往復に京山が其書簡中に現はしてゐる事實で稍々趣味ありと思ふ京山の身の上に就てゐる。京山は牧之と同甲で、四十年交つたといふ、その交情は友人といふよりは寧ろ親戚の味ひがある。従つて書簡のはしには必ず互に親族合ひの事迄も叙するのが常であつて、それによつて兩者家庭の事もおのづから窺はれる。

京山には三四人の娘があつて、三人いづれも諸侯に仕へてゐた。中にも二人の娘は長州侯に召されて、その中の一人はお妾になつて二人の子まで擧げて居る。そしてその娘は侯から京といふ名を與へられて居た。その妹も亦長州侯に仕へて居る事實が京山の書狀中に見えて居る。この事について牧之は例の「兒孫に示す」の序文の終りに附記して居る事があるから、それをここに抄録して見る。

京山、余と同齡ながら白髪なく眼明かに上下の齒鮮か也云云、又序にいふ、京山娘五人の内兩人踊り上手にて長州侯（萩の城主松平大膳大夫）に御覽に入れ候處、御満悦の上兩人共に奉公に參上候様（荏土の踊は芝居也）仰せあり、山東答に、賤き者の娘、第一仕付が大金故力不及と申すを、奥女中より、物入りは此方にて致すとの事につき差上る、間もなく一女は中老に立身、殿様よりお京と名を賜はり寵遇渥く、後には御部屋となり、姫君翌年若君誕生、斯くなれば親元より願出れば親元へ三百石被下家例なれども山東願出ず、併し山東部屋へ出れば羽振よしの事、妹は若君御膳番と申す事、實に女は氏なくして玉輿にのると是等をいはむ

京山の書簡にも、文政十二年如月二十二日附の分に、その娘を萩に遣はした事が一寸書いてある。

去年卯月十六日、娘二人、松平大膳様御供にて三百里外の旅路を長門之萩に發足、いまだ年行かぬ者共故一ヶ年之在勤心元なく、妻をも番頭お乳の人に付てつかはし、跡は男ぐらし之私並伴兩人、おろかなる手代小者など、味噌桶之世話までいたし、男やもめ之うちう



ちくらし居り、殊之外繁雜云云、妻並娘も所々見物いたし、當春三月二十四日めでたく歸着いたし候へ共、娘共はもとより櫻田御屋敷に罷在り、焼原よりは歸り不申、今に男ぐらしいたし居り申候

これで娘の消息が分る。全體世間には山東京傳、京山をいろく研究する人があつて、此兩人は殿様の落胤だなど、いふ説もある。其眞否は知らないが、さう思はる、節は滿更無いでもない。考證家の説は姑く措いて、若し或人のいふが如く落胤であるとすれば、京山の女むすめが多く諸侯に仕へて居る點からいふと妾因妾果ともいふべきものがあるやうにも思はれる。流石に京山は學問があつた丈けに、牧之の自叙傳文にもあるが如く自分の娘の故を以て三百石の扶持を受ける事はしなかつた。それは京山の見識として認めねばなるまい。

又文政十二年九月の書狀中に、惣領娘の事をいうて居る。この惣領娘も亦大名へ行つてゐるのであるが、これは萩に行つて居るのとは違ふ。その書簡には、

私は惣領娘お増とて二十三歳、當時松平大和守様え中老をつとめ居、倅京屋傳藏二十一歳、次にお京とて十八歳、次に今とて十六歳、此兩人は松平大膳様へ御奉公いたし、京は殿様

若年寄つとめ居候、末之男子は京水にて梅作と申候

というて居る。これによると惣領娘の次に長男、其次に娘二人、末が男子の五人の子供の内、娘三人までが諸侯の奥つとめをして居たのである。京山は尙ほ自分の子供に對する家庭の實況について寫實的に興味のある光景を左の如く云うて居る。

親の子に於ける、胡蝶が菊を作る様のものにて、苗より種々丹精いたし、花の頃は己が胡蝶故、いつか老にのぞみ申候、倅未だ獨身にて近來花柳に狂ひ出し大に散財致し候、依つて未だ家事を許し難く、私浪人にて刀を差し候へ共士商の片身がはりにて、机の上に帳面をひらき燈下に十露盤をならすかと思へば編筆に拙詞を連ね、印をほるかと思れば製藥を丸め、袴をぬけば前だれを結び、田舎芝居の由良之助、五段六段の狂言綺語、世話しき中に釜をかけて松風を楽しみ申す事驕奢にあらず、茶禪に氣を養ひし迄に御座候

此書狀もなかく趣のある書きぶりで、彼れの日常や家庭の様子が簡單に叙されて居る。即ち武士かと思へば町人、戯作者かと思へば茶人、やはらかいもの許り書くかと思へば印刀を取つて篆字を刻する、その目まぐらしいやうな生活が如實に描き出されて居る。



## 二二 京山の餘技と嗜好

そこで京山が茶人といふことに就て少しく書くが、前に録した祝融の災に罹つて、京山があらゆる物を失つた時分、しばし、牧之に書を寄せて、田舎の山村邊に籠細工で極めてさびたものはあるまいか。それは自分が茶の時の炭取りに用ゐたいのであるとて圖まで書いて、どうか捜してもらひたいと申し遣つたことなどが見える。京山も茶には餘程趣味があつたものと見えて、忙しい間にも時々定つた日には師匠の茶會へも出席し、或は自分の家で友人と茶會を催した事が書いてある。それに篆刻の技もかなりの處まで練達してゐたらしく、牧之に與へた京山自刻の印が書簡の餘白に四ツ五ツ押ししてあるのを見るに、今日では自分等その事に趣味を有してゐる者から云はせれば餘り上手とは評されぬが、兎に角先づ一通りは出來てゐる。隨分當時京山の文壇に於ける名聲を聞いて、印を託した者も鮮くなかつたやうで、筆を執る忙しい間には、時に印を刻してそれを生計の糧にあてたものである。

十數年に亘る京山と牧之の交際に於て、互に物を贈答したことも多かつたが、牧之は常に味

噌漬を贈つた。又寒晒し(片栗)を贈り、時には鹽引(しほびき)を贈つて居る。その他種々なる越後の土産を贈るのが例であつたが、京山が何時も頻りに御禮を云うて喜んで居たのは、重にこの味噌漬、片栗、鹽引の三品であつた。當時は今の如くに小包郵便のあるわけではなく、飛脚が擔いで江戸迄持つて行くのであるから、軽いものでなければ土産として甚だ不便である。片栗にせよ、味噌漬にせよ、鹽引にせよ、分量は少なくとも重量は相當にある。それを何時も贈るので、京山は費用を構はずに贈つてくる此土産に對しては、いかにも御厚意有難しとて繰返し感謝してゐた。越後の味噌漬は其時分の江戸の食道樂者間にも餘程珍とせられたものと見えて、味噌漬の紫蘇(ちそ)、大根、茄子の類を京山の臺所では頗る大切にしている事が其書簡に盡されて居る。又寒晒しも、江戸には類似のものはあつても全く製法が違ふので、京山は下戸であつた所から別して之を喜んだ。且つ自分の娘共が大名に仕へて居たので、この味噌漬、片栗は必ず幾何かを割愛して娘たちに贈つたもので、娘は又それを殿様に献上して居る。或は片栗が若君の食料に自然供される所から、大名に於ても喜んでゐたといふ消息が常に牧之に報じてある。京山を通じて越後の産物が、當時西國大名の味ふ所となつたのも亦興味ある事と思ふ。



## 二二三 餘談 二二三

以上京山と牧之を中心としての「北越雪譜」著作苦心談は略々叙し盡したが、こゝに聊か餘談として附け加へたいことがある。それは馬琴に關しての事であるが、恰も京山の書翰集を一應借覽し終つた頃に、矢張り鹽澤の鈴木家から、其保存されてゐた馬琴の書簡集一冊をも借りて讀む機會を得た。それは文政五年といふ年の一年分の馬琴の書狀を綴つたもので、其一年間丈けでも罫紙百枚以上からある大冊子となつて居る。偶々それを繙いて見ると、一番先に綴られてあるのが牧之から「北越雪譜」編纂の事を託された折の返翰である。

文政五年戊寅五月十七日附馬琴の書翰には、牧之から囑された雪譜編纂について色々意見を述べてゐる。第一は挿畫について、第二は此書の編纂について實地を見るの要ある事、第三には表題の事等について書いてある。先づ第一の挿畫についての意見は、

古人玉山は自然と板下の畫に妙を得たる人也、さして學問はなけれど才子なるべし、著述之事はいざしらず、此人世に在つて繪をたのみ、野生著述いたし候はゞ尤もよろしかるべ

し、江戸にては北齋之外此繪をか、すべき者なし、乍去彼人はちとむつかしき仁故、久しく敬して遠ざけ、其後は何もたのみ不申、殊に畫料なども格外之高料故、板元も喜び申間敷、しからば誰と一人に定めず、東海道名所圖會の如く、唐畫、浮世繪、そのムキ／＼にてより合畫にいたさせ可申哉、これも畫師一人ならねば跡方のかけ合格外わづらはしく候へ共、山水などは江戸の浮世畫師之手際に行く事にあらず、又婦人その外市人の形は浮世繪によらねば損也、兩様をかねたるもの北齋のみなれ共、右の意味合なれば、より合畫に可致哉と存候事

前にも書いた如く、牧之は「太閤記」の畫で有名な玉山が越後に赴いた時に、之に畫をか、せる計畫で雪譜著作の事を話したことがあつた。馬琴の考も、か、せるには玉山がよいといふので牧之の考と一致したのであるが、しかし著作の事まで之に任せることは賛成出来ぬ、それは自分などが書くべきものであらうと、馬琴らしい自負をほめかしてゐる。そこで畫に就ては既に世に亡い玉山は今更已むを得ぬとして、彼れよりも以上で必ず世人の共鳴を博する畫家としては北齋に限る、と馬琴は説くのであるが、しかし馬琴と北齋とは此時分不和の間柄であ



つた。當時北齋の畫名は頗る高く、門前市を成すばかりに繁昌して居た。その爲めでもあつたらうか、自から見識を持して居たので、や、もすれば馬琴と衝突した。馬琴の言ふが儘にはなつて居ない。遂には兩人喧嘩をするに至つて、其間が疎隔してゐた事も事實である。馬琴が北齋に向つて悪聲を放つことを辭せぬには、いくらかこの意味が含まれての事らしい。

元來一人で山水にも可、人物にも妙といふ兩者兼ね能くする畫工は容易にあるわけがない。そこで馬琴が已むを得ず寄合畫を工夫するに至つたので、例へば人物を浮世繪師に書かせ、風景を南畫趣味の者に書かせるといふ如く、各々其向々によつて長を擇び粹を鍾める方法を執らうとしたのも一應無理のない計畫といはねばなるまい。

其次には、實地に臨み越の山、越の川、さては其風俗人情まで親しく視察を遂げた上でなければ、執筆は出来ないと云うて、其書翰に左の如く書いて居る。

右の一著述あらまし認め被遣候趣にてつゝり候へば、さしてむつかしき事にはあらぬを、愚意の趣にすれば、はなはだ手おも也、所詮御地を一見せずには筆を起し難かるべきかと存候、乍去旅行のことは前にも申候通り三里五里之歩行も自由ならず、且つ諸費をいとは

ずにといふ程の餘力も無之故、中々急には思ひ企てがたき業なれども、何とぞ明年明々春までに御す、め之湯治をかね、せめて御地を踏候て、その上にて著述いたし候はゞ、後悔も少く筆もとり安くと存候、この儀はかく存候までを申也、我身ながらわが自在にもなりかね候故申すまでにて、おぼつかなき事に御座候、今十年も昔に候はゞ如何ともなり候、何事も時節おくれ心のま、にならず、これのみ残念の至りに御座候

馬琴の如き綿密周到なる作者としては、只牧之から與へられた草稿を書き直すだけでは到底満足する事は出来なかつたことであらう。且つ京山は、自分が執筆しても京山自身の著作とせず、牧之の著として世に出さうとしたのに、馬琴は然らず、彼れ自らの著作として牧之が考訂するといふ形式をとらうとしたので、京山の時とは全く逆に出ようとしたのであるから、由來細心の馬琴としては實境を見んとしたのも當然である。殊に江戸に於ては殆ど想像のつかぬ大雪の事を書かうといふのであるから、土地の事情をも見、まのあたり牧之にも逢うて種々質問した上でなければ迂濶に筆は執れぬといふ感じを起したのも自然である。

併し此書簡にもあるやうに、さうしたいと言ひながらも、眞實さうする意があつたわけで



はない。馬琴としては、たとひ越後漫遊の望みはあつたものとしても、當時の事情が許さなかつたのであつて、この書簡から見て到底出来ないといふことを暗示して居るやうな氣がする。又それは果して實現せずして終つたのである。最後に書物の表題について曰く、

外題の事色々考見候處、北越雪中圖會などいたし候ては、只今圖會ものすたり候故をかしからず、又北越雪話などいたし候ては外題かろく、わづか二三冊之半紙本めきて損也、又先年北越奇談と申す書世にあらはれ候へ共、當地にては評判どつともいたし不申、北越之二字先をこされ今更人まねする様にて残念也、依之「越後國雪中奇觀」と可致哉と存候へ共、雪中の二字未だ落ち着不致候様に存候、いづれ尙又近々之内とくと考へ、玄同放言奥目錄中へ右之外題をあらはし、その外追々拙著へ右外題を書載せ、世之人に知らせおき可申候、左様に候へば、うり出し之節大につよみになり申候、尤も越後鹽澤鈴木牧之考訂といたし申候、随分御骨折らせられ、出版成就之節御亡父様への御孝養にもと存候事に御座候、奇觀之二字は動くまじくと被存候、いかゞ、六出玉屑みな雪の事なれ共、さては俗へ遠くて損也、雪中之二字とくと考可申候事

前掲馬琴の書簡を通讀して見ても、當時彼れが頻りに外題の事で苦心して居たことがわかる。實は本の賣れると否とは主として外題の附け方如何に在るので、作者としては第一に其選定に心を碎くが古今共通である。依頼を受けると匂々、眞先にこの外題について馬琴が意を用ゐたのは無理からぬ事である。

そこでいろいろ考案の結果、遂に雪譜といふ字を考へ出したのは、この書簡を發してから後の事に屬する。鈴木家から借覽した馬琴の書簡集も調べて見たが、雪譜と命名するに至つたことを認めた書簡は見出さなかつたから、それ丈けが缺けて居るのであらう。尤も綴られた書簡中に、雪譜云々といふことが散見される所から察すると、命名に關する書簡が其間にどうしてもなければならぬ筈なのに、これが缺けて居る所以は、恐らく其分丈けが半切れか何かにか書かれてあつて、一定の用紙に書かれた書簡のみを綴る場合に、それを挿む事が不便であつた爲めに此分丈け逸したのであらう。兎に角雪譜の名が馬琴によつて選ばれたことはたしかで、後に其著作が馬琴の手を離れてからも猶ほ其名を用ゐなければならなかつた次第も前に擧げた通りである。



馬琴の書簡として引用した前掲三斷の音信は、實は皆連絡したもので、同一便に寄せたものであるが、たゞ説明の便宜の上から三つに分けたのである。この書簡は、牧之が雪譜編纂の事を馬琴に託した當時の事情を語り、又一面には、また京山の引受けない前の経緯を推知する資料ともなるものである。

尙ほ終りに書き加へるが、文政五年といふ僅か一年の間に牧之に與へた馬琴の書簡は、罫紙で百枚以上二百枚近くになつてゐることは前にも書いたが、此の他に散逸した書状はいくらあるかわからないから、之をも集めたら非常な量を示すことであらう。當時の人は書簡を認めるに堪能であつたからでもあらうが、馬琴の如くに筆硯の忙しい寸陰をも惜むその人が、よくも斯うまで努めたものだといふ感じが入るのほかはない。

## 六 私の隨筆觀

「隨筆」といふ一類の書物は、その書名の通り、心の赴くまゝ、意の動くまゝ、筆に任せて書いたものをいふのである。耳に聴き目に觸れたことのみを書いたのもあれば、それに感想を添

へたのものもある。或は自家の主張を述べ、若くは他人の説を駁したのものもある。其體に於ては秩序倫次なく、雜然と書いのもあれば、理論井然、一貫した思想を陳べたのものもある。文は和漢兩様の外に漢和混同もある。隨筆と云はずして隨筆であるのもあれば、隨筆と銘を打つたもので隨筆らしからぬものもある。兎角隨筆の範圍は甚だ廣い。若し更らに廣義に解すれば、其範圍は一層廣くなる、随つて其領域を劃然と定むることは甚だ困難である。併し普通隨筆といつてゐるのは、片々たる記事の臚列で、各篇の長短は區々だが、概して長からず、事項は多般に涉つて、その排列は概ね錯綜してゐるのを隨筆といつてゐる。匆卒筆を走らせて、多く意を構へず、漫りに書くものとすれば、勢ひ斯くの如くならざるを得ぬ。其内容に至つては千殊萬別で、或は單に遺忘に備へるため、見聞のあらましを記すもあり、それに感想の伴ふものもあり、或は何事かを研究せんとして、その資料を書きあつむるもあり、往々筆者の獨創の見識の發露もあれど、抵ね不纏まりの者の多いのが、隨筆の特徴であらう。勿論其人の専門や學殖や趣味などの相違で、内容に相違がある。乃ち史家の隨筆は史料に偏し、考證家は穿鑿に専らであり、畫家は畫論に偏し、詩家は詩話で持切り、劇通は演劇一點張りであるなどは誰れも知る所



であらう。

爰に多少の考察を要するのは、隨筆の著者の心掛如何といふことである。著者に出版や公示の意思があるでなく、唯だ心覺えに書くのと、出版若くは公示の意があつて書くのとで、自然隨筆の面目が違つてくる。全く他人に見せる意のないものには、己れの祕密も蔽ふ所なく書き散らし、他人に對する批評なども忌み憚る所なく露骨に書くのは自然の勢であるが、之に反して公刊を期するものになると、自然人を怡ばしめる意匠を要し、文章も材料もおのづから精ならざるを得ぬ、これも亦自然の勢といふべきであらう。よく纏まつた隨筆は後者に屬し、秩序倫次を缺き、雜然たる間に生の味のあるのは前者に屬する。かの柳里恭の「獨寐」の如きは、どう思うても刊行を期したものとは考へられない。馬琴の「玄同放言」の如きは、自家の學識を衒はん爲め公刊を目的としての著であることは否むことが出来ない。松浦公の大部の隨筆「甲子夜話」は私が窃かに隨筆の王と呼ぶものだが、あれは公の生前刊行されなかつたけれども立派に纏めることに努力したものである。蜀山人の「一話一言」に至つては、幾許か自然の隨筆に近い趣がある。それだからいくら蜀山の筆になつたとは言へ、各項に興味があるとは

言ひ難い。尙ほ文章本位の隨筆、事實本位の隨筆といふ區別も立ち得るであらう。古くは「徒然草」近くは樂翁公の「花月草紙」などは、文章に意を用ゐたものである。併し此二書は文章ばかりでなく、書いてある事にも趣味があるから、文章本位の例とするには不適當かも知れぬ。漢文隨筆は概して文章本位の趣がある。

さて以上アラツボク類別した隨筆の内、どれがよいかといふ優劣の論になると、遽かに判断を下しかねる。趣味本位から判すれば、刊行せん爲めに作つた隨筆、然らざるも偶然編次をなしたのでなく作らんが爲めに作つた隨筆は、材料も精選され、文章も意が注がれて居り、おのが好む所にのみ偏せず、衆多の讀者を怡ばしめる用意もあるから、一般に受がよいのは言ふまでもない。世に名高い隨筆は皆此範圍のもので、幾十回も版を重ねてゐる。之れに反して敢て筆者自から刊行の意なく、唯だ筆のまに／＼心覺えに書き散らした隨筆の類になると、多くは高閣に束ねて省みられず、爲めに埋没して還魂紙の料となつたものも少なくないが、實は此中に惜むべきものが数知れずある。例へば工藝家の隨筆のごときは、多くは専門の事にわたり、文章は抵ね拙であるけれども、其の語る所に趣味もあり、又大切な意味もある。夫の世阿彌



の「十六部集」の如きは、足利時代の詞で質朴に書かれてゐる爲めに久しく埋没してゐるが、能樂のため一道の光明を放つ大切な書物として今は尊敬を拂はれてゐるではないか。豊太閤が寵した博多の豪商神屋宗湛の茶日記なども、亦前のに譲らない價值がある。すべて斯ういふ人達の、は文章はマヅクても、其潤色のない處が却つて率直に赤裸に事の實相を道破してゐるので、能文よりも往々優る處がある。世に俗書と云はれて漢學隆盛時代士林に唾棄された多くのもの、内にも、亦頗る採るべきものがある。市井の商估などの物したもの、覺束ない筆であるから悪文でもあるが、鄙猥の事をあらはに書いてゐるので却つて天真流露の味があつて、市井の風俗人情を知るの好資料となる。兎角美文は物を美化する爲めに、往々事相を蔽ふの失がある。文章の巧拙を以つて直ちに隨筆の優劣を定むるのは輕率の譏りを免かれぬ。

私は何れかといふと、眞率に素朴に、殊更でなく自然に出來た隨筆の方に重きを置きたいと思ふ。假令否らすとも、暗黒裡に埋没してゐる多くの隨筆を明るみへ出し、今の世用に供したいと思ふ。斯る眞率の隨筆にこそ、自から欺かぬ記述がある。赤裸の實生活が斯る隨筆に於てこそ描かれてゐる。筆者の性格、其心匠の如きも、此等に就て初めて知ることが出来る。往々

にして他人に知らしてならぬ秘密も、此方面の隨筆に搜し得る。或は其人の工夫半ばの事を不備を厭はず書いてあるのも、此種の隨筆の一特徴である。讀者がそれからヒントを得て、未熟の工夫を終に大成に至らしめることもある。此種の隨筆は抵ね一家の私記であるから、日誌と其趣を一にする。何事も蔽はず隠さず其時の感情で眞率に書くから、そこに一種の味があると同じ様に、此種の隨筆にも同様の趣致があつて、日誌よりも筆數が多い丈に興味も一段深い。

要するに隨筆は百味筆筒の如きものである。一部の隨筆が既に百味筆筒である。全體の隨筆は、勿論適切に百味筆筒に譬へ得る。此筆筒の抽子ひきたしに數知れず藥味が入つてゐる。そして皆味が異つてゐて、辛いのもあれば甘いのもあり、苦いのもあり、酸いのもある。小粒であるのが其特色であるが、形や色もさまざまで、硬いのもあり、軟かなのもあり、精製もあれば粗製もあり、生なまなものもあり、加工したものもある。小粒ながら形や色や味が多般多様である處に興味がある。されば百科の書物の内に興味のあるものは隨筆の右に出づるものは無い、それ故昔から多くの隨筆が出版されてゐる。併し出版されたもの、みが必ずしも良いものとは限らぬ。埋没して世に出ないものがまだどれほどあるかわからぬ。その内に既刊のものよりも遙かに興味の



あるものも夥しくある。然るに妙な事には、隨筆を漁るものは、いつも同じ抽子を明けて、他の抽子に手を觸れないのは何故であらうか。百味筆筒の内に全く手のつかない抽子は幾百千も残つてゐる。いつも隨筆叢刻となると、有名だけに有り觸れたもの、みを多く採るのが例となつてゐる。いくら有名なものでも、餘り繰返しては味が薄くなる。皆な其の味に慣れては興も亦無くなる。何故に手附かすの抽子から取り出さないのであらうか。そこには久しく潜んで世に出られないことを聊つてゐるものが夥しくある。そのすべてが、必ずしもよいものとは限らないが、世間の思ひも寄らぬ味の異つた珍奇のものが數知れず埋没してゐる。今どき隨筆を叢刻するに、手をこれに付け、それをさらけ出すのでなければウソだ。全體隨筆には種々の形式がある、普通所謂隨筆の形式にのみ泥むと、多くの逸物を取り逃すことになる。飽くまで境域を廣めて、形式に泥まず博搜を力めねばならぬと思ふ。

## 七 日誌を書く心得

### 私家の日記

日誌は「起居注」とも云はれて起居の記録であるから、日々書き續くべきものであるが、之れを爲す人と否らざる人とがある。私は壯年から三十七八年日誌を書きつゞけてゐるので、日誌に就て幾何か経験があるが、實は此の習慣の廣く行はれんことを望むものである。

廣く日誌と云へば、いろいろ種類もあるが、公私の日誌が大別で、私の今云はんとするものは、専ら個人の日誌に就てある。

何故個人の日誌が必要かと云ふに、これはつまり一個人の記録で、それが積ればその人一代の歴史となり、それが又何代も積れば一家の歴史となる譯だ。最も多く自己を知るものは自己である。自己に非ざれば、自己が是まで如何なる経路を踏んで進み來りしかを知悉するものはない。

日記を書かぬ人は、往々にして日記否定説を唱へて云ふ。「私人の日記なんて、そんなものがあるものかい。——若しえらくなつて、世の中に樞要の地位でも占めて居れば、その人の一



舉一動は天下に關するから、それを書いて置く必要もあるが、微々たる人間の日前の行事を記した處で、風の前の秕糠にも値せぬぢやないか」と。しかし翻つて思ふに、一言一行、天下の休戚に關するやうな要路の大人物は、その人自身が日記を書かずとも、その人の行動は新聞なり雑誌なりに現はれて、他人が之を記録して呉れる便宜もあり機會もある。之に反して、えらくない人間即ち微々たる人間の行事は、之を自分で書かねば誰も書いて呉れるものがない。此の點から考へても、私家の日記は必要である。

## 青年時代の日記

青年時代の日記——年尙若くして、言行共に未だ穉氣を脱せざる時代の日記は、見様によつては殆んど全く不必要なやうにも思はれる。で、一部の人々は「世間へ出て、何か相當の立場を得るやうになつてこそ、日記といふものは必要であるが、未だ乳臭を脱せざる時代には、日記などは無用の物だ」など、云ふ。がそれは誤つてゐる。凡そ事の成るは、成るの日に成るに非らずして、その由つて來る所は久しいのである。人が或る地位を得て社會に立つてゆくに

は、其處に到る委曲の經路がある。而してその經路は、大方これを青年時代に履むのである。茲に於いてか、青年時代に日記がなければならぬ。青年時代の日記は普通の歴史に比べると、先づ「上代史」と云つた格である。

世間には、老境に入つてから日記を書く人は少くないが、若い間から日記をつけてゐる人は甚だ少ない。否、全く見當らぬ。實に残念なことである。自ら執筆することの出來ぬ幼少時代は兎も角、苟くも自分で記録することの出來る時代から、相當の年輩に達するまでの日記は、將來に於て大に必要缺くべからざるものとなるに相違ない。なぜなれば、青年時代はその人に取つて、最も重要な活動の準備時期で、その間には志を立てることに煩悶したり、目的を達する爲めに懊惱したりする。何う云ふ動機で何う云ふ志を立てたとか、何う云ふ理由で何う云ふ學問を選んだとか、何う云ふ人々と交際したとか、何う考へたとか、何う感じたとか、若い時代の胸裏を往來した感情思想が、一々日記の中に點綴されて來るのであるから、將來之を回顧して無限の感に打たれるに相違ない。殊に趣味の上から觀ると、ウブな時代の日々の行動は興味のあるもので、天真爛漫なる當時の有様を、老境に至つて知らうといふには、日記に増し



た材料はないのである。獨り自分ばかりでなく、他人が見ても若い時分の日記は面白いものである。此の一種懷舊的の興感は實に尊いものであるが、一度失へばまた之を恢復することが出来ぬ。

一體日記をつけることを面倒がる人が多いが、實は何でもない事で、眞に一舉手一投足の勞なのだ。日々、其日其日の出來事なり、思想なりを書き記すといふ事になれば、電車が惰力で軌道の上を走るが如く、自ら筆が走つて雜作なく日記といふものが出來て行く。一口に云へば、日記を書くことが本能のやうに成つてしまふ。かくの如き習慣が善なりや惡なりやに至つては、殆んど問ふべき必要がない。日々の行動を、日々規則立て、書くこと云ふ習慣は、推し擴めて云へば、日々の仕事を粗漫にせぬと云ふ事になり、また必要の事を筆まめに書く動機ともなり、親戚や友人への手紙の往復を厭ふやうな弊害もなくなる。一寸考へても、この習慣は斯様に結構なものである。

### 日記を書く要訣

日記を書いた経験のない者から觀ると、日記をつけるのは極めて億劫に思はれるが、慣れば何でもない事である。試みに一箇月繼續して見よ、所謂「習ひ性となる」で、日々或る時刻が來ると、書かねば氣が濟まぬやうになる。用事があつて夜を更かし、遅く歸つて來ても寢前には屹度つける。つけなければ眠られぬやうに成る。これは自分の、三十餘年日記をつけてゐる自分の経験から保證する。扱て日記をつけるには秘訣がある。秘訣と云ふと仰々しいが、その實何でもない事だ。

**第一** 善く書かうと心掛けてはならぬ 文章をうまく書いて、味を持たさうなど、心掛けては駄目だ。美しい文章を作るには時間が掛る、考がある、自然面倒くさくなつて中途にして止める。之では何にもならぬ。一體日記に最も尊ぶところは連續といふことで、短い間が委しいよりも、略でもよいから長い間續く方がよいのである。故に日記の文は走書きで、文章を氣取る必要はない。

**第二** 人に見せる氣になる勿れ 元來日記は一家一人の私乗で、人に見せる爲めのものではない。唯だ自分が分りさへすれば宜しい。言ひ換へれば人に見せる氣を起してはいけぬ。尤



も古くからある日記には、人に見せる爲めのものも尠くない。例へば「紫式部日記」、「土佐日記」の如きは實に立派な文章で、これ等は恐らく人に讀ませる爲め作つたものであらう。さればその目的は文章の美を發揮する點にあるが、日々の日記をつける者には、こんな心掛は無用である。

**第三** 赤裸々に書くべし 又殊更らしい事を書いてはならぬ。殊更らしい事を書くとき、天真爛漫の趣を害して却つて面白くない。前述の如く日記は自分の爲めのもので、他人に見せる物でないから、自分の事柄は一から十まで有りの儘に記すが善い。場合によつては自分の失錯をも書くが肝要である。本居宣長は、極めて謹嚴な學者であつたが、併し書生時代の日記の残つてゐるものには花柳界へ足を踏み込んだ事が明記してある。人間は所詮人間である、神ではない、かう云ふ失錯もある譯である。元々日記は一家の私乗であるから、何も隠すには及ばない、赤裸々に書いて置くがよい。や、もすると、<sup>おどろ</sup>恚々の事を書いてはと、自ら恥ぢて書き洩したり、或は事實を裝飾したりする者がある。これ等は日記として不都合の極である。思ふ存分に、飾らず僞らず書いておくと、後來それを讀む場合に非常な興感を催し、また少なからず反

省の資を得ることがある。

**第四** 單調を憂ふる勿れ 日記をつけてゐる人の中にも「どうも毎日の事柄が單調で困る」など、云うて、折角つけ始めた日記を廢めてしまふものがある。併し此等は尙未だ日記の趣味を知らぬ者である。日記を書く習慣がつくと、同時に一種の趣味が生じて來て、少し考へれば書く可きことが幾らでも湧いて來る。人と何う云ふ談話を交換したとか、何を見たら何う云ふ感じが起つたとか、誰々に何を贈り贈られたとか、かう云ふ風の事は皆日記の好材料だ。考へて見て格別面白くない事でも、書いて見ると案外に面白いことがあるから、選擇に少し注意を用ゐれば書くべき事は幾らもある。豈に管に晴雨寒暖に止まらんや。苟くも赤裸々に自己を現出する以上、比々皆日記の種ならざるはなしだ。

**第五** 少しく世の大事件に觸れよ それから、日々起る社會の出來事、小さい事は無論記すには及ばぬが、大問題、大事件は少し觸れて置く必要がある。委しい事は新聞や雜誌に出来るから書く必要はないが、これ／＼の事があつた位は記して置けば、後日の思出にもなり、亦參考にもなる。



第六 銘々得意の味を附くべし 更に一步を進めて、詩を作り歌をよみ俳句をひねり、畫を描く人々は、自己の嗜好に従つて、それら得意の作を所々に挿むがよい。ひとり作を保存する便利があるのみならず、文字に現はれぬ一種の趣味を添へることもなる。全體日記に最も趣味のあるのは、詩歌俳句繪畫などの挿んである物である。渡邊華山の日記の持て囃さるゝのは、自己の目撃した種々のものをスケッチして豊富に収まつてゐるからであり、河鍋曉齋の繪日記は文句よりも繪が主で滑稽味があるから、これも亦興味がある。

## 八 書簡三説

### 一 書簡は情の使者

書簡を普通「書狀」と云ひ、亦單に「狀」とも云うてゐる。互ひの狀況や状態を通ずる所から狀といふのであらうが、狀は「情」と普通でもあり、互ひに状態を通じ合ふことは取りも直さず情意を通ずることであるから、狀と情とは、ひとり普通のみでなく、狀の字におのづから

情の意が籠つてゐるとも云ひ得よう。されば狀袋は情袋で、封筒は情を包むものと解し得るであらう。書狀は眞に情の使者である。

昔し蘇武が匈奴に使用して留まること十九年の長きに及んだが、尙ほ歸ることを許されなかつた。茲に漢の使節が蘇武の境遇を氣の毒に思ひ、何とかして歸國させたいと、匈奴の王單于ぜんごに見えた節、詭いで云ふには、漢の天子が一日狩獵に出かけて雁を獲た、その足には蘇武の書簡が結びつけてあつて、備つさに歸思の切なることがあつたので、天子も之れを見て落涙に及んだといふと、流石に單于も氣の毒な情が動き、終に蘇武を放還したと云はれてゐる。一時の方便に書簡を假りて云うたことが蠻王を動かし得た、況んや實の書狀をやだ。

某外國に郵便稅率を大いに高めたことがある。貧人はこれが爲めに一方ならず不便を感じ、隔絶の地にある親戚と郵書の交換をすることがたやすく出来なくなつたので、互ひに申合せで、爾後は郵稅を貼らずに白紙を封じた書簡を發し合ひ、それが届いたら平安であるものと解し、開封せずに押戻すことにしたとある。白紙の書簡ですら尙ほ且つ情を通ずることが出来る、況んや文字ある手紙に於てをやだ。



情思を通ずる文は、必らずしも巧を要せぬ、拙と雖も情を動かすことが出来る。茲に手近に一例がある。それは頑是な穉兒より旅先の私に送つた端書で、文面は、

トウサマ、ヨカヘリノトキ、ヨミヤゲニ、

リボン、ゴシキエンピツ、クダモノ

キツト

とある。幼穉な文言ではあるが、穉兒の情は躍如としてゐて、殊に末の「キツト」の三字に千鈞の力がある。よく引合に出る、龜はつといふ馬喰ばくが米を貸した督促狀に「なぜくさぬ（寄越さぬ）、くさぬならおれがゆく、龜はつが腕には骨がある」といふ末句の力あるに較べても敢て遜色が無いではないか。

圓珍庵羅城が或る人に與へた書狀に左の一節がある。

吉井村勸助ちうおの子有、彼が妻を傳九といふ男盜取自妻とす、いろくむづかしき譯ありて、勸助馬池にて切腹、その遺書おかしき事故、寫し遣す、

其の書き置は、

垣カキを木キの事

やい傳九、よも我をたばかつたな、うぬめく、やんがておもひしらせん、まつてをれ、うぬめ傳九。

文は鄙野なれども鬼氣人に逼るの概がある。羅城はこれに附記して「これ等を見れば、文をかざり、筆をあやつるは、すべて二等に落ちるか」とある通り、斯る不出來の文でも、熱情が籠れば、飾つた文よりも人を動かす力に於て一等上に位する。

昔し英國のエリザベス朝に、外國に駐紮する使臣から本國の妻へ送るべき書狀を、誤つて女皇陛下に呈する公文と取違へて封筒に入れた。これは勿論失態であるが、其過失が却つて幸となつた譯は、妻宛の私信には備つさに外國に駐在することのつらさや、ホームシックを起してゐることや、俸給と交際費の不十分なる爲めに十分の活動が出来兼ねることなどを、こまかくと認めてあつたので、女皇はそれをみそなはして坐ろに氣の毒に思し召され、直ちに増俸の御沙汰があつたといふ。駐外使臣が正式に陛下に窮を訴へても、斯く響の聲に應ずるやうな要領を得無かつたであらうに、真情淋漓たる私信だけに、斯くも陛下の同情を博し得たのである。



芭蕉が門人去來に金を借りに遣はした文がある。

過日芳野行脚存立候間金二兩二分御かし可給候、押付もらひため返濟可申候、されど我等事に候へば、えなしまじく候

簡単な文ではあるが、師弟の情味は淋漓としてゐる。追つてもらひ溜めて返濟するつもり、併し我等のことである、恐らく返濟出来まじとは何等眞率の言ぞ。芭蕉の風格は躍如としてゐるではないか。

豊太閤は勿論文字に爛はない。其の書簡は覺束ない假名文であるけれども、眞率の味があつて氣魄が溢れてゐる。其の陣中から愛妾淀君に與へた手紙の内に、

(前略) 二十日頃にはかならず参り候て、わかぎみだき申可候、そのよさ(夜)そもじをも、そばに寝させ可申候、せつかく御待候べく候

又他の一簡には、

返すく御のかしく候ま、やがてく参り候て、くちをすい可申候、又われくゝるすに、人にくちを御すはせ候はんとおもひり云々

此の書狀に所謂「わかぎみ」は秀頼をさすので、子を思ひ妾を思ふ眞率の情は紙幅に溢れてゐる。留守に他人の接吻云々は、流石の豪傑も嫉妬は押へ切れなかつたと見える。しかし如是き眞摯の放言は豊公ならでは出来ぬこと、書狀が情のメッセージであること、これ以上説くを要すまい。

## 二 書簡の八難

手紙を上手に書くことは案外難事である。大儒の手紙が必ず巧うまいいとも限らず、能書の人の手紙がよいとも限らない。字がよくとも手紙の體を爲さぬものがあり、學殖があつても手紙の拙な人もある。近頃になつては、別して手紙が下手になつて、文壇に名聲ある人でも、手紙を書かせると成つてをらぬのが少なくない。殊に近來の手紙の書き方は、男女の區別が付き兼ねるほど混亂して、有鬚の男子の筆に成つたものが、餘りに女性的で人をして嘔吐を催さしむるものもある。手紙は文章の内でもおのづから一體あるもので、實はよく書くことが決してたやすくはない。中にも或る場合の手紙は頗る書きにくい。私は曾つて書きにくい手紙は何かと考へ



て見たことがある、數へて見ると八類程ある、今其の大略を左に掲げる。

第一は自分より目下めしたのものにやる手紙である。目下のものにやる手紙は、普通用ゐる敬語を省かなければならぬ。處が敬語を省く結果は、何となく高慢らしく聞える。それを高慢らしく聞えぬやうに、而も威あつて猛からず、自から溫情の籠つて居るやうに書くのは、容易でない。初心の者には殊に困難である。私の知る限りでは、近頃の人でかういふ手紙を上手に書かれた人は、故三條公の如きがその一人である。公は位人臣を極めた方で、何人も云はゞ目下である。然るに謙徳の人であつたから、敬語を用ゐずして、しかも傲らないやうにうまく書かれた。それから細川潤二郎男なども、先づ此の種の手紙に妙を得て居られた方であらう。實は此の種の手紙の名手は餘り澤山はない。これが書き難い手紙の一つである。

次に慶弔の儀式張つた手紙は、誰れも一と通りは書くが、儀式の手紙は、兎角儀式一邊に流れ易い。其間に自から優しい情味を籠めることは困難で、大家と雖も能くせざる場合が多い。斯うした手紙は、餘り淡泊に書くと、電信文と同じ事になる。さればと云つて、餘りくたくしく表情の辯を費すと、却つてそれが不自然になつて、何となくわざとらしく、輕薄ないや味

が伴うて来る。かういふ手紙に、よく其の中庸を得て、遺憾なく真情を表はすやうに書くのは、餘程むづかしい事と云つてよい。某女史が、ある人に贈つた悔狀を一目した事があるが、其手紙は如何にも情意並び到つた懇切なもので、弔慰の情もよく現はれ、頗る名文であつた。そして最後に「只遺憾な事には、御生前に一度も御目に掛らなかつた」といふ様な事が書いてあつた。一度も遇はぬ人に對して悔みを云ふ手紙に、かく情味のあるのは確かに老手であると思つた。これがその二。

さて三は見舞の手紙、例へば寒暑の見舞狀の様な、特別の用のあるでなく、たゞ左右を問ふだけの手紙は、雜作もなさうで、決して然うでない。斯ういふ手紙は、「御無沙汰をしたが相變らず御壯健ですか」と云ふだけでは一向に情味索然で、相手の人に何等の感動をも與へない。併し之れに點綴するに、土地の近況、或は隔絶した土地ならば、雙方の氣候の比較、或は自分の近狀、若くは最近に見聞した珍事などを以つてすると、さながら面接して話を交へるが如く、受取つた人も少なからず感興を惹起するものである。處が斯ういふ手紙をわざとらしくなく、素直に面白く書くことは、なか／＼むづかしいものである。



第四、婦人にやる手紙は、相手が相手だけに、多くは假名で書かねばならぬといふ不便がある。其の上むづかしい事柄を、力めて分り易いやうに碎いて書かねばならぬ苦心もある。普通用ゐる漢語を交へた手紙は、比較的容易であるが、此の柔らかな手紙がむづかしい。一步進んで婦人の情を動かす程に書かうとなると、勿論文學的の修辭をも要するので、更にむづかしい。それも自分の細君や姉妹などいふ内方人に遣はすものは論外として、他人である異性に寄せる手紙には、誰しも困難を感じぬ者はあるまいと思ふ。此の種の手紙を上手に書いた人は、國學者の中にはいくらかある。例へば賀茂眞淵が門下の秀才倭文子の初旅に出る時贈つた手紙の如きは、實に其の標本ともなるべきもので、徹頭徹尾假名で書いてあるが、如何にも情愛が紙幅に溢れ、その嚙んで含めるやうに物教へをして居る處は、さながら慈母が愛嬢に對する趣があつて、そゞろに讀者を動かすの妙がある。併し是等は有數の手紙で、餘り澤山は無いやうである。

第五、借金の云ひ譯をする手紙、並に金の無心を云ひやる手紙の書きにくいことは、茲に多言を費す迄もあるまい。此の種の手紙は、最も人の情に訴へねばならず、理合も亦相當に盡さ

ねばならぬ。随つてどんな筆不精の人でも、此の場合には相當に苦心するものである。平生手紙を書くに、此の時の心持を以つて筆を執らば、どんな手紙でも概ね成功するであらう。

第六、人に代つて書く手紙、これが又決して容易でない。全體自分の思ふ通りを遺憾なく書くすらむづかしいものであるのに、まして自分ならぬ人の情を寫さうとするのであるから、そのむづかしい事は言ふまでもない。曲りなりにも自分の書いたものは不思議に情の移り易いものである。そこで交際社會の禮式に於ても代筆は禁物で、自分が病氣などで萬已むを得ぬ場合の外は、代筆を使はないのが通規となつて居る。代筆の是非は兎も角もとして、代筆はなかなかむづかしいものである。

第七、長上を諫めるとか、若くは目上の人に金などの催促をする手紙も、亦書きにくいものである。此の種の手紙には、義理を明らかにすると同時に、先方へ對する敬意を失はぬやうにせねばならぬ。即ち最も辭令を巧に書かねばならぬ。如何にいふ事が筋立ちても、辭令が行届かないで荒立つやうなことがあつては、直ちに先方の感情を害つて、其の云ふ趣意を取つて呉れぬことになる。例へば後者の場合に於て、もとゞ當方から借した金を催促するのである



から返せと云へばそれでよい譯ではあるが、長上に對してはさうも行かぬ。矢張り相當に敬意を拂はねば禮儀として濟まぬ。さりとて餘り敬意を拂ひ過ぎると、先方で返しても返さなくてもよいやうな心持を起さぬとも限らないから、其の邊の手心をよく考へて掛らねばならぬ。先方を怒らせず、其目的を達するやうに仕掛けるには、全く書き方に苦心がいる。かつて加藤枝直といふ國學者が、其の師眞淵の子息に與へて、借金の督促をした手紙を見た事がある。それは先づ先大人眞淵に對しては子弟の關係があるから斯く々の特別の事をしたのであるが、今では代がかはつたから事情が同一でないといふ條理を分明にあらはし、さて之が督促に及ぶと云ふ順序で、條理と敬意とを並び備へて書いてある。かう出られて見ると、相手が如何にすくとも領かねばならぬ事になる。此の種の手紙はその相手方と場合とをよく考へて工夫せねばならぬから、一通りならず書きにくいものである。

第八、他見を憚る手紙がむづかしい。此の種の手紙には、大抵「御覽後火中」など、書き添へてあるが例である。處が事實に於て多くは火中に附せられない、随つて早晚世に出て來る虞れがあるから、之を書く時に豫め用意を要する。勿論出來るだけ相手にのみ分るやうな書き方

を選ばねばならぬのであるが、兎もすると相手にも分らない事になり易い。のみならず他見を憚る手紙には、密書の性質として他人の褒貶毀譽に亘る事もあり、或は權略に關する事もある。斯る事柄は筆の使ひ工合で、人を傷け且つ自分の人格を下けるやうな事がないとも限らないから、大いに注意して筆を執らねばならぬ。よし又匿名にして之れを書いた所で、その筆蹟で本人の誰れかは直ぐ知れる。依て筆蹟の分らぬやうにすることに就き、私の感じた事が一つある。それは自分の筆蹟を隠す一つの手段として片假名で書く事である。即ち手紙の全文を電信文のやうに片假名で書けば、自分の筆蹟は略々隠し得るものである。別に要もない事ではあるが、ついでだから爰に述べておく。

所謂書きにくい手紙といふは、必ずしも如上の八類だけに限らないが、もとく手紙は輕々に書くべきものでない、又無雜作に書き得べきものでもない、平生深く感じてゐる所から、假りに此の八難を數へて見たまでである。

### 三 書簡保存のすゝめ



私が早大の図書館長であつたとき、自家の蒐集した古今名流の書簡百卷約千通ばかりを展覧に供したことがある。其際私の幼時の師星野垣博士も態々來觀せられたが、私に對つて實は今日貴所の藏品の陳列と聞いたから來た、成るほど豊富な所藏に敬服した。自分の家にもそれとなく存してゐる師友の書簡が少なくない、君に倣うてこれから整理を試みんと云はれた。此展覽會に同縣人で東京盲啞學校長であつた小西信八氏も見えた。氏は私に一通の書簡を贈ることを約された。それは私の所藏に無いものであつたから喜んで其後惠投を受けたが、氏は後日私に云はるゝには、實はこれまで放擲してある友人などの書簡も、君の陳列を見てから急に惜しくなつて遽かに整理に着手した。さもなければ、君に贈るの書簡は唯だ一通にのみ止まらなかつたらうと。私が學生の爲めに催したかりその陳列が圖らずも如上の注意を惹き起し、それ迄は請へば容易く與へられた人達も、今は與へられなくなり、私に取りては却つて不利を醸すに至つたが、書簡の趣味と其保存の必要が少なくとも或る部面に認められたことを思ふと、私は之れを本懐として、折角の陳列の徒勞で無かつたことを喜んだ。

私は書簡の保存を世間に勧めたいのである。それは決して好事の意から出たのではない、其保存が必要であるからである。保存を勧むる書簡は、古い名流のものとは限らない、近代の人の中でも現代の人でも、保存するの必要がある。既に古人の書簡が今日容易に得られない事を知るならば、今人のも今から保存に心掛けねばならぬ。然らざれば他日必ず古人のを今日求めて得難いと同じ困難と不便を感じるであらう。私が書簡の蒐集を始めたのは十數年前だが、始め方が既におそかつたことを歎じた。古い名家の手簡で手に入らなかつたものがいくつもある。古簡はさて置き、己が父祖の書簡をせめて幾通か欲しいと思つてもなかく手に入らなかつた。若し父祖の遺像に併せて面のあたりその聲を聞くと一般である書簡があつたならば、吾が未見の前人は如何に眼前に活躍するであらうと思つても、今は容易に得がたく、曾つてあつたものまでも、保存の心掛が無かつた爲めに今は皆散佚して仕舞つてゐる。若し今少し早く保存の心掛があつたらばと悔ゆれども詮がない。恐らく之れを悔ゆるものは、私のみでなく、必らず世間にも同悔の人があらう。

書簡が種々他日の考證となり、史傳の好材料となると云ふやうなことは暫らく問はずとして、單に筆者の面目躍如の點に於て、之れが保存の必要あることは、宛がら其人の寫眞を存し



置くの必要と同様である。否、私の見る所では、寫真よりも寧ろ大切な意味がある。その故は、寫真は唯だ其人の面貌風采を見るに過ぎない、その人の面貌風采から推して其人の性格を推測するに過ぎない。然るに書簡は、直ちに其人の言説、其人の感情、趣味、嗜好、性格を明かにあらはしたる無音の聲である。別して或る重要な機會に其人の性格を十二分に發揮したものにになると、寫真よりも活きた趣がある。寫真と書簡とを併せてこそ其人が發揮するのに、寫真にのみ重きをおき、書簡や遺墨を閑却するのは何故であらうか。

世には記念の爲めとあつて、故人の寫真を掲げたり像を刻んで建てたりするが、偏へに形骸にのみ専らで、其精神とも見るべき遺墨の保存などに、意を留めない傾きがある。試みに官署に到つて見よ、校舎に行つて見よ、將た會社を訪うて見よ、それづくに記念すべき人物の肖像は額などになつて儼然と飾られてあるけれども、さて其の人の筆蹟となると、幾んど斷簡零紙も保存されてゐない。故にいざ故人の言行録、功績録、其他記念出版などをしようとなると、其の資料を集めるに相當骨が折れる。殊に故人の筆蹟を得るに困む場合が少なくない。全體ならばいくらかも親戚や知人の間にあるべき筈のものが、唯だ保存に心をかけぬ爲めに皆散佚し

て、いざ必要といふ場合に初めて悔ゆるのである。

官署、會社、學校などで重要な書類は種々あらうが、就中其の創立の状況を語り、或る重大事件を語り、或る功勞者若くは恩人の事を語る書類の如きは、尤も貴重のものに相違ない。大切な記録と云ふものは、セコンドハンドに成つた覺束ない記録ではなく、親しく其事に關係した本人それ自身の筆に成つたものであらねばならぬ。書簡などは其一である。されば故人の記念會でも催す場合には、此等の遺墨が尤も須要の位地を占むべきものであるのに、他日記念物となるべきものが、早く其の當時に於て時々刻々反故籠に葬らるゝのが常習となつてゐるは、惜しいことである。

保存の心掛といふものはエライもので、僅かに其の氣がつくと、幾十年を経た曉には實に非常の事になるものである。その實例は大隈家の莫大の書簡の保存に就て見ることが出来る。大隈侯は豪放不羈の人で、自らは筆を執らぬ人である。他から多くの書簡を寄せ來つても、大抵は反故になつて居ると思つてゐた。日夕往來してゐる私は、手紙に興味はありながら、曾て一たびも大隈家に維新以來の書簡がどれほど保存されてゐるかを問うたこともなく、又それを念



頭にかけたことも無かつた。然るに侯が薨じて其の傳を編する場合になると、未亡人から始めて維新以來各所から來た書簡が幾んど漏れなく保存されてあると聞いて、非常に驚いた。それを私の手で整理することになつて、さて庫より出したのを見ると、その分量の如何にも大きいのに更らに驚いた。二十疊も敷く二室を埋めるほどあるので、まるで手紙の海に漂うてゐるかの感があつて、最初は整理の方法すら立たなかつた位である。段々調べて見ると、明治十五年までの來簡は執事の手で可なりに整理されてゐて、目錄すら出來てゐたのに頗る便利を感じた。此の莫大の書簡は侯の傳を立てるに就ての好資料であるばかりでなく、維新から大正に及ぶ歴史を編するに就ての大なる資料であつて、實に大切なものが夥しくある。其の一端は侯の傳記に附屬して「風雲偉觀」と署した大冊に收めてある。又私が當時取調べ中に感じたことを録した長文も、其巻末に附してあるから、茲に委しく言ふことを避けるが、僅かに夫人が一朝保存の念を發したのが動機で、これ丈貴重のもものが残つたのであることを思ふと、如何に保存の心掛が大切であるか、知れるであらう。

故人を記念し若しくは史傳の資料とするものは、必らずしも書簡に限らない、然るに私が主として書簡の保存をいふのは、書簡に偏して云ふのではない。書簡以上の遺墨の必要は尙更ら大切であるけれども、書簡以外の遺墨は澤山にあるべき筋のものでない。學者や文人などならば著述もあらうし詩書の類もあらうが、經營家、事務家などになると、其の筆蹟は僅かに書簡に存するに過ぎない、私が主として書簡の保存を云ふのは、其れが最も得やすく且つ得る機會が最も多いからの事だ。

書簡が他日の考證に必要な所以は、其人の意思が明暗の間に窺ひ得らるゝからである。書簡が、立派に書き直された記録にもまして價值のある譯は爰にある。前年前田家で出版された松雲公の傳を読んで感服したのは、何につけても其の折々の書翰が數多く引かれてあることで、流石に大切な手紙がよく保存され、それがよく役立つたといふ事にあつた。實は書簡ほど正確に近いものはない、某年某月某日、或る場合には時刻までも注してある、(郵便の消印などがそれである)斯様に確實な文書は、書簡を措いて他に無い。書簡は漠然其の時代を語るものでなく、其の筆した即時を語るものである。此點から考へても、これほど其の折々の事を確かに語るものはない。考證の資料として價值のあるのも此故である。



要するに書簡は、其當時要があつて、又後に要のあるものである、苟くも他日要あることが今日明かである以上は、之れが保存を心掛くべきは多言を待たぬであらう。そして之れを保存することは敢て甚だしい煩勞があるではない。但だ聊か勞ありと云へば、僅かに取捨の勞あるのみだ。一概に書簡ならば、其の筆者の如何に拘らず、内容の如何を問はず、悉く保存すべしと云うたならば、終には置くに所もないことになり、結局玉石併せ焚かるゝの災厄に遇うであらう。即ち無差別に保存することは、所詮其結果に於て初めより之れを保存せざるに齊しい。されば選擇と多少の整理が必要である。此の位の事は、心掛さへあれば、最初に於てこそ多少面倒とも感じもすれ、やがて習慣を爲すに至り、容易の事となるのである。名家に存する書簡は年を経るに従つて貴重なものとなる、其端は其當時の保存に發することを思ふと、此の心掛は眞に大切である。

## 趣味談採餘



## 一 含蓄の趣味

含蓄は趣味の大要件である。そこで含蓄は何かと云ふと、餘情のあることを云ふのである。俗に所謂奥床しいなど云ふ事である。有りつ丈を現はさず、幾分を想像や推測に任すことを云ふのである。全體想像は無限であるから、想像で味ふ方が深く感興を起すものである。餘り物がハッキリ現はれ過ぎて居ると想像の餘地がないから、いくらよい物でも直ちに飽きが來る。ツマリ趣味の區域が限られるからである。

含蓄は何にでもある、人の言語、文章、詩歌、俳句は勿論、繪畫其他の藝術品にもあつて、人をして趣味を感じしむる大源泉となつて居る。今一二の例を擧げて云へば、名高い話であるが、ある人十七字の俳句に近江八景を詠ぜよと難題を出したとき、さる俳客言下に「七景は霧にかくれて三井の鐘」の一句をうなり出して、いたく喝采を博したと云ふ事である。句の可否は且らく措き、此句は含蓄を説明するの好的例である。八首の俳句で一々八景をあらはしたよりも、此一句が却つて面白く思はるゝのは、全く含蓄があつて讀者をして無限の想像を擅ま、



にせしむるからである。詩などに於ても同様で、沙翁シェイクスピアの作の超絶して居る所以は、同一の詩句が讀者の頭次第で何うにでも考へらるゝ様に書いてある所が妙だ。畢竟沙翁の詩に含蓄があるからである。總て名人の文章はいくら簡潔に書いてあつても言外にいろ／＼の意味があつて、大篇を読んだ様な味を覺えるものであるが、拙な文章はいくら繊細に長く書いてあつても湯を呑む様で味が無い。結局は含蓄の有無によるのである。

人の談話なども、餘りにハッキリした話よりもボンヤリした話の方が却つて面白く思はるゝ場合がある。又場合により、無言の方が喋々饒舌を弄するよりも味のあることもある。此場合に於ては無言は即ち能辯であるが、矢張り含蓄があるからの事だ。古語に大人は愚なるが如しなど云ふも、皆含蓄のある事を云ふに外ならぬ。又風景などに就て云ふも、朝夕のボンヤリした景物は、日中太陽の赫耀して細微のものまでハッキリ暴露するものに較べて何人も趣を感じる。別して詩人雅客は朝夕の景を賞玩して、之を詩題とし又畫題とする。要は朝夕の景は餘情があるからである。

繪畫などに含蓄を要するは誰も知る所である。例へば花を畫き、それに蝶を配するよりも、

蝶のみを畫き、暗に花あることを諷する方が確かに趣味を感じる。此點になると、日本畫の方が西洋畫に較べて概して含蓄が深い様だ。大體西洋畫は寫實を専として居るから含蓄が無い。例へば人物を畫くにしても、必ず寫實的の背景を添へ、影を添へ、滿紙塗料を施さゞれば已まぬと云ふ遣り口であるが、日本では背景も影も添へず、唯だ人物のみ畫き、全紙餘白を存する様な書き口が多くある。半可通の洋畫家はこれを見て、不自然だの、ワケのわからぬ畫だなどと云ふが、實は日本の書き口の方に無量の含蓄があるのである。餘白の中に背景も影もあるので、すべてを觀者の想像に委するのであるから、却つて無限の趣味が感ぜらるゝ。西洋では舟を書けば必ず水を畫き、其色や波紋までも書かぬと承知しないと云ふ風があるが、南畫などには、舟があれば水があるに相違ないと云ふので、寧ろ筆を省き、觀者の想像に委する書振である。どちらかと云ふと、含蓄の趣味は支那畫や日本畫に多く存して居ると云はざるを得ない。

他の藝術品、例へば彫刻、陶器などに於ても同様の譯で、餘り遣り過ぎたものは味が無い。一寸見て感興を惹き起しても直ぐにいやになるのは、全く含蓄がないからだ。名匠の作は餘り



手がこんで居らぬ。却つてザンギリとして手の省けたものが多いが、どことなく云ふに云はれぬ味があつて、幾度見ても飽きが來ない。寧ろ久しくたつて見れば見る程趣を覺えるのも、矢張り含蓄の力が餘程手傳つて居るのである。

扱又宗教となると、神話でも佛像でも含蓄は尤も深い。全體理を以つて判す可からざる不可思議と云ふことは、全く想像で味ふものであるから、趣味は無限と云うて宜しい。神話など云ふものは馬鹿けた怪談の様なものであるが、實はなかく興味のあるもので、何處の歴史も、上代となると、此神話が必らず味をつけて居る。佛像などでも、祕佛となると、見ることが出來ぬだけそれだけ趣味を感じる。皆な想像の餘地が甚だ廣く含蓄が深いからである。

要するに含蓄は趣味の必要條件とは云はぬ、これがなければ没趣味だとは云はぬ、併し疑ひもなく趣味の大切な條件である。

## 二 聯想の趣味

既に含蓄の趣味を云ふからには、聯想の趣味にも言ひ及ばねばならぬ。聯想と云ふのは英語

に「アソシエーション」と同じ意義で、或る事或る物に就き、それに關係あること共をいろいろ思ひ寄せて、數珠じゆずの如くに繋ぎ合はせることである。例へば器物などで云へば、其産地、其作者、其傳來は言ふに及ばず、産地に就ては、唯だ其地名丈でなく、其地が昔し誰れの領分であつたとか、それが風景美に富んだ所だとか、古戦場であつたとか、或は著名な人の生誕した所だとかいふことまでも思ひ寄せるのである。作者に就ても、唯だ某といふ姓名丈でなく、其人の系圖やら、經歷やら、逸事やら、性格までも思ひ寄せるのみならず、其友人やら、他の同時の人迄も思ひ寄せるのである。其傳來に就ては、いつ作られ、それが何人の手に渡り、或は禁廷の有となり、或は國寶に指定されたなどの歴史を辿るは勿論、種々それにからんだ瑣事にまで及ぶのである。聯想の及ぶ區域は、必らずしも其物に就ての經路をのみ辿るのでなく、或は他の類似のもの迄に及び、或は全然異なるものにも及び、種々の枝葉に涉り、其枝葉に又枝葉を生じて、頗る複雑錯綜の傍徑に入るものであるから、含蓄の區域が無限であるかの様に、聯想の區域も亦頗る廣いものである。聯想を馳せる人の知識が深く廣ければ、それだけ聯想の區域も廣くなるのであることは含蓄の場合と同じ事である。そして聯想により其物の趣味が益々



深くなつてくる。物に依つては聯想のお蔭で無趣味のものが趣味のものとなるものが少なくな  
い。聯想は物を美化するものである。茶人などが物を鑑賞するのは多くは聯想から來てゐる。  
若し聯想の働きが無ければ、物の趣味は半減するであらう。或は七八分を減するであらう。西  
洋の哲學家の内には、「アソシエーション」を以つて美の源であると言へ説いた人もある。美  
の源が聯想だけでないにしても、美を誘起するに大なる幫助を爲すことは否み得ない。

物には何人が見ても直覺に成る程と趣味を感じるものもあるが、聯想を藉らざれば趣味を覺  
えないものもある。金銀を鏤めた精巧の製作物は俗眼でも美に感ずるが、哲人や鍛鍊を経た鑑  
賞家でなければ、趣味を感じ得ないものが少なくない。諺に盲目千人といふは、よく云うたも  
ので、多くの器物に對し、世俗は大概盲目である。それは鑑賞の力が無いからである。そして  
鑑賞には聯想が大切な働きを爲すのであるが、相當の能力が無ければ聯想が起らぬ。縦令聯想  
が動いても、それは頗る微弱で、廣く及ぶことが出来ない。茲に海中から取り上げた、青磁の  
茶碗がある。それは海水にさらされて光澤が全く無くなつてゐる。底には貝殻が附着してゐる。  
一見何の趣味も感じないものを、鑑賞家に取り上げて之れを珍とするのは何故かといふに、其

の器は四五百年前、支那、朝鮮で作つた名器の名残りであるといふ外に、奇しき傳來があるか  
らである。昔し堺さかいの港の繁榮時代に、茶道が盛んであつて、豪奢を競ふ鉅公富商達は競うて  
名器を外國に求めた。それを舶載して歸る途中、船が難破して、名器は皆な海底に沈んだ。今  
漁夫に往々撈獲せらるゝのは其の器で、私の例に取つた青磁の茶碗も亦其一である。そして此  
の不幸なる經歷が此の器物に一種の趣味を與へるのである。鑑賞家は、當時堺の港が如何に繁  
榮であつたかを思ひ、如何に海路が危険で交通が不便であつたかを思ひ、如何に船の難破は待  
ち焦れてゐた人々を失望させたかを思ひ、其の失望者の内に某藩侯、某茶人のあつたことを思  
ひ、種々に聯想すれば、そこに無量の感慨も起るので、此器物に趣味も附け加はるのである。  
又こゝに粗製の小皿が十枚ある。時代は古いが、一向面白味を感じぬものである。それを茶人  
が取り揚げて、立派な箱に納めて「夜舟」の銘を撰んで珍重したのは何故かといふに、昔し淀  
川よどがはを上下する通船は、深夜航行したもので、例の「クラワンカ船」が酒食を載せて、此の通船  
の客に供給した。其の食物を容れた器物が此の小皿である。或る好事の人が記念のため此皿を  
欲しがり、クラワンカの船主に譲つてくれと頼んでも頑固で應じないので、已むなく、幾回か



の往復に胡麻化して一枚づ、取り返つたのが十枚となつたのであることは、此の器の匣はきの蓋裏に書いてあるのでわかる。これなども「クワンカ船」の當時を聯想してこそ、始めて趣味を覺えるものである。此の器物に對すると、クラワンカクワンカのだみだみ聲まで聞こえる心地するのは聯想の働であらねばならぬ。又黒田侯の所藏に係る、博多はくた文琳ぶんりんといふ茶入は、天下の名器と稱されてゐる。昔し豊太閤が、之れを所持した博多の豪商神屋宗湛かみや そうたんに割愛を過つた時、宗湛は此器だけは日本の國土の半分を以つてしても交換は御免を蒙ると刎ねつけた品だ。斯程のものであるから器物それ自身にも非凡の趣味もあらうが、實は其の來歴が大いに趣味を加へてゐるのである。此の器の來歴は、楊貴妃の舊藏であると云はれてゐる。神屋宗湛なる當時の外國貿易家が番頭を支那へ遣はしてゐる内に、其番頭失敗をしたので、主家に對し申譯がないと將に自刃に及ぼんとする時、其妾なる支那婦人が押し止め、妾が家の大切の名器、それは楊貴妃の愛玩のもので妾の片身を離さぬものながら、あなたの命には代へ難い、これを身代りに主公に獻ぜられなば多分罪は許さるゝであらうと、それを持たせて還した。さて歸朝後これを宗湛に見せると、宗湛は驚き喜んで、其器を戴かん許りに珍重し、失敗の事は深くも咎めなかつた

といふが此器の由來である。貴妃云々などは信すべきものでもないが、このロマンチックの來歴を聯想すると、器物に幾層の趣味が加はることは否み難い。天下の名物などいふものは、大概こんな來歴があるものである。茶人が來歴を貴び、箱書の筆者をやかましく云ひ、舊藏者に重きを置くのも、皆な聯想から來てゐるのである。

書畫などでも、聯想で趣味を加へることは勿論である。親しみのある人の手に成つた書畫に大抵趣味を感ずる譯は、聯想がいろ／＼に起るからである。郷國を同じうする人の手に成つたのも矢張り聯想が起りやすい。識語のある書畫は識語から種々の聯想が起るし、獄中の詩とか絶命の詩歌なども、人が多く珍とするわけは、悲痛の聯想が起るからである。面白い經歷のある作家の書畫の珍とせらるゝのも、種々の聯想で趣味を添へるからである。或る一派の畫を見ると自然に同系の他の畫家の作を聯想し、門人の畫から其師の畫を聯想するなどは何人も實驗する所で、書畫の鑑賞には必ず聯想が伴ひ、そこに趣味も生ずるのである。

聯想が、全然異なるものにも及ぶ一例を云へば、秋の季節に郊外に筈を曳き、程近き山を望むと、山腹に社寺などのある所の樹木が紅葉して際立つて面白く見える。公孫樹の葉は黄ば



み、楓樹の葉は血を吐いた様に紅に、深緑の常磐木がそれに交つてえも云はれない風致を覺える。併しこれは社寺の境内に限られた風致で、其の境内を離れては、杉などの森があつて境内を圍み、其の森が盡きると、茶褐色の雑木の林が山一杯を蔽うてゐる、杉の森や雑木の林は霜枯れて何の風趣もないのに、それに包まれた社寺境内の樹木が黄に紅に緑に錯綜した風致は、周圍とのコントラストで引立つて見えるのである。これに就て自然に聯想を起すことは、器物の包装である。貴重なる器物を包むには先づ錦欄や絹などを以つてし、その上包には鬱金の裂を以つてする、そして其の又上包は兪なる風呂敷を以つてする。これが普通に行はる、包装の法であるが、此の樹木もそれによく似てゐる。社寺附近の樹木は錦欄や絹に比すべきで、それを取り巻く杉の森は鬱金木綿の様なもので、其の外部にある雑木林は宛がら粗末な布の風呂敷の如きものである。これは社寺を重器と見て、それを圍む樹木から包装を聯想した一例であるが、こんな風の聯想でも社寺に多少の趣味が添はるのである。

山嶽でも河海でも趣味を感ずるのは、多くは聯想の働きである。如何に平凡の山河でも、自分の踏破した他の山河、殊に外國の山河を聯想して比較などすると妙に趣味を感ずる。川中島

や平泉などの古戰場は、唯だ見れば格別の趣もないが、其昔甲越の二雄が兵を交へたことや、三衢が京都に拮抗するほどの豪華を極めたことや、源九郎をかくまつたことなどを聯想すると、こゝに史的趣味を發する。そして史的回顧と云ふも、畢竟は聯想の働きである。古い宮殿や城址や由緒ある寺院などが、旅客に趣味を感ぜしむるのも、亦回顧的聯想によることは云ふまでもない。

### 三 煙草禮讚

近頃「煙草禮讚」と云ふ書物を書いた人がある。自分も煙草を好むから、それを讀んでかなり面白く感じたが、しかしこれは全部西洋の煙草の趣味を發揮したもので、煙草の種類やパイプの型まで言ひ盡してゐながら、全然日本の煙草に及んでゐない。誰か日本の煙草禮讚を書く人はないであらうか。

日本の煙草も元來は南蕃から渡來したと云ふので、日本固有のものではない。然し乍ら其煙草の種子が日本に培養されて、風土の關係から日本特有のものになつてゐる。丁度徳川氏の鎖



國時代に専ら世の中に行はれたと云ふ關係から、西洋各國の煙草は殆んど日本に輸入されず、永く固有のものを用的た爲、日本産の煙草は相當の發達もした。

又煙草に附屬する煙管、煙包の如きも、一種日本固有のものが、西洋に類例を見ないほど復雜に發達した。

煙草に關する文獻

日本で煙草に就ての書物は必ずしも尠くない。有名なものは大槻磐水の「蕙錄」と云ふ漢文に書いたもの、和文には「目ざまし草」と云ふのがある。又或る煙草屋が煙草の趣味を狂歌に詠じたものに「煙草百首」と云ふがある。その中には煙草の生産地、煙草の良否等を職業上から委しく書いてゐる。

今でも日本橋にある「村田」と云ふ煙管での老舗の昔の主人村田了阿は種々の著書もあり、相當な學者だつたが、村田と云ふ名稱の普く知られたのを利用して、他に一軒同じ商賣の村田と云ふ新店が出来た時、勿論品質は劣等で相手にならなかつたが、それを罵倒して斯う云ふ狂

歌を作つた。

やみ雲にむらたくと偽の家名はどこの誰にむらつた

偽りて村田をかさにきせる見世張おほせすばいいつらの皮

それから詩人の煙草を讚美した句に次のやうなものがある。

撥餘爐火歌將無。早有晨聲響唾壺。一摘草香含馥郁。數團雲影吐模糊。長頸烏喙君休惡。眞節靈心我亦俱。于月于花相伴去。笑他秋扇籠須臾。

友人林若樹氏の藏する「たばこうりせりふ」と云ふものに、享保時代の江戸芝居をもちつて次の如き洒落文を書いたものもある。

もうすもおるかこのあきんど、江戸ぢうりつけの上々たばこ、十もんでゆみや八文か  
けねなし、まづおつとつてはおとし玉、(中略)うらしま太郎がきせるつつ、ごく上たば  
このやんやすうり、らうにやくなんによのなぐさみぐさ、いのちをのぶるくすりとして、ち  
やうめいくさと申なり、さしてじまんにあらねども、われらがたばこひとひねり、女中に  
すわせ奉れば、いけうくんじて花もふり、しやかもだるまもうちやうてん、天ねんみめう



の御たばこ、てんと天下にかくれなき、天からふつたやすうりと、ぶてうほうけたうちた  
たき、テンテットントツツテンテン、天もひびけとうやまつて、たばこ十匁で八文  
も一つ序でに某詩人の贊を擧げよう。

南方嘉種。惟草之珍。孕<sub>レ</sub>精育<sub>レ</sub>秀。懷<sub>レ</sub>英抱<sub>レ</sub>眞。茗羞<sub>レ</sub>其甜。麴讓<sub>レ</sub>其醇。春雨之夕。秋霜之晨。遠  
客千里。窮巷一身。鑽<sub>レ</sub>燧按<sub>レ</sub>管。祛<sub>レ</sub>愁養<sub>レ</sub>神。金門公子。玉樓佳人。繡包徐啓。飛<sub>レ</sub>芳絳唇。家賞  
戶愛。美雅具陳。無<sub>レ</sub>貴無<sub>レ</sub>賤。形影相親。蘭佩薰纒。奚營靈均。丹心雖<sub>レ</sub>灰。風流長新。

## 煙草の異名

昔しから煙草の異名にはいろ／＼あるが、讚美の意をこめてゐるものが多い。例へば支那で  
「金絲煙」と云ふ如きは、烟のうつくしさをあらはしたものであらう。又「擔<sub>たはこ</sub>不歸」とも云  
ふ。これは貿易上盛んに賣れるものだから、持つて行つた煙草の荷を、持ち歸ることがない  
と云ふ意味で、「南靈草」と云ふのは其産地を表はしたものであらう。

煙草には色々なロマンスがある。ある帝王の娘が死んで之を葬らうとして死骸を墓へ送り、

一夜その儘にしたら蘇つた。何故かと云ふに、その墓地の近くに煙草の草があつて、其香氣を  
受けた爲に蘇生したのだと云ふ。この物語から「返魂煙」などといふ名もある。其他煙草の徳  
を古人は左の如く言ひあらはしてゐる。

酔つた者をよく醒めしめ、さめた者をよく酔はしめ、饑えたものを飽かしめ、飽いたもの  
を餓えしむる。

斯様な言葉は殆んど他には移していひ得ない、煙草だけが全く自在の働らきをするといふ  
が、事實その通りである。

如何に政府が禁じようとしても到底煙草を禁じ得ないのは、斯る靈妙不思議とも云ふべき非  
常な働きを以つて人の嗜好に投ずるからである。全體動物といふものは様々あるが、煙に就て  
嗜好を持つものは人類の外にない。或は之が高等動物の特權とも云ひ得るであらう。

前に擧げた詩人の句に、茶もその甘きを羞ぢ、酒もその醇を讓ると云つてゐるのは蓋し要を  
得たものである。如何となれば、酒はともすると廢し得るが、煙草は止めることが困難で、ど  
うしても一旦煙草に興味を感じると、手離すことの出来ない程執着するのは、喫煙家の何人も



理解するところであらう。

### 日本煙草の特質

日本は海をめぐらした國で、氣候も中和を得てゐる。其關係から日本人は極めて淡泊なものを愛した。多くは魚類や野菜をとり、獸肉はあまり常食としなかつた。その國民性は、煙草の味にまで影響してゐる。外國のマニラ製の如き、或はエジプト製の如きは、孰れかと云へば肉食する濃厚な味に調和するものであつて、日本のおだやかな飲食物とは調和を缺くやうである。且つ日本煙草が、其淡泊な上に之を喫する方法も自ら西洋と異なる。必ず煙管の皿に少しばかり盛つて、これを斷續的に用ゐる。即ち分量の上に於て西洋とは自ら異なるところがある。

斯様に淡泊性のものを少量づつ、吸ふのは日本人の身體に丁度適當する、まことに柔らかみのある喫煙の仕方である。その結果、婦人の如きも或る年輩に至れば之を用ゐるが普通で、之を以つて別に悪いこと、されず、上流の婦人と雖も、之を用ゐて何人もとがめるものがない。こ

の特殊な一種の喫し方に一改革を來して、明治以來西洋風になり、或は葉卷、或はシガレットを用ゐる結果、忽ち喫煙量が増加した。斯様な激變は恐らく世界の歴史にあるまいと思ふ。

### 煙草の附屬品

外國の影響を離れて日本で一種の發達をした事は獨り煙草ばかりでなく、煙管其他附屬品も亦さうである。

徳川時代の始めに煙草が日本に渡來した頃は、上流社會の贅澤品として取扱はれ、お客に對しては御馳走の一つとなつてゐた。その頃は、めい／＼が煙具を携帯することも尠なかつたので、煙草盆に煙草と煙管を添へて出した。それが段々一般に用ゐられるにつれ、從來の長い煙管では不便なので、追々に短かくなつて、且つ腰に挿んで置く必要から筒を要することになり、煙草入、緒締（おしめ）と必要なものが殖えると共に、其の形式も種々なるものが行はれ始めた。二つ折の煙草入れに扁平な延金の煙管（のびがね）を用ゐることが行はれた。これらは寧ろ西洋に近い形式であらう。但し、往々圖外れの大きなものを使用する向きもあつた。伊達者（だてしや）の持物、角力の關



取、或は俠客、若くはこれらに扮した俳優の用いたものは何れも圖外れに大きい。

煙具の意匠については、徳川時代の美術の粹を悉くとり入れて、精緻の極をつくした。金具の彫刻、袋地の爲に珍らしい裂地の創作、緒締の珍奇なるもの等、人々が其贅と奇とを競争することとなり、兎もすると腰の物一具に幾百圓幾千圓の價あるやうになつた。従つて煙管、煙包等を作る専門の店も出来、村田の煙管、竹屋の煙草入れ等定評のあるものが生れたわけで、曾ては佩刀の美を誇つたものが、後には煙具の美を競ふの觀を呈するに至つた。

尙ほ此他に煙具の種々の形式、それは煙草入や煙管のみで無く、煙草盆の種々の意匠、煙具を道樂に多く集めた人々の逸話、産地により煙草に特徴のある事、燧のさまざま、その袋、煙草屋の招牌、羅宇のすけかへ、委しく書けば興味のあることが少なくない。中にも喫煙の遊戯などは最も興のあることだ。昔しは花柳の巷に遊女などが煙を深く含んで、それをさまざまの形に吹き出して奇を衒つたものである。又煙占といふのがあつて、煙を環形に吹き出し、それを煙管で貫いて情客の來否を卜したこともある。遊女が口にした煙管を客に與へることなどは、接吻に近いと解してもよからう。

## アネクドット一

斯の如き、風俗に關係する日本固有のことも少なくない。又煙草を嗜む人と嫌ふ人を、高名の人物から調べて見るも一興であらう。意外の人が煙草を嗜んだり、嫌つたりしてゐる。一例を挙げると、新井白石は煙草を嫌つたらしく、朝鮮使節の來た時、應接の席上、盛んに喫煙する使節が白石に對して何故煙草を吞まぬと質したに對して、「錦繡の腸を汚ない煙でくすぶらすに忍びない」と答へたといふ話がある。彼れは偉い人物ではあつたが、煙草の味を解しなかつたことだけが玉に瑕だと、自分には思はれる。

尙ほ煙草に關する興味ある雜談は決して少なくない。何かの本に、今の英國皇帝が東宮に在らせられた時、旅中沙漠に通るか、つて喫煙を欲し、マッチを捜すと、只一本しか無かつた、その點火を誤ると絶體絶命であるので、東宮も血色をかへるまで緊張されたとあるが、こんなアネクドットは喫煙家の多く體驗してゐることで強ち珍らしくない。私にしても淺間山に登つた時に同じ様な事があつたが、それを絮説するにも及ぶまい。唯だ筆の序に録する一場の滑稽



談は、往年私が早稻田大學の前身東京專門學校の講堂で政談演説を試みんとして壇に登ると、警部が臨監してゐるので、早急の早替りで演説を改め、丁度其頃世界の煙草史を讀んでゐたら、その話をやつてお茶を濁し、警官を烟に捲いた滑稽談もある。こんな雑談までも取りこんで日本煙草の禮讚を書いて見たら相當に興味があらうと思ふが、自分はそれを爲すほどの暇をもたない。

#### 四 紙

國の文野の度は紙の使用量で算するとさへいふ位に、紙は文化に大切な資料である。或る人の計算に、我が國民一人當りの紙の量は十七封度ゴザイに當るといふが、英國の一人百五封度に較べれば甚しい相違があり、更らに米國の一人百二十五封度に較べれば、一層大なる距離がある。

紙の需要は文化が進むにつれてますます殖える。紙が多く使用され、ばされるだけ文化の進歩を助ける、即ち相互關係がある。然るに爰に妙なことには、文化の進むのと反比例に紙の質が退化して行く傾向のあることだ。先年各時代の各種の紙を集めて展覽會があつた折一覽した

が、現今の紙を以つて四五十年前のに比すると、何れも質の下つたのが目立ち、更らに百年前に較べると、一層粗悪であることが實證された。但しこれは日本紙に就て云ふのであるが、西洋紙に於ても、製法は追々進んで器用に紙は造られてゐるには相違ないが、其實に至つては矢張り下つてゐることは争はれぬ。

之は何故かと云ふと、昔は紙を貴重のもつと考へ、之を濫りに使用することを惜んだ。且つ今のやうな進歩した印刷術もなかつたので、大量に紙を使用する必要もなかつた。曾ては良紙は貴族に限つて用ゐられた時代があつた。其貴族も紙を惜んで、反故裏ほんごうらを用ゐて字を書いたものである。尙ほ紙の製造されなかつた上代に溯れば、獸皮を用ゐたり、竹や木葉を用ゐて字を書いたり彫つたりした時代すらあつたことを考へると、紙の惜まれたのも無理はない。然るに紙を使用することが盛んに行はれてゐる今日に於ては、新聞雜誌などの定期刊行物に使用さる、紙量だけでも大層なものである。かうなると、大量生産のために原料が變化せざるを得ない。現今では藁までも原料にする。木材ならどんなものでも好いと云ふので、幾百町歩の森林を伐り仆すと云ふ勢である。これは一面科學の進歩を示す譯で、ぼんぼ襦を材料にした舊時の紙



と、表面は格別の優劣がないやうにも見えるが、其實、質は劣つてゐるに相違ない。勿論特種の紙には特種の材料を用ゐるから例外はある。併し特種の紙は、普通大量に用ゐる紙に比すれば、其分量は甚だ僅かなものである。故に大勢からすると、紙は文化と逆比例に退化すると云ひ得るのである。別して日本の如く西洋と根本的に相違のある紙が、西洋紙に追々壓倒せられ、其の用途が減ずるに連れては、舊態の維持が出来ず、益々粗悪となつて僅かに残喘を保つてゐるのも是非もない次第である。

私は専ら趣味の上から日本の紙を観察して見たいと思ふのであるが、日本の紙は日本固有の特色があつて、どの紙に較べても堅硬の資質を有してゐる。日本の如きヒキの強い紙は世界に無いと云へば大袈裟であるが、或る特種の紙こそ、西洋でも日本に譲らないヒキの強いものもあるが、日本のは、普通の紙でも従前はヒキが強かつた。それは材料の然らしむる所で、藁紙などが出来て特色を損じたけれども、尙ほ今日でも此の特徴を幾許か維持してゐる。又美術的加工に就ても、決して西洋に後れを取らぬ。或る時代の或る種の紙に至つては、世界に冠たるものもある。それ等は追々後に説くとして、先づ日本の紙が如何に多種多様であるかを一瞥

せんか、言ふまでもなく日本に長く續いた封建の制下に、諸藩が思ひ／＼に紙の製造を奨励した結果として、又當時交通が開けなかつた結果として、國が異なり地方が殊なれば、紙も亦異つて「ローカル・カラー」がそれ／＼に顯著で、いろ／＼の特徴があつた。全體世界の氣勢からすると、交通が開けるに隨ひ、紙の種類が追々統一さるゝ傾向があり、複雑のものが段々單調となる趨勢もあるが、趣味の上から云ふと、多種多様で複雑であることが、未開の遺風であつても、興味は却つてそこに存するのである。

日本の紙の種類が多いのは、單に製産地が區々で製法が異つてゐる爲めばかりではない。用途により、それ相應の紙を要するからでもある。勿論此點は西洋でも同じことであるが、日本には前述の如く多種の紙があるからでもあらうが、如何にも用途により特別の紙が使用されてゐる。恐らく此點も他國に匹儔が無いかも知れない。そして其の用途相應に適當の紙があることも、亦紙の趣味上閑却してはならぬと思ふ。今特別の紙を要する用途を、思ひ出すまゝ、に書きつけて見ると、左の如くである。

傘 提 燈 扇 子 防水用 蠶卵紙



紙幣	障子紙	襖用	表具裏打用	帳面用
表紙	辭令用	寫經用	包装用	書籍用
錦繪用	書簡	廁用	凧	染物型紙
書畫用	儀式用			

尙ほ以上の外に伊勢で烟草入を作る一種の油紙がある。それは赤味を帯びて透明で、宛がら菓子羊羹の如くであるから羊羹と云うてゐるが、烟草の乾燥を防ぐ爲めに工夫されたものである。洋風の感化で出来た紙の類では、ナプキンに用ゐる紙もあれば、テーブルに用ゐるのもあり、尙ほ此外にもいろいろあらうが、右に挙げた丈でも用途は頗る多類であると云はねばならぬ。勿論用途の相違で紙種が凡べて異なるものでもないが、共通のものはいくらもないと思ふから、日本の紙の種類は如何にも多般であることがわかる。

斯く多種の紙を要する所以は、風俗習慣からも來てゐる。工藝上の必要からも來てゐる。今一々こゝにそれを説く暇もないが、兎に角其の單調でない處に趣味が存するのである。何もかも同種の紙が共通で間に合つたら便利は便利であらうが、そこには趣味は存せぬ。趣味の問題

と便利問題を混淆してはならぬ。

日本には上代から佳紙が製出されてゐる。經卷に用ゐた紙などは支那の麻紙を摸したものであらうが、其實は決して支那には譲らない。紺紙も寫經用として古くからあるし、香を漉きこんだ紙もある。全體日本では上代から貴族社會に和歌などの文學が行はれて筆道が盛んであつた結果、書く物としての紙が精製されねばならなかつた。そこで非常に良質の紙が早くから漉かれた。正倉院に保存されてゐる紙や、上代の歌切うたぎれなどで残つてゐる紙を見ても、驚かる、ほど精製の佳紙がある。上代の紙にはいろいろの種類もあるが、鳥の子が多く残つてゐる。此紙は今も官省の辭令書などに使用されてゐることは誰れも知る通りであるが、之れにも幾多の變遷があつて、今日の鳥の子は昔のに較べると甚しく劣つてゐる。これは其初め何處から製出したか、詳かに知らないが、栃木縣には鳥の子と云ふ地名があり、今でも紙の産地である處から考へると、此地が鳥の子紙を製した所ではあるまいか。又奥羽のやうな僻地から檀紙が出た。この紙は奉書紙しよに髣しよをよらせたもので、紙面が平滑でないが、そこに一種の趣味を持たせて、和歌を認める料などにされた。今も幾分か製造されてゐるが、昔のものには及ばない。



右のごとく原料の関係から立派な紙が田舎から製出され、朝廷へ貢されたことは古くからである。何と云つても佳紙の多く出たのは、文化の中心であつた京都並に其附近であつたことは云ふまでもない。加工の妙に至つては、勿論京都に及ぶものはなかつた。其一例として茲に紙に地模様を描く墨流しの法を擧げる。これは紙を造るに當り、原料を流し込んだ船に水を張る、其水の上に彩色を以つて種々の繪の具を浮かせ書きをして、船の下の栓を抜くと水は流出して、水上の繪の具がソツクリ紙に附着する。これが墨流しの法で、一種云ふ可からざる趣のある地模様を現はすものである。斯る工程より生ずるものだから、同じものを二つ作り出すことが出来ない。そしてそこにも亦趣致が存するのである。此法は色紙、短冊などに施されたことは勿論だが、大部の寫本も此墨流しの紙を用ゐて出来てゐる。西洋でも字書の小口などに五色の模様を施すに此法に依つてゐるやうだが、其精美に至つては日本が遙かに其上にあることは争ひ難い。

此の墨流しの紙の、大規模に今日存してゐるのは、藤原時代の名人が手を別けて書いたので有名な本願寺の寶物「三十六人集」などであらう。其の冊數は記憶しないが、三十六家の歌集

がそれ／＼冊を異にしてゐるから、なか／＼浩瀚なものである。その用紙は鳥の子で、一枚一枚違つた意匠で墨流しの法により加工され、技巧の極を盡したものである。山水花鳥あらゆる模様があることは勿論だが、人の眼に錯覺を生ぜしむるやうな妙技を凝らしてゐる。例へば紙の一隅に十枚位折れてゐるやうに五色の断面を見せたり、或は綴目とじめの處へ小刀で何十枚か切り裂いたかの如く断面を見せた所などもあつて、うっかり見ると事實折れたり切られたりしてあるかの如くに出来てゐて、眼が翻弄されるのに驚く。言ふまでもなく、此等の用紙には墨流しの外に金銀泥で種々優雅の圖が書かれてゐて、如何にも華麗のものである。何百枚といふ數多き紙が毎紙地模様を異にしてゐるなどは、眞に驚歎に値する。そしてこれが古く平安朝のものがあることを考へると、佳紙と加工美は古く發達したことが窺はる。

越前の福井は紙の産地として名高い處である。墨流しの方法も行はれてゐる。鳥の子紙も製されてゐる。而かもこの地で最も名高いのは奉書紙であらう。これは頗る優美の紙で、外國に誇り得る紙の一種である。昔は此紙の用途が頗る廣く、和歌其他筆道につかつたばかりでなく、儀式典例にはこの紙が専用のものであつた。包装には流派を生ずるなど種々工夫を凝らし



たものだが、其の用紙も亦此紙であつた。用途が廣かつた丈それだけ製法も發達したが、現今の此紙はブク／＼して柔かに失し毛ば立つて、遠く昔しの、に及ばない。昔しの、は柔か味があつて、同時に手堅い感じがあり、揉んでも毛ば立たず、墨の乗りもよかつた。今のはロールが十分か、つてゐない感じがする。

美濃も亦紙の産地として有名である。普通用ゐる障子紙や罫紙などは抵ね美濃産である。書籍の用紙も多くは美濃紙を使つてゐる。然し美濃で一番製造に苦心したものは、岐阜提燈に張る紙だと云はれてゐる。此紙は典具帖と云つてゐるが、製法のむづかしい譯は、第一、薄くないければ、提燈に張つて燈光が發揮しない、第二、紙にムラがあつてはならぬ、第三、油を引かないことが岐阜提燈の特色であるから、相當に強靱でなければならぬといふ、むづかしい條件があるから、紙師が一番製造に苦心したといふも無理ならぬことである。これも御多分に洩れず今のはズット品が落ちてゐる。

美濃の徳の山と云ふ處では、水に這入つても文字が散らない一種の紙を製したことがある。委しくは知らないが、或は明暦の江戸の大火に考へて、造つたものではあるまいか。昔の江戸

の大火には、一切の帳簿や文書は、匆卒の場合、池か井戸へ投げ込むより外に手段は無かつた。後に取り上げて見ると、悉く墨が散らばつて字が分らなくなるので頗る困つた。こんな事が動機で工夫したものであらうと思ふが、今其の製法が傳つてゐるか否やは不明である。此頃岩國の人から聞いたことだが、此國でも同じ紙を工夫したとある。同地の帳面に用ゐる紙は小豆色のと黄ばんだのに限られてゐると聞いたが、それが果して墨の散亂を防ぐ紙かどうか聞き洩らした。島根は元來紙の名産地で、石州半紙は頗る名高いものである。紙の質がよくて蟲が喰はず、そして割合に價が安い。岩國の製紙も、石州の感化を受けたものではあるまいか。

土佐も亦紙の産地として名高い。土佐半紙と云へば全國に行き渡つてゐる。半紙の外にもいろ／＼あるが、爰には一種特異の紙を擧げる。それは藥袋紙である。漢方醫が藥の包装に之れを用ゐるのは濕氣を防ぐ特徴があるからで、色は黄ばんでゐる。書籍の表紙にも多く用ゐた時代があるが、矢張り防濕の用意から來たのであらう。此紙に就て「杏林内省録」といふ醫家の隨筆に據ると、これは山内公の秘製に係り、銃砲の火藥を包む爲めに特製したもので、之れに包めば氣が外に漏れず、兼ねて濕氣を受けないといふ特徴があると云つてゐる。所謂御留め



紙で、多く賣ることを許さなかつたといふから、偽物も出たに相違ない。其眞質を鑑定するには、紙の一端へ火をつけて見ると、眞物は線香の火を點じた丈でも決して消えることが無いが、贋物には火が直ぐに消えると云はれてゐる。土佐には製紙の業が發達したから、こんな工夫も出來たのだが、現今紙の當業者から聞けば、土佐には甚だ評判がよくない。土佐は製紙が上手であるだけそれだけ手を省く猶法にも長じてゐて、種々ズルイ事をやる。それが一般の製紙業者にも及んで、悪感化は追々一般に浸潤する傾向があると聞いた。

各地の紙の特質を擧げるとは到底匆卒に出來ないが、爰に前に漏れた二三特徴のある紙を擧げれば、灰汁打と云ふ紙がある。間合といふのがある。前者は映寫に用ゐられ、後者は重に壁張り、襖、屏風などに用ゐられ、軟かでベタ／＼したものである。薄葉と雁皮も、薄い點に於て典具帖と同じ様な特徴があるが、薄葉と雁皮は典具帖に比して紙質が硬堅である。薄葉に似て更らに精良で、其質も一層硬堅であるのは竹紙である。これは今日餘り見ないが、ペンで使用出來るのは西洋紙に似て西洋紙以上、世界に類のない紙である。日本の世界に誇り得る紙の一つはこの竹紙なども其一つだと思ふ。これは第一紙質が薄いから、一冊に多くの紙數を使

つても嵩まない。墨つきが好くて、濕氣を受けても害がなく、蟲がつかない。嵩がなくペンでも書けると云ふので、維新前後の洋行者は行李に必ず携へたものであつた。今日でも極く小さな本を作る時などに用ゐられ、或は仕掛花火の風船を作るに用ゐられてゐる。尙ほ此他に漏らす可からざるは、柃といふ紙である。これは錦繪を作るに必ず要するもので、錦繪の美を發揮するのは此紙あればである。色は純白で、ふつくりした氣味があり、奉書よりは薄くて堅く、美人の顔の柔かな皮膚の感じを艶美に表現するには、畫工の手腕以上此紙の功德によるといふても誣言でない。

以上を考へると、日本の紙は世界に比例のない色々の特徴を持つてゐることが會得されよう。然しこれらの特徴もやはり當業者の専門秘法になつてゐて、單に口傳で傳統されるのみだから、古老が減びると共に段々消えて行く。古い書物を複製する時に百方搜しても容易に紙の見當らないことがあるのは實に惜むべきことと思ふ。

全體書物の美術的中樞は何かと云へば、どうしても紙に條件のあるのは否むことが出來ぬ。紙は趣味を感じしむる大切な道具だ。然るに之が文化の進むにつれて却つて退歩し、粗惡な品



質のものが幅を利かして、良質の紙が影を潜めて了ふのは經濟學のグレシヤムの法則の適用さる、譯で、機械偏重と大量生産の結果餘義ない次第とは云ふもの、趣味の爲めにも、又日本の特質を尊重する上からも、今日に於て何等かの方法で研究保存する途を講じ度いものである。但だ爰に最近の痛快事として録すべきことがある。それは早稻田大學の新圖書館の壁畫を書く料に、特に製した未曾有の大紙に就てある。既往のレコードでは、幅九尺長さ二間といふのが最も大きいものだと言つてゐた。禁裏御所でも、將軍家でも、これより以上の大きな紙を造らせたことは古來ない。然るに今度早稻田のは三間四方であつて、堅硬でもあり、質も非常によく、畫家の大觀觀山二氏も、これならばと満足してゐるものであるが、これは福井の製紙家岩野平三郎氏が特別の苦心で僅かに十枚造つた。原料は麻が二分の一、雁皮が三分、楮が二分で、如何にも優美な紙で、墨色が十分發揮して比類のないよい紙である。斯様な減法界もない大きさの紙を作るには四間四方の船を要し、それがコンクリートで特設され、それに装置する金網のごときも圖外れに大きい爲め、特に製作を要したは勿論、壓搾器、其他乾燥若くは光澤を出す諸設備に至るまで、皆特別の工夫を要し、幾多工程の經過中に、意外な失敗を

重ねて幾んど幾回か絶望を感じながら、苦辛をつゞけたので、僅かに成功したのは眞に天祐である、製造家は言うてゐた。その苦心の次第は専門に屬するから、爰に委しく語ることを略するが、一事を語れば、他も恐らく推測出來ようが、其の一事といふのは、四間四方の船に水を張つて、イザ水を去る段になると、水に波が立ち瀬まで生じて、おのづから水路が出來、紙の原料はそれに動かされて不平均を生じ、水の去つた後を検すると、紙に龜裂を生じてゐるの痛く失望したといふ。手漉きなれば何でもない事が幾百倍の大物となると、水の平均を保ちつゝ、それをぬき去ることすら容易のものでない。此の失敗から幾んど寢食を廢し、機械代りに自在の働きをする多くの職工を用ゐて、漸やく水の流出の不平均を制したと云ふことである。此の紙の製造は日本製紙史上特筆すべきことである。

## 五 包装と裂地

世界中で日本程包装法の進んで居る國は無いと思ふ。此に包装といふのは廣い意味で云ふのでは無く、主として貴品、重器を包装することに就て云ふのである。貴品、重器にも色々ある



が、或る時代に於て茶器が非常に尊重せられ、其餘風が今日も尙ほ茶の社會に存して居る。ひとり茶道のみで無く、種々の方面に其の影響が及んで居て、或る意味に於ては、すべての藝術は茶器を中心として發達したというても過言でない。此に述べる包装法の如きも、亦茶儀に伴つて發達したものに外ならぬ。

勿論茶器と云うても種々の別があり、其の形も亦まち／＼である、それに相應した袋を作るのが、即ち包装である。此の袋を作るといふことが、一種の藝術となつた。袋には紐が要る。随つて紐を製することにも、其の紐の結び方にも種々の工夫が凝らされた。袋に入れた上に、箱に入れる。其の箱を作ることも精巧の極に達した。箱というても色々ある。普通に箱といへば上箱うはばこを指していふのであるが、其の上箱でない箱もある。たとへば茶入の形通りに出来て居る箱、即ち丸い壺のやうなものに對しては丸い箱、肩衝かたせきといふ、肩の張つた、稍々細長い茶器を入れるには、矢張り其の形のやうな箱が要る。是は轆轤で挽いたものである爲に、普通挽家ひきやといふ名が附いて居る。それには生地のものもあるが、多くは漆で塗られて居る。右様の箱の上に、更に同じやうな恰好の箱を附けることがある。其上に、今度は角形かどがたの上箱を附け

る。そして袋は其の挽家までも入れるやうにして作られる。如何にも複雑なもので、之を見ても、器物を大切にする爲めに、如何に包装に力めたかといふことの一端が窺はれる。

其等の事に就ては各々長い説明を要するが、差當り茲には袋を作る材料に就て、聊かいうて見たい。此に材料といふのは裂地きれぢのことである。此の裂地は一科の藝術を成す程面倒のものがある。百千と數へる程の裂地に色々の名前がついて居る。又色々の時代があり、色々の國の生産がある。呉服の専門家でも解し兼ねる程複雑であつて、茶道の人でなければ名の知れぬものが少なくない。否、茶道の人でも、袋地を特に研究した人でなければ解し兼ねる程、専門的のものである。全體茶器の包装には、器物を大切に保存する爲といふ外に、裝飾の意味も加はつて居る。即ち包装に依つて器物に興味を添へるといふことが、袋の役目である。それ故一つの器物に對して、種々の異なつた袋が作られる。名物茶器などになると、必ず三つの袋が要るとせられた。三つの袋を作る所以は、折と場合に依り袋を異にする爲である。たとへば大名の茶席などいふ場合には、金欄の袋を用るねばならぬ。意氣な席には縞裂しまぎれを用る。わびた席には緞子の袋を用るといふ如く、其の席と調和を保つために夫々袋を選ぶのも、袋が物を大切に



保つ職務の外に、裝飾の務めがあるからである。又器物そのものとの調和を保つためにも、時代ある器物には時代裂を用ゐる、外國から來た器物には外國産の裂地が用ゐられる。包装が單に器物を保存する爲めであれば、それを蔭で引離してよい譯であるが、さうではなく、包装その儘茶席に持出すので、即ち包装に依り茶器に光彩を添へるといふ譯であるから、従つて其の裂地は非常に吟味を要することになる。茶人が裂地を得るために多大の精力を費したのも、謂はれないことではない。

茶人の世界では、支那の唐宋あたりの織物が色々弄ばれた。其の織物は本國の支那でさへ非常に稀れなものであるのに、物は好む所に集まる譯で、是等の織物が日本にかなり多く渡つて來て、それが包装に役立つたといふことは、驚異に値ひする。勿論此の時代裂を得るのは、決して容易なことではなかつた。古い時代に支那に赴いた高僧の袈裟や、或は其他の衣類のやうなもの日本に保存されて居る。其等のものがつぶされて、包装用のものとされる。又聖徳太子の用ゐられた蒲團の裂が隋あたりの製造であるといふので、それが袋地に採用せられるといふ譯であるが、併し高僧の袈裟にせよ、太子の蒲團にせよ、皆寶物となつて居る大切のものであ

るから、矢鱈に之を用ゐることは出來ない。たゞ頗る地位の高い人が其れをなした位である。斯様に稀れなる、貴い裂となると、一寸四方位の斷片を得ることすら容易でなく、従つて小さな袋を作るにも、巧みに其の斷片を縫合せて作つたものである。同じ柄の裂のない時には、別の裂を縫合せることもやつた。古いものは、何といつても寺院に多く存してあるから、此の裂地も寺院と密接の関係がある。元來茶そのものが寺から生れたものだから、それは自然の資縁でもあるのだ。高僧の袈裟、其他の織物類で、茶人が其れに因んだ名を附けて、たとへば夢窓國師の袈裟を摸して織つたものを、夢窓裂といふたりした類は少なくない。又寺の名の付いた、いろ／＼の裂がある。それは多くは寺の藏品に因んで居るのである。

又往時交通不便の世の中に於て、印度或は土耳其あたりから、色々の織物が、不思議な程多く舶載されて、それが茶人に珍重された。たとへば間道といふ縞の裂は、近頃の研究では、土耳其古のものと云はれて居る。それからモールといふものがある。或は回々織ともいはれて居る。之れも土耳其古のものである。和蘭木綿といふのは、其名の示す如く和蘭裂である。是等色色の裂も夫々時代が違つて居て、古いもの程稀れである爲め珍重される。古渡り、中渡り、後



渡り、近渡りなどいふ段階が附いて居て、其の最も古いものに極古渡りといふ名が命ぜられて居る。其の段階に依つて等級が定まり、又價も定まる。唯だ古いから稀だ、稀だから貴いといふ計りではなく、古いのにはやはり優秀の品位があるからでもある。茶人の眼はいかにもすぐれたものであつて、呉服屋よりも、機屋よりも、よく行届き、裂地の鑑別と選擇には、驚くべき能力があつた。即ち裂地に於ける伯樂は茶人であつたのだ。普通の人が無意識に委棄して居る裂地の中から取上げて、珍としたものも少なくない。

又茶人が其の獨自の趣味の上から取上げたものも多くある。たとへば支那の天子の御璽の据わつて居る詰命書こつめいしょといふものがある。それは織物であるが、其の印の所をくり抜いて、之を袋地に用ゐる、日本風に御朱印裂ごしゆいんざれと呼んで居るなどは、趣味の上から取上げた一つの例である。全體茶は何から何まで趣味のもので、器物も茶人の思惑から、支那其他の雜器を取上げ、其形や色や、其外色々の所に面白味を見出して、本國の生産地では思ひも寄らなかつた所に味を附け、之れを趣味あるものとしたのであるが、之れに用ゐる袋の裂地も、同様に時代から、織方から、模様に至る迄、皆趣味的に見立て、器物に風流を添へたものである。だから其の裂に

命じてある名を聞いた丈けでも、史的趣味を感じずには居られないものが多い。たとへば紹鷗裂とか、利休裂とかいへば、有名な茶人の衣服に用ゐた紬の裂をいふのであつて、其の名を聞けば、何人も此の二大茶人を聯想する。興福寺裂、法隆寺裂、本能寺裂などは、何れも皆是等古刹に存する金欄や緞子に因んで名けられたものであるが、斯様に有名な寺の名の附いて居る丈けでも頗る趣味を感じる。況んや其の織方などに於ても、一種特異の趣味あるに於てをやだ。高僧の名を冒して居る大燈裂だいとうざれは大燈國師の衣類を本として命ぜられたものであるが、そんな莊嚴な名計りでなく、優しい遊女に因んで、吉野といふ名妓が好んで着たといふ間道かんどうがあり、又定家ていかといふ遊女が其補襦しゅじゆに用ゐた定家緞子といふ裂は、既に名物裂に數へられて居て、其の來歴に於ても甚だ趣味を感じしめる。或は又包まれてある名器から名を得たもの、持主の名から命じたものなど様々ある。西洋あたりの分類法から學術的に名前をつける方式から見ると、如何にも勝手千萬のやうに見えるが、風流の味は寧ろ茲に在つて存すると云はねばなるまい。



## 六 玩 香

今日では香水がよく流行して、女は勿論、男子までも盛んに香水を用ゐる。この香水中々色色な階級があり、高いものになると一滴何圓といふ程のものもあつて、贅澤物の標本となつてゐるが、一體香を聞いて喜ぶことは非常な高い趣味に屬する。日本では古くは液體の香を玩ぶことがなかつた、香はすべて之を焚いたものであつた。

この香は初は佛に獻ずるといふことから起つたものであらうが、それが追々色々な事に應用され、茶儀にからんで種々の發達を遂げ、趣味的に追々工夫されて一種高尚なる遊戯ともなつた。明人高瑞南の「遵生八牋」に香のことが多く出てゐる。そのうちに香の趣味をいろ／＼擧げてゐる。獨坐して心を清めるによいとか、茶を煮る時によいとか、吟詠の同伴とするによいとか、睡魔を避けるによい、月を見る友とするによいと、支那流に色々擧げてゐる。その中に、美人と火爐に手をかざし密語を交へ、そこへ香をたくと情熱が昂まり、心ときめきを禁じ難いなどと大分お安くない事も云つてゐる。

## 蘭奢待より一木四名

香を天平時代に早く既に珍重したことは、正倉院の御物のうちに蘭奢待らんじやたいのあるのでも分る。然し香を弄ぶやうになつたことはさう古くないので、歴史の天子のうちで最も香を遊び、且つその道に極めて堪能であられたお方は後水尾天皇だと傳へられてゐる。

香と云へば誰でも直ぐ思ひ浮べるのは前にも云つた蘭奢待であらう、これは矢張り伽羅きやらである。専門家の説では、これは評判の高いものだが、餘り結構な物でない、寧ろ一木四名と稱されてゐる名香が却つてこれより以上だと云うてゐる。一木四名とは、一つの伽羅を四つに分けて、彼方此方に珍藏されてゐる、それに別々の名のついてゐるのを云ふ。帝室にあるのを藤袴はかま、小堀公のを初音はつね、細川公のを白菊、仙臺侯のを柴舟しばねといふ。これが蘭奢待にも優る最上の伽羅である。

一體香は南洋に産するものが最もよい、その香の名は皆産地の名がついてゐる。それは六國七種というて次のやうな名稱がある。



一、古伽羅

二、羅國(シヤム)

三、真奈伽(マラツカ)

四、寸門多羅(スマタラ)

五、真奈蠻

六、佐會利

七、新伽羅

昔斯様なものが長崎へしきりに輸入されて來たとき、大名が争つてこれを得ることに努めた。中々富んだ大名と雖も、その輸入し來つたもの一本全部を買ふわけには行かず、その一本のうちの或る要部を競つて買ふことをつとめたもので、それが爲に立派な家來などを派遣した。競争の結果、他の大名によいのを取られたといふので、切腹した士さへあつた。

かほどに香の趣味が貴族社會に廣まつて、珍香を得るには全力を盡した。今こゝに香を語るのは其全部に就てはなく、只極めて一部分のことを云ふに過ぎない、それは主に鬪香に就てある。

## 鬪香の面白味

初は香を聞くことも極めて單純であつた、それが追々複雑になつて、意外な發展をした。支

那では元の時代に鬪香が初まつたとある。これは多分香の優劣を争つたものであらう。日本でも勿論香の優劣を鬪はしたものであるが、尙其外に香の聞き手の優劣を鬪はした。兎角勝負事しやうぶじにならぬと興味は薄い所から、玩香も勝負を中心とすることになつたが、上流の社會に行はれた丈に、飽くまで品位を保ち、金錢や物を賭けるやうなことはなく、勝者には賞状を與へて其の名譽を表彰するに止めた。

併し、勝敗を決するにも其法が餘り單調では興味が無いから、種々の工夫を凝らし、それが段々に複雑になつて、自然流派も生じ、それ々の流派で特種の法を定むるやうにもなつた。今は到底各流の法式を陳べる譯には行き兼ねるから、極めて大略を云ふに過ぎぬ。

大體鬪香は双六のやり方に倣つて工夫したと思はれる。双六にもいろいろ種類があるが、通例は或る所に障礙物があつて、そこまで行くと遮られて、後戻りをせねばならぬことになつてゐる。これは誰れも知る通りで、双六の興味は斯様な變化にあるのだが、鬪香に於てもいろいろの變化に興を持たせてゐる。但だ双六に於ては平面の紙に畫を描き、それを勝負の具に供してゐるが、鬪香にはそんな安つばい趣向でなく、道具にはいろいろ立體のもの迄用ゐて、頗る



芝居が、つてゐる。鬪香に第一必要としてあるのは一面の盤であるが、この盤は謂はゞ舞臺のやうなもので、その盤の上に人形が活動する、其他大道具とも見るべきもの、又いろいろ細かな小道具と見做さるべきものもある。

鬪香の工夫は、つまり双六と芝居を合併したもの、やうだ。香道の本筋から云つたら、俗になつた嫌ひがあらうが、然し工夫はあくまでも高尚で、詩や歌や古い物語などから意匠をつけて、どこまでも優美であり、その道具は精巧目を驚かす程美術の粹を盡してゐる。今いろいろな鬪香の例をとつて双六並に芝居に近いことを云つて見よう。

## 雙六と芝居に似る

例へば羽衣香と云ふがある。浦島のお話を取つたもので、人物は天女と釣人で、二つ人形がある外に、松がある、そして羽衣には紐がついてゐて、松の枝にかけられるやうになつてゐる。此松を盤の中央に立て、盤の兩側の溝に二つの人物が置かれ、香の聞き分けの當否で人物が進退し、松に羽衣を掛けたものを勝とする趣向であるが、茲に劇の小道具と見るべきは、松

と羽衣である。又拾貝香といふがある。盤の上に三十六歌仙に擬して三十六の貝を置くのだが、盤面の一半は蒔繪で波たつ海面をあらはし、一半は陸に擬して梨子地で砂の趣をあらはしてゐる。此の海陸兩方に十八づつの貝を位置よく置き、香の聞き方の當否で海中の貝が陸に上つたり、陸上のものが海に入つたりして、結局其數で勝敗を見るのだ。こゝで背景と見るべきは海陸で、小道具は貝である。こんな平面の背景はいろいろある。曲水香といふのは、川の流が金の蒔繪になつてゐて、一つの巖石が中央に横つてゐる、それが決勝點である。盃を水中に流し其の遲速で勝敗を決するのである。即ちこゝには川が背景で、盃が小道具である。こんな風に平面に繪をかき、それを背景とする計りでなく、立體の背景もいろいろある。即ち木樵香といふのは山の盆景を作つて、盤の一方に飾るのである。これは大道具と見做さるべきものだ。又源氏香の内、關屋香には逢坂の關と瀬田白川を形どる爲に橋を飾る。これも立體の背景で大道具である。又椿姫香には、屋臺の上に二人の姫の人形をならべて、屋臺に翠簾をかける。これなどは全く芝居がかつてゐる。又舞樂香には幔幕二張を張り、樂の太鼓をも飾る。舞臺と見做さるべき盤は通例長方形であるが、圓形のものもある。玄宗と楊貴妃の扇軍の香などには



圓形の盤を用ゐることになつてゐる。

## 故事風俗に因むもの

以上は香道で、所謂立物の一斑を擧げたのだが、いろいろ故事を案じた意匠の内にはなかなか凝つた工夫がある。例へば陸奥香では人物が西行と能因で、それが東西に立ち別れ、西行の方には道邊の松があり、又宮城野の萩がある、能因の方には武隈の松と白川の關がある。西行能因の進退は、松や關所に阻止さるゝやうになつてゐる。丁度双六で或る地點に達すると休まねばならぬ所があると同じだ。蟻螂香には、盤の中央にかまきりが置かれてあり、一方には僧形の人が琵琶を弾じ、一方には直衣をつけた人物が琵琶を弾じてゐる。これは昔、妙音院の御前に妙觀といふ僧と孝定といふ公卿が琵琶を弾じて、その琵琶の妙音でかまきりを惹きつけた方が勝となる故事に基いたものである。其他孟嘗君が雞の啼聲をまねて關所を通つたといふ故事や、玄宗と楊貴妃が双方に別れて、侍女に花の枝を持たせて花合戦をしたといふ故事や、孔明の八陣にならつた複雑の趣向もある。

日本の故事風俗によつたものでは、鵜舟だの蹴鞠だの鷹狩だの枚擧に暇ないが、中に極めて複雑なのは黒木香である。これは黒木を頭に戴いた賤の女が黒木を背に負つてゐる牛をひき、それが五組、盤の上を行進するのだ。途中で枝折戸が五ヶ所かざつてあつて、それを通り抜けねばならぬ。それから又決勝點に達するに立派な門がある。それに入ると、黒木の代りに賤の女には花の折枝をもたせ、又綾の巻物を持たせる。然るに女と牛が同時に達しない時はその門を開かない定になつてゐて、香の聞き方の巧拙如何によつて牛が遅れることがある。人間が進んでも牛が遅れては門に這入れない、その面倒なところに興味を持たせてある。

## 雅びな源氏香

こんな工合に鬪香の式は様々あつて、今は只其一端を云ふに過ぎないが、源氏香などと云ふものは「源氏物語」に因んで工夫したもので、源氏は五十四帖あるけれども、源氏香は五十二種になつてゐる。香の組み合せでいろいろな形が出来る、その形は「香の集」と稱へて如何にも雅なものであるが、これは香のくみ合せを表示したもので、五本の線が五種の異つた香を示



してゐる。そのうち同じものは上部に横線を引いて連絡し、同一の香であることを現はす。かやうに色々に表示が出来るが、數理的に五十二種以上は出来ない。それが爲に源氏になぞらへたものながら、五十四帖のうち首尾二つだけ省かれてゐる。この香の集は符號のやうなものであるが、それが何となく雅な工夫である爲に後には一種の模様となり、或は器物に描かれるやうになつた。これは多分種彦が「田舎源氏」を書いて、表紙などに美麗に此符號を應用した所から手廣く流布することになつたものであらう。

## 七 温泉と文藝

日本人は世界で最も風呂好きな國民である。火山國であるから温泉が豊富であり、清潔を尙ぶ習慣があるので、共同浴場が到る處にある。江戸ッ兒の日中行事は朝風呂に入ることから始まり、貧人と雖も風呂をかゝさぬ。日本人の道樂は風呂であると云うても誣言であるまい。斯る國土に於て風呂が文藝に没交渉であらう筈は無い。式亭三馬は早く風呂を材料として小説を書いた。それは「浮世風呂」である。錢湯は全く或る時代に社交俱樂部であつた。今でも尙ほ

其趣がある。近隣の男女が互ひに語を交へるも此處であり、不見不識の人と交はるも此處であつた。或る時代には湯屋には二階があつて、湯女が茶菓をすゝめた。碁盤將碁盤も往々具はつてゐて、僅かの錢を投すれば半日遊ぶことも出来た。實に安直な遊樂俱樂部であつた。明治の初年には風呂屋の建築法が今日の如くやかましく無かつたので、多くの浴場が出来たことがある。それは舊式の石榴口ざくらぐちを撤して氣分のよい新式で、湯女もゐるたから、多くの書生はこゝに遊んだ。今のカフェーに比すべきであらう。或る老人の話に、昔は物價が安く、天保錢一枚、それは九十六文に當るものだが、その九十六文で床屋で髪を結び、手拭一本買つて、錢湯に這入り、殘金で夜鷹が買へたと云ふ、浴錢は如何にも安いものであつた。市井の浴客は、湯に入りながら淨瑠璃を語つたり、新内をウナツたりして、爰を音曲の練習所とした。無名の作家がこゝに材を得て數知れぬ川柳を詠じ、戯作者が其の鬱屈をこゝに暢ばして更らに筆を新にしたり、又思構をこゝに鍊つたりしたことが幾許であつたらうか。少なくとも俗文學が朝湯に負ふ所は少なくなかつた。元來浴は氣分を爽快清涼にするものであるから、それが精神に重要な影響を與へ、それがやがて文藝に反響を及ぼすことは言ふまでもない。



風呂に就ての史實を案するに、古く光明皇后が病者の垢をお手づから流されたといふ著名なことは今更語るまでもないが、頼朝が海水に浴して神を拜したり、武士が清淨潔齋して死に就いたり、頼家が修善寺の浴場で暗殺されたり、三代將軍が青年時代浴場で近侍に戀慕されたり、抱一が八百善に風呂を作らせて割烹店に風呂の備はる端を發したり、高杉東行が浴しつゝ、あつた愛婦の裸體の注進で捕吏の襲撃を免れたり、巖谷龍一が一生のスネ物富永冬樹を浴場に延いて應接し、流石の富永をアツと云はせたり、大隈侯が一浴百憂を一掃したりしたなど、風呂に就ての anecdote は少なくないが、悲劇喜劇さまざまであるけれども、皆な風呂の享樂を頌するものに外ならぬ。

温泉のある所には、概ね寺があつて、靈泉と宗教が絡んでゐる。随つて温泉の地には名僧の詩文が多く遺つてゐる。文人墨客の澡泉に浴するものは、必らず何等かの什を留めてゐる。横井也有は熱海に遊んで其の集に無い記文を草してゐるし、眞淵の門下で才媛と聞こえた油屋倭女子は伊香保に浴して名高い伊香保紀行を書いた。數へ来れば温泉文學は大層なものである。尙ほ政治上に就て云へば、其の行詰りが往々温泉會議で解決された例もあり、浩漣な報告書

や論文が温泉で書かれたり、千古の名著も濛々たる湯氣の中から出てゐることを考へると、温泉と文藝とは決して交渉が薄いとは言はれぬ。

私は曾つて温泉の今昔を比較して、その相異の甚しいのに自から驚いた。昔しの温泉行は全く養痾の爲め不便を忍んだものであるのに、今は養痾は必らずしも單なる目的でなくなり、いろいろと新たな目的も加はり、寒季には避寒、暑候には避暑にゆく。これ等も養痾の範圍内だといへば言ひ得るが、その内容を解剖すると、強ちそのためではなくて人を避けるためとか、愛人と水入らずに會するためとか、頗る複雑な意味があつて、決して昔しのやうな純粹のものでない。

自分は九州の別府に一二度浴したことがある。同所は日本から大連あたりの植民地に連絡もあり、歐洲とも亦同様で、外から内地へ来るには先づこゝに足を留めて疲勞を慰するに適當な地形であるから、その點からいへば、この温泉場は一種の港ともいふほどのもので、繁昌するのも當然である。自分はこの地に滞在中にいろいろとおもひを馳せて、この地に在る浴客はどんな人々かと考へた。卒然として見る時は、いづれも甚だノンキなもので、飲食その他贅澤三



昧に日を暮して、殆んど如何にして金を使ふべきかに苦んでゐるらしい。併しそれは成功者や成金連などが多く眼に映ずるからで、こゝには失敗者も破産者も皆集まつてゐるに相違ない。あるひは身を匿すために、あるひは回復の案を畫すために、人知れず苦心懊惱してゐるものも來てゐるであらう。世界を股にかけた詐欺師や泥棒もゐるであらう。國事探偵や美人局専門の美婦なども紛れ込んでゐるであらう。表面はさあらぬ様に見せかけても、この土地ほど秘密を包藏する多くの人間の集まるころはあるまいと思ふと、何となく興味の底から、多少不安の氣の起るやうにも覺えたのである。

自分の右の如き觀察は、必ずしも空想でなくて、今の温泉場、就中別府のやうな要衝の地には慥かに存在する事實である。一と口に浴客とはいふが多種多様で、西洋でも探偵の入込むところは温泉場だといふが、日本も今はそれに近くなつてゐる。昨今我が小説家が材料に窮すると、筆を載せて温泉場へと出かけては何等かの種を擱んで構想を定めるのも、畢竟こゝに秘密が潜んでゐるからである。イヤ秘密があるからといふよりも秘密が探り得られるからであらう。小説家のいふことは必ずしも事實でないにしても、温泉場に得た材料といへば、いかにも人の

の領く譯は、即ち温泉場が探偵の腕の揮ひ場所であるからだ。大體小説家が探偵小説を書くのに、舞臺を温泉場に藉りるのも、勿論この故である。若し温泉場に照魔の鏡があつて浴客の暗黒面を暴露したら、驚くべく、憎むべく、將た笑ふべき、種々なる化物の正體が見られるであらう。

これから追ひつゝと温泉が開けてゆけばゆく程、罪の巢窟になる傾向がある。これを昔の單純な時代のそれと比較したら、實に非常の變化ではあるまいか。男女の關係が漸次西洋風になり、婦人の貞操が不安になり、自由結婚が追々行はれ、藝娼妓の外に女優など、いふものも出來、それらの活躍する舞臺となるものは、多くこの温泉場であるとすると、單にこれだけでも温泉場が風紀上の注意場所であつて、昔と天壤雲ならざる相違のあることが知られる。

然らば昔の湯治場はどうかといふと、單に糧を齎した位のもので、隨分不自由を忍ばねばならなかつた。それが今のやうに贅澤になつて、何不届もない安樂郷になり、旅宿も驛路の旅館よりも遙かに立派になつて、或る意味では料理屋をも兼業し、藝者も來ればその他の藝人も來る、自動車がある、東京へ電話も通ずる、金次第で大抵の事が出来る。かうなると、病なきも



のも家族を伴れて團圓を楽しむ。新婚旅行者も此處を選ぶ。風流の士も茲處に吟詠を曳く。平素繁劇の事務に當るものもまた來つて安息の地とする。宿痾のあるものは素よりこゝで療養を續ける。繁華になつた湯治場のブライトが種々あるが、更に暗黒面を見ると、それは富貴を衒ふところで、身分不相應の贅澤三昧から隨分産を破ることもなる。良家の婦人が節操を害ふことも珍らしからぬ。今の温泉場は誘惑の地である。罪惡の避難所もこゝであり、その策源地もこゝである。何の秘密もない遊樂の地の如くにして、其實恐るべき秘密の隠れ家である。疑問の人假裝の人が好んで立てこもるところである。今は交通自在のために、劇場やカフェーや寡婦の家や破倫の夫人の家などは近い待合茶屋に連絡せずして、却つて隔つてゐる湯治場に連絡してゐる。温泉場の沿革を考へて見ると、僅かに五十年経つか經たぬに斯うまで驚くべき變化をしてゐる。さらにこれから五十年後には、如何なる驚異を持來たすことであらう。

今日の温泉場は、一口に云ふと複雑な社會の縮圖である。此の小乾坤には、善も惡も、文藝の資料に充實してゐる。性慾、戀愛、享樂、詐謀、欺瞞、煩悶、あらゆるものが湊合してゐる。こゝには社會の風紀の研究も出來れば、人間浮沈の研究も出來る。又人倫の研究から人間心理の研究も出來る。一種の文藝は、恐らく將來こゝに起ることであらう、恰かも狹斜文學の起つた様に、寧ろそれよりも幾層規模の大なるものが起るであらう。ひとり探偵小説の撞場が無いことは勿論である。

## 八 旅

### 昔の 旅

旅は趣味のあるものである。併し旅は同時に不自由のものであり、いくらか危険の伴ふものであり、心細いものでもある。併し旅に伴ふ不自由、危険、心細い點が、やがて趣味を發する源となる。今日のやうに世の中が便利になつて、萬事萬端整ひ、何百里の道程も一日二日で行かれ、そして危険もなく、定まつた時刻に正確に目的地へ達し得るやうになつては、却つて趣味が薄らぐ觀がある。今の旅行は丸で東京市中を歩くのを引伸ばしたやうなものである。氣樂は氣樂であるが、どうも趣味が薄いやうに思はれる。全體興味を發するには種々の原因があ



る。思ひ掛けない事、換言すれば常經を外れたことに多く興味を發するものである。不自由、危険、困難といふことは、其即時には中々の苦痛で、一寸興味はないやうに思はれるが、併し時日を経てから考へると、其時の苦痛が他日興味を惹起す原因となるものである。今日のやうな便利な旅では斯様な苦痛も困難もない。後日回顧しても興味を喚ぶの場合が乏しい。

昔の人の言つた言葉に、可愛い子には旅をさせよとある。これは一面困難や不自由を體驗せしめると共に世態人情を知らせるには、旅が誠によい學校だといふ意味で、如何にも名言ではあるが、然し其の辛かる可き旅行も、其人の境遇又は考へによつては却つて愉快に感ぜられて、殆んど苦痛、困難、不自由を感じない者もある。たとへば俳諧師又は雲水のやうな境遇から見ると、是等は旅行を以て一生の樂みとするやうなものであるから、普通人の味ひ得ない興味がある。正徳の頃芭蕉の門人乙州といふ者が書いた隨筆の中に、旅行の愉快なことを書いてゐるが、是をつまんで言ふと、「旅は辛いと言ふけれど決して辛くない。宿屋々々で持出す寢具は随分ひどいもので、脚もよくは収まらないやうな煎餅布團である。こんなひどい宿屋でも僅か二銭か三銭の金子を出せば、其の深切から扱ひ振り迄が違つて、直ぐに綿の厚い布團と取

り代へる。又油錢と言つて心付を出せば、俄かに燈心を増して薄ぐらい室が輝くやうに明るくなる。風呂の催促が早く来る。茶も新らしいのと入れ代へて、菓子なども添へて来る。馬を頼むにも宿屋から先づ心配して、安全なやすい馬を周旋する。朝も急立てるやうな事はせずに、御緩りとお立なさいといふ。僅かの心付が瞬間に斯う現はれ、いかにも現金で甚だ可笑しいやうではあるが、機能が忽ち現はれるのと、五十銭位（昔の金にて）で十日も二十日も便利を得られるのは、旅より外にはない事だ。旅慣れた人が、旅は氣樂である、旅は忘れられないものだといふ感じを起すのは無理でない。僅か一夜の泊りでも、其の宿屋と人情の關係が出来たり、是非又いらつしやいと言はれたり、二度目に行つた時には親戚にでも逢つたやうに、ひどく喜ぶといふやうなことを考へると、旅は憂いものなどいふ事は寧ろ間違つたことである」と言つてゐるが、いかにも其通りで、俳人の境遇からは斯様な感じが一層深いこと、思はれる。交通の不便な世の中では、無論膝栗毛で無ければ旅は出来なかつた。中々困難ではあつたが其興味は却つて深かつた。到る處の名山大川が人の目を駭かし心を驩ばせた。今のやうに疾風の如く走る汽車では雲烟の眼を過ぎると一般、風景を味はふ暇もなく、其名さへ知ることが出



來ない。膝栗毛の一徳としては、汗を流しながら大地を一步々踏むのであるから、我を迎へる山水に對しても深刻の印象を受けて、終生忘れ難い感がある。東海道五十三次といふ旅は膝栗毛時代の最も興味あるものであつた。徳川氏の制度で各藩の諸侯が江戸へ參勤交代するに、織るが如く此道を往來したので、驛路も宿舎も輿馬も頗る備はつた。到る處に旅客の口腹を満たす名物があり、旅情を慰むる名所があつたので、膝栗毛の勞も之れに償はれた。籃輿に揺られながら、一時間に僅か一里や二里を行くのは遅緩は遅緩だが、昇夫を相手に浮世話をしたり、土地の風俗人情を探つたりするも一興であつた。馱馬に跨りながら、馬夫のをかしく謠ふ俚歌を聞くのも一風流であつた。寒國を雪中に旅行し、橋に乗つて急坂を下り、手に汗を握つたり、大河の出水に出遇つて人の肩に乗り、危く涉り果せたりするなどは皆當時の旅狀である。

朝未明に旅舎を發し、一里許り行き、夜が明け日光の上るを拜したり、人家より立上る晨烟を見るも氣持のよいものである。旅に疲れて退屈を覺える折柄道連れが出来て、心よく語り合ひながら行くなども、膝栗毛に伴ふ趣味である。半日はかり歩いて、晝食をした、めに茶屋へ着いた時の心持のよき。早く宿屋へ着き、日の暮れる迄幾何かの時間があり、悠々とした心持は、是も一種の趣味といふことが出来る。或は道中の差支へから目的の宿に着けず、己むなく合の宿に泊ると、宿屋の不十分な所から、色々の雜客と入込みに泊ることもたまさかにはある。斯様な場合には拘摸が交つてはをらぬかの懸念もあつて、一人旅には極めて心細く思はれ、荷を置いた儘一人湯に行く事も出来ないことがある。併し入込みの雜客から色々の話を聞くこともあながち興味がないではない。こんな宿屋の食物は無論口に合はない。其時荷物から用意の物を取り出して食ふも、趣きがあつて面白い。

或は暴風雨に逢つて、思ひがけなく津や港に船がよりしたり、或は夜中道を失つて難澁するやうなことは、今日の旅行には無いことで、昔は頻りにあつたのである。こんな事は固より不快には相違ない、實は旅の困難はかやうの時に最も痛切に味はれるものであるが、後日追懐して見ると却つて此場合に興味を感じる。全體かやうな變に際しては、常經に外れた色々の出来事が起るもので、或は意外の人に危難を救はれたり、或は入込みの客舎で知人にめぐり合つたり、徒然の滯留に近所の名所舊蹟を探つて、前人未發の名蹟を發見したり、兼ねて一遊を望ん



でゐた古蹟をゆくりなく尋ねて、偶然宿志を充たすことが出来たり、或は風俗視察の名を藉りて遊里を覗いて見たりするたぐひのことは、こんな場合に多くあることで、それが其時若くは後日興味を覺える原因となるものである。さて又かやうな難澁の域を脱した時の快感は言語に絶する程で、今日の汽車旅行などの到底想像の及ぶ所でない。

## 山岳旅行

旅を苦痛のものであると云うた時代は既に過ぎ去つた。今日の様に交通の便が開けた時に、旅立に親族故舊が水盃を取りかはすなど云うても、誰れも其の理由を覺り得ぬであらう。併し昔の旅を考へると命懸けの様なもので、其の交通不便の時代に於ては、道のない所を辿り行くこともあり、旅籠屋と云うても十里二十里の間に僅か一軒位ある様な次第で、それもむさ苦しい茅屋、唯だ雨露を凌ぐに足る程度で、何所の何人であるか、素姓も知れぬ掏兒、泥棒、人殺などを包含する色々の階級のものの一室に雑居合宿するのであるから、一刻と雖も心の許さるゝものでない。或は喧囂の爲めに一夜殆んど寝られなかつたり、又深夜馬の嘶く聲や狼の遠

く吠ゆるを聞き、悲哀の感に打たれてシミ／＼旅の哀れを催すなどは、強ち遠き昔の事でない、今でも往還を離れて山地に踏み入れれば、斯様な處がない譯でない。まして深山に立入る一種の旅行、往々登攀家が試みる冒険旅行となると、今日と雖も困難は昔と少しも異ならぬ。幾千尺とも云ふべき高山に登る旅行に於ては、無論通路は定まつて居らぬ。深山の常として一夜大雨が降れば、前日迄無かつた所に忽ち川が出来たり、或は架してある橋が、一夜の内に無くなつて仕舞ふ様な變化のあるを常とする。斯様の處に何を辿つて行くかと云ふと、唯だ其の山道に通じて居る案内者を使いとするの外はない。二度三度同じ高山を登つた経験のある人でも、前に行つた道を辿つても再び行つて見ると全く地勢が變化して、溪流や橋などを當てにして行つては間違を生ずる基だと戒めて居る位である。今日に於ては參謀本部の地圖が出来ては居るが、山となると此地圖も餘り當てにならぬ。唯だ頼む所は日々其山に出入する其附近の樵夫の案内に待つ外はない。斯様の處には、やゝもすると猛獸の居ることもあり、勿論旅宿の設備のある筈はないから、勢ひ野宿の覺悟をせねばならぬ。特に寒氣の侵すことは想像外であるから、火を焚いて暖を取るの工夫もなければならぬが、やゝもすると燃料が濕氣に侵され、焚



火の出来ぬ事もある。或は道に迷つたり、或は相當食物の用意をして登つても、意外な出来事の爲めに山籠りの日数が豫定の外に出でたりして食物の缺乏を告げ、或は飲用の水すら容易に得ることが出来ない様なことがあつて、殆んど死活の危険に遭ふこともある。斯様のことは今現に高山に登る人の毎々感じて居る危険であつて、斯様な例を挙げれば、今日でも旅は容易ならぬ者と會得し得るであらう。さて昔は高山にあらずとも、少しく脇道へ這入ると、山中の困難に負けぬ様な事が到る處に多かつた。更に／＼上代に溯つて見ると、困難は愈々甚だしく、旅立も出陣と同じく、生還を期されなかつた位なものである。支那の如きは、今日でも尚ほ旅行には夜具布團、鍋釜に至る迄携帯して行かねばならぬ所が多く、恰かも我邦の上代の旅の如く困難である。斯く考へると旅は苦勞のものである。併し苦痛が伴ふので趣味も生ずる。今日の如く汽車の旅行では樂な代りに趣味も薄い所から、追々峻峻の山岳を跋涉して快とするやうなことが行はれ出したのも偶然でない。

## 旅に要する豫備知識

旅にも種々の目的がある。唯だ或る地點迄達するが目的で、夜行汽車に乗り、寝ながら行くのもあるが、趣味の目的を以て旅をする段になると、之れには尠くとも相當の準備を要する。即ち幾何が其の人の頭腦に趣味を會得する知識がなければならぬ。唯だ漫然と歩く丈では、折角面白い風景美に接しても或は一向感興が起らぬ、如何に史的故蹟を訪うても何等の感懐も惹起さぬ。一體旅の趣味は何人にも感ぜらるゝものでない、どうしても相當の年輩になり、相當の教育がなければならぬと云ふことが要件である。京都邊の名所舊蹟を尋ねると何人も感ずることであるが、社寺の茶店に茶を賣つて居る老婆などは、流石に場所柄丈けあつて、其の語る所を聞くと、田舎の歴史家よりも遙かに旨いことを云うて居る。やゝもするとお客の知らない年號などをべら／＼口走る、兎もすると立派な紳士が此の婆さんに教へられて、多少のヒントを得たりすることがある。此の老婆は京都の如き歴史に富んだ土地に生れ、且つそこにそだつて居るから知るともなしに知つて居るのであつて、敢て教育があるでは無いが、せめては其の婆さんに教へられて、それで趣味を發する位の能力が備はつて居らなくては、旅をして無駄である。今日修學旅行と云うて、或程度の學校に行はれて居るが、趣味の教育上善いことに



相違ない。然し小學程度の幼稚な子供に名所舊蹟などをヤタラに見せて廻ることは、チト考へものである。と云ふのは、此程度の小兒には未だ趣味を感じる能力が乏しく、従つて趣味あるものを見ても趣味が起らぬ、他日頭の發育した時分に初めて感じ得べき、アタラ趣味の區域を幼稚な時代に喰ひ荒させては、一知半解の生カジリが寧ろ他日の損となる虞がある。修學旅行も、兒童の能力に應じて其區域を選ばなければならぬ。我邦人は兎角高尚の事は知つて居るが、案外普通知つて居らねばならぬ事を知らぬ。別して専門の學術を修めて居る人などに此の病がある。平素は自から敢て不便を感じぬが、旅行をするとシミ／＼不便を感じる。例へば英國あたりへ旅行する人は、一ト通り教育のある者が多い、又高等の専門學を修めた人も少なくない。然るに兎もすると西洋の中學程度の者が熟知の事實を知らぬ爲めに、折角名蹟を通過しても勝地を踏んでも一向感興を起さず、夢中に通過することは珍らしくない。蘇格蘭にはウオーター・スコットが詩人として古來非常の尊敬を受けてゐて、いろいろ其の遺蹟があるが、此の詩人の大體の經歷や、“Lady of the lake” (湖上の佳人) が此人の詩である位の事を知つてゐるでなければ、詩中の湖水を觀ても其邊の風景を見ても感興を發せぬであらう。又此の

大詩人の記念塔の下に立つても、何等の感懷も起らぬであらう。又ウエバリーと名の附いて居る橋はスコットの“Waverley novels”から來て居るのであるが、それを知らんでは何も氣付かずに經過するであらう。英國にしても同様で、例へばウエストミンスター・アベーを見ては其の殿堂の廣大なるに感服するであらうが、英國歴史中の大事件は多く此の寺院に絡んでゐる、然るに其の一端すら知らぬとあらば此の殿堂も一向面白味が無いに相違ない。事實を知るは趣味の動機であるから、相當の教育が旅行者に必要なことは云ふ迄もない。今日の大學程度の學校を出た人でも外國の事になると、文科出身は別として、やゝもすれば是等外國兒童が周知の事を全く知らぬ人もあつて、現に洋行中不便を感じた人がいくらかもある。畢竟高い程度のこととは教はつて居るが、西洋で有り觸れたことを閑却してゐるからである。日本の名山大川、其他大事件に關係ある名所舊蹟を尋ねるにも、相當の頭腦備はり、且つ種々なることを味ふに足る年輩が趣味旅行に必要であることは勿論、素養ある人と雖も、旅行前、人に聞き書に見て特に多少の準備をなすことが肝要であらう。



## 旅と風景美

旅行家が最も愉快とする所は自然の風景美に接觸することである、自然を味ふことは旅行に於ての大なる獲物である。處で此の風景美に就ても注意を要する。昔し交通の開けなかつた時代には人のトツキ易い所の勝景が一概に著名のものとなつて、或は日本三大景とか十大景とか、或は支那に倣うて八景など、云うて數へられ、夫より以上の風景は日本に無い様に持て囃され、詩歌に詠まれ、文章に書かれて激賞を受けた。又景色の局部にも色々の名が付き、巖に就て云へば、其の形が似て居ると云ふ所から屏風岩、兜岩、烏帽子岩など云ふ、俗な名を附けたり、唐様かまやまにいろ／＼の雅名を附したりして、風景美の勝地と云へば、必らず其の幾つかのものに限られ居るかの如く思はれ、古人が詩や文章に褒めたものでなければ、絶景にあらざる如く考へられ、因襲の久しき、今日夫より以上の風景が、交通の開けた爲め、いくらでも現はれ出て居るのに、それには見向きもしない。甚しきは、古人の激賞した風景が其後種々の事故の爲めに變化して、既に美なる趣を失つて居るに拘はらず、尙ほ且つ其處に出掛けて往つて、内

心餘り美とも思はない癖に、古人の口眞似をして美也々と歎賞すると云ふ様なことを屢々耳にするのは、全く習慣に囚はれて居るのである。全體好風景と云ふものは概して人に遠ざかつた所にあるものだ。更らに云へば、人の容易に到り得ぬ秘密の場所にあるものであつて、交通不便の時代には人の見ることを許さなかつたものである。夫が今日殆んど全部さらげ出された譯であるから、無名の山水で、是迄激賞されたものに比すれば、遙に美とすべきものがいくらかもある。然るに其の風景に接しても、古人の品題がないからと云うて、それを閑却するは以ての外の事である。好いものは目で判断すれば好いにきまつて居る、何時迄も天の橋立だ、松島だと云うて、風景を小區域に限るよりも、何ぞ進んで古人の嘗て見及ばない新しいヨリ以上の好風景を鑑賞せないのであるか。都會の人は今日でも遊び場を江の島として居る。此の島は都會に最も近い島である、島を見ることの出来ない都人士には昔から興味があつたものに相違ない。島はきはめて小さく、其の全部が方一里で、陸からは橋を渡して直ぐに至ることも出来、且つ島の一端から富士が現はれ、風景を玩ぶには手頃のものである。こんな手の上にも乗る様な島を交通不便の古代には大島と呼んだこともあつたと聞いて居る。昔しの都人士がこれ



を大きく思つたのも無理はないが、いつ迄も江の島の美ばかり稱してゐる様では、日本の様に世界に冠たる程澤山にある好風景に對し誠に相濟まぬ譯合ひである。今後の旅行家は舊來の陋習に囚はれず、自分の見識で風景を鑑賞し、徒らに古人の言に泥むことを止め、別天地を開拓せねばならぬ。近江八景は名高いものになつて居るけれども、實地は夫程の美を感じぬ、紀州和歌の浦も訪ねて見れば噂ほどの處でない、兎角「コンヴェンション」に囚はれてはならぬ。

## 案内記

旅行に最も大切な者は案内記（ガイド・ブック）である。日本でも追々案内記が出来て少しは進んだが、まだ西洋のものに比すると如何にも貧弱である。昔の案内記は幼稚だと云ふかも知れんが、趣味上から見ると寧ろ今のよりも備はつて居る。自分は昔の案内記に對して聊か趣味を感じ、書肆を訪ふ毎に幾つも購ふ癖がある。つまり趣味上廢り行くのを残念に思ふ上から漫りに購ふと云ふに過ぎぬ。其の案内記の内でも最も整つて居るものは東海道筋のものである。夫は道中記と地圖とを兼ね、或は冊子體或は折本體になつてゐる。之れには宿驛も大小に従つ

て記されており、繁昌の所には人家が多く畫かれ、淋れた所は人家を少なく描き、有名な宿屋や本陣などは圖になつてゐる。街道には豆人寸馬があしらつてあつて、主なる山や川や湖水や沼や池なんども描かれ、某所より某所へ幾里幾丁と里程も註されてある。又土佐繪式の雲を隔て、富嶽や其他の高山を畫き、其附近の宿驛より、これより登山などと指定もしてある。又その土地の主なる社寺や名所や或は名物などが註されてゐるものもある。全くパノラマ式に出来て居るから、之れを携へて旅行すると印象的の感覚が深く染み込み、是等の圖のお蔭で永く地名を記憶し又風景を記憶することにもなる。或は是等の式の案内記を幼稚な工夫と輕蔑するものもあるかも知れぬが、實は今日西洋に於て現下最も發達した地理の教へ方は、文章を並べた地理書で讀ませるのではなく、寧ろ斯る「グラフィック」の地圖に就て、地形でも風景でも物産でも其他一切地上の物を印象的に知らしめると云ふのが今日地理の教へ方であつて、日本の教育も追々斯様な教へ方にならねば地理を活かすことが出来ぬ。昔の案内記は粗雑ながら西洋の發達した遣り口に近いと云はざるを得ない。尙ほ案内記より少しく規模の大なるものに就て云へば、各地に名所圖會と云ふものがある。是は趣味の方面から見ると如何にも能く工夫されたも



のである。これに挿んである繪畫は名人の筆に成り、能く風景を盡したもので、今日の寫眞などの遠く及ばぬ所がある。尙ほ夫に附け加へて名所舊蹟の沿革來歴を叙し、それに關聯ある詩や歌や文章までも加へて居るが、案内記は斯くありたきもので、今日の粗雜なる案内記の及ぶ所でない。兎角今後の案内記は精細に且つ趣味的に作らねばならぬ。勿論今日作る案内記は時代相應の工夫を要する。理學の進歩せる今日に於ては、理科的解説を必要に應じて附するが如きは尤も緊要である。例へば岩に就ては火山質であるとか否とか、地質其他一切の學問を應用して、學術上に知られて居る事柄は簡單ながら説明を加へると云ふが如き進歩がなければ、眞の案内記とは云はれぬ。

## 旅館不快のかずく

旅館は今到る處可なりに整頓して、一等旅館とも云ふべきものは申分のないやうに進んで來たが、二流以下になると、まだ苦情を云はねばならぬことが多々ある。曾つて旅中無聊に堪へず、手帖に苦情の數々を駢べて見たことがある。今左に之れを録す。

- 權貴の定宿なりとて鼻に掛くる
- 隣室に病人の居る
- 隣室の喧騒なる、殊に物争などの起る
- よからぬ宿に逗留する
- 寢後宿帳をつけに來る
- 物賣の矢鱈に來る
- 床の花瓶に時經たる花の挿しある
- 手を鳴らして速かに婢の來らざる
- 便所湯殿の清からざる
- 時刻早きに出發を促す
- 宿屋の料理屋を兼業せる
- 主人、用もなきに來て長咄をする
- 夜具布團の不潔なる、敷布の濕氣ある
- 權貴の客人到着せりとして俄に部屋換を喰ふ
- 夜更けて隣室に客の來る
- 己が室の前を他客の往來する
- 寢後晚く雨戸を鎖して夢を驚かす
- 立ち際に勘定の遅き
- 時節外れの物を置いて裝飾に充つる
- 朝早く起きて盥嗽の用意調ひ居らざる
- 婢を呼ぶ毎に別人の來る
- 上草履手拭などの不潔なる
- 投宿後荷物の直ちに届かざる
- 絃歌の喧しく聞ゆる
- 主人、心にもなきお世辭を振りまく
- 庭園の掃除行届かず塵芥の散亂する



- 手洗鉢の水をかへざる
- 深更按摩などの用を聞きに来る
- 戸締不完全にして安心ならざる
- 風呂の案内の遅き
- 發程に臨み履物傘など人に取りかへられたる
- 居室近く下婢の屯所ありてさゝめき騒ぐ聲の聞ゆる
- 前程を問ふも主人の不案内なる
- 茶代不受を標榜する宿屋の不深切にして宿料の不廉なる
- 隣室に酒客の騒ぎ小兒の泣く
- 多く室の空き居るに窮屈なる室を當てがはれたる
- 深夜室外に夜番の柝を打つて夢を驚かす
- 朝、室の掃除もせずに膳部を出す
- 長逗留に食物の千篇一律なる
- 急ぐ場合に宿屋の氣を揉まざる
- 茶代の厚薄により待遇を異にする
- 隣室に酒客の騒ぎ小兒の泣く
- 宿屋の主人無遠慮に詩歌書畫を需むる
- 床の間に地方官吏田舎大盡の揮毫を嚴めしく掲げたる
- 宿屋の主人の政治を談ずる
- 給仕をしながら下婢の坐睡をする
- 夜遅く着きて善き酒の得られざる
- 馳走顔に拙き西洋料理を出す
- 着の時間を報じあるに宿屋に待設けのなき
- 旅に病んで宿屋の不深切なる
- 室の空く迄とて假りにむさぐるしき部屋に押込められたる
- 婦人客小兒客に對する設備の行届き居らざる
- 常得意客の跋扈して傍若無人なる
- 夜更けて警吏の視巡りに來る
- 外出中己れの室が他客の用に供しある
- 土地の名所なりとて社寺の參詣を強ひらる、

## 九 堀出し物

隠れたるを顯はし、埋れたるを出し、無理解の手より理解ある手に移り、閑却されたものが珍重され、包まれた或る光りが發輝される、これが堀出しであらう。堀出しの適例と云へば、



支那の甘肅省の燉煌石室から出た、書畫佛像其他の器具などであらう。これこそ事實の掘出しで、地底から出したのである。但し地底から掘出したからと云うて、必らず掘出し物に合格するとは限らぬ。

掘出し物の第一の條件は、その物に賞玩さるべき資質があらねばならぬ。燉煌は昔晋の都のあつた跡で、その邊の土砂から掘出されるものは、書畫によらず器物によらず、六朝から唐代までのもので、頗る珍重すべき資質を具してゐる。降雨の無い乾燥の地だから、埋藏物は少しも朽ちて居らぬ。事實の掘出し逸品は先づこゝらであらう。

併し趣味界に通例掘出し物と云ふのは、必らずしも人間の手に無いもの、みを云ふのではない、人手にあるものを鑑識で發見することを云ふのである、即ち比喩的に掘出しと云ふに過ぎぬ。更に委しく云へば、委棄されたり閑却されたりしてゐるものを、鑑識で逸品と見定めて之れを取上げる、それを俗に掘出し物と云うてゐる。而して掘出しと云ふの一條件として、實價より價が安くあらねばならぬ、例へば實價百圓もするものが、十圓で手に入つたと云ふので掘出しの名がつく。趣味の本體から云ふと、價が何うであらうと、逸品だに發見すれば、それ

を喜ぶべきであつて、さうしてその喜びを表するため至當の價を拂ふべきであるが、雅三俗七の世の中に於いて、こんな君子風のこととは事實行はれ兼ねる、寧ろ高かるべきものを安く求めたと云ふ所に興味を持ち、之れを誇りとして物の趣味を説くことはあとへ廻はし、先づ價の廉を吹聴するのが通例である。趣味の問題も斯うなると陋しくいぢ下司ひすばつてくるけれども、實價に遠い低價が掘出しの條件である以上は、これも已むを得まい。持主が盲目で名器を名器と知らずにゐる、それを名器と知るものが手に入れるのは、實は其器の仕合せと云ふべきだ。鑑識のない持主が、名器を二束三文に手放したからと云うて、それは自業自得で氣の毒とも云へぬ。實を云へば物を活かすも殺すも人にあるのだ。物に賞玩力のない人はどんな寶器を藏しても、瓦礫を擁すると同様である。されば掘出すと掘出されるとは、其人の鑑識力の多寡優劣に依ると云はざるを得ぬ。この鑑識力にも幾段の階級がある。相當の鑑識のある人でも、或る物に對して辨別の出来ない場合もある、無落款の書畫や或る専門の知識を要するものなどがそれであつて、何にでも鑑識のある人は減多に無い。本來掘出しを手柄とするのはその鑑識を誇るのであつて、その價の廉であるのを、彼等は其の鑑識に拂はるべき當然の報酬と考へてゐる



のだ、如何さま多少の道理がある。併し世間には掘出しに汲々たるものがあつて、その人は必らずしも鑑識に長じてゐない、彼等は唯だ射倖心に驅られて、萬一の僥倖を期するのである、その心事を剖析すると陋劣味が潜在してゐて面白くない。全體世の中には上には上があつて、掘出さうとして贗物をつかまされたり、掘出す爲めに物を交換に出し、却つて人に掘出されたりする例がいくらもある、皆射倖慾に熱するから起る失敗である。兎もすると無心得たものが、鑑賞家の品鑑より掘出しとされる例もある。これは他力の掘出しであつて、斯様のものに對し其持主が誇る権利が有るか無いかは疑問であるが、これも一種の掘出しものに相違ない。

若し夫れ掘出さんが爲めに種々の手段を用ゐる、或は騙し或は欺き、正しからざる方便を以つて或は誘ひ或は惑はすに至つては、沙汰の限りである。かくの如きは趣味界の賊と謂はざるを得ぬ。しかるに掘出しの歴史には往々詐謀權略が伴ひ、けしからんことには、動もすると、そのよからぬ權略を公然人に語つて手段の巧を衒ふものがある。商人に在つては深く咎むべきでもないが、相當の地位ある人に往々この事あるは、陋と云はざるを得ない。

掘出しもの、來歴は多くの場合趣味があり、物それ自身にも趣味を添へるものであるが、ウブ、純白、誰れに語つても恥かしからぬ掘出し物は多くあるものでない。神聖な書齋に置く書畫なり、骨董なり、それが掘出しであれば興味のあることで、吾等はそれを歓迎するけれども、願くはそれが清淨潔白なものでありたい。

## 一〇 骨董のかげ口

質屋の庫の中で、多くの器物がうち寄り、互ひに身の上を述懐するといふ趣向は、古くからあるが、器物自身をして己れの事を云はしめるほど確かなことはあるまい。人間の鑑定は、實を云へば餘り當にならぬ。器物は鑑定家の嘘八百を常に冷笑してゐる。無鑑識の富豪が巨費を投じて贗品を購ふのを氣の毒がつてゐる。彼等をして遠慮なくそれを言はしめるも一興ではあるまいか。私は曾つて彼等の壁訴訟を書いて見たことがある。左に録するのは則ち其一斑で、書畫の事には及んでゐないが、書畫の苦情も似たものであるから、骨董のかげ口を以つて類推し得ると思ふ。



我等は骨董である。我等は今我等の持主に内證で、我等の仲間の太平樂を並べて見る。

我等は強ち持主の好き嫌ひをする譯ではないが、凡そ我等の一番閉口するのは俗物の手に渡つた時である。俗物は元來我等を知るの明がないから、やゝもすると、稀代の名工の作の、幾百年を経て漸くついた時代のさびを、是は汚いなど、いうて無闇に磨り落す事がある。此等は恰も我等の皮膚を擦り剥くと同様に、慘酷とも何とも言ひやうがない。

よし又それ程の亂暴は働かないまでも、我等仲間をそれ／＼適處に配置してくれないため、その特色を十分に發揮し得ないことがある。例へば明代の盆みんたいに今時のものを載せたり、しぶ味が特色の器物の傍に金蒔繪のびか／＼物を取合されたりしては、我等も戸惑ひせざるを得ない。我等は金殿玉樓に入つて、こんな工合に時代違ひのものと伍したり、不調和なもの、取合せに出遇ふ位なら、寧ろ貧乏人の手に落ちて、よく其所を得て我等の特色を十分發揮させてくれる方が望ましい。然るに世の所謂成金者などになると、根が無趣味であるから、置所や取扱方などは實に頓珍漢で、それで持主は得々として居るのだから、我等の迷惑もさる事ながら、その滑稽さ加減には苦笑を禁じ得ない。

少しは骨董に眼が開いた方で、箱や袋を氣にしてくれるのは有難いが、時代の調和といふことを一向無視してゐるので、或は袋が古びたといつては新しいのに改めたり、或はつまらぬ人に箱書をされたりするにも困る。中には無頓着な持主になると、年が年中床や棚へ飾つて置かれるだけならまだしもだが、時々鑑賞に引き出されて、いざ片附けるといふ段には、いろいろなものゝ雑居させられて、各自の體がぶつかり合ふ爲め、自然負傷するやうな事も度々ある。それを何とも思つてくれないのは實に情けない。

ナマ好事家などが、いろいろと工夫して却つて折角の本體を壞るやぶにも困る。本來料紙文庫に出來て居るものを、形が小さいからといつて中なか春を作つて硯箱えんばこにしたり、折角の名匠苦心の作を意匠が足らぬと言つて、あとから金銀の裝飾を加へたり、又我等仲間の皮膚にあられもない花押を漆書したり、さては獲やすからざる印材の鈕にメチャ／＼落款を入れたりなどは、皆な打ち毀して、骨董を愛する者といふことは出來ない。全體茶の宗匠などは兎角茶器に花押を入れたがる。持主はそれを得て價を増すかのやうに思つてゐるが、實の所それだけが疵になるのを御承知ないらしい。



それから鑑定家が極めを付ける折などにも、屢々我等を失笑させる事がある、まして半可通のもの知り顔にも困る。共箱の大切なことを漸く知つてから、支那製の堆朱の香合などに柘桐の箱がついてゐるのを見て、これは共箱であると喜んだり、南蠻の銅器を購ひ得て、共箱の無いのが遺憾だなど、は寧ろ噴飯の至りで、共箱が聞いて呆れる。

時代蒔繪などの珍器の内方が少し汚れてゐるからといつて、金などに塗りかへるのは、若干の費用を掛けて價を高くせんとの野心であらう。こんな骨董屋は幼稚なもので、素よりいふに足らぬが、偶々通客が店頭へやつて来て、これはよい時代だ、惜しい事には中を塗り直してある、これが大疵だ、若しこれがもとの儘であつたら随分奮發すべきに、と評される時の我等仲間の嬉しさは、實に想像の外である。骨董屋の主人が茫然として、塗り換へた費用の二倍三倍位を損して、ヤットの事に手を摺りながら買上を求めるときの面は、ふた眼と見られたものではないが、我等仲間の心地のよい事は又格別である。

眞實のおためしに遇ふのは我慢も出来るが、時々ひどい目に逢ふ事がある。例へば交趾かうちの薬を小刀でボリ／＼削つて見たり、堆朱の一角を崩して見るやうなことが毎々ある、悲惨なこと

ではあるまいか。往々贋作が眞物と受取られて相當の待遇を受けるのも心苦しく感ずるが、それは我等仲間の責任でない。持主が贋作である事を知りながら、しかもこれはよく出来て居ると言つて珍重し、人に向つても此の意味で示す譯ならば我等も愉快に感ずるが、もしさもなくして、持主は全く眞物と思ひ込んでゐるのに、鑑識家が贋品と評して、これは箱の方が却つて價があるなどと皮肉に罵倒される時などは、持主よりも先づ我等仲間が却つて赤面する。さていよいよそれが贋品ときまると、忽ちその待遇が一變し、哀れにも袋や箱までも取除かれ、無雜作に扱はれるに至つては、人情の輕薄實に忍ぶ可からざる感がする。

人間は伶俐らしい顔はしてゐるが、案外に物がわからない。その證據には、よく我等の年齢と産地を取り違へる。まだうら若いものを捕へて、これは五百年の時代があるとか、日本産と心付かずに、支那だ、高麗かうらいだと言つてゐるのは毎度の事で、骨董屋で賣買の場合に於ける争も皆それである。妙な事には骨董屋は飽く迄我等を老齡にすれども、顧客はこれに反して成るべく青年にしようとする。産地についても同様で、日本固有のものは兎も角も、すこしく疑はしものになると、賣る方では斷じて支那だといふのに、顧客は之れを和製だといふ、實に奇觀



である。それで買方でも内心骨董屋と同説の事もあるに違ひないが、價を踏付けるためにこんな懸引をやるのであると思ふと、人間の根性の野卑なところが露はれて、我等も内々舌を吐かざるを得ない。

我等の祖先の過去帳をよく調べないで、無闇に古い物をよがる連中にも困る。兎もすると延喜の年號のある經筒きやうつづや天平年間の經瓦などを捜す人がある。我等先祖の成立しない頃のものを得ようといふのは、無理ではあるまいか。

骨董屋に訪づれる客のうちには、氣障な奴も随分あるが、たまには我等の氣に喰つた客も来る。どんなのが我等の氣に喰ふかといふと、概して眼識のある客である。此種の客は會心の品を見ると、何とも言はずに價を拂つて忽ち我等を拉し歸る。そんな客は確かに内心満足を表して居るのである。兎もすると歡喜の餘り、これは廉に過ぎる、少しばかりだが價の外に口錢を遣るといつて、若干の金を投り出して行く客もある。我等も斯様な客に持ち歸られると、その寵遇が非常であるから實に心持がよい。又價が格別に廉であるといふので、差向きその物を欲しく思はないでも、これは勿體ない、入用はないが買つて置くというて持ち歸る人もある。是

等は眞に我等仲間の眞價を認めてくれる客で、大に歡迎する所である。

我等が厭に思ふことがさまざまある中で、鑑定家などいふものが、よくも分りもしないで、負惜みによい加減のことをいふことがある、我等が内々苦笑するのも此時だ。鑑定家の内には狡猾なものがあつて、贋物でないものをコキけなして、さて後ちに手を廻はして、やすく買ひ求めてホク／＼してゐるものがある、面おもてにくいテアヒだ。我等が危險に思ふのは、泥棒に浚はる、時である。兎もすると捕吏に追はれて我等を隠すに由なく、濠へ投込んだり、土中に埋めたりして、それきり世に出られない事もある、又兎もすると破壊されたりすることもある。併し豫審庭へ證據品として出されて、被告の白狀を聞くだけは多少の興がある。

兎もすると贋作ばかり澤山に藏に入れて喜んでゐる人がある。その人の庫にある間は無事だが、一旦世に出ると直ちに贋物と看破されて唾棄される、其時は宛がら死刑の宣告でも受けるやうな氣がする。之れに反して鑑識家の手にある我等の仲間は仕合せだ。贋物は一點もなく、皆な正しい血統を引いてゐるものばかりで、こんな藏者に限り、産地により時代により類を分つて整然と保存するから、宛がら親屬と一堂に會する心地がして眞に愉快を覺える。



昔しの賣立には流石に義理深い美談があつた。大阪の豪商天王寺屋五兵衛が賣立をした時、加島屋が幾千の金を投じて名器を落札し、親戚知友を會して茶會を催し、名器を得た喜びを頌つた。さて茶會が濟むと、其器を天王寺屋へ慰斗をつけて返上に及んだ。加島屋はもと天王寺屋のお蔭で大きくなつたのだから其恩を忘れず、斯くしたのだといふが、當節はそんな義理堅い人は見受けないヨ。

今の茶器を澤山に有つてゐる人々は、茶會の時に往々ボロを出して識者の笑を博する。我等は其都度主人のお蔭で赤面するヨ。どうも多く名器を藏してゐると、一つの病は兎角それを出して人に見せたくない、そこで無理が起る。出し過ぎるために物の調和を失つたり、銜氣がほのめいたりして、折角の茶會をメチャクにする。そこへ行くと、大家の茶會には少しも無理がない。幾戸前茶器を藏める庫があつても、不要の物や調和を害するやうなものは一つも出さないから、指のさし處がない。

無闇に他人の愛藏品を欲しがる人にも困るネ。某侯の如きは、好んで人の名器を見て無心を言ふ癖があつた。そこで侯から拜見をと望まると、戰慄して匆皇大切なものは深く匿し、よいか減なものをシブく出して見せたものだ。隠された我等は主人の温情に泣かざるを得なかつた。

某大家の賣立會だ、入札會だというて騒ぎ立つのを冷靜に見てゐるのも一興だネ。仙臺侯の賣立だといふと、御家騒動や仙臺萩の劇を聯想して、妙な連中が場に入込んで来る。政岡の飯を炊いた釜はないかの、千松のお膳が無いかのと捜し廻はつて、飛んでもないものに強ひて因みをつけて、争うて入札するなどは噴飯に値する。大名の持ちものでさへあれば何でもよいものと心得て、どこにでもやすく買へるものを高々と買ふのをかしい。大名のもので、如何はしい贗物がない譯ではない。それを藏者を過信して一向に疑はないなどは、人間といふ奴も案外甘いものである。大名によつて藏せらるゝ我等は、自然貫目がつくので、同じものでも價が高くなり、珍重もさるゝから、我等は仕合せであるが、さて其手を離れることになると、幸か不幸かを一考せねばならぬ。近く十数年の間に諸大名が藏拂ひをしたことは著名な事實だが、戰國時代から久しく暗にゐる我等の先輩や仲間、これにより初めて天日を拜した。其舉句、持主が變つて各所へ散じた。其持主が變つて却つて仕合せを増した者もあるが、中には頗



る危険の手に渡つた者もある。所謂大成金の如きは如何にも大膽に多くの價を拂ふものであるが、榮枯盛衰の最も劇しいのは此の族で、いつ何時沈淪するかも知れず、随つて我等の仲間の運命もどうなることか、考へて見れば心細い極みである。

骨董商といふものも随分慾張りであるが、しかし人間といふ奴は與し易いものである。入札會には例として札元が同業に酒食の饗應をする。サア一杯飲むと、忽ち冷靜を破つて氣が荒くなり、競争が起つて、酒前よりも價を倍加するを辭せぬ。我等の價は、實は酒のお蔭であるのである。骨董屋は實は小膽もので、酒力を藉り勢ひをつけるが、さて僅か一萬圓の札を書く時には手がブル／＼振へるヨ。

昔から骨董を翫賞すると終には産を破ると戒めて居るが、これは我等を侮辱するの甚しいものである。凡そ何事でも程度を超えて耽れば必ず産を破るに至る、必ずしも我等骨董のみではない。畢竟是れ一を知つて他を知らぬ俗物の妄言である。骨董は其實或る場合に於ては隨分産を作ることさへある。嘗ては之れを二束三文に買つて散々樂んだ擧句に、次第に時代も古くなり、品も稀れになり、そして自分の飽きた頃になつて百倍二百倍の價を持つやうなものはい

くもある。かうなると、株券などを有つて居るよりは遙かに利益になる。株券などは一向趣味上の快樂はないが、骨董は其の人に無限の快樂を與へ、其の上價を追々増してゆくこともあるから、之れをしも一概に産を破ると云うて排斥するは、無趣味な頑固者流の僻見と言はねばならぬ。併し相當の鑑識も無いせに濫りに骨董に巨額の金を投ずるは全くよろしくない。要するに骨董が破産の基をなすのは、無鑑識で金を投ずるからなのだ。

それについても我等の毎度お氣の毒に思ふのは、田舎の金持の物數密である。彼等は眞によい物を見る機會が乏しいから、兎もすると仕込物などを減法界の高價で買ひ込んで、これは漢器だ、これは天平器だなど、いうて誇り、財産目録には何千圓何萬圓と記して置く。そしてこれを秘藏して人にも示さず、自ら樂んで居るだけならまだよいが、さうなると自然人にも示して誇つて見たくなり、一步進んでは東京へ持ち出して、他人の所藏と比較がして見たい、或は一層高い價に賣つて見たいと云ふやうな心が起る。茲に到つて初めて化けの皮が剥け、何千圓何萬圓といふ財産が一夜の内に大暴落して、僅か百圓にも足らぬといふ事がある。イヤハヤ笑止千萬の事で……。



田舎に限らず都下に於ても、時によると例の鑑定家や道具屋が氣脈を通じて、權勢もあり金もあり多少の鑑識もある高貴の人々へ、随分如何はしい品を非常の高價で賣りつけることがある。買つた方では固より眞物と信じてゐる、そして偶々之れを見せられる人も先方の氣を兼ねて、わるいと思つても直言を憚り、よい加減に褒めて置くからたまらない。其の持主は大得意で、生涯贗物を擁して終に覺るの機會がない。然るに一旦其の人が没落して、其の品が賣りにでも出たとなると、鑑定家や骨董家は、見ぬうちから、ウムあの人のか、あれならお話にならぬなど、舌を吐いて冷笑する位のこととは彼等仲間の往々やる所で、實に油斷も隙もならぬ話である。

女色を愛する人が、女の素姓や、爲人や、氣立や、才徳などは一向構はずに、たゞ／＼容色のみを標準として品定めするのを、世には「面喰ひ」といつて之れを卑下するが、骨董屋にも客人中にも、かういふ「面喰ひ」先生が随分少くない。一體汚いものよりは奇麗なものを誰れしも好くのは普通であるが、趣味は必ずしも美麗なものに限らない。わびたもの、さびのあるもの、しぶいものなどは概して奇麗とは言はれぬが、その中になかく、捨て難い趣味

がある。這般の趣味は、通人にして初めてよく解する所で、所謂「面喰ひ」者流の到底窺ひ知り得べき所でない。

何といつても我等の趣味は至つて地味な方であるから、世間一般が十分に解してくれないのも無理はないが、近來我等の持主の宅へ尋ねて來る客の九分九厘まで、我等仲間が書齋や座敷の床などに立派に飾られてあるのを見ても一向冷淡で、中には我等に一瞥をすら與へない人がある。こんな客計りに來られては、主人の失望もさる事ながら、我等も盲學校の置物となつてゐると同様で、實に馬鹿々々しい氣持がする。我等の眼から見ると、こんな連中は誠に可哀相なものだ。例へば花の山に入つて花を賞つることを知らぬ人達と言はねばならぬ。

畢竟するに、我等仲間の恩人は茶人若しくは其の流れを汲む好事家である。人情として誰れしも物の破損を忌み、美なるを好むのが常であるのに、茶人は雅趣さへあれば、多少の破損は厭はぬ。きらびやかなものは寧ろ之れを避けてさびのあるものをば珍重する。土中に埋れてゐた磁器などの掘出され、幾百年の間墳墓の枯骨に殉して、殆んど世に出る機會がなささうな運命を擔つてゐた品が、再び世に出るのも皆茶人達のお蔭である。茶人のためには、その昔臺所



にころくして亂雑に取扱はれたつまらぬ器物も、年を経て其の類が絶えてなくなると、やがて貴重品に列せられる。極端な例を言ふと、始め不淨のものを入れた器が、誤つて食器などに採用されるといふ滑稽もある。近年焼芋屋は、甘藷先生を恩人として其の碑を建てたが、骨董屋なども、其の顰に倣うて宜しく茶人のために碑を建ててゐるがよからうと思ふ。

意  
外  
録



### はしがき

前年、人に頼まれて意外に思ふことを百則書き「意外録」と名づけたことがある。一時の戯筆で、今見れば程氣が満ち、餘程取捨しないと物にならないから、可なり書き換へて見たが、どうもおもしろくゆかぬ。元來、意外などいふことは、極端にいふと神秘的のことの外に無い筈で、どんな事でも少しく考へると、相當の解釋もあり理由もあつて、意外が意外にはならない。萬有の内に不可解の事も、多くは理學の研究で解を得て來ると、不思議でも奇蹟でもないことになる。意外は蒙昧無智の者の感ずること、意外に感ずることが多ければ多いほど、其人の蒙昧無智を甚しく告白するのだとも云へよう。私の所謂意外といふのも、實は無智の告白に近いものかも知れんが、初度の直覺で案外に感ずることは、誰れにも無いわけではない。それが人の興味をそゝるものであることも、人の許す所である。但だ常經を外れたことが案外の思を爲すものであるから、人の行爲などに涉つては、たとひ興味があつても遠慮せねばならぬことが少なくない。私が初稿を多く塗抹したのも此故である。餘りに斟酌に過ぎては現存の



人のことなどは何も書けぬことになるが、もとゞゝ讒誣の悪意などのあつての事でないから、さうまで遠慮は無用と、いくらか塗抹を見合はしたものもある。勿論、案外を感じる事物の範圍は極めて廣い。或は人の行藏として現はれ、時によりて社會の活ける事實として顯はれ、或は既に埋もれ果てた歴史的事實として、又は眼前の人、乃至事物の隠れた半面として現はれ、更に或は蒼閭一片の月、そこに未顯の李杜の輩の巢うてゐたことを紹介することも絶無と限らぬ。要は意外なる其處に趣味があるのだ。但だ私の意外とするものを、人が意外とせぬものもあらう。數多き私の話の内に強ひて意外とコジツケたやうなものも或はあるかも知れんが、それは淺學寡聞の致す所と一笑に附されたい。

## 一 無ささうだが

刀圭界の巨擘であつた故青山胤通博士が、國學者で名高い平田篤胤の流を引く平田鐵胤の養子になつたことがある。胤通の「胤」の字は蓋し其の名残りであらうが、此の事實を知らない人は、後藤新平子が、嘗つて醫者であつたことを聞いて意外とすると、同じ様に意外とするもの

のもあらう。元老として唯だ一人存してゐる西園寺公望公が風流の人であることは誰れも知つてゐるが、あの人が琵琶を弾するの名人で、明治天皇の御在世中、時に召されて琵琶を弾じたと聞かば、人或は意外に感ずるであらう。併し又西園寺家がもとゞゝ琵琶の家筋であると知らば、意外とすべきでも無からう。懸河の雄辯の持主であつた島田三郎氏が、生れて三歳位までは啞の如くで言語を發し得なかつたとは、氏の親友田口卯吉氏の談であるが、意外と云へば意外だが、大いに鳴かんとするものは先づ黙すると思へば意外とするにも足らぬか。大江丸と云へば名高い俳人であるが、其の三代大江丸が掏賊の親方であると云へば、意外の感に打たる、であらう。更らに此人に金石癖があつて、長く名家の墓碣の探究に没頭し、十二冊の著書があると云うたら、益々意外に感ずるであらう。そして意外にも此人は逮捕に就かずに病歿した。此人の事は余が「春城隨筆」にも收めて置いたから参考されたい。こゝに又意外といふことに合格しさうな事實がある。乃木將軍の父、十郎翁が曾つて病んで、醫師の診察を受けた時、醫師は、此病には房事が尤も害になるから戒めよと注意した。翁は唯々として去つたが、其後二年も經て醫師を訪うて云ふには、先年御注意により房事を廢して今日に至つたが、尙ほ今後



も廢して居らねばなるまいか。實はモウこれ以上禁じて居ることは迷惑に思ふと云うたので、醫師は大に驚き、實は當分の積りで申上げたのであつたが、二年間も固く守られたのは御氣の毒であつた。併し出来難いことを能くも長い間守られたと、心から感服して詫びをいうたのであるが、此父にして彼れが如き將軍を生んだのは意外ではない。

二 解剖社から兵法の大家 藤公看護婦に招かる

大阪に緒方洪庵を中心として解剖社といふを設けた事がある。その創立は天保十三年で、それから二十年間、毎年一二次、町奉行所より刑屍を申受けて解剖を行つた。緒方の書生は皆解剖に熱心であつたが、中に尤も此事に熟練の門人があつた。それは村田藏六というたが、意外にも此人は後に大村益次郎と改名し、明治維新の際には兵部大輔ひやうぶたいふの要職に在り、兵法の大家として崇められた。その銅像は、現に九段の靖國神社の境内に建つてゐる。

伊藤春畝公に愛された亡友長田秋濤が、公に就て意外の事を語つたことがある。公は病中看護婦に戯れた悪縁から、看護婦の自宅へ招かれ、それを拒むことが出来なかつた、と云ふが

椿事のアラ筋である。秋濤のいふには、ある時、伊藤さんが僕を連れて花屋敷の常盤で飲んで居ると、或る女が面會に來た。それが誰かと思ふと例の看護婦である。伊藤さんの云はれるには、これから席を改めて飲むことにしようと云はる、から、どこへ行かる、のかと聞いて見ると、看護婦の家へ行くのだと云はる、ので驚いたが、往つて見ると、九尺二間の、狭くらしい小路にある家で、ドウ云ふことから知れたか、伊藤さんが見えると云ふので、此九尺二間の家の前に見物人が群集してゐた。それを構ひつけないで平氣で伊藤さんが酒を飲んで居る様子は、ドウしても東洋的豪傑であつた……

三 キ印にされた勝伯 異境に持てた省亭

勝伯と云へばなか／＼の通人であつた。その人が餘り通を利かして却つて失敗したことがある、そしてそこに意外がある。伯自身の談に、今の吉原は誰れでも金さへ持つて行けば何んな花魁でも買へるが、昔は先づ茶屋へ行つて相談し、茶屋から花魁へ願はなければならぬ。謂はば花魁に買はれる様なもので、時によりては願意相叶はぬ事もある。そこで我輩も若い時、全



體花魁に振られるなどと云ふ事は、男子としての耻辱だ、乃公は一番惚れさせてやらう。それには狭い肌が必要だと思つて仕事師の扮装で出掛け、三つ布團の上に大胡座をかき、胸を寛ろぎ、腕組をして花魁今や來ると待ち構へてゐた。すると障子を細目にあけて見て、又締めて去つたが、扱て朝になつても來ない。肝積でたまらず、茶屋を呼んで談判をして、茶屋から花魁に問うて見ると、アレはキ印だから駄目だとの挨拶で、我輩折角の意匠もメチャクになつたとある。

勝伯とは反對に艶福を得たのは畫家の渡邊省亭である。此人生粹の江戸ッ兒で、西洋趣味などの無い人だが、往年西洋に遊んだことがある。其時洋服の代りに法被を着て出かけたと云ふも奇である。言語は無論分らず、其上異様な風をした肥大の男が西洋美人に惚れられたと聞いてはチト意外である。何れ悪所に出入した出來事であらうが、一夜房中に居ると戸外に誰か窺ふ者がある、女は之を叱すること再三に及んだが、尙ほ立去らぬ處から、女は遂に短銃を取つて之に擬したので漸く去つた。此の戸外の者は前の情夫であることが分つたが、それに短銃を擬する迄に、此法被先生、金髮美人の心を抑へた手際はエライものだ。

#### 四 裸體應接の二幅對

茲に又意外な應接とも云ふべき一話がある。曾つて法官中に富永冬樹といふ人があつた。此人は大の拗ねもので、いろいろ奇行が多かつた。處が此奇行家が先を越されて一驚した話がある。或時富永は勅任判事巖谷龍一を訪問した。玄關番の案内につれて行くと、色々の部屋を通り、廊下傳へに臺所の方へ導かれた。妙な處を引張り廻すものだと思つて居ると、やがてこちらへと云ふから這入つて見ると、此處は浴室である。時に主人の巖谷は今し入浴中で、マア此方へゐらつしやいと云ふので、富永もイヤナリ衣類を脱して飛び込み、一浴して赤裸の主客初めて一禮し、引續き主人は手を拍つて、裸體のまま、茶を進めたのには、流石の富永も辟易した。

裸體の意外が今一つある。私が石渡敏一氏と共に統計學者の杉亨二翁を神田の邸に訪うたことがある。座敷に待たされて三十分程経つても主人が出て來ないので、待ちくたびれてゐると、縁側に足音が聞こえて、突如私等のゐる處へ這入つて來たのが主人で、それが全裸體で、



陽器がブラ／＼してゐるのに一驚を喫した。翁は極度の近視眼で、私等の座敷にあることを知らず、入浴を済まして出で来り、そこを通り抜けて奥へ行かうとしたのであつた。

### 五 君子の好述 お鼻さん

茲に又石黒子爵から聞いた意外な話がある。中澤雪城と云へば巻菱湖の門人で、書道に於て一時名聲が高かつた。石黒子爵も曾ては其の門に入られた事がある。子の云はる、には、自分は悪筆だが、師匠は天下の名人である。自分が雪城先生の食客とならうとする時、先生が書物は若先生に習ふがよいと謂はれた。其若先生と云ふのは川田養江博士の事だと聞いて、先づ意外に感じた。但し川田は養子になつて間もなく離縁したから、自分の外に養子になつた事實を知つてゐるものは少ないと云はれた。夫から雪城の細君に就て左の如く語られた。雪城先生の細君は中國筋の或驛の妓であるが、此女は賤業者には珍らしく好く婦徳を守つた。先生が此女を娶つたには一笑話がある。元來先生の或部分には人並外れた大物があつて、折に觸れては無遠慮に出して我々に示して戯れたこともあつたが、斯様な譯から如何にしても匹敵すべき配偶

に乏しく、是には先生もホト／＼當惑し、長崎へ至る迄の驛々に妓に會して物色し、合格したのが僅かに三人に過ぎなかつた。即ち後に正室となつたのが此三人中の一人であつたと。これも意外の内に加へてもよからう。

話は變るが、一つの官能が或る物に専らになると非常に其部分が發達する。私が往年北海道に旅行した時、札幌麥酒會社で眼前に見聞した實例がある。麥酒製造工場では、空罎を買ひ集めて掃除して用ゐるが、之れを掃除するに當つて第一に必要なは、石油と酢の罎を先きに分けた上でなくては洗ひない。そこで多數の工女に一本々々づ、嗅ぎ分けさせるのだが、一日怠慢なく嗅いでも普通二三百本しか出来ぬ。然るに此に一人特別の者がゐた。之れは三十歳位のお花と呼ばれる、女であつたが、此女に限つて、廣い場所に何百本を集めて置き、立どころに嗅ぎ分けて、アレコレと指摘する。そして百發百中誤つた事がないと云ふ。そこで「お鼻」と譯名あなされて調法がられてゐた。

### 六 ナブキンの上に贈與の勳章 中島信行の議場整理法 物々しい重器扱ひ



爰に又意外な勳章の贈り方がある。勳章の贈與は何れの國でも嚴かな形式に據るものであるが、長田秋濤が伊藤公に隨從して歐洲漫遊中、西班牙の宮廷に招かれて一夕の宴を賜つた時、一同食卓につくと、意外に感じたのは、銘々のナブキンの上に金色燦爛たる勳章が置かれてあつたことで、國王の姉妹に當らるゝ内親王達は、花をも欺く麗質に眩きまでの盛装を凝らし、氣輕に外賓の間に斡旋して、お手づからナブキンの上の勳章を取り、銘々の胸間に挿まれたのは眞に愉快を覺えた。此の贈與の法は如何にも氣が利いてゐて趣味深く感じたこと聞いたことがある。勿論、勳記は式の如く授與することになつてゐるさうだ。

衆議院で議長をつとめた人の内で意外な態度を持した人は、中島信行氏であつたとは林田雲梯氏からいつぞや聞いたことである。あの頃の書記官長は曾根荒助子であつたが、議場が混雜を生じて來たり、議論が沸騰して來ると、議長中島は瞑目して天を仰いで黙つて仕舞ふ。書記官長が氣を揉んで腕でコツ／＼注意しても、宛かも知らざるもの、如く、ます／＼落付拂つて顧みない。それで一日中島に、曾根から此事を言ひ出すと、中島の言ふには、盤根錯節に當つて自分の力で治め難いときは天帝に請うて治めるより外仕方がないと、即ち中島の瞑目して居

る時はいつも天帝に訴へて居る時であると云ふ事が、その時始めて分つたが、此議長には書記官長も大いに困つたらしい。

幕末に前島男爵は英學の教師として薩摩藩に迎へられたが、其頃一藩の師範といふと、鄭重に待遇されたもので、ある時藩の重器を特別に見せるから、出頭せよとあるので、男も禮服をつけて出ると、藩の重役から嚴めしく、貴殿は外國の語學の師範であるから、特別に外國より寄せられた大切のものを御覽に入れると挨拶があり、一二の侍が恭しく持出す物を見ると、塗り箱に入れたもので、其の箱を開くと、また桐箱があつて、それをひらくと、錦欄の裂れに包まれたものが出ると云ふ工合に餘程の重器であるらしく、男も何であらうか、可なり重量のあるものだが、といろ／＼想像もしたが推測しかねてゐると、やがて現はれ出たのを、恭しく推し戴いて拜見すると、意外も意外、それはウェブスターの字典であつた。薩摩で外國から此の寄贈を受けた頃は珍らしいものでもあつたらうが、男などには熟知のもので、こんなものなら特に拜見するでもなかつた、と一笑したとある。



## 七 異彩ある博徒の親分

讃岐で乾兒こぶんの二千人もあつた博徒の親分に、詩書を能くするもの、あつたのも意外だ。それは日柳燕石くまなぎである。私が最初此人の名を知つたのは、明治以後の勤王家の詩集を獄中に見て、楠公を詠じた詩が面白いと感じて其氏名を知つたが、しかしその人の素姓などは知らなかつた。然るに其後此人は會つて高杉晋作が遁竄中に救つたものだを知り、且つ此人が讀書家で、高杉も三舎を避ける人物である事を高杉が友人に贈つた書状で知り、意外に思つたが、此人が勤王の爲めに維新の際力を盡し、終に其筋に知られ、戊辰北征の時總督宮の記室となり、我が郷里越後へ來り、病歿して碑も亦我が縣にあることを聞くに迫んで、益々案外に感じた。

博徒の親分に就て今一つ意外に感じたことを語らう。信州上田の博徒の親分早川當五郎と獄中に會して、私が素讀の師となつたことは「獄窓舊夢談」に記した通りだが、二十餘年も經過した或る年、大隈老侯の邸に信州の多くの有志が會した時、私は老侯に用談があつて其席に行くと、圖らずも此の人に出會した。此人は顔面に紫斑があつて、紛れ難い特徴があるので、直

ちにそれと分つて、意外の感があつたが、其席にゐた降旗元太郎氏に聞けば、自分の選挙區内の大切な道具であるといふので、其席にゐた意味を解した。其後大隈侯が吾が郷里越後に下らる、時、是非侯の護衛の爲め同伴を許されたいと懇請して侯の一行に加はり、新潟にまで來て、夜間は侯の寢所の隣室にフロツク姿で、端坐夜番をしたことがある。これなども自分の經歷中に意外の一に數ふべきである。

## 八 龍動の眞中で切腹の準備 前將軍に草履を取らす

明治十五年に外資借入の廟議があつた時、英國へ派遣された人は吉原重俊しげとしであつた。サンドといふ英人が非常に斡旋した結果、某銀行が貸付を諾するまでに交渉が纏まつたので、サンドは吉原を伴うて銀行へ往かんとすると、吉原は意外な問を發した。それは龍動ロンドンの何處かに日本疊が一枚あるまいかといふので、サンドは無いといふと、然らば布の敷物はあるかといふので、それはあるとの答を得た。吉原は更らに榊さかきといふ樹があるであらうかと問ふので、サンドは奇問の續發に不審を抱き、今大切な場合そんなものを搜して何にするのだと問ふと、吉原は爰に



初めて本音を吐き、折角容易ならぬお骨折で今日事が成るまでに運んだ所へ、本國政府より見合すべしとの電報が来たので如何にも面目が無い。私も武士の流を汲むものであるから、自刃の意を決してゐる。先刻有無をお尋ねしたものは皆割腹の際必要のもので、それを銀行へ持込み、違約の罪を謝した上で、直ちに自刃を遂げんとする積りと、固く意を決してゐる様子であるので、サンドも意外の事に驚き、這般の行違ひは國際間には間々ある事、コレ式の事で身を果すなどは君の爲めに取らぬ。全體郷に入つては郷に従はねばならぬもの、英國では國法で自殺を禁じてゐる。君は英國に在る限り其法律に背くことは出来ぬと、理を盡して諫めたので、吉原も已むなく決意を翻したといふが、日本武士には珍らしからぬことながら、明治十五年にもなつて外國に使したものに斯る武士魂が現はれたのは意外とも云ひ得よう。外人から見ても尙更ら意外の事であつたらう。併しこんな事が日本人の信義をあらはして財界でも評判がよいと、久しく英佛に財務官たりし森賢吾氏から聞くがま、こゝに收める。

私の友人で徳川慶喜公に草履を取らせた者がある。勿論慶喜公が將軍を辭されてから後の事であるが、明治五六年頃か、上野の不忍池に競馬のあつた頃、慶喜公も觀覽席に居られたが、其の棧敷の一段上の席に、當時まだ三四歳の小兒であつた、私の友人は親に伴はれて觀覽してゐた。その際誤つて穿いてゐた草履の一半を、下なる公の席へ落した所、公はみづからその草履を取つて、この小兒にはかせてやられた。この小兒といふは、早稻田大學の教授松平康國氏である。

### 九 似顔付サイン 大根の極印

畫家下村觀山氏が前年外國に遊んだ時、銀行で金を請取るに、日本で印を押す場合に流石は畫家だけ工夫があつて、印の代りに自分の似顔を描き、その下に署名した。勿論倉卒の筆で鳥羽繪の様な者ではあるが、よく肖て居るから、此の花押が到る處通りがよかつたといふ。實はこれ程確かな花押は無い。己れの肖像を畫くのであるから、其人の面貌がわかるのみでなく、其筆者が畫家であることも同時にわかる道理である。これなどは意外な花押と云ひ得るであらう。

私には聊か印癖がある所から、方々より印や印譜を贈る人がいくらかもある、ある時尾州出身



の赤堀又次郎氏が、風呂敷に何か大きなものを包んで携へ來り、君は印がお好きだから之れを差上げるといふ。偉い大きな印であるナと思つて開けて見ると、意外にも大根が現はれた。よく見ると、此の大根に黒肉で印が捺してあつた。赤堀氏の云ふには、宮重大根は舊藩の時から將軍家に献上になるので、いろ／＼やかましい規定があつて、今でも此大根には必ず極印を捺することになつて居る、即ちこゝに捺してあるのがそれだと聞いて一笑した。

## 一〇 潔癖と勘違ひ

越前の春嶽公は非常な潔癖家であつた。厠は不淨の場所だと云ふので、寒中と雖も赤裸となつて入るを例とせられた。潔癖も爰に至つては極端で、一寸眞實と受取れぬ程の話であるが、永く公の小姓を勤めた佐藤誠氏と云ふ人の直話である。又維新の當時司法卿であつた、大木喬任卿は豪放な性質で、何うかすると倨傲の譏りも受けた程で、霸氣満々たる人物であつた。斯様な性質からか、但しは潔癖の爲めか、此人には他に見るべからざる奇行があつた。紅葉館の女中の語る所に依ると、卿が酔つて便所へ行くと、必らず手を拍つて女中を呼び、之れに命じ

て陽物に水をかけさせて拭かせたと云ふ事で「何うも之れには困りました」と女中は語つた。

同じやうな意外話が今一つある。獨逸から某醫學博士が來遊の折、我醫學界の大家が花屋敷の常盤屋へ迎へて饗應をした。其際此外國人が便所へのき、事果て、出でんとすると、老婢が柄杓に水を汲んで佇立してゐた。外人には厠に上つて手を洗ふ慣習が無いから、何故水を把つて待つてゐるか分らず、思案の末、必定陽器を洗ふのであらうと、ボタンを外して老婢の前に露はすと、意外の事に老婢は笑ひ崩れたので、外人は怫然として怒り、席に戻つて其の無禮を詰るので、主人側も驚き、種々穿鑿の末、行違ひが分つたので、漸やく外人をなだめた。此事も常盤屋の婢の直話である。

## 一一 蝮蛇の液 物騒な媚薬

蝮蛇なみよといふ、ぬらくした蟲は、濕地に多く見るものであるが、これが意外の液の持主である。尤もよく知れてゐる事實は、瘴猛なる蛇が此の蟲に出遇ふと恐れ入つて、必らずすくんで仕舞ふ。其の恐るゝも道理である、此蟲が蛇の體に一旦取りつくと、どうあつても離れず、粘



液を體內から出して、ぐにやぐに蛇の體の上を匍匐しつゝ、あるく。或は時に此液を垂らしながら、若干の距離を飛んで他の部面を冒すこともある。さうすると、此の液で濕うた蛇の體は看る看る融解して、終には全く骨のみを残すに至る。これは多くの人が目撃してゐる事實で、いろいろの本にも書かれてゐる。全體此の液には如何なる化學的成分があるのか、私は平生之れを意外に思つてゐる。尙ほ意外とするのは、此液は單に蛇身を融解する作用があるのみでなく、種々の作用がある。工藝家が象牙に加工する場合に、これを和けて餅の如くする必要のある時は、蝟蜒を煎じて、牙をそれに濡せば、牙は自在になると云はれてゐる。又陶器に孔を明ける場合なども、錐の尖頭へ此の液を塗れば、苦もなく孔が穿てると云うてゐる。工藝家には誠に大切な材料で、昔は之れを秘傳とした。享保九年入江貞庵の著した「百工秘術」の内に左の記事がある。皆な蝟蜒の液の意外の作用を爲すことを示してゐる。

器工門。角や象牙を軟かにする秘法。今こゝに秘中の秘を見はす、まづ角を絞にておろすなりとも鐵鍛にてなりともた、きくだきて鍋に入れ、水見合に入、蝟蜒を數十條入れてよくよく煮るべし。もしとけざる内に水干ば、別に湯を沸し置き、これをさすべし、如此す

れば、後、糊のごとく解るもの也、もし少しかため餅のごとくして細工せんとおもはゞ、しばし置くべし、堅くなるなり、いかやうの細工にても出来るものなり、急にかためんとおもはゞ、甘草水にてよし。

盆山庭石等割たるを繼ぐ法。盆山庭石等のわれたるをつぐ事、漆にうどんの粉ませつけば、つがる、物なれども、繼目みゆるものにて見ぐるし、蝟蜒の涎りにてつぐべし、水に入てもはなれず、つぎめ見へずしてよし。

茶碗などをつぐにも、蝟蜒にしくはなし。

磁器類の穴を穿、または心のま、石切り製する術。磁器の類、穴を穿るに、世につたへ云ふは、艾葉にて灸三五すへて後、きりにてあくるとあり、これにて穴あくものにあらず、極傳授あり、夏月極暑の時、杉の木にて錐をこしらへ、此錐に蝟蜒をさし通し、炎日に干べし、かはきつくもの也、此きりにて穴をあくべし、心やすく穴あく也、また鋸小刀の類もこしらへ、これに蝟蜒を干付べし、何様の磁器にても切れるなり、疑しき事にあらず。

さて蝟蜒を作る法として、下巻雜工の部に特に一節を載せて、左の如く云うてゐる。



一、蠅蛉を作るには、苜を繩にて一抱しめて、盤に水を入れて、それ／＼苜の切口をそろへ、水にひたし、一夜置くべし、明日苜を見れば、蠅蛉あるもの也。

これも亦不思議の感がある。本草などを調べたら、相當の解もあらんが、今は唯だ事實を録するのみである。

支那ほど性慾を助ける媚薬の多く工夫されてゐる處はない。随分迷信から起つてゐるものもあるから、案外に思ふものが少なくない。「三國志」で名の高い蜀の所在地四川省には、縮陰病が流行するといふが、之れに就て工夫された薬は、滋強的の草根木皮を取り合はしてあることは勿論だが、これに一秘劑が調合されてゐる。それは何かといふと、綿火薬の如き爆發性を有してゐるものだと言ふ。之れを用ゐる譯は、爆發力を以つて陽器を鼓舞する趣向であらうが、支那人ほど意外な工夫をするものは無い。

## 一二 力士を向うに廻して 森林意匠の一室

意外の人に意外の腕力が具つて居る。中上川彦次郎氏は福澤翁の姪で、實業家として知られ

たが、此人の腕力は非常のもので、曾て常陸山と腕押を遣つたことがある。無論捷利は常陸山に歸したが、兎も角對抗する丈の力があつた。又大阪の大儒中井竹山も異常の腕力家で、谷風と京都の或る酒席で會した時、一つ「枕挽戲」を行つて見ようと竹山から言ひ出した。谷風は内心嘲りながら言ふが儘にやつて見ると、此學者なかく強い。たうとう双方勝負が付かず、枕の方が破れて了つた。夫でも竹山の手は枕から離れなかつたと言ふ。

淡島椿岳と云ふ人物は、一種の拗戾者で、極めて奇行の多い人であつた。然し中々面白い畫を書き、どこか超脱した處のある、仙人じみた性格の人であつた。此人の家に意外な構造の室があつた。それは窓一つなく、白晝でも眞暗な室であるが、よく見ると、四壁に椿岳の筆で大木の杉が凄じ様に一杯に描かれ、室の一隅に圓形の穴が穿つてあつて、其處から差入る薄暗い光線で四壁の杉の圖が見える様になつて居る。此室に入ると、恰も森林の中に這入つて月影の僅かに洩る、を望むの感があり、そゞろに人をして凄愴の感に堪へざらしむる。此點が即ち椿岳の意匠の存する所で、生前には、こゝで坐禪をやつたと云ふことだ。



## 一三 攝津大椽の喉 美男の吉良上野介 三人の林權助

大阪の故人攝津大椽は、聲の美を以て淨瑠璃界に鳴つたが、義太夫には餘り聲が好過ぎる所から、滋味をつけるに餘程苦心した。併しどうしても滋味が付き兼ねた。已むなく聲の長う續く特長を利用して、一種他人の擬し得ざる節を工夫し、終に大名を博した。攝津の晩年に或る醫學博士が、此人の聲に不審を抱き、攝津に請うて喉の検査を試みたことがある。然るに果して喉部に備はる瓣は女子のと同じであることを發見したといふ。此事は八九年前浪花に於て攝津門下の人より自分の親しく聞いた話である。

吉良上野介と云ふ人は、赤穂義士の評判が無暗とよい爲めに、繪などには寧ろ醜男子に畫かれてゐるが、此人實際は非常な美男子で、若い時分には田舎源氏にある光氏も宜しくと云ふ位な美貌の人であつたと云ふことが近頃分つた。曾て吉良家の菩提寺たる三州片岡山花藏寺に傳つてゐる上野介義央の木像の寫眞を見たことがあるが、事實其通りである。

歴史上には往々意外のことのある者で、昔慶長頃に鳥居光忠の家來で、關ヶ原の戦争に伏見

の城を枕にして自殺した忠臣に林權助と云ふ人がある。其時同じく忠死した其子は又三郎と云うたが、明治戊辰の役に、矢張り伏見の戦争に林權助と云ふ人があつて、其子も亦、又三郎と云うたが、父子共に戦死を遂げた。明治と慶長とは三百年も隔つて居るが、同じ名の父子が同じ土地に戦つて、同じ運命に燈れたと云ふのは實に奇縁である。然るに此前後の林權助は矢張り同じ血統の者で有ると云ふから愈々妙だ。吾が外交界に人も知る林權助と云ふ人も、調べて見るに、矢張り慶長の林權助の後裔であると云ふも奇だ。

## 一四 一切經を誦んじ又手寫す

佛敎隆盛時代に精力絶倫の僧が輩出したことは珍らしくもない事だが、中には意外な僧がゐる。建仁寺の榮西禪師の法弟で、釋良祐といふは、安覺と號し、亦色定ともいうた。此人宋に入つて、十年の間に、一切經全部を誦誦して歸つたと云はれてゐる。此事は「鶴林玉露」の著者羅景綸が、目撃のまゝ、を其書に書いて居る。あれほど大部の經を誦誦したといふは古今に類がない。然るに意外は之れに止まらぬ。此僧は歸朝後、一切經全部の手寫を企てたが、これも



成功した。即ち文治元年二月十九日から筆を着け始めて、承元三年二月十六日に業を卒へ、六千卷の手寫が成つた。此時五十一歳で、實に三十年の歳月を費したのである。此の筆寫は、寺に在る時のみの仕事でなく、行脚游歴の時も必らず筆紙を携帯し、旅舎に於ては勿論、野宿の時でも船中でも、苟くも暇さへあれば書きつゞけて、終に其の業を卒へたとあるが、此經の幾許かが今猶筑前の宗像神祠ひなかつたに存してゐる。それを見ると、筆寫の年月日と地名とが記されてゐると、北條霞亭の隨筆に見えてゐる。

## 一五 十里の間に三百餘の關所 社寺の商賣

昔し交通が開けなかつた時、旅客が如何に不便を感じたか、幾んど想像に餘る位であるが、當時交通の不便といふは、道路が無いとか、不完全であるとか、船車の乗物がないなどいふばかりでなく、嚴しい關所が要衝に多く設けられて、それが少からず旅客を悩ました。此の關所は、徳川時代に於ては警備の爲めにしたのだが、中世には、通行税を徵する目的で大名や豪族や寺社などが設けた關所は意外に多かつたのに一驚を喫する。今泉澄氏の著書に據ると、淀川

十里の間だけに三百幾十个所の關所があつたといふ。僅か十里の間に三百幾十个所停船を要する所があり、それ／＼に若干の通行税を拂はねばならなかつたことを思ふと、當時旅行の不便は全く想像外である。勿論これは一例で、各地共に大同小異の事があつたと思はねばならぬ。

昔し寺院や神社が其の収入を圖るために軌道を逸した行爲のあつたことは隠れもないが、併し事實に徴すると、行き過ぎ方が餘りに甚しいので、意外の感を起さしめる。今泉澄氏の著述に據ると、京都の祇園社では綿、管崎神社では油、攝津の今宮では魚といふやうに、座ざを設けて特權が與へられてゐたといふ。これなどは多分商人が便宜上神社を中心として其の保護の下に商業を營んだものとも見られ、神社直接の營業でないやうだが、寺院が自から商業を營んだ例が少からずある。天野の酒、道明寺の糰もち、大福寺の納豆、昆陽寺の蒟蒻、新善光寺の扇などは特に著名であつた。中に就て耳立つのは酒の製造であるが、昔し近江の百濟寺はくさい、河内天野の金剛寺の酒が拔群の譽高く、秀吉も之れを愛用して、吟味精製すべきやう一山に命じたことさへある。葦酒山門に入るを禁じてゐる寺で酒を製造するといふは意外である。延暦寺が質屋業を京都に營んだことや、高野山の僧が行商をしたことなども隠れもないことで、藥などを持ち歩い



たのは僧にふさはしいとも云ひ得ようが、吳服類までも行商したのは行き過ぎで、京都邊では此の高野聖かうやひじりの行動を卑めて「マイス」(賣子)と呼んだ。

### 一六 浮浪者の半面 惡所の希觀本

社會の暗黒面には意外の事のあるのが寧ろ通例である。長く浮浪者の實狀を調査しつゝ、ある、草間八十雄氏から聞いた話の内に、彼等浮浪者の内にもおのづから頭領があり、其の統率の下に立たねば生存が出来ぬ、そして其の頭領に大隈の諱名あだなが付いてゐる、勿論一脚を失つた不具者だから此の諱名があるのであるが、斯る暗黒面に大隈の名を聞くのも意外である。賣春乞食の内には加藤さんといふがある。これは吉原土堤に出没して懐ろの空疎なヒヤカシ客の歸途を誘拐するので、「土堤のおきん」が通り名となつてゐる。其年齒は六十を越える高齡で、密賣七十二犯と聞いては、これも意外の内に數へねばならぬ。彼等が好んで塵溜場を夜間の時に選ぶといふも意外だが、堆積の塵埃は一種の醗酵作用を起して温熱を生ずると聞けば、こゝを寢心地のよいベッドとするのも一理ないではない。淺草觀音堂境内を貰ひの場所とする浮浪者の内

には、千住邊から通ふものが多く、それが或る所で襤褸の服と着替へるといふのも意外である。彼等の内にはなか／＼富饒のものもあつて、或る頭領株は貳千圓の金を貯蓄してゐると云ふも意外である。落合邊おちあひに巢すくふ乞食連で時に洋食を注文する者があるといふも意外だが、流石に洋食店は其の巢すくに持運ぶことを欲しない所から、或る民家に頼み、そこまで運ばせると聞いて、亦復意外の思をなした。

昔し芳原の繁昌時代に、玉屋と云ふ遊女屋に不似合な貴重書が傳はつてあつた。それは永祿頃の鈔本日本紀である。其道の學者達はこれを切りに見たがつたものであるが、何分場所柄だけに見せて貰ふに困難した。故人小杉楳軒博士などの若い頃には是非其の本を見たいと云ふので、學者同士聯合して玉屋へ登樓し、敵娼を語らつて主人に懇請に及んだ結果、美事見せて貰つたと云ふ話がある。此の貴重な書物は「玉屋本」と言はれてゐるもので、御維新の始め政府が各方面から史書を蒐めた時借出されたきり、遂に戻らずじまひになつたとも云ふ。

### 一七 半峯博士と紙 詩版を薪とす



自分は古今の紙を集めて紙の變遷の研究を企てたことがあつた、先頃ある同人の席で此話が出る、座に高田博士もゐる、意外の事を言ひ出した。俺も洋行中廁に行く毎に不淨紙を集めて見た。國々により色々相違があつて、中には西洋の製造に係る紙に、失禮にも「ミカド」の名をつけてゐるものもあつた。元來不淨紙は日本の「さくら紙」が受けがよく、それに「ミカド」の名をつけた所から、不淨紙の名となつたと見えるなどの話が出た。高田博士の如き人が意外な蒐集を試みたもの哉、と事の奇なるに驚きつゝ、一體何の爲めに集めたのかと問うた所、親類に「さくら紙」の製造を業として居る者があるから、その参考の爲めと聞いて一笑した。

明末支那の常熟縣に毛晋字は子晋といふ人があつた。此人は十七史其他經書子類を多く精刻して名が高い。「汲古閣本」といふのが即ち此人の刻本である。此人の刻したもので書名のみ傳はつて版の亡びたものもあるが、意外の原因で焼かれたものが一つある。それは「四唐人集」といふ詩集であるが、偶々「存亡考」を讀んで見ると、左のやうに録されてゐる。

板已作薪煮茶、相傳、毛子晋有二孫、性嗜茗飲、購得洞庭山碧羅春茶、虞山玉壺泉水、思無佳新、因顧四唐人集版而歎曰、以此作薪煮茶、其味當倍佳也、遂按日劈燒之、

これに依つて見ると、毛氏の孫が煎茶を好み、佳水と佳茶を得たが、さて佳薪の無いのに困しみ、父祖折角苦心のものではあるが、合格すべき佳薪は「四唐人集」の版木の外はないと、遂に劈いて焼いたとある。版の亡びる原因は種々あるが、これは又意外の原因である。

一八 插槌—燐寸—靴 金城の鴟尾—日光の建築

昔し江戸時代に、毎朝味噌を挿鉢ですりこなす爲め、挿粉木の減つてゆく量を積算し、それを江戸中の人家の数に乗ずると、一日でも非常な大木を消費する計算となる、即ち江戸の人は總掛りで毎朝大木を味噌に和して喰つてゐるに齊しいと云うたが、個々に就ては少量でも積算すれば意外の大数となるものである。前年外國の新聞に、或る人が人間一代に使用する燐寸の數量を計算したことがある。即ち烟草に火を點するためや其他種々の事で一日使用する燐寸の數を凡そ三十本とすると、一生五十年間に使用する燐寸を、一本の材木に見積れば三千三百五十立方寸に當る。此材木の長さは人間の身の丈の三倍以上もあつて、到底一人で運搬の出來ない程の重量である。又人間一生に穿く靴の原料を積算したのを見るに、一年に凡そ靴二足つゝ、



を穿くものとし、一足の靴を作るに牛皮二・五平方尺を要する、而るに一疋の牛からは僅かに三分分の皮さへ取れぬから、五十年間の靴を作るには三十三頭の牛を要するとあるが、意外の大數に上るものである。

名古屋城の金の鯨は、實物を見ても可なり大きなものであるが、さて其の實價を積つて見ると案外大なるものである。此の鯨の鑄造に使用された黄金の價が當時小判千九百四十枚と傳へられて居る。之を慶長小判に換算して見ると、一萬七千九百七十五兩になり、假りに二十圓二十八錢の相場で積つて見ても、三百六十五萬三千三百三十圓に當るから意外の金高である。又日光に於ける徳川氏の廟は華麗の結晶とも云ふべきだが、近年建築學者の取調べた數字に據ると、陽明門などは一坪二十萬圓もかゝつてゐるといふ。しかし規模は割合に小さく、全部の建築を合せても東京驛の建築よりも小さいとは、是れもまた案外である。

### 一九 地獄は僧徒で満員

私が長崎へ往つた時、何よりも先きに訪ねて見たのは黄檗の諸寺であつた。この寺々は飽く

まで支那風に建築され、毫も倭臭を存せざる所に少からず趣致を覺えた。昔し隱元、木庵、即非などの高僧が住した關係から、此寺々にこそ隱木即の眞蹟が多く存してある筈と、寺僧に閱覽を求めると、寺僧は落ちつき拂つて、意外な返答を興へた。曰く「在家へ托鉢に出たきり還つてきません」と。これは質屋に典して戻らぬことをいふのであるが、案外の斷り方に私も一笑了した。又紫野の大徳寺に近年まで超脱の高僧がゐた。ある時面會していろ／＼話すと、老僧曰く、さて／＼君と話すことの面白さ、君は俗人ながら、僧と語るよりも俗を離れて興がある、暗に今の僧の墮落を言外に漏らし、さて語を次いで語るを聞くと、此頃田舎の人が來て、拙僧に質すには、私等は死後はどうせ地獄へ行くのであらうが、何とかして行かぬ工夫はあるまいかと、問ひましたから、拙僧の申すには、其心配は無用である、今の所、地獄は僧を以つて満員を告げ、あなた方を容るゝの餘地はないと答へたと聞き、此僧の意外の諷刺に一笑を禁じ得無かつた。

### 二〇 趣味は異なもの



前島男爵は古童の門人で、尺八では素人離れをして造詣が深かつた。私などは度々聞かされたから意外とも思はないが、此事を知らない人は意外とするかも知れん。書道で名の高かつた長三洲も亦た古童の門人で、これも男爵に拮抗するほどの名人であつた。漢詩で名聲のあつた永坂石埭氏は支那料理の通人で、割烹を自からした。それが支那料理店のより優つてゐると云はゞ、或は意外に感ずる人もあらうが事實である。三宅雪嶺氏が洋畫の鑑賞家である位は人も知つてゐるであらうが、夫子みづからが畫筆を把り、天稟に畫を能くすると云はゞ或は意外に思ふものもあらう。服部一三氏は厳格な相貌態度の人だが、浮世繪蒐集の趣味があり、鑑識もあり、收藏も富んでゐると云はゞこれも意外とする人があらう。岩崎久彌男はミリオネアだから自から漁獵などをすまいと思ふ人もあらうが、投網とうあみにかけては黒人も及ばぬと云はゞ意外とするであらう。東本願寺の前法主光演師は句佛といふ號もあるから、俳諧を能くすることはよく知れてゐるが、畫は栖鳳の門人で、其堂に入つてゐると云はゞ意外とするものもあらう。尙ほ故山尾子爵が金魚の趣味家であり、一たび東京市長に擧げられた奥田義人氏が蟬の研究家であり、辯護士の城敷馬氏が高山植物の研究家であるなどは、意外に思ふ人もあるかも知れぬ。

假名垣魯文は明治初頭の戯作者で、自から猫々道人と名乗つた、俗受け専門の人であつたら、高雅な趣味があらうとは思はなかつたが、其書齋を見た人の話しを聞いて意外に感じた。此人の書齋には古い佛像が置かれ、襖は古寫經で貼りつめられ、宛がら僧院であるかの如く、禪味が一室に漲つてゐたといふ。尙ほそのみでなく、庭下駄にまで一種の工夫があつて、蓮ついでの葉で作つた草履が置かれてあつた。魯文のいふには、既に室内に佛像を置き寫經を襖に貼りつめてゐるからには、どこまでも佛の心を以つて心とせねばならぬ。此庭前には眼に入らぬ細蟲がどれほど居るやらも知れぬ、普通の履物では、それを知らずに殺すの虞れがある、蓮の葉で、ブク／＼した草履を作つたのは、それを殺さぬ用意だと聞いたが、魯文にも意外な非俗の趣味があつたと見える。

二一 缺けた處から召上がれ テンジン違ひ 風呂船

昔し或る諸侯が狩獵のため郊外に出で、茶を請はんと貧家に立寄つた時、農婦が缺けた古碗



に茶を注いで出し「どうか缺けた處から召上げれ」と云うた話がある。案外な事の様であるが、缺けた處は誰れも口をつけぬから、貴人に對し斯様に云うたのは、無禮に似て却つて禮に合つて居る、案外な處に理のあるものだ。

松浦武四郎が多く珍品を藏したことは當時世間に評判もあつた。或る時天神講を機とし、珍藏の菅公の名幅を見せると云ふ案内を知人に發したので、何れも禮装して出かけて見ると、一室に壇を飾り、種々の供物をならべ、上に一幅懸けてあるが、これは白絹を以つて蔽はれて居る。愈々開帳となつて白絹を切つて落すと、現はれたのは浪花の私窩子の繪番付であつた。一同意外に驚き、一杯喰はされたと笑つたと云ふが、浪花では私窩子を天神と云うてゐる。

徳川時代の悠長な天地には、それ相應悠長の事のあつたのも不思議はない。淀川を上下する船の便利を圖るために、深夜酒食を載せた舟が、「喰わんか〜」と高唱して、物を賣つた位のこととは敢て意外とするにも足らぬが、瀬戸内海には風呂船と云ふがあつて、幾日も浴せず船中に在る人の爲めに風呂に入らしむるを業とした。これは當時の氣分になつて見てもチト意外である。

### 二二 俳優入浴的一幕 螢と蚊

文化頃の芝居の繪本を見るに、極めて稀れではあるが舞臺の上に役者が風呂に入つてゐる圖が出て居る。場面を變化するの意匠としては如何にも奇抜である。尤も當時淫靡、風をなして居つた、満都の子女の目前に俳優が素肌を現はして見せると云ふに就ては、別に何かを挑發する意味も伴つてゐたに相違ない。何れにしても舞臺の上に風呂桶まで持込んで幾多の俳優が裸體であらはる、などは意外の工夫と云はざるを得ぬ。

「啼かぬ螢が身を焦す」といふは戀を唄ふ絶唱だが、併し譬喩的に云うた迄で、螢の光に生殖の關係があらうとは思はなかつたに、理學者の研究に依ると、意外にも螢が光を放つ時は其交接期で、戀に無交渉でないことが知れた。又三伏の炎暑に人を襲ひ來つて、生血を啜る蚊に就て、學者の研究に據ると、これは丁度蚊の懷妊期で、人の血を吸収し、それで胎兒を養ふので、人に近づく蚊は皆な女性であると聞いたが、こんなことも動物學の門外漢には意外の感がある。



## 二三 狩野永探 來聘使喫驚す

久しく日本に來てゐて大學教授となり、古美術の研究をして日本のために少なからぬ貢獻をした、フキネロサ氏は誰も知つて居る人であるが、「狩野永探」といふと餘り人は知らぬ。が此の永探こそ、フキネロサ氏の雅名である。氏は狩野家の畫を研究したことがあるので、狩野永惠より斯の名を受けたのである。即ち永の字は永惠より、探の字は探幽より取つたので、鑑定書には狩野永探と署してゐる。

探幽や巨勢（金岡）が日本畫界の傑物であることは爰に斷る迄もない。況んや此の名を見て意外に感ずる者などは日本人にある筈はないが、さて朝鮮人は昔し此の名を見て驚いたのだ。曾て朝鮮の聘使が日本へ來り、新井白石と應接した時に、彼等は此二人の畫家の名に就て意外の思をなし、意外の問を發した。それは日本では何故這般の淫猥な名をつけるのかと云ふのであつた。彼の地では「幽」と云ふ字は女陰を意味し、「巨勢」は陽物を意味する所から、聘使が愕然としたのも故ある哉だ。又太宰純は「春臺」を號としてゐたが、これは本場の支那では

擧蹙する字面だ。彼れ太宰が「修刪阿彌陀經」の著者であるだけに一寸妙だ。露國の帝政時代の頃の事だが、エビス・ビールを同國へ持込み、大に當てようとした處、「エビス」の名が不都合だとあつて一向相手にされ無かつた話がある。「エビス」は日本でこそ福神だが、あちらではやはり前述の幽的意義の語であつたからなのだ。

## 二四 八重野夫人 外人の出鱈目 難訓一斑

故宮内式部長三宮義胤男の夫人はロンドン生れであつた。ある時其夫人の名を聞いて、意外に感じたのは、八重野といふ、如何にもやさしい名である事であつた。良人が宮中に仕へる身であるから、外人ながらも斯かる名に改めたものと見える。

西洋人の出鱈目には毎度閉口する。日清戦争の頃、米國に發行する雑誌「エラストレーテッド・アメリカン」に伊藤公夫人の肖像として載つてあつた者が實に意外であつた。よく錦繪に、鴨河の流れに涼臺を架し、美人が片脚を流れに投じて居る圖がある。これは誰れの目にも熟してゐるものだけに、其美人が即ち公爵夫人であるとしてあるなどは噴飯せしめる。畢竟日清戦



争の舞臺には、伊藤公が大立物である所から、こんな思ひつきを遣つたものであらう。

日本の地名人名などの読み方に意外に面倒な者がある。例へば東海林と書いて「シヤウジ」と読み、薬袋と書いて「ミナイ」と読み、設樂と書いて「シダラ」と読み、利母と書いて「カバラ」と読ませるなど、列擧に遑なしである。それから地名では、道祖土と書いて「サイド」と読ませるも奇だが、出雲國出雲郡出雲郷と書いて之を「イヅモノクニ、シュツトゴホリ、アタカワガウ」と讀むなどは案外である。又享保二十年の昔、時の將軍から諸藩の士分に奇異の姓や名を有する者を書き上げさせたことがあるが、その記録を見ると意外な名が多く載つて居る。今一二を挙げれば、松平備中守の内には「平平平平」と「谷谷谷谷」といふ兩人があり、松平修理大夫の内には「小助助助」と云ふがあり、松平豊後守の家の中には「七分五分形紋左衛門」、小笠原左近將監家中には「松飾目出度左衛門」、田中左京大夫家中には「一二三四五六」と「正月十三日」、松平佐渡守家中には「松平梅干之助」などの名が見えて居る。

## 二五 色狂女性と奇怪な按摩

尾崎行雄氏が曾つて法相たりし時、各所の裁判所を一巡した。其巡回中、法相が意外に感じたことが二つある。監獄に色情狂で良人を殺した婦人が入監してゐた。其の婦人は良人を殺したことは白狀したが、其死屍を検するに陽器が紛失して居る。それをいろ／＼婦人に訊問しても、流石に之れに就ては何も語らなかつた。已むなく婦人の糞を試験すること、なつたが、糞中に其物の織緯を發見したので、紛失の原因が婦人であることが分つた。今一つ意外なことは、法相それ自身に關係のあることであつた。或る夜旅舎で按摩を招き、揉ませながら睡つた所、按摩が妙な所業を爲すのに驚き、目を醒まして見ると、按摩は法相の或る物を熱心に舐めて居るので、法相は叱りつけて按摩を退け、其の譯を訊さず已んだと云ふが、此の按摩は男子であつたと云ふから、或は何かの迷信で斯る所業をなしたものが、さなくば變體性慾狂で、もあつたらうか。

## 二六 柿本人麿 髯自慢 生髯賣買

關西では柿本人麿を祀つて、抵ね火除の神、安産の神として居る。夫は如何なる故かと尋ね



て見ると意外の答を得た。人麿はヒ・トマル、即ち「火止」といふ普通より火除の神とし、又ヒトマル即ち「人生」の普通より安産の神とするのであると聞いて一笑した。

赤松滄洲は美髯を以て海内無双と自負して居つた。ある日一人の老人が訪ねて來た。應接して見るに其の人の髯が如何にも立派で、長さ尺餘もある。流石に滄洲も自ら愧ぢ、中心不快を感じた。其の客漸く去り、玄關まで送り出すと、此の老人願に手を掛けると見るや、髯を取り外し、丸めて懐に推し込み、ふり向きもせず悠然として去つた。滄洲は初めて其の假髯なりしを覺り、一杯喰はされたと切齒した。此老人何人なるか分明ならざれど、豪傑氣取の人に接する秘訣を心得て居る者と見える。

廣瀬旭莊の「九桂草堂隨筆」に髯の話が載つて居る。或る諸侯の城下に美髯の人があつた。城主が能面を作らせんとして、面に植ゑる髯を要する所から、此の美髯の人より其髯を三十金で買入の約束が成立した。美髯の人は剃刀で一舉剃り落して、面師に渡さんとしたが、面師は異議を申立て、剃つた髯は死髯である、活髯で無ければ面の用に立ち兼ねると言つて、一本又一本、其の持主が苦痛に感ずるを氣にもかけず盡く抜き去つたといふ。

## 二七 日光の宮號運動 明皇貴妃

物の裏面を穿鑿すると意外のことがあつて、それが爲めに其物の金箔の剥げることが珍らしくない。東照宮といへば誰れしも尊崇してゐる様なもの、日光に徳川氏の廟を建てる時、天海などが朝廷に猛烈な運動を試みた結果、ヤツト宮號を得たのだと云うたら、意外に思ふ人もあらうが、それが事實である。初め朝廷では、東照權現の神號を賜はつたのであるが、幕府方では是非宮號を賜はりたいと懇願した。朝廷では一旦拒まれたけれども、幕府方で菅原道眞の先例を申立て、人臣でも宮號を賜はつたことがあると頻りに請うた爲め、漸やく勅許になつたので、初めから家康の功德を思し召されて賜はつたのではない。斯様に裏面の真相が分つて見ると、家康の難有味もいくらか減る様な氣がする。

「長恨歌」に歌はれた立宗と貴妃は膠漆管ならぬ戀中で、性慾家の羨む所であるが、あの女も二度までも御機嫌を損じて逐はれたことのあるのを人は意外とするかも知れぬ。しかし意外はそれだけでなく、繪に書いてある二人を見ると、貴妃は勿論、立宗も可なり膩氣のある様な男振



りとなつて居るが、馬鬼の難の時には七十の老齡であつたのだ、それが女狂ひをしてゐるのが、いくら支那でも意外である。

## 二八 通説當てにならず

平凡な人間が、誤り傳へられて大層えらさうに持てはやされ、教科書などに麗々と掲げられてゐる者がいくらかもある。彼の鹽原多助、佐倉宗吾の如きが其一例である。多助は勤勉力行の權化の如く、宗吾は佐倉の義民として、普く世人の追慕を受けて居るが、何ぞ知らん、近年調査の結果は兩人共素行修らざる人物であることを發見するに至つた。日外坪内逍遙翁が教科書編纂の折、語られた所に據ると、多助は申しむべき人物で、到底歴史に載すべき人物でない。彼は炭屋を業として産を成したが、一度成功するや其行狀は前日に反し、主家より貰うた妻を虐待し、其妻の歿するや當時の人目を驚かす程の盛葬を營んで、其非を蔽はんとした。そして追々奢侈を極めた爲めに幕府よりお咎を蒙つた位な男であると。又佐倉宗吾も、實地に就て調査して見ると甚だ世間の傳説と相違して居る。嘗て故人團十郎が宗吾の芝居を演じようとする

に當り、例の考證癖で實地を取調べた結果、宗吾は品行の修らざる小人で、彼の直訴事件の如きも賭博的客氣に逸りて遣つた仕事で、決して義舉などと云ふべきものでない事を發見して、大に失望したといふ。

晩年聖人の如く仰がる、人でも、青年時代には多くは相應の瑕瑾のある者で、斯様な事は深く咎むるにも及ばぬ。本居宣長、貝原益軒の如き人物は、誰れが見ても無疵の人の様に思はる、が、若い時には矢張り若い相應の事があつた。宣長は其畫像を見ても昔が偲ばる、程の美男子で、若い時には随分花柳の巷に出入した者だ。江戸に居た時分でも、遊里に通うて親に叱られたことが其自筆の日記に載つてゐて、今に傳はつて居る。京都に居る時にも、島原の或る遊女に思はれて憂身を襲して通つた爲め、友人が心配して、一體君のやうな美男子が遊里に行くから面倒が起るのだ。今度は髪を亂し、粗末な衣裳を着け、貧乏らしくして行けと戯談半分に云うた所が、宣長も戯れ半分に、其通りにして遊里に行つた。すると遊女が非常に驚き、貴郎の様な方が、斯る風をして來られるのは何か仔細があるに相違ない。夫を白狀なさいと迫られて、始終を語つた所、遊女は大いに立腹して、其友人へ散々苦情を持たんだといふ意外



の珍談も残つて居る。

貝原益軒も徳行の標本となつて居るが、矢張意外の事がある。廣瀬旭莊の「九桂草堂隨筆」を見ると、益軒は其の細君より年齢が四十も上であつた。細君はなかくの嫉妬家で、益軒が獨り外に出るのを承知しなかつた。但し益軒も油断のならぬ好色家であつて、細君に焼かれる原因もあつた。晩年夫婦で諸國を遊歴し、有益な書物を著はしたが、それには細君の力も與つて居ると云はれ、美談となつて居るけれども、實は嫉妬の爲め細君が同行したのだ。又同隨筆に、此細君は嘗つて人と私通した事が發覺し、益軒に詫證文を取られた事も見えて居る。

## 二九

佐賀の亂の陶彈 乞食剩錢を用意す

布團の中では眠られない

九段の遊就館へ行く人は戦争に關する種々の記念物を見るであらうが、爰に佐賀の亂の記念物として砲彈が一つ保存されてある。之が意外なものである。砲彈と云へば誰も銅や鐵を聯想するが、此記念物は陶器である、即ち陶彈である。當時鐵其他の鑛物を以て砲彈を造ることは佐賀では困難であつたに相違ない、彈丸盡きての後の窮策として陶彈を作つたのは滑稽な様で

もあるが、佐賀には伊萬里其他陶器を製造する場所が多いから、陶製砲彈を思ひ付いたのは偶然でない。併しこれが實地に用ゐられたかどうかは分らない。

世の中が文明になるにつれ、乞食などもひどくスルクなつて來た。私の意外に感じたのは、熱海に散策中、格別乞食の様な風もして居らぬ小兒が私の傍へ寄つて來て「旦那大きな銅貨を一つ下さい」と云うた。私は面倒だから、今銀貨の外持合せがないと云うて避けようとする、小兒は「銀貨ならお剩錢をあけます」と云うた。

諺に乞食を三日すると忘れられぬと云うて居る。乞食の境遇には餘人の想像の及ばぬ樂地があるらしい。或慈善家が乞食の子供を憫んで孤兒院に入れてやつた處が、其子が夜分になると必ず布團を脱け出で、ゐなくなる。妙なことだと係員が所在を捜して見ると、片隅に佇んで熟睡してゐる。呼び覺まして何故布團の中に寢て居らぬかと詰ると、其子供の言ふには、どうも布團の中ではよく眠られぬ、安眠を得るには「蹲んで寢るのが一番樂だ」と答へたと云ふ。乞食の習慣から言へば布團などは却つて邪魔になると見える。



## 三〇 奥平の奇行 慧春禪尼 維新當初の新聞紙

奥平謙輔の事は別項追懷録に收めて置いたが、此人は奇矯の性格を有したから、其の行爲に意外のことが多い。斷獄が決して死刑の宣告があつた後、當該判官に是非一たび面して申し置きたいと云ひ出したので、當該官は、今更何か言ひたいといふのは、あの人にも多少の未練があるのか、と疑を抱きながら、遇つて見ると、意外の事を申し立てた。それは何かといふと、自分が萩の亂に書いた文章や會津征伐の折に秋月胤永に與へた文章は皆不朽の名文であると思つてゐる。願くは私死後貴官により此等の文の湮滅しないやう願ひたいとあつたので、その申立は流石に俗流を超越してゐると判官も感じたといふが、奥平は書と詩文とは得意であつたから、肉體よりも此等を重んじたのであつた。此人の逸事の内に奇矯の事がいろいろ傳はつてゐるが、萩の一老人から聞いた話に、意外に感じたことが一つある。それは奥平が結婚式を擧げて知己朋友を自宅に會し、披露の宴を開いた時であつた。奥平の平生を知る友人連は、あらかじめ奥平に注意して、結婚は人の大禮であるから、僉略があつてはならぬと、饗應の事に就

ても特に注意をした。愈々招かれて披露の席に就き、膳部を見ると例に依り例のごとくで、一汁一菜の外何の變つたことが無いので、前に注意した友人連もあきれて奥平を詰ると、奥平のいふには、折角君等の注意もあつたから、此の饗應には特に丹誠した。その結果は飯碗を明けて見れば分るといふから、蓋を取つて檢すると如何にも玄い飯が盛つてあつたので、此飯に何の趣向があると問うた時に奥平の答は、平生の飯は人の春いたものだが、これは特に自分自身の手を勞したものだとあつたので、皆々呆然とした。

鎌倉時代には禪宗が盛んであつたから、女流で禪に入つたものは固より少からずある、又中に高邁な行ひをしたものも無いではないが、最も奇抜の行ひをしたものは慧春尼であらう。此尼は或る武家の家に生れ、頗る容色があつたが、何故か人に嫁せず、自から顔を傷けて寺入をした。いくら顔を傷けても天のなせる麗質は蔽ひがたく、或る若い僧に懸想されて五月蠅く思ひ、ある日森嚴なる式のあるに乘じ、突如全裸體となつて式場に現はれ、稠人廣座の眞中に己れに戀する僧の名を高く呼んで恥かした。此の尼の意外の行動はこれに止まらず、後にはみづから烈火の内に投じて最後を遂げたとある。



日本の新聞紙の歴史には意外のことが少なくない。その襁褓時代には新聞紙に字引を添へて出したこともある。橋爪貫一といふ幕臣が執筆した「内外新報」に、附録として「字類」といふ小冊子を添へたなどは其一例である。明治六年と云へば可なり時勢も進んだ頃だが、新聞紙はまだ襁褓期を脱し得ず、各社の新聞記者は東京府廳に召喚され、官吏から説諭を受けたことがある。その説諭の次第は、新聞紙の務は目前の出来事を直ちに報道するで無ければならぬ、然るに、カビの生えた古る事ばかり書くのでは新聞紙の體を得ないと、西洋の例を示して懇々説法を受けたなどは滑稽である。爲政者は追々新聞紙を蛇蝎の如く忌み嫌うて、幾回か峻嚴なる法令を發し、筆の自由を檢束したが、當初は大官人が新聞紙を發起もし經營もしたのである。幕末に小栗上野介かうのすけが西洋で新聞紙の効用に感じ、歸來新聞紙の發行を幕府に建議した。それは採用を得なかつたが、新聞紙の必要は早く官吏から主張せられた。明治四年には時の參議木戸孝允の發意で「新聞雜誌」といふが發刊され、前嶋驛えき頭あたまの發意で今の「報知新聞」の前身「郵便報知新聞」が生れた。新聞紙も當初は官府の奨勵で萌芽を發したのである。可なり後の事であるが、今の元老西園寺公が「自由新聞」に矯激の筆を揮ひ、君側にある實兄徳大寺公

を手古摺らせたこともあつた。左院御用を標榜した「日新眞事誌」は外人ブラックに經營させたが、其の御用新聞に日本の政客が筆を把り、往々政府を攻撃するので政府も困つた。其頃はまだ治外法權が撤廢されず、外人はこれに立籠つてゐるから、政府は如何ともすることが出来ず、やつとのことにブラックを政府の御用掛として去勢した事もあつた。追々新聞紙が進むに従ひ政府は取締を嚴にし、刑律に問はる、ものも出て來たが、當時は士族と平民の差別待遇をなし、士族の記者には繩をかけず、自宅に幽閉する憲法を用ゐる、平民の記者は用捨なく繩をかけて牢屋へ繋ぐといふ不公平もあつた。今から考へると意外な事ばかり。

### 三一 西郷從道侯 福澤翁 前島男と星亨氏

大隈侯嘗て故西郷從道侯を評して、「アレは貧乏徳利のやうな人ぢや」と云はれた。其故はと聞くと、「西郷は如何なる内閣にも入用であつた。宛かも世帯を持つに貧乏徳利が必要だと同一である。貧乏徳利は、酒入るべし、酢入るべし、油入るべしで、一見無用の物の如くで、實は世帯にはなくて叶はぬ道具だ」と笑はれたが、西郷侯に就ては、世人或は不得要領の人と



解釋し、大西郷の如く、末技などに頓着せぬ人であつたと多く思つてゐる。然るに此人が意外に多能であつて、茶道に通じ、挿花に詳しく、漢學も相當に出來、詩才も可なりあつたと云はば、人は奇異の感をなすであらうが、併し事實全くさうであつた。事情を聞けば無理もない事である。侯は幼少の折家計不如意で御殿へ上り、一年四石の扶持を受け、「龍安」と云ふ名でお茶坊主を勤めた事があるので、茶道などの素養あるのは寧ろ當然である。尙侯が人の如く無暗に其藝を振り舞はさぬ奥床しい性格や、また人に接して愛嬌のあつたことなどは、侯の天性にも依つたであらうが、幼少からの苦勞が之れを然らしめてゐるのだ。

福澤翁はあの位潤達の性質であつたが、案外甚にかけては痴であつた、考へることが長くて相手は皆な困つたと、大隈侯は語られた。翁は人も知るごとく一切風流ジミたことを排し、何でも俗を貴ぶを以て主義とした人であるが、併し何處かに風流氣があつて、往々俗を雅にする頓才を示した。かの世俗と云ふ字を分割して自から「三十一谷人」と號したり、或は「雪池」と號して諡吉に通はせたりしたことなどが其一端である。曾つて人に揮毫を頼まれて直ちに筆を執り「油斷大敵」と書いたが、まだ紙の餘白がある。何と書き續けるかと思つてあれば、意外

意外、「彼我忙々」の四字を配した。「彼我忙々」は「火がボウ／＼」に音相通じ、繁劇といふ外に火の用心の寓意もあつて、意外にも下に置けぬ風流才があつた。

星亨氏が曾つて前島男爵の門下生であつたと云はゞ、意外に思ふ人もあらうが、それは事實である。星氏は明治の初年前島男に就て英學を學んだのである。氏は剛愎を以つて一生を終始した人であるが、青年の頃も一風變つてゐて、前島男の家族も此人の取扱ひには困つた。男爵在宅の時は教授を受けてサツ／＼と歸るが、不在の所へ來ると、如何にも無愛想で、男爵の家族が何を云うても返辭をせず、寒中などは火鉢の近間へお出でなさいと言つても、空ふく風と聞き流してそれに従はぬ。そこで家人も手古摺つて、あの人は亨とほといふ名はありながら、亨らぬ人であるというて、星氏が來る毎に、臺所では亨らぬさんが來たと云うたとは、前島男の直話である。星氏の母もその頃前島家へ往來したが、これも亦大の變り物で、豪酒で執拗で、頗る面倒な婦人で、亨氏と氣質がよく似てゐたと云はれてゐる。星氏は後に何禮之氏の書生に住み込んだが、これも前島男の紹介に因るので、星氏は前島男に可なり縁故がある譯だが、其の性格の同じからざることや、政治経路が異なる所から、幾んど往復を絶ち、僅かに星氏が衆議



院議長であつた時、前島男が公務の爲め一別以來初めて面會したに過ぎぬとは、是れも亦案外とせざるを得ぬ。

三三二 木戸公の乞食振り 板垣伯の住居

京都の鴨河べりに信樂といふ旅舎があつて、私は度々こゝに泊つたことがある。此家の女主人は可なり老いてゐたから今は歿したかも知れんが、いろく面白話を有つてゐた。木戸公と其室お松のことも能く知つて居て、私に面白い逸事を語つた。お松と云ふは、後には崇められて人々偉い者の様に云ふが、實は尋常なみくくの女で、某神主の養女である。此神主義氣に富み木戸公をよくかくまひ、幾んど死を冒して守護した。或時は幕府の搜索極めて嚴重で、隠すべき處もなかつたので、己むを得ず数日間床の間の天井に隠し、一枚の板を嵌め外しの出来る様にして、是より飲食物を差入れたことさへあつた。然るに幕府は公が此家以外に居る筈がないと、大勢で家を圍み、十人許りの捕吏が鎗を以て普く天井を衝き、遂には公が隠れ居る處をも一二ヶ所衝いたが、運強くして難を免れた。

しかし段々逮捕の手がきびしくなつて、公は此家に居り難く、辛うじて丹波に逃れて疊職となり、一時を過したが、後には大阪に入り込み、乞食の群に入つて、自ら可笑しい歌を作り、容貌を變じて諸方に滑稽な踊をやつて徘徊したが、人皆其身體の肥満して其氣風の洒落なるを愛し、誰一人之れを公だと覺るものもなかつた。此頃お松は一度公を訪うたことがあつたさうだが、其の居所と云ふは孤作の小屋で、品物と云つては只一つ缺け椀あるのみであつたので、女氣の悲痛一時に迫り、其儘ワツと泣き臥し、暫くは正體もなかつたのを、公はやつとこのことで慰めすかして別れた。

公が乞食を假装して居た頃、京都邊にも徘徊し、例の滑稽踊で藝妓輩を笑はせたこともあつたが、幾許もなく王政維新となり、打つて替つて重く用ゐられて參議になると、お松と正式の結婚を遂げ、夫妻相携へて京都へ來た時には、此の信樂の婆さんも招かれた。其時のお松は實に見紛ふ許り立派の奥様となつたので驚いたと云つて居る。偕て其際數多く招いた藝妓の中に、一人妙齡の舞妓が窈かに婆さんの袖を引き、「アノ旦那様は、いつか見た面白い乞食によく似てお出でた」と云つてクス／＼笑ふのを、公は逸早く耳にして、例の洒落の調子で、「そ



れは其咎、其乞食は乃公だ」と笑つたので、一座は驚いたと婆さんは語つたが、これも意外の談柄とするに足るであらう。

昔改進黨時代に、黨用で板垣伯を訪ねた事がある。當時の伯の住所は芝公園内の第何號地と云ふ様な分り悪い處にあつた。辛うじて番號を尋ね當てたが、扱て其家が如何にも見難らしいので、自由黨總理の家とは思へぬ。そこで念の爲め其家に就て問うて見ると、矢張り伯の家であつた。下駄の三足も並ぶと一杯になる入口に障子が二枚ある、どうしても下等の判任官の住居としか見えぬ。下駄くだ脱から御免と云うて取次を頼むと、中でお上りと云ふ聲がする。戸を開けると、直ぐそこに伯が客と對談中で、今上れと言はれたのが主人の伯であつたのに一驚を喫した。伯は無雜作に應接されて、用は立どころに辨じたが、一方改進黨總理大隈伯の殿様振りと板垣伯の生活振りが餘りに懸隔あるので案外に感じた。

### 三三 明治の顯官と舊藩主 閑叟公の苦手

長州の毛利元徳公は、言ふ迄もなく故井上侯や伊藤公等の殿様である。此の公長いこと舊弊

の殿様風が抜けなかつた人で、井上が既に大臣格にもなつて居るのを捉まへて、宛がら奴僕のやうに考へてゐた。井上や伊藤を招く場合にも席順がやかましく、伊藤が足輕から起つたといふので、いつも下席に置いた。或時元徳公、伊藤を麾いて「どうだ、お前も出世して今少し上座に坐る様にならねばなるまい」と勵まされたことがあるが、其頃伊藤は既に相當の官等に進んでゐたのだ。井上に至つては既に大臣にもなつて居たのに、會て宮中の式に毛利公が召された時、着馴れぬ洋服を着けて參内されたのを、井上參議も出迎へて居ると、偶々公の靴の紐が解けた。公は「聞多、之を結んで呉れい」とばかり足を出されたので、井上は大禮服の儘で謹んで之を結んだといふ逸事がある。後に明治天皇が聞こし召され、今頃君臣の別を無闇に正して居る毛利にも困つたものだといふと承はる。

佐賀の鍋島閑叟公は英邁の明君であつた。此人抜群の長幹で威風堂々たる所、雄辯四筵を壓する所、大隈侯に能く似て居る。當時内閣で何か議論が起ると、閣員は閑叟公の辯舌に驅立てられ、誰れも太刀打が出来なかつたと云ふ。閑叟公は大隈侯よりヨリ以上の籌略もあり、なかなくズルイ處もあつて、此人にスネらるゝと誰れも抑へることが出来なかつたが、唯だ一人意



外な人が、いつも閑叟公を抑へた。それは伊達宗城侯（舊宇和島藩主）である。此人固より閑叟公より偉い譯ではないが、一つ祕密を持つてゐた。閑叟公の息女が此人に嫁して居る所から、愈々公が意地を張つて一同困却すると、此人は奥の手を出し「妻をお返しする」と言ひ出す。これには流石の公も閉口して、いつも撃退された。

### 三四 中將姫支那に喧傳さる 圖書の關所

中將姫は日本古代の貴族の女性で、其人が自ら藕絲の曼陀羅を織つたといふ事や、此の女性が佛の權化であるかの如く、如何にも人間を超越した人であつたといふ話は、日本に於ては隠れも無い事であるが、此事が、いつしか支那に聞えて居るといふのが面白い。嘗に支那に聞えて居る計りで無く、ある倭佛家が大に之に感服し、姫の事蹟を、恰も我國の繪卷物のやうに描いて、それを立派に刻して居る。日本の高僧の事蹟が支那に傳はり、書籍に書かれて居るのは、強ち珍しい事で無いが、此の女性が高僧以上に取扱はれ、密畫で版に迄刻されて居るのは、案外と云はねばならぬ。日本には中將姫の事蹟を繪に現はしたものなどは少からずある

が、其の日本に在る繪卷や書物が支那に渡つて、それを其儘復刻したのとは全くちがひ、何處から何處まで支那風に描かれてある。蓮の絲を機で織る處もあれば、姫の經歷が備さに畫かれて居る。そして姫其人が、全く支那婦人になつて居る所に興味がある。それには漢文で凡その事蹟も録してあるが、之れが日本の好事家にひどく面白く感ぜられて、二度迄日本で復刻されて居る。一つは寛政年間、今一つは文化年間の複製で、其の何れかの中の、支那人の題識のあるのを読んでみると、斯様の佛性婦人が東方に現はれ、しかも支那に於てせずして、海を越えて日本に現はれたことは洵に羨しいと書かれてある。自分は其の二版共持つて居るが、標題は「當麻曼陀羅緣起」とある。

大阪の如き俗地が曾つては書物の淵藪であつたと云ふも意外である。ある時代に、徳川氏の法として、舶載の書物は必らず大阪で検査をする事とした。大阪を経ざれば、支那の書物も、西洋の書物も、絶対に販<sup>かきな</sup>譯に行かなかつた。大阪は實に書物の關所であつた。無論耶蘇教を取締る上から、大阪で検査することが地形上一番便利であつたからに相違ない。大阪の書物屋には今でも其檢印が残つて居る。それは小さな楕圓形のもので、兎もすると此印の押された唐



本が今でもボツ／＼見當る。當時何人も長崎にさへ行けば支那の珍本は幾らもあると考へたらしく、蜀山人の如きも矢張り然う考へて、役目を帯びて長崎へ行つた時分、頻りに捜し廻つたが一冊も手に入らず、失望したと云ふ話が傳はつて居る。

三五 天一坊の膽玉 奠南一流の命名

天一坊と云へば大岡裁判で有名な不敵の賊であるが、之を刑場に曳いて斬首したものは山田淺右衛門と云ふ人であつた。此人の子孫と山岡鐵舟とは懇意であつたが、鐵舟が此山田の子孫から先代の話だといふのを聞いた話に、天一坊の首は如何にも斬り悪く、首斬りでは大分自信のある自分もたうとう遣り損なつた位だ。さて斬首の後、こんな大膽な奴の膽はどんなであらうと膽を取出して見ると、案外小さいのに驚いたと。

亡友山田奠南は娘にテイと云ふ名を命じた。定めし貞と云ふ字であらうと考へてゐたが、或時其字を訊ねて見ると、意外にも「呈」といふ字であつた。全體どうしてこんな字を選んだのかと問ふと、奠南の答が亦意外であつた。曰く、簞笥、長持を附けて進呈するからサ。

三六 幕末の外交官 五代友厚の書簡

幕府が始めて新見豊前守其他を使節として外國へ派した頃は、日本の禮服は其人の官位に相當する烏帽子直垂、素袍などであつたことは言ふまでもない。使節等は臆面もなく、此装束を着けて揚々馬車に乗り、群がる見物人が異様の目を睨り、中には嘲笑してゐるものもあるのに氣も付かず、流石に日本は禮義の國だ、吾が堂々たる衣冠を見ては皆な畏敬してゐるとうのほれたことが隨員の記中に見えてゐる。斯く自分極にうのほれ切つてゐる使節の目に米國の下院がどう映じたかといふと、これも隨員の記中にあるが、使節は先づ輕侮の目を以つて議長を見つた。議長の服装は日本の仕事師をつくりで、股引を穿ち筒袖を着てゐると、眞面目に觀察してゐるなどは抱腹絶倒であるけれども、外國の風俗を始めて見たものには無理もないとは云ひ、今から思ふと意外とも云へよう。彼理の船が日本に來た時、幕閣の重臣は皆な招かれて、船に入つて饗應を受ける事となつた。矢張り其際も古風の禮服を着用したのだが、黒船を始めて見た連中には船内の事など想像もつかぬ。船の法として、大賓を迎へる時にペンキを塗り替へる



ことや、船中には大きな鏡が装置されてあることや、西洋料理のエテケットなどは勿論知る筈もなかつた。そこで外國の事に通じてゐる通詞は、失體のないやうにと、船の入口に奉書紙に三ヶ條の注意書を大書して貼りつけた。其第一は、ぬり立てのペンキに禮装の觸れぬやう注意すべし。第二、鏡に頭を撃ちつけぬやう用心せよ。第三、饗應の食物を紙に包むで持返る莫かれと云ふ三ヶ條であつた。これは曾つて故前島男爵より聞いたことで、如何にも人を愚弄するに近い注意書であるが、當時にあつては尤も機宜に適したものであつた。こんな事も、文化の進んだ今日から思ふと、意外の感なきにあらずである。

大隈老侯の傳記を編纂するに方り、意外に感じたことは、侯の長い生涯に各所から寄せて來た書簡が悉く保存されてゐた事で、或る年度迄の分はよく整理され、目録まで出來てゐたなどは全く案外であつた。此事は別項「手紙保存のすゝめ」にも言うたが、扱て萬餘の手紙を取調べて意外に感じた手紙は、五代友厚氏から侯に寄せたものであつた。五代氏は薩摩出身で、大臣格の人物であつたが、早く官海を去つて大阪で事業の經營に當り、間接に國政に與つてゐたことは、氏の書簡二三百通のどれを見ても國政に觸れてゐないもの、無いのでも推測される。

爰に氏の書簡に就て意外に感じたのは、どの手紙にも必らず劈頭に「例之五ヶ條御忘れ被下聞敷候」とあつて、友厚と署名し大隈殿とある。幾十通見ても同じことで、これが幾んど一つの形式となつてゐる。勿論本文にはいろいろの事が書かれてゐるが、用向きの書かれてゐる所は本文と云はんよりは寧ろ副書そくがで、前文が本文であるかの形式となつてゐる。私は最初これを見て、「例の五ヶ條」とは何であらうかと思案に暮れた。何れ五ヶ條の本體があるに相違ないと、小半日もか、つて多くの手紙を翻して見ると、果して見當つた。それは別紙に細書してあつて、大隈侯の缺點が五ヶ條列記されてあり、各條に多少の注脚がある。侯は晩年と違ひ當時は霸氣満々で、往々圓滿を缺く爲めに人の憤怨を買ふやうなこともあつたので、五代はそれを憂ひて苦言を呈したのである。流石に五ヶ條とも肯綮に當り、其緒言には、貴下の如き顯要の地位にある人に對し、何人と雖も其闕點を摘發する者は無からうが、これは御懇意に任せての婆心と諒察あつて、反省されたいといふやうな、友情の籠つた文言がある。其の幾百十通の書簡に、例として五ヶ條を云々してゐるのは此の別紙から來てゐるので、五代が如何に侯の反省を促すに深切であつたかは想像に難からぬ。五代は確かに侯の知己であつたのである。



## 三七 斯氏の哲學書 油田の診察

一時ハーバート・スペンサーの著書が日本に流行して、其の多くの哲學書が盛んに讀まれた。スペンサーは意外な愛讀者を意外な國に得たので意外な感を起し、當時工部大學にダイアルと云ふ教師がゐるのをたより、スペンサーより遙かに書を寄せて云ふには、日本で余の著書が大に行はれて居ると聞くが實に驚くべきことである。日本人が余の哲學を理解し得るは何故であらうか。希はくは其理由と事情を知らせて貰ひたいと云うて來た。長谷川泰氏がダイアルより此の質問を受けたので、答へて云ふには、日本人は儒教の薰陶を受けて居るから、先天的に哲學を理解する力を有して居る。且つ哲學書を讀んで樂むの風がある。さればカントの哲理でも青年の學生が容易に解する。スペンサー位の哲學を解するに何の難きことがあらうと。これを以てスペンサーに復せしめたといふが、スペンサーも定めて驚いたであらう。

長谷川等は多少法螺を交へて地歩を保つたのを、其後端なく日本の爲政家が意外なことをやつて、折角保つた地歩をメチャクにした。其の次第は、往年歐化主義の盛んであつた頃であ

つた、鹿鳴館で内外の男女が互ひに擁して踊つたり、假裝舞會が催されたりして、内外雜婚の氣運が漸やく萌して來た時、吾が爲政家は、人もあらうに、此の哲學者に雜婚の得失を尋ねた。スペンサーの答は、優等の人種と結婚すれば劣等人種が負けるとあつて、進化の純理から黄色人種を侮辱したので、吾が爲政家も恐縮したが、斯る質問も畢竟スペンサーを崇信する餘りに出たことであらうが、それ式のことを政府が質問するなどは滑稽千萬で、今から思ふと案外の事と言はねばならぬ。

徳川氏の末造から維新に移り替はる頃、外人は何でも知つてゐるものであるかの如く思つて、専門外の事を質したり或は其の指導を受けたりして、失敗を招いた滑稽も少なくなかつた。文久年間に我が郷里越後に意外の事があつた。私の郷里には、古くから石油の賣出してゐる所がある。それは黒川くろがはといふ所で、地名も石油から來てゐるのだが、當時はまだ石油のことは分らなかつた。茲に村松濱の素封家に平野才之丞といふ人があつた。脚疾を患へて困つた擧句、或る人の勧めに依り、長崎まで立越して米國人の名醫の治療を受けることになつた。一ヶ月許り滞在して此の米國人と交つてゐる内に、郷國の油に就て質問を試みると、それは多分べ



トロレアムであらう。米國の富も實は此の油が多量に出るからだと聞いて、平野は此人に實地の検査を頼み、それか否かを確かめたいと思つて切にそれを請うた。當時長崎から越後へ回航するに汽船もない時であつたのみならず、外人を内地に旅行させることも容易に出来なかつた。流石に平野は膽略と實力があつたので、一外人を新潟へ回航せしむるため、六萬圓を投じて一汽船を買入れ、又當路に種々の運動をして、此外人を越後内地に旅行せしめ得る特許を獲たが、其の特許は二日間と限られた。元來新潟より黒川までは、徒歩では一日に行き兼ねる距離である。そこで平野は迅速に往復せしむる爲め、人力車を工夫し、之れを曳き之れを推すに數人の力を以てし、辛うじて目的を達し、特許の時間内に外人を船に歸らしむることを得た。此検査の結果、果して黒川の賁油が所謂石油であることが分明し、採掘に就て多少の指導を受けたので、それからは可なりに油を得ることになつたが、醫師に石油の診察を乞うたのも意外、此爲めに六萬圓を投じたのも、人力車を急造したのも、皆な意外と云へば意外である。

衝  
口  
發



○明治大帝の御製、蘆間の小舟に云く、  
取る棹の心ながくもこぎ寄せむ

あしまの小舟障りありとも

これ三國干渉に耐忍の聖意を寓せられたるもの、温  
藉の間に帝者の大度量を見る。此御製、田中青山伯  
より聴く。

○余嘗て勝海舟畫する所の富士の圖を藏す。一俳句  
を題して云く「三國にふみ跨れや富士の山」、蓋し三  
國干渉に對し痛憤を發したる者。

○世間進歩を思ふもの、終に走る。走つて尙ほ足ら  
ず、疾走す。而して疾走の餘、躓かざるもの幾許ぞ。  
孟子の所謂百歩にして止み、十歩にして止むも亦是  
れ走るなり。寄語す徐行せよ、蹉跎の敗なく、こゝ  
に初めて進歩を見ん。

○京師相國寺に巨額の金を喜捨して山門の建築を助  
けたる者あり。住職其人に會する數々なるも、嘗つ

て謝意を陳ぜず。其人或時之を責む。僧一喝して曰  
く、汝の喜捨は佛如來に獻じたるなり、汝の榮とす  
べし。吾豈汝に謝するをせんと。此住職相國寺に著  
名の高僧と聞く、惜むらくは名を逸す。

○人より贈られたる小冊子中、僧日蓮の遺文一篇を  
收む。弘安二年松野殿女房より食料を贈られて謝す  
るの書簡也。

(一) 麥一箱、いゝのいも一籠、瓜一籠等旁々の物、  
六月三日に給候ひしを、今まで御返事申し候はざ  
りし事恐入て候」(二) 此身延の澤と申す處は甲斐  
國飯井野、御牧、波木井三個郷の内、波木井の郷の  
成亥の隅にあたりて候。北には身延嶽天をいたゞ  
き、南には鷹取ヶ嶽雲につゞき、東には天子の嶽、  
日とたけ同じ、西には又峨々として大山つゞきて  
白根の嶽にわたれり。猿のなく聲天に響き、蟬の  
さへづり地にみてり。天笠の靈山此處に來れり、



唐土の天台山親アツクに見ゆ(三)我が身は釋迦佛  
にあらず、天台大師にてはなけれども、曲々晝夜に  
法華經をよみ、朝暮に摩訶止觀を談すれば、靈山

び、釋迦佛は靈山より御手をのべて御頂をなでさ  
せ給ふらん(八)南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華  
經、恐々謹言

弘安二年乙卯六月二十日

松野殿女房御返事

浄土にも相似たり、天台山にも異ならず(四)但  
し有待の依身なれば、著ざれば風身にしみ、食は  
ざれば命持ちがたし。燈に油をつがず、火に薪を  
加へざるが如し。命いかでかつぐべきやらん。命  
つぎがたく、力絶えては、或は一日乃至五日、既に  
法華經讀誦の音も絶えぬべし。止觀の窓の前には  
草しげりなん(五)かくの如く候に、いかにして  
思寄せ給ひぬらん(六)兔は經行の者を供養せし  
かば、天帝哀みをなして月の中におかせ給ひぬ。  
今天を仰ぎ見るに月の中に兔あり(七)されば女  
人の御身として、かゝる濁世末代に法華經を供養  
ましまして、梵王も天眼を以て御覽じ、帝釋は掌  
を合せて拜ませ給ひ、地神は御足をいたゞきて喜

是れ日蓮遺文の逸品と云ふにあらず、然れども讀過  
其妙を感じざる能はず。元來日蓮の文は簡勁の處に  
其特徴を見る。親鸞の文、簡はあれども勁はなし。  
前者は男性的にして後者は女性的なり。前者は人を  
鼓舞し、後者は人をして泣かしむ。前者は陽氣にて  
激切、後者は陰氣にて沈痛。兩人の人格と教義の異  
なる、自から然らざるを得ず。今此文を見るに、大  
體八段に分つを得べし。第一段先づ惠贈を謝す。第  
二段己れの居所の風物を叙し、暗に天竺の靈山リキヤン、唐  
土の天台山に比す。形容にサブリティあり。此筆  
無くんば、靈山、天台山に比する能はず。而して此

叙景は到頭第三段を起すの地を爲す。第三段暗に己  
れを釋尊、天台大師に擬す。豪放の氣宇掩はんとす  
るも能はず。第四段筆路一轉、生ある者薪炭油米無  
くして争て持續し得んと人間の本音を吐き、終に己  
れ無くば「法華經」「摩訶止觀」讀誦の聲も絶たんと、  
己れ故に供給を欲するにあらざるを云うて地歩を占  
め、第五段意外の同情者を得たりと、喜びを抒ぶる  
の地を爲す。第六段佛典中の好譬喩を引き來り、謝  
詞の前提とする處妙を極む。而して「今天を仰ぎ見  
るに月の中に兔あり」の一句、眞に萬斤を扛ぐるの力  
あり。第七段初めて謝意を陳ぶ。而して其の陳べ方  
は流石に宗教的にして説教的雄辯を發揮して餘蘊な  
し。此の數行の文を誦する信徒、今日に於ても容を  
改め合掌を禁する能はず。況んや當時謝書を贈られ  
たる崇拜者其人に於てをや。凡そ各宗派に於て、人  
を化導するに力あるは、經典よりも祖師の親翰にあ

りとす。畢竟親翰は其人の寫眞と蓄音機とを兼ねた  
る者、宛がら其人の譬喩に接すると同じきが故也。  
○物を惜しまざる人なり、唯だ名譽を惜しむ。物を  
惜しむ人なり、却つて名譽を惜しみます。妙なる哉。  
○日本の活版所の著者に對する苦情は、植字後多く  
文章を訂正するに在り。而して最も苦情の多きは加  
藤弘之翁に在りとす。翁活版所の苦情に對し、却つ  
て常に叱つていふ。活版の活版たる所以は自在に組  
直し得るに在り、然らざれば死版のみと。聞く、米  
國に在つては、植字後著者の意を以て文字を變更す  
る時は、一字に二十仙を徴するを例とすと。本邦に  
於ても、活版社の威力、學者を壓するの日は、亦米  
國に倣ふに至らん乎。  
○陳眉公曰く、人の善を聞けば則ち之れを疑ひ、人  
の惡を聞けば則ち之を信ず、此れ滿腔の殺氣なりと。  
今の政權争奪を事とする者即ち是れ。



○足を忘るゝは履の適なり、韻を忘るゝは詩の妙也、最も人に適するの服装は眼につかざる者は是れなり。  
 ○今の人無趣味なるもの十の七八。人の居を訪うて其目に入るもの、曰く金屏風、曰く銀瓶、唯是れのみ。若し此等無くんば、一物も捉へずして去るを常とす。如斯は世界を狭くするもの、趣味教育、適度に必要なり。

○経験は勇氣を鍛練する一爐錘也。一たび大故を経れば、病何かあらん、死何かあらん。経験ある人の勇を稱するを休めよ、渠等は褒められても褒められたと思はぬ也。

○或人來り、書畫の質作の多きを歎す。余曰く、書畫の落款に重きを置く風習歇まざれば、質作其跡を絶つ可からず。舉世質作を尙ふに至らば、誰れか勞して他人の落款を盗むもので。單に書畫のみにあらず、小説、脚本、其他の文章亦然り。若し匿名著述

大に行はるゝに至らば、埋没の文章家始めて頭を擡げん。兎角實質を鑑賞する風尙を欲す。無落款論實地に行はるゝの日は、亦元老の政界に滅亡するの時也。

○昔の茶人は茶を立てる爲めに道具を求め、今の茶人は道具の爲めに茶を立てる。

○佐藤一齋曰く、今の人率れ多忙を説く、其爲す所を視るに、實事を整頓する十の一二、閑事を料理する十の八九と。洵に然り。多くの人は閑事を以て實事となす、閑事除き去れば、多忙といふほどの事あるにあらず。

○一事を成し了り、之を言語に現はさざる者人品高し。今日は、事を爲すに先だち、早く之を吹聴し、事を成し了れば、偏へに人の知らんことを欲す。當世流淺膚にして奥行きなし。

○市井の瑣事、狹斜の消息、本來俗氣ある者、平易

に書けば卑猥愈々甚し。以て小新聞に載すべく、大新聞に載す可からず。唯だ這般の事を特に莊重に書けば、俗氣を免れて一種の趣あり、留意を要す。

○一日校用を辨せんとし、芝に到り、亦麻布に到る。芝には三田の松方侯邸を訪ひ、麻布には徳川頼倫侯の邸を訪ふ。歸途、車中に思へらく、今日は赤穂の義舉に奇縁ある日也。徳川邸は元祿の昔吉良家の邸にして、其の吉良氏は即ち赤穂の讎敵上州の宗家なり。上州、復讐を慮り、此邸に入らんとして果さず、終に仇家の斃す所となる。松方邸は元祿の頃松平隠岐守の邸也、大石父子が預けられたるは此邸にして自刃したるも亦此邸也。

○信州上田町に、往々奇品名器の骨董商により鬻がるゝものあり、傳へて云く、淀屋辰五郎の舊什と。余初め聽いて之れを信ぜず、後淀屋に對し、當時關所の處分を行ひたる人、即ち上田侯なることを知り、

漸やく傳説の一概に排す可からざる、とを感す。顧ふに當時沒收の品を幕府の手に歸せず、當該の官吏擅まゝに自家の手に收めたる歟。其往々にして出づる淀屋の舊什は、或は侯より拜領の物なるも未だ知る可からず。

○方今薩摩琵琶の奏する「城山」の一曲は勝海舟作る所、其の譜は西幸吉に依つて成る。海舟は西郷に知己を以て許したる人。西は西郷幕下の人、西南の役、西郷の爲めに戦うて官軍に捕はれ、後釋放を得たる者。此作、此譜、西郷に頗る縁あり、此曲、人の感動を博する、偶然にあらず。想ふに海舟の詩歌俳句敢て少しとせず、然れども其詩歌は恐らく一篇と雖も後世に傳はること無けん、唯だ傳はるべきは此一曲あるのみ。

○支那人、讀書、飲酒の要訣を説く。謝少連の讀書の訣に云く、



讀書須少年、僻地、靜夜、早晨、  
阮堅之の飲酒の訣に云く、

飲酒須談酒、小杯、細談、久坐、  
余最も酒訣を喜ぶ。

○「徐氏筆精」に李益の「馬汗凍成霜」の句を録して曰く、人は謂ふ冬月豈汗馬あらんやと、然れども奇妙の處此に在り、理を以て詩を論ずれば、之を遠きに失ふと。「筆精」の著者、冬月馭馬の經驗を缺くに似たり。「馬汗凍成霜」は詩人の寓言にあらず、事實也。余嘗つて冬天馬車を驅り、信州追分を過ぐ。此日寒氣凜烈、膚粟を生ず。車中、携帶のブランデーを傾け、温を取らんとす。一瓶を倒すも醉を發せず。二頭の馬、御者の苛鞭を受けて疾走するを見れば、滿身雪を被むるが如く白し。これ流汗の凍結したるもの。寒地の人皆之を知れども、「筆精」の爲めに之れを辯す。

○徳川期の戯作書の標題に今人の解し難き者多し。「野傾旅葛籠」「傾城野群談」「茶傾腹立顔」「野白内證鑑」、此等は多く男色と女色を兼叙の書なり。野は龍陽即ち野郎の約、傾は傾城、白は素人、茶は茶屋の約。「剝野老」「野郎蟲」亦男色の書なり。蟲といふは人を毒するの意。剝といふは財を蕩盡せしめて赤保となすの意。男色流行當時を解せざれば、書名も亦解し得ざる也。

○コンニヤク本、洒落本といふもの、皆な口語體の文を行り、花柳の情事を叙す。而かも其の書名、多く漢籍の名に普通のものを取るは、内容と調和を缺くに似たり。當時漢學流行し、漢籍の名、人耳に熟す、之れに倣うて名を撰ぶ、必ずしも其理無きにあらず。然れども其因寧ろ他に在り、名を漢籍に假り漢學者流を罵倒する、一種皮肉の猾手段と見るべき歟。左に四五の書名を擧ぐ。

一廓通遊子 一故契三唱

一巨慶三笑 一契國策

一格子戲語 一通神孔釋三彩色

一文選臥坐 一起承轉合

一三體誌 一酒徒雅

一記原情話 一和唐珍解

一船頭深話 一遊子方言

一醒世恒言 一梅花冰裂

○關東地大いに震ふの日、余偶々坪内逍遙と大隈會館に在り、食卓に着き、箸を下さんとする刹那、此事あり。次日逍遙兄、寄するに國歌數章を以つてす。今こゝに收めて記念とす。

ノアの世の出みづもかくや荒れくるふ

火の海のうちに家ひとほろぶ

大なぬゆり大火あれて三も年の

人の力の跡かたもなし

たかぶれる人の心とそり立ちし

石の高どの微塵となりぬ

いしすゑゆ築きなほすとなぬせしか

人のしわざも人のこゝろも

蟲一つ宿る草なき焼け原に

むさし野の秋の夜をおもふ

○大正十四年秋朝鮮に大洪水あり、龍山鐵道の圖書館水中に没す、館員皆身を以つて免る。水去る後、館内を検するに、書架悉く顛覆して一も立つものなし。書架は抵れ高さ七尺、洋籍滿ちて重量大なり、水中に没すと雖もその位置を保ち得べきに似たり。然るに館員の報を聽くに、書架其五分の四を水に没するに迫んでは到底顛覆を免れずと。一種水壓の實驗、留意を要す。

○今の所謂翻譯、意譯、直譯、義譯の語は何人の案出に係るか、余未だ知らず。偶々杉田玄白の「解體



新書」の凡例を見るに、翻譯、直譯、義譯の由る所を知り得たり、乃ち左に其全文を抄す。

譯有三等、一曰翻譯、二曰義譯、三曰直譯、如和蘭呼曰<sup>ベネアレン</sup>、題驗<sup>カフカヤ</sup>者即骨也、則譯曰骨、翻譯是也、又如呼曰<sup>カフカヤ</sup>加蠟假骨者、謂骨而軟者也、加蠟假者、謂<sup>カフカヤ</sup>如鼠鬚<sup>カフカヤ</sup>器音<sup>カフカヤ</sup>然也、蓋取義於脆軟、備者備題驗之略語也、則譯曰軟骨、義譯是也、又如呼曰<sup>カフカヤ</sup>機里爾<sup>カフカヤ</sup>者、無<sup>カフカヤ</sup>語可<sup>カフカヤ</sup>當、無<sup>カフカヤ</sup>義可<sup>カフカヤ</sup>解、則譯曰<sup>カフカヤ</sup>機里爾、直譯是也、余之譯例皆如是也、讀者思諸、

是れに由つて觀るに、譯の通用語は此書に發するに似たり、但だ意譯を闕けども、義譯之にちかし。

○別項「烟草禮讚」に烟草の禁令の行はれ難きを云うて詳悉せず。偶々「博學彙書」第二を閱するに、支那萬曆年間、禁煙の令、惡弊を生じ、禁を解きたる事を擧ぐ。左に録して「禮讚」の補遺に充つ。

烟草本艸未<sup>レ</sup>載、萬曆年間偶見<sup>ニ</sup>閩人有<sup>ニ</sup>食<sup>レ</sup>之者、崇

禎年間食者頗多、崇禎先帝禁<sup>レ</sup>之、至<sup>ニ</sup>于殺<sup>ニ</sup>賣<sup>レ</sup>烟者、以<sup>レ</sup>儆<sup>レ</sup>之、州縣貪墨之官吏借<sup>ニ</sup>此名<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>破<sup>レ</sup>人之家<sup>ニ</sup>者不可<sup>レ</sup>勝計、晚年帝始諭<sup>ニ</sup>内外<sup>ニ</sup>弛<sup>ニ</sup>其禁<sup>ニ</sup>、言此烟可<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>酒而不<sup>レ</sup>損<sup>レ</sup>人、當時至<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>大辟<sup>ニ</sup>處<sup>レ</sup>貨易者、何有<sup>ニ</sup>廷之無<sup>ニ</sup>直諫<sup>ニ</sup>耶、今則海内兒童婦女皆用<sup>レ</sup>之矣、銀筒竹筒入<sup>ニ</sup>口中<sup>ニ</sup>、少頃即醉、此則眞酒艸也

酒艸亦烟草の一名とすべき歟。

○外國に赴く者に交付する旅行券の形式、今は簡略のものなれども、徳川末期の渡航免狀に録したる條件は甚だ繁雜也。曰く、外人より金を借る莫かれ、曰く、已むを得ず金を借らば、歸國の時必ず返金すべし、曰く、日本同士の交深切なるを要す、曰く、外人を殺傷す可からず、曰く、他の國籍に入るを許さず、曰く、宗教を改むるを得ずと、煩雜眞に驚く可き者あり、亦以つて時勢の相違を見るべき歟。

○山崎博士(覺次郎)の先考、松崎慊堂に師事し、頗る酒を嗜む。曾つて西京の陶工三浦竹泉に託して盃を作り、之れを同好に頒つ。余博士と舊あり、余の酒を嗜むを知り、贈るに此盃を以てす。頗る大盃なり。匣中一小箋あり、二行の語あり、曰く「一飲限<sup>ニ</sup>二盞<sup>ニ</sup>、銘曰、厄思也、再斯可<sup>レ</sup>」、慊堂<sup>ニ</sup>、蓋し「慊堂日曆」中より親筆を摸刻したる者也。博士の先考の特に此銘を採りたるは、節酒の箴となすにあらん。而かも一飲二盞に限るは酒客の忍ぶ能はざる所、此の盃の殊に大なる所以、亦推するに難からず。

○老子は、楚の苦縣、厲郷、曲仁里の人也。其の地名皆人の嫌厭を買ふの字を冠す。老子の如き風格と理想を有する人を産するは偶然にあらずと。漢字に意を用ゐる日支の人より此説を聽かず、却つて老子研究家英人ドグラスより之れを聽くは奇也。

○人あり、建仁寺の僧河清に楨面に賛を請ふ。河清

直ちに筆を下して曰く、

見時如<sup>ニ</sup>白水<sup>ニ</sup>、飲則勝<sup>ニ</sup>丹砂<sup>ニ</sup>、八十老翁面、春風二月花、

○支那婦人の名、皆瑰麗の語を選んで命ず、風趣揃すべきものあつて輕浮に落ちず。但だ妾の名は綺語を選べども、多くは諧味を帯び、莊重を闕くを覺ゆ。

史上に見る妾の名は左の如し。

比紅兒	羅虬	柳	姪	韓翹
園桃	韓退之	荅	柳	同上
朝雲	東坡	翠	翹	同上
眞珠	唐牛奇章	鶯	々	元稹
燕々	東坡	晒	々	張建封
紅々		蘇	小々	
愛々				

○「沈氏筆談」に云く、自から畫の善惡眞贋を判ずる能はず、人の言に依つて取捨する、之れを耳鑑と



云ふと。今の世、耳鑑者流甚だ少からず。

○狩野芳崖、氣を貢ひ權貴に屈せず。某侯嘗て芳崖に畫を囑す。芳崖十數日其邸に臨めども、毎日烟を吹き、茶菓を喫し、晩酌を採る耳。一日、執事、芳崖を責む、曰く、何ぞ早く筆を執らざる。芳崖曰く、俗物言ふをやめよ、余が苦心は毎日喫茶飲酒の間に在り、筆を執る時は則ち畫の成る時なりと。

○天明八年の刊、山東京傳の著「吉原楊子」に娼樓の事情を叙す。中に就て、一嫖客磁石と綽名する者を點出し來る。此の綽名の由來を問へば、日々志す所北に在りと云ふ。讀んで一嘖を發す。

○香魚は美濃の長良川の産を佳とし、鵜の捕りたるを特に上品と爲す。明治天皇之れを嗜ませ給へるが故に、長良の漁家、殊に鵜を操縦する七家幸を得ること甚し。他の漁家之れを猜み、揚言して曰く、鵜齒の痕に毒を藏すと。宮内省依つて細査し、其無

毒を認むと。是れより鵜齒の痕を留むる香魚頓みに聲價を増す。狡獪の徒、亦隨つて齒痕を贋作するに至る。

○今の陸海軍に大尉中尉少尉の名あるは、高野長英譯する所の「三兵タツテケ」より來ると。曾つて後藤子爵語る。

○蘭醫杉田鶴齋の「形影夜話」を讀む。中に食物の消化に四段あることを説く、蓋し蘭説に據る也。其説に云く、凡人の飲食、蓋し四化あり。一を刀化と云ふ。粗上宰割キリキリこれなり。二を火化といふ。烹煮熟爛ニクニクこれなり。三を口化といふ。細嚼緩嚥チヂミこれなり。四を胃化といふ。蒸變傳送チヂミこれなりと。腹中に入るに先だち三化あるを説くは、精にして切なりと謂ふべし。

○茶人の腐心するは湯加減に在り、之れを湯候と云ふ。湯候の如何は直覺に依つて判じ得るのみ、口授

す可からず。茶人は之れを鳥の啐啄に譬ふ。鳥の卵子を温めて雛漸やく長じ、自から殻を破つて出てんとする時、母は其即刻恰かも嘴を以つて殻を衝き破る、其の氣合、内外眞に相合す。湯候も亦此呼吸無かる可からずと。

○「鐵は熱したる時に打たざる可からず」是れ西洋の諺也。機逸す可からずと云ふの外、積極的強烈の意味あり。吾れ此語を愛す。

○坂本龍馬の背に大なる「ホコロ」あり、寸餘の毛叢生す。龍馬の名のある所以。

○江藤新平、佐賀藩に仕ふるの日、罪を獲て山中に謫居し、「謫居嘔語」を著す。中に就て自由貿易を唱ふる一篇あり。其論旨、國際的自由貿易にあらず、各藩の間に有無相通せんことを主張したる者なり。獨逸の聯邦にも嘗て日本と同様の事情あり、隨つて江藤と同一の議を建てたる學者あり。江藤、洋學に通

せざれども一種の識見あり。其司法卿となり、娼妓を解放せんとするや、自から布達案を作る、曰く、娼妓は牛馬と一般、既に牛馬に齊し、如何ぞ債をハタルを得んやと。

○太陽系の軌道に周轉する諸星の内、往々軌道を逸して地球に近かんとするものあり、邦人之れを夜這星といふ。洋人亦此星を呼ぶに同じく閨房の語を用ぬ、「エロス」と云ふも奇なり。性慾を色と云ひ、「エロス」といふ、其の音の同一なる既に奇。脱軌の星を東西性慾に譬ふ、更らに奇と謂ふべし。

○骨董舖に會心の物あり、價を問へば不廉甚し。余曰く、卿等は趣味の賊なり、折角面白きものを面白からざらしむと。價も或る度を超え、貪の域に入れば、物珍を失ひ、興味索然たり。

○「讀書錄」に云く、感中有寂、寂中有感と、余此語を愛す。



○雷同は、商家の努力して研究を要する心理作用なり。廣告術、畢竟雷同を挑發し鼓吹する術のみ。

○私語は人耳を傾く。喫緊の事、低聲に語るを要す。

○國亂れて身を殉ずるは易し、世治つて身を護するは難し。乃木將軍難きを爲す者たるを失はず。但だ此故を以て不出世の傑と爲すは吾輩服せず。

○婦人に貴ぶ者は貞節、而して操守の嚴は偏狹を意味す、婦人の偏狹遂に咎む可からず。

○三伏苦熱を云ふは斗米足る人の事、貧人何ぞ暑熱を言はん。渠等終日營々僅かに一日の糧を得、渠等の清涼は是れ。

○廣く人に交はる、可也、唯だ泛交は不可也。泛交は無意味にして益あるなし、其終局贏ち得るは多額なる香典の支出のみ。

○三伏の炎熱皆冷を思ふ、唯だ此時に於ても冷を欲せざるは、曰く戀、曰く羨。

○雷に縁故ある大槻如電、亡友柏木探古の逸事を語る。曰く、探古雷を恐るゝこと度に過ぐ。彼れは避雷の爲め經營慘憺、人をして一笑を禁じ得ざらしむる者あり。彼れは蚊帳の釣緒を特に萌黄に染めて感電を防ぐことゝなし、床下より感電を慮つて碁盤の脚下に陶皿を置き、盤上に寢具を載す。微雷動けば倉皇之れに入り、屏息するを常とせりと。

○今の骨董界の所謂る珍品は皆陳品、今の書肆の所謂る珍本は實に陳本なり。新は珍ならず、陳にして始めて珍なり、之れを無用の用と云ふ。人は唯有用の用を知る、無用の用も亦知らざる可からず。

○越後小千谷に數學の大家あり、佐藤虎三郎と云ふ。雪山、子精、解池、皆其號なり。此人の著に「豫法圓理三台」と云ふ數學書あり。弘化三年、余が郷里水原に於て出版せらる。頃者専門家見て驚歎、世界的大著と爲す。小千谷の富豪西脇氏上版、世界の諸

大學に頒布の擧ありと聞く。燈臺下暗し、此著此著者、伊東元帥に依りて指摘せらる。

○中元の音物、扇子は會社より、團扇は商店より來る。齊しく風を煽るもの、一は方、一は圓。方を贈るもの店殿しく腰高く、圓を贈るもの店謙にして人の腰亦低し。偶然音物の形により、それゝを代表するも妙也。

○争うて人の上に立たんとし、排擠日夜これ方め、壓迫又壓迫の世の中、情の天地は別乾坤なり、情界はそれ天國の如き歟。芳原の花魁は古來客の上席に坐するを例とし、支那の遊治郎は他人の目前情婦に撃たるゝを誇りとす。

○戀は低聲に語るべきもの、低聲に語つて趣味あるもの、秋夜蟲のすだくと一般也。

○學校得業の青年兩三輩來り、處世の道を問ふ。余曰く、大抵は既に先輩に聽き了りたるならん、余重

れて言ふを要せず。唯だ何人も恐らく道破せざるものあり、極めて喫緊の事に屬す。他にあらず、諸君今後諸般の事に奮闘を要す、而して戀愛にも亦奮闘せざる可からず。余之れに對しても勝利を冀ふと。

○忘は時ありて大切なり。人は餘りに忘れざるが故に却て累を爲すことあり。例へば悪習慣の如き忘れたきものなり、誤まれる思想も忘れたきもの也。人世記憶術を學ぶ、諸子少しく健忘術を講ぜよ。

○世間、千歳の歴史を窮めて、今日を審かにせざるものあり、廣く萬般の事を知つて、一事にだも精通せざるものあり、此等は精力を徒らに消耗する者のみ。寧ろ千歳を觀んと欲すれば、今日を審かにせよ、億萬を知らんと欲すれば、一二を審かにせよ、經濟的に精神を用ゐるの法は是れ。

○一日、二三學徒と會す。余曰く、學者概ね處世の道を知らず、終世研究に没頭して竟に世にあらはれ



ざるもの多し。學者の世に處する、狭く深く修めて地平線を抜くに在り。今の學界の地平線は甚だ低し、之れを抜くは眞に容易なり。一事の研究に専らにして、少しく儕輩を抜けば、世人直ちに許すに大家を以てす。卿等何ぞ此の速成法に據らざる。但し茲に喫緊の一事あり、餘りに多く地平線を抜く莫かれ、世と隔れば低能者流能く辨する能はずと。是れ余一時の戲言なりと雖も、學徒眞面目に聽き、皆然りと爲す。

○故郷に歸省したる一客來りて曰く、吾れ故山を愛す、故山も歡んで吾れを迎ふと。余曰く、君の故山を愛する、君の言の如くならむ、故山の君を歡んで迎ふと云ふは、余邊りに信する能はず。顧ふに人の故山にあるの時、皆質直朴訥、故山と能く和す。而して其去つて都門に來るや、漸く浮華に流れて亦舊態を存せず。且つ志しを都門に得るもの、故山を忘

れて歸らざるもの十の八九、而して失脚都門に居る能はざる者、已むなく故山に歸る。嗚呼山水無情と雖も曷ぞ斯かる輕薄の徒を歡迎せんや。

○人吾れに長壽の法を問ふ。余曰く、餘りに賢なるも不可、餘りに愚なるも不可、賢愚の間に在るもの壽。餘りに富むも不可、餘りに貧なるも不可、貧富の間に在るもの壽。

○「山出しのまゝ」と標榜して販<sup>アキナ</sup>ふ者は單に薪炭あるのみ。うぶを喜ばざる世の中なること知るべし。

○平易の二字往々人の擯斥を受く、而も此二字ほど權威ある者あらず。英國民の誇りとする常識も、畢竟平易の知識のみ。支那の先輩亦嘗つて之れを道破す、曰く、道理妙なる處、却つて多く平易の處にありと、又曰く、平易民に近きを政の本と爲すと、眞に然り。

○大聲高調、細理を盡す能はず、慷慨激越の語、往

往聽者に悲憤の感を與へず。年少血氣の演説、此失を免かるゝ者少なし。

○讀んで壯快を覺ゆる語、演じて壯快ならざるものあり、讀んで感興を覺ゆるもの、話して平凡なるものあり。文章體の演説、動もすれば不成功に了る所以。

○言語文章、漫りに最大級の措辭を用ゐる勿れ。唯だ稗氣を告白し、識者の笑を博するのみ。

○人に於て重しとするは人格に在り。此處得れば、小過、疵とするに足らず。此處失へば、衆長、録するに足らず。

○人晩節を完うするに心を致さざる可からず。閱歷稱するに足るのたと雖も、末路を過てば、多年の功を一朝にして空しうす。或は萬物の終り衰凋を例とすと云ふ。然れども日既に暮れて烟霞却つて絢爛を見、歲將に逝かんとして橙橘更らに芳馨を放つを見

すや。晩年は人生の大晦日なり、掉尾一番を要す。

○夏時の快は、早起花に灑ぎ、室を拂うて香を焚き、靜坐半時間、客の襲ひ來らざる間にあり。

○早朝客の來るを厭ふ、唯だ花を齎らし贈るの客を喜ぶ。

○瓢を玩ぶ者、其の色澤に就て語る。曰く、多く酒を飲ましめざれば、玲瓏の紅色を發せずと。流石に瓢は酒器なり、酒徒と其態を同じうす。

○宇宙は男女兩性の寄合世帯なる哉。山河の風景、兩性に毫も縁なきが如し、而も仔細に分析すれば、亦是れ女性的曲線と男性的直線の抱合のみ。

○友人志賀矧川、歴史地理に通じ、且つ義を好む。嘗つて米國テキサス獨立(一八五三)の史を讀み、其のアラム戰役に於て節に殉したるホナムが重圍を脱して援軍を乞ひたる事蹟の、吾が長篠の役に鳥居強右衛門が圍を脱して急を本營に報じて節に殉したる



と、東西義烈の迹甚だ相似たるに思到り、前年特に石材を鳥居の故土に取り、自ら詩を賦してホナム殉難の事歴を刻し、之れをテキサス州サン・アントニオに於けるアラモ寺の古戦場に建てたり。當時碑の拓本を米國に在る君より寄せられ、頗る君の義を好むの厚きに感じたり。大正四年、偶々岡崎町に家康忠勝の三百年祭を行ふ。矧川一小冊子を著し、アラモの戦と長篠の戦と兩々對照、事情の甚だ同じきを説き、之れを同人に頒つと共に、アラモ表彰碑の拓本を日本のアラモなる鳥居が長篠の危急を報ぜし岡崎城の石壁に掲げ、以て東西意氣の契合を示したり。余之れを聞いて益々矧川の擧に感ず。世人往々此等の案無きに非ず、而も之れを行ふもの少れなり。矧川の擧は、直ちに時俗に對する頂門の一針と云ふべき歟。矧川は岡崎の出身なり。

○朱舜水、明末の國難に遇うて日本に通る、恰かも

康有爲等が日本に來ると一般也。而して朱康の人物學識を比較するに、恐らく朱、康に及ばず。朱は進士及第もせざる田舎學者のみ。之れを傑物の如く持て囃さしむるに至りたるは、水戸藩の鼓吹與つて大いに力あり。

○水戸藩は、一種の見識を以つて朱舜水を聘したる如く、例の自尊的筆法を以つてえらさうに言ひ居れども、實は然らず。幕府の記録に徴するに水戸御預けとありて、事實御預けに相違なし。恰かも陳元贊を尾州徳川、李梅溪を紀州徳川に預けたると同筆法也。當初幕府は明朝を憚り、遁竄の彼等を顧みることなかりき。明朝滅亡して繫累全く無きを見て、始めて三家に預けたり。而して流離の間、何人が朱舜水を扶けたる。曰く、安東省庵即ち其人なり。幕府より預けらるゝに迨び、初めて款待したりとて識者は水戸の手柄顔なるを許さず。何人も顧みざりし際に

扶けたる省庵こそ稱するに足れ。朱舜水が終生省庵に許すに知己を以てせる、偶然にあらず。

○明末支那の騷亂は、日本に非常の刺激を與へたり。三代將軍寛永度の瓊國は、原因一にあらざれども、對支の政策、其主因と解せざるを得ず。畢竟三代將軍國內の一致を得、能く平和を維持し得たるは、隣邦の國難に見て恐怖したる結果のみ。三代將軍は眞に幸運兒と謂ふ可し。

○韃靼人は當時非常に恐れられたり。朝鮮も、寛永年間、遂に之れが爲めに征服せらる。當時日本も薄氣味わるく、特に朝鮮に使を派し、援軍を送らんことを交渉せしに、朝鮮は嚴に謝絶したり。蓋し韃靼人よりも日本人を恐れたるも道理、文祿の役は彼れ忘れんとして忘るゝ能はざるが故也。但し朝鮮の識者中、日本の援兵を藉るべしと議せしもあり。曰く、日本人砲術に長ずと。此等の事實は朝鮮の文書に載

せて明かなり。

○日光廟に朝鮮國王宸翰八字の額を掲ぐ、是れ朝鮮王が我が壓迫を受けたる記念碑とも言ふべきもの。當時朝鮮國、韃靼に困しめられつゝある時に乘じ、宗對馬守、徳川氏に對する忠義立に、強制して書かしたる者。而して宸翰を齎らしたる韓使を特に日光まで行くを強制したり。後幾ばくもなく朝鮮、韃靼に降る。此額蓋し朝鮮王、位を去らんとする名残の筆と云ふべし。

○日光廟に和蘭製の燈籠あり、これも壓迫の獻上品なり。即ち濱田屋嘉兵衛、彼の國の王子を擒にして歸り、之れを放つに當り強ひて求めたるもの、即ち是れ也。實は外國の獻品のみならず、諸大名の獻品も多くは壓迫に因す。然らば日光満山の美觀は壓迫の結晶とも言ふ可き歟。

○徳川幕府が朝鮮の聘使に對し費したる經費、多きは十九萬兩に達す。此外沿道諸侯の費したるも亦少



なからざるべく、彦根藩の如き、特に盛大なる饗應をなしたる事實あり。單に幕府の十九萬兩に止まるとするも今の二百萬圓に當る、多費實に驚くに堪へたり。當時幕府の對韓政略、以つて窺ふべき歟。

○朝鮮は當時吾が使節を釜山浦に於て遮り、京城に入らしめざりに反し、日本に於ては強ひて日光迄行かしたたり。徳川の末年、日本も朝鮮流となり、對馬に於て韓使と會見することゝなる。此變遷は國運の消長を間接に云ふものなり。朝鮮の私乘に徴するに、彼れの信使は、日本に來り、到る處款待を受け贈遺を得るを以つて大なる役得となしたりとあり。

隨つて應接所を對馬に移すに及んで、朝鮮側に内實苦情を鳴らしたる者ありしも宜なり。

○高野山金剛峰寺を訪うて古文書を閲覽せる一友人語る。古文書中、圖らず直江兼續の一書を得たり。蓋し當時の住職某僧に與へたるものにて、此僧は兼

續の兄なり。文中、所藏の書畫珍寶を二十七隻の船に分載して送る事を云々す、兼續最後の覺悟を定めたる時の書なること知るべし。惟ふに兼續手澤の遺什は、多く金剛峰寺に存すべくして今存せざるは、同祿の災に罹りたる歟。惜むべし。

○井原西鶴の眞蹟甚だ稀れにして、東都に在るもの多くは贋物なり、但だ浪華に往々眞蹟を藏する者あり。曾て水落露石の居を訪うて俳句の短冊を觀る、句書共に佳なり。曰く、

萬思ふまゝならぬこそうらめし、月夜に人目、  
闇にひとりね 西鶴

夜のにしき浮世は晝のほたる哉  
○俳人大江丸、門人の名吟に感じ、激賞措かず、終に譲り受けて自家の集に入る、句に云く、

をし鳥よひと夜別れて戀をしれ  
此句の短冊も露石の架中に在り。露石又他に大江丸

の什を示す。

ひと、勢のうちまたものよ冬の梅

此等の句は、俳諧を解せざる余と雖も、年を経て終に忘るゝ能はざる也。

○前嶋男の別業、伊豆の蘆名にあり、山に倚り海を望み、形勝甚だ佳なり。書樓に一篇額を掲げて三字を書す、曰く、餘地堂。山岡鐵舟、明治初年の揮毫に係る。余男に堂號の由來を問ふ。男云く、維新勿勿の際、年壯氣銳の徒輕舉往々事を誤る、余常に此等の徒を戒む、曰く、事を企つ、必らず多少の餘地を存せよと。當時余を呼ぶに「餘地堂」の名を以てするに至る。一日鐵舟余の居に來り、酒間三字を書す、即ち是なりと。余男を知る三十餘年、而して男に此の別號あるを知らず、此扁額も亦始めて見る所なり。  
○女子破瓜の期に達すれば、渾身肉豊かなり、俗に之を色肉と云ふ。而して醫學家は曰く、是れ懷妊に

對する自然準備なりと。

○花を携へて道を行くものを見るに、花を損はんことを虞れて慇懃いたはるの狀殊勝也、價の貴からざるものにて鄭重の待遇を受くるは花なる哉。贈を受けたるものも之れを粗略にせず、必らず瓶に挿んで床上に置く、花の徳と謂ふべき歟。

○足尾銅山より歸來の一客、余に贈るに一函の菓子以て運、根、鈍の三字を印す。此三字は故古河銅山王の箴言也、足尾に作る菓子には恰當の意匠也。

○藝妓の戀は素人の戀よりも激切なり、思はぬ人に思はれ、其都度戀を刺激するに因る。

○不見轉藝妓、貞操ある妓に對して言ふ、卿未だ戀の痛切を解するに至らず、欲せざる客に接してこそ情人に對する戀を痛切に感するなれと、蓋し前と同理也。



○大人物に投票する莫かれ、中人物に投票せよ。大人物は自家の抱負あり、選挙人の請託に耳を藉さず、中人物は能く選挙人に聴く、中人物こそ眞個に民意を代表すと。是れ逐鹿場裡に所謂る運動員が大人物を排して己が候補に幸ひせんと仕組みたる遊説法也。此説固より非なりと雖も、而も俗衆を動かして效あり、何れの邦土に於ても代議制下に第一の人を得ざるはこれが故耳。

○吳服屋は婦人の撞場也、夫婦相伴うて行く、良人は閑却せられ、唯だ後へに従ふのみ。寄語す、男子は此場を婦人に譲るべし、女子の撞場は日本に於て殊に少なし。

○深遠なる學識ある者の教授は平易なり、卑近なり、學問淺薄の人の講義は却つて高尚也、學徒漫りに高尚の説を喜ぶ、卒業上りの青二才に一條の活路ある所以也。

○曾て三絃の名手と話す、其人曰く、どうも今の人は歌を弾かず、三味線をひくに困ると、余其至言に感ず。白樂天の詩に云く、「古人唱<sub>レ</sub>歌兼唱<sub>レ</sub>情、今人唱<sub>レ</sub>歌只唱<sub>レ</sub>聲」と、古今同歎。

○冬心齋「研々錄」に銘して曰く、「雲一縷朝々暮々潤如<sub>レ</sub>許、豈待<sub>レ</sub>玉女披<sub>レ</sub>衣而後作<sub>レ</sub>雨耶」、如此き願語、邦人の企及し得ざる所。

○支那の都々一子曰く「相思極處反相恨、何<sub>レ</sub>似當初莫<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>君」

○大丸吳服店主下村正太郎余と舊あり、嘗つて京都の居を訪うて其所藏の書畫を觀る、中に俳人春坡の俳句一幅あり。春坡は蕪村門人にて下村の一族也。句に曰く、

飛び過ぎて、鼻打つ蛙哉  
と、大丸が後年突飛の改革に蹉跌するを前知し、暗に諷したる趣あり、余感吟措かず、主人に勸むるに座

右の箴となさんことを以てす。事は十數年前に在り。○野口英世歸米の後一日、日本大使と相携へて郊外に散策中、驟雨に會ふ。途上の男女之れを見て曰く、あれは野口博士なり、雨に濡らす可からずと、争うて傘を獻じ、こゝに四五男女の間に競争を生じ、博士爲めに趨舍に窮す。而して大使に對しては皆知らざるものゝ如く、何人も顧みる所なかりきと。博士の米人に珍重せらるゝ一端を見るべき歟。

○神戸の鹿嶋秀磨と話次潜水夫の事に及ぶ。鹿島云く、潜水の人に空氣を供給するの業は死活の繫る所、事容易なるに似て、其實緩急の加減細心の注意を要す。甚だ緩なる可からず、甚だ急なる可からず、苟くも懈怠あれば水中の人窒息す。神戸に於ては、例として送氣器を操縦する者に潜水者の妻を用ゐる。妻なき者は親近の婦人を用ゐると。余聽いて感ずらく、婦人は細心のものなり、之を用ゐる固より可、

妻をして良人の命の繩を取らしむるに至つては益々可也、情理共にヨリ以上の技師ある可からず、潜水夫を業とする者の家族の、器の操縦に心得あるべきは言ふを要せず。

○西洋の諺に「アングラー・シャツ(襯衣)ほど昵近の者なし」と、夫婦骨肉如何に近しと云ふと雖も、終に襯衣の近きに及ばざる也。秦豊吉、名優澤村田之助の錦繪研究に襦袢を形容して此間の消息を言ふ、曰く「蛇のやうに女の皮膚に食ひ入り纏ひつき波うち重なり蟠るものは唯肌着ばかりである」、又曰く「女は其生涯を暖く柔かく蒸さるゝ如き肌着の内に懶く太陽の光に背いて身を包む」と、體の秘密を知る者は唯だ肌着あるのみ。

○夏時村落に傲然たるはカボチャ、唐瓜、夕顔の棚などブラ／＼吊り下り居ると、半裸體の婦人が黒く肥えたる乳を臆面もなくブラ／＼現はし居ると也。



渠等は兩々ブラ／＼を競争するに似たり、亦是れ天真爛漫の一光景也。

○某歴史家と對話中、水戸家の記録の事に及ぶ。其人曰く、烈公の座右日記こそ眞に奇怪のものなれ。烈公機密の外に漏れんことを恐れ、特に一種の假名を電信符號の如く作り、之を以て秘書をして日々機密に渉るの日記を叙せしめ、機密に與る重臣との往復文書にも亦此符號を用ゐしめたり。此符號、卒然として見ればタクミありとも見ゆべき好き趣向に似たれども、符號を知らざれば後世日記を解し難き不便あり。曾て藤田東湖斯かる事の幕府の嫌疑を招く種子たらんを憂ひ、一再ならず烈公に廢めんことを勸む、烈公終に聽かずと。知らず、此符號臺帳今尙ほ水戸に存するや否やを。

○久保田米僊、曾つて幸野梅嶺を訪ふ、梅嶺厨に在り、應と答へて出て、迎へす。米僊怪んで厨に廻り

見れば、澤庵漬の桶上に在りて坐す。其故を問へば曰く、今下婢を馳せ壓石を市に買はしむ、而して未だ歸らず、請ふ暫く待て、こゝを去る能はずと。

○神樂江卷石、一種の風骨あり、南畫を善くす、得意の作あれば携へ來り、余に贈るを例とす。卷石自ら曰く、吾れ未だ大先生たるを得ず、然れども中先生たるを得べしと、自ら中先生の三字を刻して常用の印とす。曾て某旗亭に招飲す、僅かに配膳終る、卷石膳部中一大牡蠣あるに囑目し、諦視多時、終に携へて室外に出づ。物色すれば既に去て在らず。他日卷石に會して故を問ふ。卷石謝して曰く、非凡なる牡蠣を見、フト石菖を入れて見たくなり、折角の款待を忘れて匆匆歸宅したりと。卷石の畫に匠氣なきは此風格あるに由る、如斯きの人近來甚だ少くなれり。

○伊藤仁齋の家、今尙京都堀川に在り、儒家にして儼然家聲を墜さざる者、此家の如きは少れなり。曾

て聞く、伊藤家に一個の抹茶々碗を藏す。伊藤氏元と堺の人、居を京師に移すに當り、茶碗に盛るに小判を以てし、祕かに携へ、之れを以て家を興すの資とせりと。此茶碗即ち同家發祥の器なり、器の珍藏せらるゝ所以也。

○伊藤家を訪問の人語る。同家に孔子を祭る廟あり、扁して「仁齋」と云ふ、仁齋先生の號、之より來るが如し。

○大概如電曰く、島田蕃根長逝の日、關根只誠倉皇訪ひ來り、戸外より近火々々と呼ぶ。余驚いて何れに火災ありやと問ふ、只誠依つて蕃根の死を報ず。蕃根と余等兩人同甲なり、友人の死を以て近火と爲す所以也。

○余の常用の封印「五大力」の三字を古篆に刻す。人多く其意を解せず、實は大俗を雅化したる者のみ。元祿の頃、俗間迷信流行す、曰く、五大力明王の護

符を信書と同封すれば、其書無難に速達すと。後漸く略して封筒の上に五大力の三字を書するに至る、恰かも今日封じ目に緘字を書すると一般。余の印文の出典如斯し。

○濫教育をなし、月謝の收入を貪る學校は學問の商店也。支那に於ては之れを學店と云ふ。

○獨は人の知らざる所、而して己れのみ知る所也。此の秘密の處に虚心平氣に精思せよ、自から恠怍たらざる者幾許ぞ。

○人事毎に異を樹て、以つて自ら高しとするものあり、吾輩取らず。佐藤一齋曰く、日常の事大抵世俗に従ふ可、但だ事大節に關するもの世俗に従ふを要せずと、洵に然り。苟くも出處進退に關し、我を主とするの時、世に媚び俗に倣するを要せざる也。

○野口英世海外に在りて學名高く、本邦の醫界、此人を誇とするに至る。圖らざりき、此人、熟知齒科



醫血脇守之助門下の人ならんとは。余嘗て血脇氏に戯れて曰く、君の一生の誇とすべきは、齒科専門學校を創立し、幾千の齒科醫を出したるにあらず、唯だ一の野口氏を出したるに在りと。血脇氏は窮苦の間に野口氏に學資を給し、野口氏の今日あるを致せり。

○鐘鼎古器の骨董舖に於けるは錦欄の女帯の吳服店に於けると一般、百金と云ふも可、二百金と云ふも可、二舖の巨利を博するは、主として此の二品に在り。想ふに商賣の秘訣は、人の廉ならんことを欲する者を廉賣して、價の高きを意とせざる者に依つて償ふにある歟。

○書畫骨董、己れの趣味に投する者を購ふは可、眞贋を人に圖つて定むるも亦た妨げず。己れ趣味を覺えず、單に人の推獎に聽き購ふは不可也。如此きは趣味と相關せず。或は人に誇らんが爲めに、或は他

日價を倍して賣らんが爲めに購ふものあり、これも亦趣味と相關せず。

○浮田和民博士自から學究を以つて居り、讀書の外道樂なし、唯謠曲を學び、能を見て喜ぶ。余嘗つて能の趣味を問ふ。曰く、余敢て能を解せず、唯心を安んじて觀賞し得るは余の快とする所也と。余重ねて安心の所以を問ふ。曰く、余何事に就ても説なき能はず、宗教に就ても時に疑惑を發して自から苦悶す。單り能は時代の骨董物、絶對に變改を許さず、可否の論議全く無用なり。觀て心思を勞せざる如斯きもの、天地間他にある無し、余の安心して之を見る所以。而して往々之れを觀て坐睡を催す、是れ亦余の喜ぶ所以也と。浮田博士一流の觀察也。

○嘗つて故五峰坂口兄(仁一郎)より、卷菱湖の書簡一卷を贈らる。卷中四五の書簡を收む、皆な余が郷國村松濱平野安之丞に與へたるもの、蓋し平野氏舊

藏也。安之丞鷗邊と號す、菱湖の門人也。既に師弟の關係あり、其往復、往々秘事を漏らすも宜なり。一簡に六郷兵庫頭の依頼に依り三千兩の米の津出しを請ふあり。當時湊の外、米の積出を許さざる制なり、是に據つて平野氏が密輸出をなしたることを知る。又智恩院門主の菱湖に與へたる和歌を載す、曰く、

菱湖が字をうつすを見て

華頂王

かしこくも見るぞ嬉しき素直なる

むかしわすれぬ筆のすさびを

智恩院門主賜歌の事實は、家藏菱翁自筆由緒書に記しあれど、和歌は略して載せず、此書簡に依り初めて和歌を得たり。一簡妻の死を報じ、一簡歿後の事を云々す。曰く、「一昨年より兩度離縁、實は厄介人並に縁者共不心得にて右の仕末、とても届かぬ事と

明らか此節は召遣にいたし、先穩成體に相成申候」と、先妻の歿後二年ならずして二人迄娶る、家庭の紛々見るべし。又新潟の實家の借財整理に低利の金を借らんことを請ふの一簡あり。皆な菱翁の傳を補ふの資料に充つべし。余此の一卷を架中の珍となす。○大阪に有名なる高利貸あり、人呼んで鬼權と云ふ。嘗つて人を訴ふ。原被法庭に對決の日、鬼權、途上被告に會す。鬼權被告に謂つて曰く、君は法律上の敵なり、然れども經濟は別問題に屬す、茲に我れと君と共通の利益あり、君も恐らく同意せんと、路傍二人乗の人車を僦うて原被兩告同乗す。

○浪華に寓するの日、朝來雨あり、終日客無く、旅窓蕭然たり。行李中冬心齋の題語を出して讀む、遂に所感を録す。曰く、我邦、畫に題識あるは文人畫に始まる。文人の畫を作るは文を造ると一般、字を造るの代りに形象を作るとも謂ふべく、胸臆を叙するに



於て異なるなし、題語は此意味に於て畫の一部とも云ふを得べき歟。胸次畫して盡さざる所あり、題語以つて之を補ふなり。字と畫と形同じからざる故を以つて別物となすは非也。渠等は字を以つて現はし得ざる所を畫し、畫を以つて現はし能はざる所を文を以つて言ふ。到底混融一體、兩々相離るゝ能はず。故に支那文墨大家の題語は、必らず畫に一段の光彩を添ふ。本邦文人亦之に倣ふと雖も往々贅の譏を免かれざる者、學力足らざるに依ると雖も、一は識語即ち畫なることを知らざるに坐す。竹田、山陽の徒僅かに此譏を免るゝ所以は、彼等此理を解するに因るのみ。兎角識語を題する者形式に流れ、往々圖畫を詩文に由りて形容するを能事とす。如此きは唯だ重複のみ、到底贅たるを免れず。圖畫の及ぶ能はざる所に文を藉る、於是識語始めて用あり。然れども此の補ふ意味に於ても往々形式に陥り、畫に就

て直ちに聯想し得べき事を云々する者多し、未だ以つて題語の要を得たりと云ふ能はず。單り支那文人殊に明清の人始めて常套を破り、抱懷を遺憾なく發揮し、畫に託して志を披瀝するものあり、畫を作るの意思を披白するあり、或は畫論を題し、或は故事典故を叙す。其の題する所多様にして、幾んど端倪す可からず、於是畫と題語と互ひに相俟つて趣を添ふ。僕支那文人畫を購ふに當り、殊に長識語あるを欲するも亦此の故也。

○人あり、寺崎廣業を訪うて其の畫名の喧しきを祝す。廣業笑つて曰く「藝の爲めと言はんよりは名の爲めなり」と。蓋し廣業の名必ずしも俗なりとせず、而も商家や所謂の擔ぎ家に氣受ける善き名なり、平易に云へば商賣繁昌と云ふの名なり。江都には今尙御幣を擔ぐもの少からず、中村不折の名をフ印として忌む者投機者流にあり。菱田春草短命の識を爲し

て早く亡ぶ、而して擔ぎ家亦之を厭ふ。名の畫家の運命を司る、廣業言ふ所の如き歟。

○廣業の書齋、山陽所書「廣業」の二字額を掲ぐ、余の客室又小竹所書「會所」の二字額を掲ぐ。俗と云へば共に俗なり。然れども俗中又一點の趣味あり。寺崎の偶々自家の名を録したる頼家の墨蹟を得たるは珍なり。余の會所の二字も、傍らに「信之初也」とありて「書左氏春秋語」と出典を録しあり、普通の看板とおのづから選を異にす、余の珍とする所以も茲に在り。余曩に此の額を浪華の書肆に得、問へば往時大阪の某町會所に掲げたる者と云ふ。余思へらく、余の居、朝來雜客菌集、一室會所の如し、此額用ゐるべしと、歸來相間に挿み、今尙存す。一日大阪の友人木崎好尙訪ひ來り、此額を見て驚いて曰く、圖らざりき、此の額を君の居に見んとは。是れ實は余の久しく客室に掲げたる者、君の藏となるを見

て、吾は人を得、處を得たるを喜ぶと。

○一夕某旗亭に尾崎号堂と飲む。余号堂の頭髮未だ白を交へざるを珍とし、且つ曰く、髭に聊か白を見るは流石に齡を白狀すと、号堂曰く、西洋の諺に、勞する所より白髪を生ずと、余の頭髮に白を交へざるは頭腦を勞せざるが故のみ。若夫れ髭に白を交ふるは原因あり、余喫烟を廢して爾來益々健啖、多く口舌を勞す、恐らく白を致す所以と。余曰く、寔に然り、唯だ君一大原因を逸す、君の口舌を勞する、豈啻飲食のみならんやと。共に哄然たり。

○森田節齋、氣節を以つて高く標持す、維新の際、河本杜太郎刺を通じて天下の大事を語り、終に曰く、吾輩事を擧げんとするも頭領を缺く、願くは先生起つて余等少壯の輩を統率せよと。河本の此請は蓋し節齋を買ひ冠りたる也、節齋看るゝ顔色蒼ざめ、座に堪へずして退き、又座に復せず。河本其の頼甲



妻なきを見て倉皇去り、其の家前の酒店に就き立ながら數杯を傾け、高聲節齋を罵倒して去る。學者の氣節アテになり難し、何ぞひとり節齋を病まんや。

○田舎を訪うて常に威容を感じるは素封家の第宅なり。其周邊を圍む老樹の亭々たる、其門戸の堂々たる、其主人の客に對するの懇懃なる、婢僕の主人に從順なる、其庭園の苦むして風韻ある、其座敷を飾る書畫調度のことさらならざる、皆な舊家に威容を添ふるものに非ざるはなし。

○越後魚沼郡降雪殊に深く、土を見る能はざるもの數月。郡民皆雪に飽き、土を思ふ。一客の新潟に來るものあり、街上塵埃の揚るを見て、快哉を叫ぶ。奇に似て奇にあらず、雪國の人情然らざるを得ざるなり。

○關西の俗、養子を迎へて家を繼がしむるもの多し、殊に養子をして事業を相續せしむる多し。是れ適材

を得るの佳習也。紀州に遊ぶの日、校友多く新和歌浦に會す。座中に名門の友數人あり、問へば皆な養子なり。彼等曰く、此地に養子俱樂部あり、養子の多き、知る可しと。余笑つて曰く、紀州は柑橋の産地として名あり、窃かに聞く、柑橋は他樹と接木せざれば佳果を得る能はずと、養子俱樂部の趣意書僕未だ見ずと雖も、恐らく文中此譬喩あらんと。

○偶々九段坂上に散策す、此夕恰かも兩國川開きに會し、佇立して火戲を觀る。想ふ、江戸繁昌の日、列藩諸侯相競うて火戲を演じ、滿都の歡呼連宵相躁ぐ。曾て人の語るを聞く、鍋島閑叟特に此戲を好み、毎年賞を投じて演ぜしむるを例とし、徹宵連發、終に百兩の烟火を打盡す能はざりきと。當時諸侯、一夜を占斷するを法とし、互ひに豪を競ふ、猶ほ今日某の日鍋島デー、某の日山内デーと云ふが如き者ありきと。今の富豪、廣告的に財を散じ富を街ふに拘ら

ず、此の快戲に資を投ずる者を聞かず。某々の成金家何ぞ諸侯の舊に倣はざるや。四疊半に一夕千金を散ずると孰れ。

○俳人大江丸の肖像一幅を齎らし示す者あり、自詠の句を題す、八十七歳の筆也。

春の花こんなおやぢや無つたな  
洒落の味掬すべし。

○湯淺半月來訪、余の書室に神山鳳陽の書幅を掲げあるを見、余の爲めに鳳陽の逸事を語る。鳳陽嚴格にして苟くも笑はず、門人畏れて仰ぎ見る者なし。家は京都蘇屋町に在り、庭園に梧桐の大樹あり、人多く之れを目標として訪問す。鳳陽正室に子なきを憂ひ、秘かに婢に通じ一男を擧ぐ、鳳陽喜ぶこと甚だし。門人に久保田米僊、谷口香嬌等、畫を善くする者あり、窃かに一卷の戲畫を作り、漢詩俳句を題し、署して桐の雨と云ふ、蓋し先生婢に通ずるの圖

なり。裝潢了り、密かに先生の几案の上に置き、先生の御機嫌如何を覗ふ。流石に翁も此の惡戲に對しては平素の嚴肅を保ちかれ、始めて破顔一笑したりと云ふ。此の一子不幸にして夭折す、翁落膽甚だしく、豫て譲らんことを期せし秘藏の一刀を售り、自から文を撰んで豐碑を建つ。其文情意備きに到り、一讀人をして同情に堪へざらしむと。

○先賢の書畫を見るに、其人自詠の詩歌無きにあらざるに、古歌古詩を題するを常とせり、謙意見えて奥床しく覺ゆ。近世は拙劣を意とせず、自作を題せざるを不見識となすに至れり。

○骨董の入札會に、札元、同業者に酒食を饗するを例とす。厘毫を争ふ商賈も、一杯を傾くれば、負けぬ氣街ひ氣茲に勃興して、動もすれば十露盤を度外に置くに至る。酒前沈着の氣を酒後遽かに浮躁に變じ、往々價ひを五倍十倍す。是れ札元が費を惜まず



響應を爲す所以也。酒は眞に十露盤を亂る者、唯だ飲を解せざる者此の戰場に於て獨り過なし。

○曾つて聞く、守田寶丹(治兵衛)大黒天を描くを日課とす。余頃日偶々人より一幅を贈らる、即ち日課の畫にして、首部に「日課第一千四百二十三號」「明治四十三年庚子八月二十四日」と書し、更に「午前三時二十六分起床、清水修行」とあり。中央に大黒天を圖し、其の上部に三行の書あり、曰く「第一品をよくし、第二價を安くし、第三おせじをよくすべし」と。而して大黒天の畫中に一日の收支を朱書す、曰く「小賣若干、卸賣若干、合計金若干、於帳場十世主人印」とあり。余他に二三紙を見る、皆此類にして一種の繪日記なり。而して毎紙起床の刻を見るに、早きは二時半、遅きも三時半、起されれば必ず清水浴を爲すを例とせり。寶丹の居常以つて見るべき也。

○嬰庭窠村、酒を嗜み、往々量を通して宿醒を感ず。窠村橋場に僑居の日、隣家と庭園相通じ、時々庭上隣家の主人と相見れども互ひに一語を發せず。某日窠村宿醒甚だしく、嘔吐苦悶の聲隣家に聴こゆ。忽ち隣家より一婢薬を齎らし來る、曰く、是れ宿醒を解くの劑なり、主人の命にて贈る、速かに服用せよと。平日相見て相語らざる隣人、こゝに始めて聲息を通す。隣人も亦酒徒にして宿醉の經驗あり、從來冠婚喪祭にも互ひに慶弔せざる者、酒の厄に會して初めて惻怛の情を發す、所謂同病相憐れむ者。

○窠村の冷語、往々骨を刺す者あり。曾つて其の紀行を見る。自序に、縦横詭譎を弄して旅舎の不自由に言及し、終に婢の口を藉り一冷語を發す、曰く、夜具粗にしてお氣に召しますまいが、お宅にいらつしやるお積りて御ふしう下さいと。貧生旅舎に傲る者に加ふるの一痛棒。

○一政客一藝妓互ひに相戀ふ、尾崎紅葉、短篇小説に其の情緒を叙し、終に藝妓をして奇抜の傲語を吐かしむ、曰く、妾となるにはあなたは餘りに貧なり、よし／＼意を決して正妻となつて上げませうと。余既に小説の名を忘る、而して今尙ほ此豪語を忘るゝ能はず。

○犬養木堂、善く人に戯る。曾つて夜間電燈を知らざる田舎漢の訪問を受け、其の輝く電光に驚駭しつゝあるに乗じて曰く、此燈の特色は、主人にあらざれば吹き消す能はざるに在り、請ふ起つて試みよと。田舎漢、力を極めて吹けども燈火滅せず。木堂曰く、吾の爲すを見よと、祕かに栓を捻り軽く吹く、而して急ち燈火滅す。木堂曰く、どうだ。

○至尊の脈を拜診するに、侍醫膝行玉體に接近するを例とす。維新の初め、佐藤尙中、侍醫に擧げられ、其の膝行の不可を論じ、人類本と直立動物たるを説

く。然れども匍匐の例今尙舊の如し。余曾つて某侍醫に就て云々す。某曰く、設令直立を許さるゝも、高貴の威嚴に打たれて匍匐せざるを得ずと。這般の事、理窟を以つて律す可きにあらざる也。

○某日早朝人を訪はんとし、時を約して自動車を作ふ。刻到り、門前轟々の聲あり、思へらく、自動車刻を違へず來ると、倉皇起つて玄関に到る。偶々一人門より入り來る、余謝して曰く、今より外出を要す、請ふ自動車に同乗して語らんと、共に車中に入り余傲然主席に坐し、客をして側らに坐せしめ、且つ馳せ且つ語る。行く十數町にして、一自動車の追ひ來るあり、背後より呼ぶ。余初めて客の自動車に誤り乗りたるを覺り、笑つて粗忽を謝す。客曰く、我れの自動車も亦賃借の者、君の誤認せるも敢て無理ならずと、哄然として相別る。

○近來自動車の便漸やく開らけ、東京以外の大市亦



之れを備ふ。昔日に比し便は則ち便なりと雖も、其の設備未だ完きを得ざるが故に、此便却つて不便を醸すことあり。余前年大隈侯に隨ひ、自動車を驅り桃山の御陵を拜す。歸途余の自動車故障を生じ、修理に時を移すも終に成らず、已むなく徒歩十數町、漸やく人車を得て旅館にかへる。疾走の便ある自動機關、一旦損すれば双脚を勞せざるを得ず。是れ便の極より不便の極に移る者、文明の利器、完備を闕けば、不便抵れ斯の如し。

○余が郷國柏崎の旅館に友人多く會したる時、隣室の一行、酔後食を思つて蕎麥を求む。夜更けたる故を以つて時を經れども辨せず。彼等懊惱、其到るを待つ能はず、自動車を僦つて旅館を出て、某所に到らんとす。途上蕎麥を搬び來るものに會す。彼等は自動車を停めて、車中之れを喫して去る。余翌朝之れを聽いて噴飯す。如斯きは都下に見る能はざる事

に屬す。

○某家に西郷南洲揮毫の四字額あり、文に云く「天下無雙」、蓋し力士小野川に與へたるもの。傳へ聞く、小野川の之れを得るや喜ぶこと甚しく、南洲に謝し且つ請うて曰く、願くは閣下の衣類の斷片を給へ、一たび閣下の身に觸れたる者は、汚穢のものとも雖も可なりと。南洲其故を問ふ、小野川曰く、之れを裝潢に用ゐて記念に充てんとすと。南洲點頭、直ちに其の着けたる小倉の袴を裂いて與ふ。此額もと袴地を以つて表装したるもの、今は改めて金装となす。思ふに小野川は寧ろ表装を解するもの、表装舊に復する、則ち可也。

○高森昌允の詠歌に云く「願はくは老いぬる今の心にて、はたち許りの身を得てしがな」老者には到底青年の及ばざる所あり、練達經驗、是れ實に老者が歳を積んで得る所のもの、蓋し老者の獨擅に屬す。

唯練達經驗を多く積む時は則ち其人墓に入る時也、惜むべきかな。若し廿歳前後にて老者の有するものを有せば如何に幸ならんも、是れ望むべきにあらず。少壯は此點に於て老者を崇敬せざる可からず。

○「勘定と感情」國音近し、而して此四字實に勞働爭議を解くの關鍵とす。近時勞働爭議各所に起り、其原因一ならずと雖も、多くは感情に馳せて勘定を度外に置くが故に、終に收拾す可からざるに至る。爭議の根本は要するに勘定に在り。資本、勞働の兩者感情を去つて虚心に交綏せば、自づから解決の道あらん。吾れは感情の激發、勘定を度外に置くの弊を惡む。

○勞働は神聖なり、何が故に然るか。活動は人類の最も大切なる務めなり、活動の已む時は即ち死する時也、活動を辭するは即ち死を希ふに同じ、人類の萬物に超越する所以は、其天分の活力を十分に發揮

するに在り。勞働者多くは誤つて勤勞を以つて犠牲となし、其の境遇を悲慘となして曰く、其の勞働するは賃銀を得んが爲め已むを得ざるに出づと。是れ實は勞働の本意を解せざるもの也。勞働は金錢を以つて換算す可からざる價值を有す、賃銀を得るは其の結果に過ぎずして、其原因にあらず。勞働を人類の本質的の務めとし、之れを以つて神聖として、始めて之れに興味を感ずることを得べし。之れを犠牲とし之れを悲慘とすれば、爰に倦厭怠業生ず。勞働の本義誤る可からざる也。

○偶々書肆を訪うて、一卷の支那小説を観る、署して「綠林五漢錄」といふ。開いて之れを見れば、吾が俗本「白波五人男」を漢譯したるもの也。余爲めに一嘆を發す。

○偶々韓版「奮忠紆難錄」を購ふ。此書、韓僧松雲の事蹟と詩文を收む。松雲は、文祿の役、單身清正



の陣に入り、軍情を偵察したるもの。其の録する所の「探情記」讀んで最も興味を覺ゆ。此僧後に使して日本に来る。清正引見して、話次貴國の寶如何と問ふ。松雲答へて曰く「弊國に寶なし、將軍の首を獲て寶となさん耳」と、此僧豪語の一端也。

○京城の物産陳列所を訪ひし時、製作頗る粗笨なる竹帚を見る、蓋し朝鮮の僻地に産するもの。余見て笑つて曰く、何ぞ寒山拾得の携ふるものと似るの甚しきやと。歸路浪華を過ぎ、鹿田書店に主人と會して、話次此事に及ぶ。主人曰く、その帚也、富岡鐵齋翁得んことを欲し、僕の渡韓を機とし、囑するに其帚を齎らし歸らんことを以てす、僕諾して終に約を果す。帚の價は甚だ廉なれども、運搬に煩はしく閉口したり。然るに翁喜ぶこと甚しく、これ吾が庭の用となすに足ると、一畫幅を贈らる。所謂の蝦を以つて鯛を釣るの類と一笑す。鐵齋の風格見るが如

し。○「斐喰ふ蟲も好き、ふ」とは、吾が俗間に古く傳はる諺なり。人は多く是を以つて吾邦創造の諺となす。何ぞ圖らん、此諺「文選」に出づ。此書、日本に来ること早く、其流布も亦廣し、諺の此書より發して日本化したるもの、ひとりこれのみにあらず。○肺病の學名「フジシス」といふ、「不治死」と同音なるも奇也。

○吾が郷國の某郡殊に水腐の地多く、農夫水の多きに困む。軌近排水器を設けて水を排除するに力む。然れども排水の溝渠完からず、往々甲の排水は乙の田を侵すことあり、爰に於て屢々水論を生ず。余曾つて友人を伴うて此邊を通過し、友人を顧みて曰く、我田引水は何人にも熟するの語也、但だ此處は我田排水の地なりと。

に紹介したるものは龜田鵬齋となす。鵬齋の越後に遊ぶや、其寬の書を觀て喜ぶこと甚しく、終に私淑其書に倣ふに到る。是れ多く人の知る所也、而して第二の紹介者に至りては、人多く知るなし。維新後東都に一時名を博したる會津の人佐瀬得所の余が郷里水原に来るや、小田島某の家に就て、始めて其寬の書幅を觀る。得所驚いて曰く、越後に此の書聖あるかと、心醉頓に食指動く。得所卒然兩刀を主人の前に置き、曰く、生之れを購はんとすれども、旅囊餘錢なし、請ふ兩刀を以て之れと替へんと。主人其意を諒とし、幅を貸し與ふと云ふ。明治の初年、東都に其寬を紹介したるは得所なること以つて知るべし。後中林梧竹越後に來り、此書僧の爲めに碑文を書す、これ多く人の知る所、亦贅せず。

○齒科醫石塚松嶺、新潟に業を營み、余と舊あり、余歸省毎に請うて齶齒を治す。某年の歸省、余忙殊

に甚しく、亦齒を治するの時なし、歸期迫まり、匆皇汽車に投じて東上の途に上る。此時松嶺、機械を携帶して同車し、車中一齒を抜き去る。鐵道開始以來、車中此事あるは恐らく之れを以つて始めとせん。余歸省毎に郷人余を迎へて宴を張るを例とす、其都度、談治齒の事に及ばざるなし。座中の人戯れて云く、先生既に年老ゆ、毎歲郷國に来る毎に齒を抜き、而して尙ほ抜くべき齒を存するやと、一座絶倒す。○支那の酒饌に珍とするものは燕巢なり、或は燕窩ニフワウイといふ。此燕此窠、普通民家に見るものと同じからず。由來懸崖絶壁、人跡なき所に窠を構ふるが故に、採集容易ならず、故に其價甚だ高し。頃者支那の事情に通ずる者は語る。曰く、人の懸崖に攀づる、往々墜落の危険あり、近年は猿を訓練して之れを探らしむ。其法、猿に負はしむるに籠を以てし、數日を支ふるの食料を供す。猿は輕々絶壁に攀ち、搜索探



集に數日を費し、唯だ徒らに遊び暮して得る所なく歸るもあり、或は滿籠の窠を齎らし歸るもあり、其の多きものは百金に値すといふ。吾れは之れを聽き我が長良川に鵜を使啖して香魚を漁するの法を聯想せざるを得ず。

○大養木堂、往々大隈侯に代はつて揮毫す、而して印の無きを憂ひて、印人濱村藏六に二顆の印刻を託す。余偶々藏六の居に於て既に刻成るの印を見る。余問うて曰く、これ何人の囑に依るか、藏六實を以つて告ぐ。異日、木堂に會し、此事を言ふ。木堂曰く、君は此秘密を知るか。實は藏六に託するに、一顆の印「門人代筆」の四字を、人の解し難き大篆を以つて刻せんことを需めしに、渠れ應ぜざるが故に已むと。固より詭譎に出づと雖も、一笑を禁する能はず。

○茶筌に片筌と丸筌あり。片筌は即ち丸筌を豎に半

截したる者。昔し茶を點するに片筌を用ゐるを法とし、丸筌は茶碗を洗ふに用ゐる。今は片筌廢せられて、丸筌兩様の用を爲す。此事、家藏の上田秋成の幅の識語にあり、又田能村竹田の隨筆「赤屠瑣々録」にあり。

○早稻田大學の恩賜館内貴賓室に、銀盃を陳列する大架を置く。其數百に垂んとし、大小錯綜、燦然目を眩す。遠く外國より寄せたるものあり、前攝政殿下の賜ふ所のものあり、皆な野球仕合の戦勝を語る者、「力」の標本は集つて此一室に存す。

○支那の滋強劑に「何首烏」あり、固と是れ一種の草根、其形罌丸に似て、細根纖毛に似たるものを見る。性慾に效ありと爲す所以は、恐らくは其形態に在らん。其「何首烏」と名くる所以は、何氏之れを用ゐて若返り、其の頭髮烏の如く黒しと云ふより來る。支那の媚藥は概ね此類也。

○亡友坂口五峰の遺骸を茶毘に附し、親族、遺骨を收むるに當り、若干の金塊を得たり。蓋し義齒に填裝したる者。遺族以爲へらく、此金塊を以つて何物かを作り記念となさんと、余に之れを圖る。余曰く、故人印癖あり、宜しく印を作るべし。偶々印篋を開するに「長相思」と刻したる印を得、余曰く、宜しく此印を摸鑄すべしと。鑄成り、之れを「五峯遺稿」の簽題の下に捺して之れを知己朋友に頒つ。

○越後の海岸に會つて大木材漂着す、其材に「峨眉山下橋」の五大字を刻す。此海濱、椎谷侯の領地に屬するを以つて、此物侯の所有に歸す。此事漸やく江都に傳はり、諸侯の見んことを望むもの多し、椎谷侯因つて江都の藩邸に搬せしむ。太平の天地、支那趣味に耽るの時節、此物益々喧傳し、毎日諸侯の就て見るもの相踵ぎ、小藩の椎谷侯幾んど煩に堪へず。思へらく、如此くんば各藩の接伴の爲め産を破

るに至らん、若かず、見んことを欲する者には、吾れより其邸に致さんにはと、爲めに運搬用の大なる蓮臺を作り、爾後訪問を免るといふ。

○國の文野は市聲を聞いて判するを得べし。我が徳川期に於て江戸の街頭は喧囂の聲常に充滿す。曰く大名行列叱喝の聲、曰く騎馬の聲、曰く肩夫與卒の聲、曰く物を鬻ぐ聲、曰く藝を賣る聲、曰く行人相争ふ聲、曰く何、曰く何、幾んど摟指の違あらず。吾輩前年北京に遊び、其の市街の雜沓に加ふるに、車馬の聲、物を賣るに打鳴らす銅羅太鼓の聲、互ひに罵る人語の囂然たるを聽き、吾が江戸時代の舊時に想ひ到り、文化を距る未だ遠しとなせり。我が東京今日の市街は、電車縱横、唯だ鐵の軌るを聞くのみ、幾んど人語を聞かず、亦雜然たる何等の聲も聞かず、市上甚だ靜肅、文化の市街は則ち如此し。

○徳川期に盛行せる多種多様の浮世繪の中に就て、



最も人心に投じたる者を求めれば、吾れは先づ指を五條橋上牛若辨慶相争ふの圖に屈せんとす。封建の時代、復讐を倫教としたる時、幼年の牛若、鞍馬に劍道を學び、幾多辛酸を嘗めて仇家に報復を圖らんとす。是れ當時年少の同感を惹く大なるトラジデー也。此の美少年に配するに荒くれたる魯智深の大入道を以てしたるは好個のコントラスト。而も大入道、美少年に敵する能はず、屈服臣従したるは、これ少年をしてお山の大将たらしめたる者也。僧侶の權勢尙ほ衰へざりし當時を思へば、僧の屈服は、少年の虛榮心を今よりも一層をりたるは言ふを待たず。尙ほ牛若に穿たしむるに一本齒の木履を以てしたる如き、瑣事なりと雖も亦少年の意に投じたるや知るべし。然れども此圖ひとり少年の心に投じたる者と爲す可からず。實は甚しく有鬚男兒の趣味に投じたり。元祿の頃男色流行し、花の如き美少年、鬼の如

き奴を伴ふの圖は、既に當時衆道者の喜びし所の案を取り來り、牛若に配するに辨慶を以てしたる好意匠は、衆道家の見て魂飛神銷の畫たりしや想像に難からず。

○曾つてマホメットの傳を讀む。もと商家に仕へ、主人歿する後、其寡婦に思はれて其夫となる。これマホメットの起身とす。後其妻養を易ふるに迫んで、マは教壇に名聲を博すると共に、漸やく亂倫荒暴の行あり。縦まゝに人の妻を奪うて之れを神意に歸する等、羅織甚だ多し。實は此宗の聖典とする「コーラン」は、マが一代の亂倫の記録といふも不可なし。流石に後年其教徒の改削を経たりと雖も、尙ほ亂行の記事の存する者少からずといふ。蒙昧時代の教祖は多く精力絶倫なるが故に亂行少からず、ひとりマホメットに就て云ふのみにあらず。

○往年、肥塚龍と富山縣に遊説の時、越後より越中

に赴く途中、親不知子不知の險を過ぐ。今は崖上一路通じて、舊日の難處は眼下に在り。一行中、石を飛ばすの妙を誇る一政客あり、崖上頻りに石を飛ばして喜ぶ。余等試むるに敵する能はず。既にして富山縣泊町の政談演説會に臨む。余先づ演壇に立つ。此頃黨争激甚、演説中往々暴行を爲す聽衆あり、此日も石を袂に入れ、暗に吾等を威嚇する四五の徒の場にあるを認む。余依つて先づ旅中投石の事を語り、拙者の如きは其の尤も拙なる者、此技の達人は一行中別に在り、投石の技を戦はさんと欲せば、後刻其人の此壇に現はるゝを待てと、聽衆皆笑ふ。而して遂に事無きを得たり。是れ機先を制するもの、演壇に立つもの這般の略を要す。

○尾崎号堂の雅號、もと「琴泉」と云ふ。曾つて某小會席上、森田思軒云ふ、琴泉の號は女性的なり、女流畫家を思はしむと。犬養木堂傍らより、之れを

女流畫家の號と見るは當らず、杉山流の按摩の名と見る、或は可ならんと。此擲楸終に尾崎をして「學堂」と改號せしむ。今の號は保安條例に觸れ追放の時更に改めたる者、學と号と音相通す。

○畫室は畫家の策源地、其大小明暗、畫品に關係を及ぼすこと大也。橋本雅邦嘗て云く「平生の望は、千疊敷の巨室に、尺四方の小畫を作らんことを欲す」と、これ至言なり。席の規模大ならざれば畫家の氣宇亦大なる能はず、随つて大なる床に掲げて調和せざることあり。由來畫の大小は必らずしも絹紙の大小に關はらず、名人の畫は小品と雖も大なる趣あり。古來畫家が寺院を借りて畫席となすも此故也。

○往年、小野義眞、陶製の五百羅漢を作り、之れを向島の邸に置く、後之れを淺草の花屋敷に移すに迫んで、衆庶見て之れを珍とす。余が鎌倉に養病の日、長谷に陶器を製するの家あり、訪うて其主人に會す



れば、其人即ち五百羅漢の製作者也。由つて其の製作當時の苦心を聞く。曰く、五百の羅漢、各々其相貌を異にするは極めて難事に屬す。二百迄は辛うじて相貌を異にし得たれど、意匠全く盡き、それ以上力及ばず、已むなく三縁山に藏する兆殿司の五百羅漢圖粉本を借り得て、それに據り僅かに功を竣るといふ。此陶工の姓名加藤太兵衛、尾張の人、瀬戸の直系に屬すと聞く。

○陶工苦心を談するの傍らに、老妻侍坐して余に語る。彼れが如く勞多くして酬の少き製作はあらず。當初千圓を以つて受買ひ、二百圓を剩すの打算の處、種々附屬品を要し、或は一羅漢を數個作る必要生じ、終に製品八百の數に上り、價は爲めに増加せず、最後決算に迫んで、受けたるもの僅かに八錢五厘に過ぎずと、嗚々苦情を洩らして已ます。太兵衛、妻の言を聽かざるもの、如く、曰ふ、彼れが如き製作を今

一たび試みんことを欲すと、辭色平然たる處に藝術家氣質を認め、余をして感動せしめたり。

○江州商人、天稟の商才を有す。其の儉素、其の忍耐、其の勤勉、其の計算に精なる、支那人に酷似するものあり。大阪の人嘗て語る、江州人來つて店舗を開くや、其附近の同業皆畏る。其儉素と勤勉とは到底敵し難きものあるが故也。果して其の店舗は幾許ならずして成功するを例とす。彼等は妻孥を伴ひ來らず、皆な店舗に宿泊し、夜間と雖も事務を見、亦丁稚を督勵す。其の妻孥あるものは、休暇に乘じ家に歸るのみ。大阪商人の如く、休日遊覽に多少の金錢を散するものと其選を異にす。彼等が忽ち産を成す、決して偶然にあらずと。又聞く、江州商人程計算に嚴且つ精なるものはあらず。如何なる大取引に於ても、決算に臨み厘毛の差あれば彼れ必ず争うて已ますと。滋賀縣會を見たる一客曰ふ、他府縣に見ざる

一異彩は、議員各々十露盤を携へて議席に列するの一事とす。豫算、決算、其他數字に關する議案に對し、彼等は十露盤を彈かざれば賛否を謂はずと。

○讀書趣味を詠したる詩に云く、  
富家不用買良田、書中自有千鍾粟、安居不用架高堂、書中自有黃金屋、出門莫恨無隨、書中車馬多如簇、娶妻莫恨無良媒、書中有女顏如玉、男子欲成平生志、六經勤向窓前談、

此心を以てすれば、讀書は人間無上の樂也。

○狩野芳崖、團十郎の技を喜び、其の渡邊華山を演ずるや、百忙中往いて觀る。此優の品藻態度、華山を扮して遺憾なく、其技亦神に入る。芳崖見て幾んど心酔す。其毫を揮つて畫を作るに至り、芳崖竊かに此優にあらずんば爲し難しと賞したるに、一握の扇子の揮毫終れば、乃ち之れを觀客席に投ず、衆争

うて之れを得んとして喧囂を極む。芳崖之れを見て

憤然として起ち、「華山死す」と叫んで去る。歸來芳崖、門人に語る、團十の技は賞すべし、唯だ河原乞食の根性を脱せざるを憾むと。

○河村清雄、洋畫界に名聲藉甚の日、人あり、余を訪うて曰く、聞く、早稻田大學の恩賜館建築成ると、河村に囑して一畫を作らしめ、館に掲ぐるも可ならずや。幸に之れを可とせば、吾れ川村に之れを介せんと。余曰く、止めよ。河村の畫可ならざるにあらず、唯だ彼れ責任なく、畫成るの日之れを典し、或は債鬼に奪はれ、常に囑者を失望せしむ、吾れ其の二の舞を爲すを欲せず。然れども若し無料に書くの意あらば、敢て妨げずと。蓋し河村の成功を危みたる也。其人、川村を訪うて告ぐるに余が言を以てす。數日を経て河村余を訪ひ來りて曰く、「無料に書けとは能く言はれたり。吾れは貴下の言を喜び、急に書



く氣を起したり。必らず期日に成功すべし。唯だ畫題は余の選ぶに任せよ」と。余默然諾す、而して心竊かに成功を期せざりき。然るに何ぞ圖らん、期日に先立ち畫成り、其の大學に搬入の者を見れば、眞に傑作也。此畫、豎四尺餘、幅十尺に充ち、波濤巖嶠を撃ち、日光波に映するの狀を畫す。蓋し「君が代」の國歌に畫題を採る也。今恩賜館に掲ぐる巨額は即ち是れ。

○早稻田大學の新圖書館支關に大圓窓を劃したる壁あり、總長、下村觀山横山大觀二畫伯の揮毫を請はんとし、一日二畫伯を早稻田に招く、余も亦與かる。畫題を定めんとして決せず。倉卒一案を立て、曰く、暗より明に入り、野より文に進む、これ圖書館の徵象也。幸ひに二畫伯あり、明暗文野を分つて擔任を請はゞ好畫を得ん。其の意匠の如きは二氏に任じて可なりと。一座之れを可とし、黒雲の内より旭

日揚るの畫成る。此畫、直徑二間半、金色と漆黒の對照、觀者をして快哉を呼ばしむ。之れを明暗の圖といふもの、實に余が倉卒の發意に基づく。双美として早稻田大學の誇るもの、前に河村の洋畫あり、後に此の日本畫あり。

○高村光雲老人、年少の時、淺草駒形町に住す、曾て語る、當時子規の聲を聞くこと日に幾回と。遊女高尾が仙臺侯を憶ふの句に「君は今駒形あたり時鳥」とあるは紀實の句に似たり。老人曰く、當時駒形の前岸に鬱蒼の杜あり、子規は其内に住み、河を渡り毎日東台の森との間に往復し、駒形は恰かも其の通路に當ると。幕末尙其の聲を聽く、高尾の時代想ふべし。

○世、暴富の人を呼んで成金と云ふ、其の僕倅にして産を爲すを貶する也。然れども一概に成金を貶するを休めよ、成金は成功を意味す、成金盛んに興らざ

れば國運振はず、國力富まざる也。漫りに成金を罵るよりも、其成功を祝し且つ之れをして自重せしめよ。吾人は成金を歓迎する者也。

○人あり、來りて貧民學校設置の事を云ふ。余曰く、休めよ、方今の急は、貧者の爲めに學校を設げんよりは、暴富の子弟の爲め家庭學校を興すの必要あり。所謂成金の徒、多くは素養なく、成功に酔ひて日々豪奢淫樂を事とし、一家の風紀を紊し、延いて社會の風紀を紊さんとす。如斯き家庭が其子弟に及ぼす影響、洵に寒心すべき者あり、之れを放任せば、其の子弟の前途知るべき耳。今日の急は、此等の子弟を收容する家庭學校を作り、其の生家と隔離し、惡弊を避けしむるに在りと。

○余又成金者の爲めに一策を案す、曰く、渠等の子孫を安泰ならしむる法は、渠等をして多くの産を傳へしめざるに在り。原來産を作る人の子孫必らず

しも産を守るの人にあらず、寧ろ浪費蕩盡、終に身

家を亡す者なり。故に餘りに多くの産を子孫に遺すは却つて子孫を賊ふ所以也。成金の人、子孫の圖を爲さんと欲せば、子孫に其の克己自立の精神を失はしめざる程度の遺産を傳ふべし。西洋諸國に於て富豪の巨賈を公共事業に散する所以、一は日本と家族制度を異にするにも因れども、實は餘りに多くの産を子孫に遺すの不利なるを知り、公共事業を財産の棄て場に充つる者なり。過大の産を子孫に遺すは無慈悲の至り也。暴富家の安全瓣は、實に富を割いて社會の公共事業に投するに在る哉。

○一ツ橋帝大の同窓、毎年例として四谷三河屋に牛肉會を開く、余も毎に與かる。會する者皆年齡六十を過ぎ、四五古稀に達するものあり。但だ當年の意氣尙存し、健啖舊の如し。舊日と異なるものは酒量の減じたる一事とす。嘗つて十二名の同窓の會した



る時、宴後試みに肉量を査して五十三人前の數を得たり。此日酒に專にして幾んど肉を啖はざるもの二人あり、之れを控除すれば一人平均喫する所五人前也。一座云く、此數字、人意を強うすと。而して近く最も健啖なる一人を失ふ、荒川義太郎即ち是れ。

○一ツ橋帝大の同窓會に田中館愛橋博士も來り會す其の服裝の、フロックコートに似て稍異なる所あるに留意したる一友、博士に就て問ふ所あり。博士曰く、これ舶來なり、今次洋行中購ふ所と。酒次、博士終に實を語つて曰く、英國に滞在中偶々天長節に會す、公使館よりも禮裝出頭すべしと通牒し來る。僕行李中之れを開き、倉皇自動車を驅り、古衣舖を訪うて多くのフロックコートを見る。皆大に過ぎて體に適ふものなし、唯一衣稍適ふ、乃ち獲て當日の祝賀を果し得たり。此衣服、フロックコートと稍異なる所あるは抑々故あり、實は少年の外套なりと。

一座絶倒す。

○田中館博士、飛行機の研鑽に汲々とし、時に機上の人となる。曾つて余の屋上一飛行機の來るあり、新聞紙に就て檢するに博士の搭乘しあることを知り倉皇出て、之れを見る。思へらく、飛行研究の犠牲となる者近來少からず、博士も或は終に難に遭ふことあらん乎。余異日博士を訪うて曰く、君を飛行機の犠牲とするは國家の損害にして友人の忍ぶ能はざる所也。請ふ君漫りに他人の作りたる飛行機に乗るを休めよ。若し夫れ自家の工夫に係る者に殉するに至つては別問題なりと。博士謝して曰く、誠に君の言の如し。當日機上の人となりしは、余の發明に係る信筒を驗せん爲めなりきと。頃者博士自轉車に乗り一脚を挫く。余一書を投じて曰く、思はざりき、空中の人、航空機の厄に遭はず、却つて地上自轉車の厄に遭はんとは。吾れは中心今回の奇禍の前者にあら

ざりしを君の爲めに祝せざるを得ず、幸に自愛せよと。

○余先年初めて若干の地を購ふ、思へらく、區々尺寸の地を得る、言ふに足らずと。而して更らに又思ふ、尺寸の地と雖も亦これ地球の一角なり、吾れは今日より地球の所有權を有すと、太白を擧げて起つて踊躍す。

○世界大戰の時、英國一億の資を本邦に募る、余戯れに一友人に勸む、進んで其の募に應ぜよ、一口にても可なり、若し餘財無ければ、物を典しても應ぜよ、世界に冠たる富國に金を貸すは、亦人生の一快事にあらずやと。

○世界大戰後、人種差別論の起るや、余等同窓、偶々四谷三河屋に牛肉會をひらく。酒次、人種の黄白を以つて差別待遇を爲すの非を鳴らし、口角沫を飛ばすものあり。余鶏卵を割り、之れを鍋中に投じて曰

衝口發

く、見よ、此の白の跋扈の狀を見よ、白は幾んど鍋の全面を掩はんとす。然れども卵に貴ぶものは黄也、味の佳、滋養の多き、亦黄に存す、白なるアルビエーメンは、雞子殻中に在る間の食料に過ぎずと。一座好論となす。

○大隈内閣危急に瀕したる當日、池之端に開催中の江戸博覽會に侯の臨場を請ふ。侯請に應じ、巡覽の後一場の演説を爲す。曰く、余も亦江戸趣味を解する者なり、江戸趣味畢竟家康趣味なり。家康不世出の天資を以つて治務に練達す、徳川の治世、持續三百年の長きに渉る者偶然にあらず。家康は外柔内剛の人、常に外部質素の服裝を着け、人の見る能はざる内部に華麗の服を着す、此の奥床しき所、家康流とも云ふべく、江戸趣味の源は之れに發す。江戸繁昌の時花柳の雄を辰巳(深川)とす、辰巳藝妓の風は、外部極めてシミにして、隠れたる所に華麗目を眩する者



あり、是れ實は家康好也。一校書三草子、當時の豪傑武田耕雲齋に思はれて、肱鐵砲を喰はす、これも亦外柔内剛の家康の薰陶に外ならず、と側らに坐せる後藤蠻爵を顧み、暗に蠻爵を耕雲齋に比して冷嘲するに似たり。侯の演説多方面に涉り、皆成功す。而して内閣危急の當り、辰巳藝妓を評論して平然たり、侯の胸次の洒落又見るべき歟。

○三宅雪嶺、辯訥なるも、其説奇警、聽者に深刻の印象を與ふ、雪嶺は一種の雄辯家と云うて可なり。余嘗つて雪嶺の演説を評してアプト式と云ふ、其の突兀たる調を云ふのみにあらず、言々語々、刻み刻んで之れを聽者の腦に印せざれば已まざるの概あるが故也。

○中村進午博士の別業、千葉縣一の宮に在り、余曾て同人と同訪、終日款晤す。余別業所在の地名の老女子と云ふに興味を感じ、博士に勸むるに別業の名

を「天姥山莊」と命ぜんことを以てして曰く、是れ佳名なり、君早く取らすんば、他の別業を此地に有する者必らず取つて名とせんと。博士の答は意外なり、曰く、家兄に圖り、然る後決せんと。博士が兄を敬するの一斑以て見るべし、其美質稱すべき哉。○故長谷川泰常に曰く、顛狂院を起すより、兩性をして性慾を満足せしめよと。余初め其意を解せず、後某醫學大家が顛狂の起因を研究し、兩性、性慾を果し得ざるため發狂する者甚だ多しと説くを聞き、初めて長谷川の説の味あるに感す。

○柳亭種彦嘗つて艶麗の筆を揮うて、男女の交情、遊治の狂態を叙し、江戸繁榮時代、浮世繪と共に並び稱せらる、而して種彦の人と爲りを想見し、京傳、三馬の徒の如く、品性高からざる戯作者と爲す。然るに事實は相反す、往年、淺草老書舗淺倉屋の老人余に語る、戯作者中、敬服すべき人は唯だ種彦あり

しのみ。大抵此店に來り書を購ふの文人、店頭に胡

坐す、寺門靜軒の如きも亦然り、ひとり種彦袴を穿ち一刀を佩び端坐するを例とせりと。余が架中種彦自筆の日記一冊あり、表紙の見かへしに「様」の字を大書し、附記して曰く、卷中所録の人に「様」を省略す、此の「様」すべてに通用すと。他人に示さざる私乘に尙ほ且つ此の用意あり、溫藉謹厚の人となり、以つて見るべし。

○友人松平破天荒と新潟に同游の日、一夕那邊茶屋に飲む。佳人座を圍み、綺羅星の如し。酩酊の後旅宿に歸臥す、破天荒筆を授いて一詩を示す。

綠酒紅燈多所思、風情不如少年時、白頭初到美人國、孤枕淒涼聽竹枝、

余も亦老いて同感同歎を禁する能はざるを憾む。○曾つて京師の鳩居堂に於て、雲華上人の蘭竹一幅を見る。雲華自題の詩の外小竹の讚あり。雲華の詩

に云く、

我竹唯隨意、吾蘭不用工、何論人取捨、夜座多清風、

之れに添へたる小竹の題詩は、甚だ雋味あり、所謂當意即妙、亦題語の要を得たる者。詩に曰く、

上人與吾好、因緣如有宿、興到畫幽蘭、自然添小竹、

○地方の新聞、往々噴飯の記事を掲ぐ、某大官を見送る記事、各階級の人を擧げ、折花攀柳の徒もありと附記す、蓋し藝妓を斥すならん。曷ぞ知らん、折花攀柳は妓を遊ぶものなることを、主客全く顛倒す。近來漢語を誤るもの比々たり、單りこれのみにあらざる也。

○不朽の名著、讀み來れば抵れ平凡なり、論孟然り、ルソーの民約説然り、羅馬法然り、エイソップ物語の類も亦然り。此等は、世に出てたる當初、皆一世



を聳動したる者なり、而して今平凡を感じる所以は、深くして、其の書中言ふ所、多くは今人日常之れを風化多年、其の及ぶ所廣汎、其の人心に浸潤する所、念とし又之れを行ふ、故に一讀敢て奇を感じざる也。

# 隨筆春城六種終

昭和二年八月一日印刷

(隨筆春城六種)

昭和二年八月三日發行

定價貳圓八拾錢

著者

東京市牛込區東五軒町三十五番地  
市島謙吉

發行者

東京市牛込區辨天町百五十七番地  
種村宗八

不許複製

印刷者

東京市牛込區須町七番地  
竹内喜太郎

東京市牛込區早稻田

發行所

早稻田大學出版部

(振替 東京一三二二三  
名古屋二三四五三  
大阪六八九〇〇)

日清印刷株式會社印刷

25554



市島春城著

# 春城隨筆

四六判五五〇頁  
總布函入美裝  
定價貳圓八拾錢  
郵稅拾貳錢

面白い隨筆を讀みたい人は先づ第一に本書を讀め！

讀書界の人氣を沸騰させ、幾萬の讀書子に深い感銘を與へた『隨筆賴山陽』の著者、春城先生が現代隨筆界の最大權威たることはいふ迄もない。事實、著者ほど博覽にして多方面の趣味に通じた者は尠かろう、本書はこの多方面の趣味を最もよく表現したもので、機智縦横、諷諭百出、筆鋒愈牙えて讀者をして酔へるが如くならしめる。眞に天下一品の隨筆集である。

### 目次大要

上篇 雅俗相半録——婦人の決闘——元祿義舉の隠れた後援者、切支丹珍話、搦摸の著述、金食し東叡山、縁切寺、以下百十數項。  
下篇 趣味談叢——寺は趣味の淵藪、茶人の趣味教育、反古趣味書簡の區趣味、豆本蒐集談、酒趣百則、以下十數項。

東京 早稲田大學出版部發行 振替 東京 大阪 六一九〇〇

市島春城著

# 隨筆賴山陽

三六判七二〇頁  
口繪多數入美裝  
定價參圓  
郵稅拾貳錢

▼本書は何故、無際限に賣れる？

(一)材料は著者が四拾年間苦心蒐集したもの、而も從來の著述中に漏れた斬新な材料を網羅したこと(二)山陽に對する褒貶的態度を超越して其人間味を赤裸々に表したこと(三)隨筆體に面白く描き、どの頁を讀んでも趣味津津たること、などが主なる理由であらう。今回更に新發見の材料に依る記事八十餘頁及珍奇な寫眞數葉を添加した。殊に竹田が寫生した山陽竹田對座の圖は山陽の肖像畫として眞に天下一品である。

増訂新版

東京 早稲田大學出版部發行 振替 東京 大阪 六一九〇〇



市島春城著

# 藝苑一夕話

三六判全九百頁  
總布函入美裝  
價各貳圓參拾錢  
郵稅拾貳錢

(上下二卷) ▼江戸文人詩客の逸話集

本書は「蟹の泡」の姉妹篇とも言ふべきもので、それが西洋の逸話を集めたのに對して、これは日本藝苑の逸話集である。即ち江戸文化が頂點に達して幾多の文人詩客を輩出した文化文政時代に於ける「ツムヂ曲り」の人の逸話を中心としたもので、無邪氣で而も極めて味のある珍談は、一度手にすれば一氣に讀了せしめて了ふ底の魅力がある。

東京 早稲田大學出版部 東京 牛込 一六八 二〇〇

市島春城著

# 蟹の泡

三六判五百頁  
總布函入美裝  
定價金貳圓  
郵稅金八錢

本書に輯めた小話百五十篇、其の多くが東西先賢の逸話に屬する所から、書名を「蟹の泡」と題した。畢竟藝苑の天才と云はるゝ人は、其の言行概ね一風變つてゐて常徑を履まず、多くが世間の所謂「ツムヂ曲り」なるもので、言はゞ蟹の横行にも似た行き方である。而して又蟹には元來腸が無いと云はれてゐるが、之等先賢の行徑常軌を逸して居ながら、亦甚だ無邪氣な點がそれによく似てゐる。  
：此書が讀者に破顔一笑の興を添へることもあれば、全くこの「ツムヂ曲り」諸先輩の賜に外ならないのである。(著者序文の一節)

東京 早稲田大學出版部 東京 牛込 一六八 二〇〇



市島春城著

# 大隈侯一言一行

三六判五四〇頁  
總布函入美裝  
定價貳圓參拾錢  
郵稅拾貳錢

▼侯の眞筆(寫眞版)二枚 其他口繪八枚

世界的偉人大隈侯逝いて以來、國民が侯を哀惜追慕するの情、益々加はる。此の偉人の日常生活の精細は、何人も知らんと欲して未だ知り得ざる所。茲に市島氏あり、侯に隨身すること四十餘年、侯の一言一行を悉く日記に誌し置き、其一顰一笑をも洩さず。今此日記を土臺として侯の言行を口述し、文壇の雄將にして平生隈侯を敬仰せる梅溪氏を筆録す。侯の家庭生活、趣味、嗜好、人物觀、社會觀、各種の逸話を網羅せる空前の隨筆的傳記にして、侯の面目宛から生けるが如し。寔に侯を千古に傳ふべき一大書也。

東京 早稲田大學出版部  
東牛 京込  
一六八  
一〇九  
三〇〇



